日比谷ものがたり

三井グループ「三友新聞」
昭和５９年～平成４年＝7年間連載

中　編

前編１～70　デンカの 70 年を見つづけた街日比谷収載
後編 241～　データーとも欠落

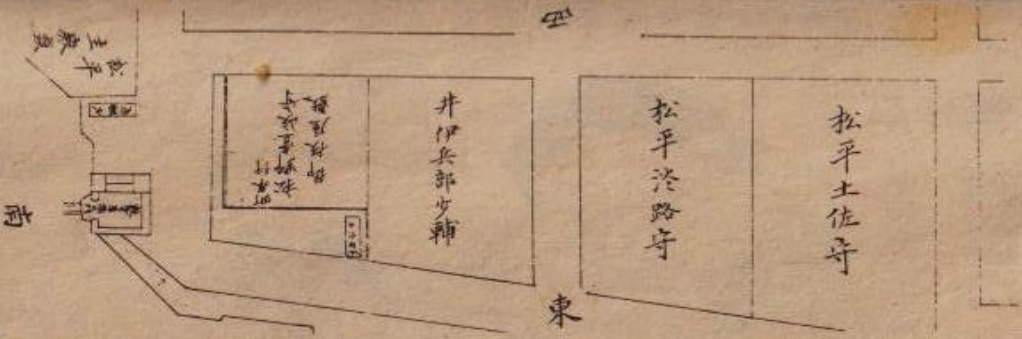
山岸弘明

日比谷物語 ⑪

日美野　弘

与板井伊藩

そごうと有楽町駅東京寄り、交通会館の一画は寛永七年（一七四二）から天明元年（一七八一）まで掛川井伊藩邸であったことを㉝で紹介した。



宝永四年の数寄屋橋周辺（井伊兵部少輔邸は現在の交通会館、そごうの一画に当たる）

㉝では、宝永二年（一七〇五）十二月、兵部少輔直朝の発狂で、養子兵部少輔直称が新潟県の与板二万石に減封されて、辛くも改易を免かれるところまで書いた。今回はその続編。

与板は長岡から北へ三十㌔。三島・刈羽・頸城三郡のうちを治めた小藩であったが、藩祖直勝は井伊直弼を生む彦根井伊藩の創設者でもあったという名門家。直短も本家掃部頭直該の四男から養子入りした。在職二十六年間に、東照宮百年忌法会、享保七年江戸大火での江戸城警備などを勤めた。

その後、四代は短命藩主がつづく。丹波守直陽は享保十六年（一七三一）に相続して翌十七年に歿し、養子伯耆守直員も三年後に、再び養子でつないだ伊賀守（兵部少輔）直存こそ宝暦十年（一七六〇）まで在世するが、この年十一月に封を継いだ内膳直郡も十二月にはしくなるといった具合。

しかし、十一年から日比谷最後の住人となった兵部少輔直朗は、中央幕閣で活躍して与板井伊の名を高める。明和七年（一七七〇）奏者番、天明元年（一七八一）西の丸若年寄にすすみ、十一代将軍家斉の就任とともに若年寄へ。文化九年（一八一二）までの三十年間家斉ブレーンとして在任している。直朗は寛政の改革をすすめた松平定信や松平信明を補佐し、定信失脚後は化政時代実現の一翼をになった。

最初に紹介した賜邸四十年間のなかで寛保二年（一七四二）六月から延享二年（一七四五）までは堀田正亮邸となり、その後松平宗秦預かりのとき願い出て、再び日比谷邸を受けた。

『屋敷渡預絵図証文』によれば、数寄屋橋御門内井伊兵部少輔屋敷、坪数四千四百一十八坪、うち建家長屋十蔵とも二千四十六坪。東五十五間、西五十四間三尺、南七十六間二尺、北八十七間。……堀田相模守殿上ケ屋敷、今度願いの通り拝領つかまつり……。立具目録＝門扉七枚、戸四八八枚、障子五七八本、襖二七一枚、畳一、六一二帖……右の通り相違ございなく請取り申し候……。とある。

日比谷物語 ⑫

日美野　弘

堀田と松平伊豆

堀田といえば春日局の縁で出世街道を歩んだエスカレーター物語で知られる。大名となった堀田一族は三家あるが、このうち佐倉堀田藩は日比谷と浅からぬ縁がある。

⑥で帝国ホテルにあった江戸中期を紹介したが、そごう、有楽町駅の一部、交通会館に、寛保二年（一七四二）六月から延享二年（一七四五）十月までと、天明元年（一七八一）九月から文政元年（一八一八）までの二回にわたって賜邸されている。

文政七年の日比谷図（松平イツとあるのが大河内信順邸である）

最初が相模守正亮で、二度目が大蔵大輔正順、相模守正時、正愛の三代。正亮は幕閣として活躍する。奏者番兼寺社奉行を皮切りに大阪城代をへた延享二年には老中へ。この年〝徳川家中興の英主〟といわれた八代将軍吉宗が長男家重に将軍職を譲り、大御所政治がはじまった。

正亮は老中筆頭の松平乗邑が享保の改革の政治責任者として失脚した後、宝暦十一年（一七六一）までの十六年間老中を勤めるが、この間、吉宗が宝暦元年に亡くなり、家重も十年に逝去して、十代将軍家治が就職する。大御所時代から田沼時代へすすむ、幕政の曲り角にあった。

正順は帝国ホテルの項で紹介したが、正時をはさんだ正愛が藩校成徳書院を創る。日比谷邸はこの正愛のとき屋敷替えとなる。正愛の子が水野忠邦と天保の改革をすすめる正睦である。正睦は安政年間に米国総領事ハリスと通商条約を結ぶ混乱期の幕政最高責任者としても知られている。

この一画の安政元年から十年までの九年間は、松平大河内伊豆守信順邸となる。大河内家は三河十八松平の一つで㊼で紹介した高崎大河内藩の宗家。信綱のとき埼玉県の忍三万石の大名に取立てられるが、この信綱は三代将軍の家光のもと幕藩体制を基盤とする武家封建社会の確立をはかった賢臣知恵伊豆その人であった。

信綱の七代子孫が信順で愛知県の吉田七万石城主。天保二年（一八三一）大阪城代、五年京都所司代にすすみ、八年五月から三カ月老中を。天保八年といえば水野忠邦による天保の改革直前のことであった。

日比谷物語 ⑬

日美野 弘

阿波の蜂須賀

阿波といえば、鳴門の渦潮と阿波踊り、浄瑠璃の〝傾城阿波の鳴門〟で知られているが、その阿波松平蜂須賀藩の上屋敷と下屋敷が●比谷にあった。

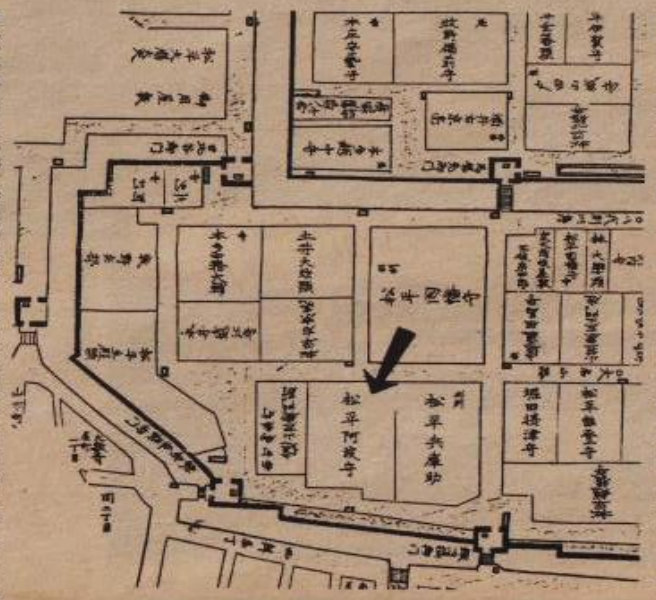
上屋敷は宝永期（一七〇四）都庁日比谷寄りに賜邸を受け、文政年間（一八一八）の一部敷地替えで、そごう、有楽町駅の一部、交通会館、麹町保険所、第一勧銀宝くじ部、そして都庁日比谷寄りの一部になった。下屋敷は三信・三井ビル前の日比谷通りの一画で、江戸図でみると日比谷御門前になる。文政七年（一八二四）賜邸を受けて、ともに慶応四年（一八六八）に上収された。

蜂須賀氏は清和源氏の流れ。正勝のとき斎藤道三、織田信長、豊臣秀吉に仕え、四国征伐、関ケ原の合戦、大阪の陣などの功績で二十五万石の大々名となった。日比谷住民となるのはその六代綱矩からの十代である。

阿波は藍や塩、煙草といった産業振興を基盤にめざましい経済発展をとげるが、一方商業資本の進出は米作り主体の藩経済を圧迫する。藩は享保の改革、宝暦の改革、寛政の改革と藩財政の立直しをはかろうとするが、その都度重臣や農民が抵抗して挫折した。この間、五社宮一揆、織部騒動、上都一揆や阿波おどりの盛りあがりなど、反封建運動が爆発している。

淡路守綱矩のとき、佐倉十一万石の堀田正信が幕政を批判して徳島藩に領けられたが、その間四代将軍家綱に殉死したので、監督不行届がとがめられ閉門を受け、人形浄瑠璃の阿波の十郎兵衛がはりつけになったのもこの時代のことだ。

綱矩のあと淡路守定員、阿波守定英とつぐが、この定英に嗣子がなかったので蜂須賀の血が途絶える。養子宗鎮、至史の後、久保田新田藩主佐竹義道の四男から養子に迎えられた阿波守重喜は明和三年（一七六六）藩政改革を断行するが、内外の猛反対にあい、六年幕府から〝国政よろしからざる故〟をもって隠居を命ぜられ、のち下屋敷で謹慎の生活を送っている。実権を握った家老たちにとって英主は無用の長物であった。蜂須賀家はこの後、治昭、斉昌、斉裕とつづいて幕末を迎えるのである。



嘉永二年の日比谷（阿波邸は都庁の一画にあった）

日比谷物語 ⑭

日美野 弘

有楽町ビルの右京

⑫でニッポン放送、農林中金、第一生命の一画にあった松平大河内家を紹介したが、文政十年（一八二七）十一月から明治二年（一八六九）までの四十二年間、有楽町ビル、新有楽町ビルに移っている。

大河内家は⑫の吉田大河内家の支藩。十八松平の一つで、信綱の五男信興が若年寄となり、茨城県の土浦二万一千石を領有したのがはじまり。この大河内忠真、水野忠成、松平乗寛があり、十一代将軍家斉のもと化政文化が絢爛と華ひらいた。

封地の高崎は中仙道の主要宿場として発達し、利根川水運を利用した産業も豊か。江戸後期には藩校設立、多彩な人物の輩出、和算・俳句の流行などがあったが、一方では農民による城下の打ちこわしや天明の浅間山噴火、大飢餓、侠客博徒の横行など領内は不穏な状況がつづいている。

最後の藩主輝声のとき、天狗党討伐があった。嘉永六年（一八五三）黒船来航を契機とした内紛で分裂した水戸藩は、佐幕派と尊皇派が対立する。尊皇派の天狗党が筑波山で挙兵し、幕軍に敗れ西へ移動したので、高崎藩が領内の下仁田で武田耕雲斉に挑んだことだ。

この時、高崎勢は奇襲を受けて敗退。このことがあって、洋式銃の採用による軍制改革に着手する。輝声はこの後もたびたびの幕命を受ける。品川台場整備。甲府城代、陸軍奉行など江戸末期関東の重鎮として活躍した。

松平家は慶応四年いったん上屋敷を上収されるが、明治と変わった新政府のもとで再び有楽町ビル、新有楽町ビルに戻り、約一年間在住するのである。

天保十三年の日比谷図（有楽町ビル、新有楽町ビルの一画に松平右京邸がある）

家にとって、元録時代輝貞が側用人に登用されたことは忘れられない。側用人は将軍の秘書役。綱吉とその母桂昌院の絶大な信任を得、その権勢は老中をしのいだ。次の輝規、輝高も老中にすすみ、群馬県の高崎七万二千石に栄進していた。

ニッポン放送の一画は輝高の子輝和と輝延だが、右京亮輝延のとき有楽町ビルに賜邸替えがあり、輝徳、輝允、輝聴、輝声（いずれも右京亮）とつづく。輝延は文政六年（一八二三）十一月から八年二月までの老中である。同時期の老中には大久保

晴雨計

昭和六十年の回顧

昭和六十年を振り返って最大の事件といえば、内にあっては昭和十一年二月の二・二六事件であり外との関係では第二次世界大戦であった。しかも、この二つの事件は、その処理を一歩謬れば国の浮沈を永久に左右する重大なものであった。昭和初年のわが国は国粋主義で固まり軍部の鼻息の最も荒き時代であり、この時期に起きたのが二・二六事件で、皇道派の青年将校下士官兵一、四〇〇名が二月二十六日未明蹶起して斎藤実内大臣、高橋蔵相等を殺害し、東京市に戒厳令が布告された。事件当初は一般国民までがこれを蹶起部隊と称して、どちらかといえばやや好意的態度であったが、宮中の怒りをかい一変して反乱軍となり、それに参加した下士官兵は説得に応じてそれぞれ原隊に帰り、軍法会議の結果首謀の一七名の青年将校に死刑の宣告があり、その年の丁度今頃代々木刑務所で処刑された。かくして国内同志の相剋を見ずに事件も無事片付いた。

次にわが皇国の歴史の中で最大の難問であった昭和二十年八月十五日の天皇によるポツダム宣言受諾、同時に終戦の御詔勅を国民に放送され、わが国の運命が危機一髪の処で救われたことである。ここでわれわれが永久に忘れてはならぬことは、この行詰った二つの難局打開に例外なく聖言が動いていることである。またこの土壇場で一糸乱れずこれに従う国民の結束も、永久に傷付かないように教育で温存して置かねばならぬ。

その威力の一つに日本人の日常の団体行動の真髄に「私心」が少ないことが結束力を強化し、計算以上の威力ともなる。一つの例にこんな事があった。二・二六の際、池田成彬が北一輝授助の件で東京憲兵隊の取調べを受けた。取調べたのは特高の塚本誠憲兵大尉（東大出）であったが、逆に塚本の方が池田に意気投合（心酔）し、二人は終世の交りとなった。交りの詳細は後日に譲る。

（北斗星）

日比谷物語 ⑮

山岸 弘明

その後の松平主殿

江戸中期の元禄四年（一六九一）十二月から明治維新をはさんだ明治十年（一八七七）までの約百九十年間、ニュートーキョー、ガード周辺の一画に十八松平の一つ松平深溝邸があったことを⑭で紹介した。百九十年といえば二世紀に近いが、今号はその続編。

深溝家は主殿頭忠祇のとき、長崎県の島原六万五千石から栃木県の宇都宮に転じたが、宇都宮は一代で終わる。忠祇が宇都宮に入部した当初、籾摺騒動が起こった。これは藩の財政難を緩和するため、上納米の籾摺を改めようとしたもので、宝暦十三年（一七六三）大規模な農民一揆があって従来通りの籾摺案をとした。

安永三年（一七七四）六月、その子主殿頭忠徳が二十五年ぶりに島原に戻った。島原は内高が七万三千石あったが、国替えで二万両を借金したので、以前にもまして藩財政は苦しかった。島原に入ると藩札を発行し急場をしのぐが、この藩札がインフレを招いて実質米価の引き下げにつながったので、領民はますます困窮する。

寛政三年（一七九一）雲仙岳が大爆発を起こし、一万五千人が死去するという大惨事が起こった。藩は幕府から十年年賦で一万四千両を借り、領内に倹約令、衣類取締法をだし、家臣削減に取り組む。藩体制立直しをめざした忠祇が亡くなると、その後は短世領主がつづく。忠候、忠誠、忠精、忠淳、忠憂（いずれも主殿頭）で、忠憂がなくなったとき喪を伏せて後継者をさがした。

松平主殿家の最後の領主には十五代将軍慶喜の実弟忠和を迎える。藩政は家老らの重臣に委ねられたが、彼らは幕藩体制の維持を基本方針としたので、あきたらない下級藩士は中老松坂トノモとあるのが島原深溝藩邸）を襲撃して、各地の倒幕運動にかけつけた。また、代々長崎警備を命ぜられていたので、幕末期には藩内に砲台をすえつけ海防の任にあたっている。

ニュートーキョー、ガード周辺の一角は慶応四年（一八六八）いったん上屋敷を上収されるが、明治元年再び戻り、十年（一八七七）まで在住している。廃藩置県後まで残った日比谷唯一の大名邸である。忠和は明治になると東照宮宮司、宮内省御用掛をつとめた。

文政十三年の日比谷図（松平トノモとあるのが島原深溝藩邸）

おことわり 筆者のペンネームを本名の山岸弘明に改めました。

日比谷物語 ⑯

山岸 弘明

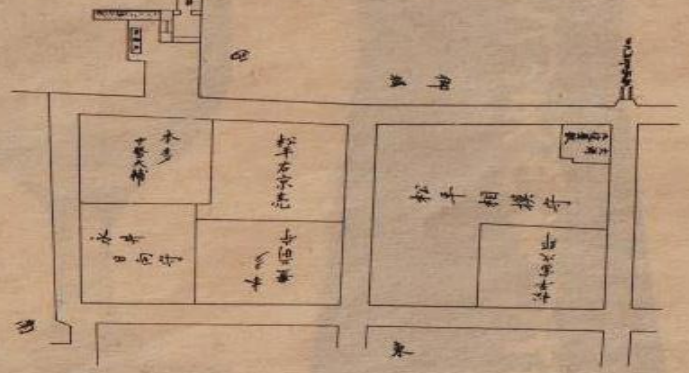
その後の鳥取池田

⑫で国際ビルの一画にあった鳥取池田藩の前半を紹介した。池田藩の藩祖は家康の二女冨子の孫だから、家康の血統を伝えるという名門。因幡、伯耆二カ国（鳥取県）三十二万石を領有する大々名で、今回はその続編になる。

池田藩は五代重寛の後、治道、斉邦、斉稷、斉訓、慶行、慶栄とつづき、最後が十二代の慶徳。国替えがなかったとはいえ、幕府からの公役や相次ぐ災害復旧などの臨時出費が増え、参勤交代の旅費や五つもあった宝暦期には安田成信が宝暦の改革を断行する。改革は農民一揆の中心地を分断して農村支配を徹底させることを骨子としており、藩財政の再建、藩校開設などを盛りこんだ。安政六年には田村貞彦を中心に、安政の改革に取り組む。地場産業の藩専売を強化し、一方では富国強兵をすすめる。しかし、こうした改革にもかかわらず、藩財政は好転しない。財政危機は藩士の生活を逼迫させ藩政動揺がつづくのである。

最後の藩主慶徳は水戸徳川斉昭の五男。幕末期の藩政は尊皇派と佐幕派が激しい派閥争いをくりひろげて、鳥取二十士事件の悲劇も。鳥羽伏見の戦いの火ぶたが切られると藩論を尊皇に統一して、新政府軍の最前線をすすむ。上野彰義隊、甲陽鎮撫隊を破り、さらに奥州各地を転戦している。

池田日比谷邸は慶応四年（一八六八）いったん上収されが、年号がかわった同じ明治元年に復し、連年まで住まう。新政府下では実弟の十五代将軍慶喜が朝敵となったことから引退を申し出るが、聞き入れられなかった。それが影響したかどうか、明治期、鳥取藩が新政府中枢に位置することはついになかった。



文化五年の日比谷（相模守家はやがて高次郎邸、火消役宅を吸合する大藩邸になる）

晴雨計

『私の三井昭和史』

右は今般東洋経済から出た書で著者江戸英雄君（昭和二年三月東大法卒、直ちに三井合名入社、今日に至り現三井不動産取締役会長）の満六〇年にわたる生きた三井本流の昭和史である。著者は謹厳な努力家であり、当時筆者も合名に籍を置き彼は文書課、自分は秘書課で朝夕連絡があり、当時は昭和七年三月血盟団による団理事長の遭難や池田成彬の新常務理事就任、さらに息つく暇もなく五・一五事件、相沢中佐事件、二・二六事件等が続発して文字通り日本は非常時に突入し、合名社内でも文書秘書両課の往来が激しくなった。殊に石塊の物騒な連中の来社が激しく、江戸君と筆者が二人三脚で相手に応待する場面が多くなり、その場合の二人三脚の首から上は江戸君の受持ちで、首から下の駆け引き応待は筆者の受持ちであった。

一度だけ江戸君の生命が危ないと直感したのは、三信ビル問題に関して、ある石塊青年が夜会社の退けたころ会社の一室で江戸君に会いたいと申込んできて、江戸君は今の三井中三号館五階の一室で会うことになり、この時はかりは親しい友人の身を既ったため自分もある準備を整え、真暗な隣室で会見が無事済むまで数時間待機した憶い出がある。このほか江戸君は内では合名の改組、外では内外ビルの所有権の難問題を司法当局に体当りで釈明解決したり、また占領軍オールマイティの時代にも、三井商号商標の問題で通訳を伴って命掛けの折衝を繰り返えし、よくもあの小さな身体が今日まで続いたものだと感心させられる。同じころ同僚各社も悔危機で、外地から携帯ラジオ一個を頼りに引揚げて来て解体された物産の同僚数名と堀商の昭和銀行一所で第一物産の旗揚げをした水上社長の苦労。その他第一銀行と三井銀行の合併、さらに分離、また非常時の日銀との体当りの折衝等に当った小山相談役の当時の苦労が偲ばれる。

（北斗星）

日比谷物語 ㊼

山岸　弘明

幕末の三若年寄

江戸後期のツインタワー・パークビルの一画は岡崎本多藩邸だが、幕末混乱期の文久二年（一八六二）七月から翌三年八月までが有馬道純、しばらく永井飛弾守預かりの後、元治元年（一八六四）から遠山友祥、慶応四年（一八六八）から永井尚服と若年寄三人が相次いで賜邸を受けて明治維新を迎える。

文久二年といえば修好通商条約締結直後のことである。この年、島津藩の行列前を横切ったイギリス人が神奈川県の生麦で殺され外交問題に。一方、朝廷は幕府に攘夷を迫り、内外の緊張が一段と高まっていた。

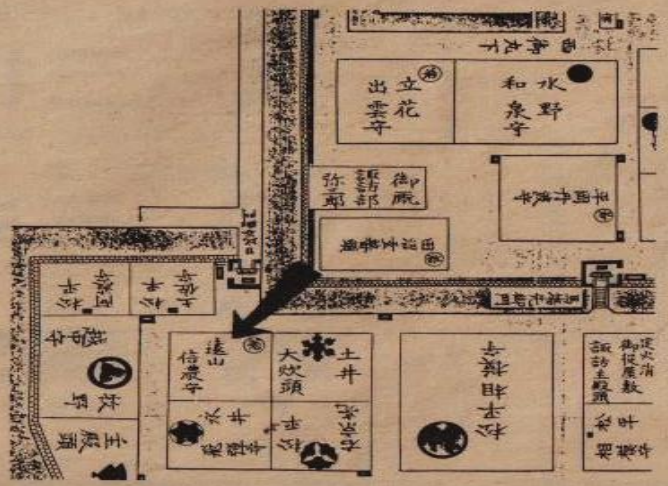
有馬氏は九州のキリシタン大名で知られる晴信からはじまり、その八代の末孫が遠江守道純で、福井県の丸岡七万九千石を領有する。幕末の丸岡藩海岸線に砲台を築くなど、洋式砲術による強兵策を。道純も日比谷時代の若年寄をへて文久改革の年、三年から元治元年までの一年間老中を。

当時の幕閣には板倉勝静、阿部正外、本荘宗秀らがあり、幕末史にその名を残す。京都所司代の松平容保もその一人。尊攘運動の激化する京都にあって文久二年政変、翌元治元年禁門の変で佐幕派巨頭として活躍する。

次の遠山氏は関ケ原の合戦で秀吉に没収された岐阜県の苗木城を奪い返した。以後配転のないまま一万石の所領を守り、最後の藩主が信濃守友祥である。日比谷在住期間が若年寄。苗木藩は平田学らによる神道の影響がつよく、藩士の中には明治維新以降の神道界中心として活躍するものが多かった。

最後の永井氏は宗家尚政の三男からはじまる。岐阜県の加納三万二千石のオーラス藩主が肥前守尚服。尚服の若年寄時は、慶応四年一月から二月までのわずか一ヵ月である。

慶応元年には家茂が大阪城内で病死したうえ、つづく十五代将軍慶喜も三年に大政を奉還し、翌四年二月尚服の退任時は明治戊辰の戦いがはじまっている。幕閣といっても、このころの若年寄にはすでに昔日の権勢はなかった。戊辰戦争下の幕府は、陸軍奉行小栗忠順、海軍奉行勝海舟らの軍部にゆゆられ、江戸開城へとつづくのであった。



慶応元年の日比谷（ツインタワー・パークビルの一画に若年寄遠山信濃守邸がある）

日比谷物語 ㊽

山岸　弘明

日比谷薩摩屋敷

島津といえば戦国時代を生き抜き幕末までつづいた西南の雄藩である。日本史に果たしたこの家の役割は、どの家門にも劣ることがない。この島津薩摩藩邸もまた、日比谷電々ビル、第一勧銀本店の一画にあった。

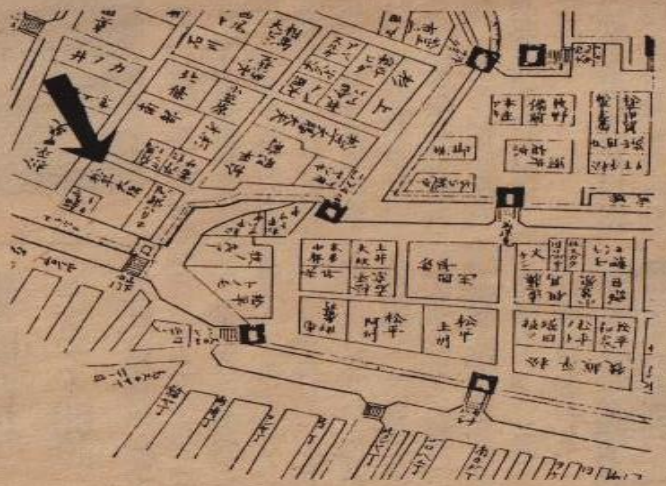
この日比谷島津邸は慶長七年（一六〇二）八月に賜邸されたもので、江戸上期が上屋敷、中期以降に中屋敷となり、装束屋敷とも呼ばれた。

島津氏は清和源氏。初代忠久は源頼朝の落胤ともいう。戦国時代後期に義久が南九州を平定。関ヶ原の合戦では西軍にあったが、家康に謝罪して本領を安堵され、戦後は幕府に忠順に従う一方、財政対策に傾注している。日比谷邸は初代が家久で、以下、光久、綱貴、継豊、宗信、重年、重豪、斉宣、斉興、斉彬、忠義と十代つづくが、この間、初期は琉球を配下に治めて貿易を独占、新田開発、金山発掘などにつとめた。

中期に入ると、元禄文化の消費経済がすすむ一方、本城と江戸藩邸火災などの出費がかさんで藩財政が逼迫する。宝暦期には幕命で川々ご普請を受け、二年分の年収にあたる四十万両を失ない、このころの藩赤字は五百万両にも達したのである。

後期は藩財政の立直しと攘夷への道を歩む。天保の改革では貸主に二百五十年間無利子償還という借金ふみ倒し案を強引に納得させる一方、国産品の専売化や琉球を通じた貿易収益などの向上などにつとめる。この結果、短期間のうちに逆に二百五十万両の備蓄を計上し、この成功がのち薩摩藩倒幕運動の基盤となる。斉彬のとき側室の子久光と後継争いを演ずる。斉彬は開国主義の英主で、忠義のとき寺田屋騒動、藩長連合へと歩む。

装束屋敷の名は、島津藩の附庸であった琉球国王が将軍と国王の代替わりに江戸へ出て、将軍にあいさつした時ここで装束を改め登城したことによる。琉球はいまの沖縄県。五百年前は戦国時代の日本と中国にはさまれた南国の王朝国家として栄えたが、慶長十四年島津軍が運天港に攻め入ったとき、王府首里城が陥落し、以後薩摩藩の属国となった。



幕末二年の日比谷図（松平大隅とあるのが薩摩藩邸である）

晴雨計

「心に打ち勝て」

右は先日リヨン社から出たもので、著者は今年八一歳の山梨県出身の老医で、副題にも言っているとおり「人間は死ぬことにも勇気が要るが、また生き永らえることにも真の勇気が要ること」を己が永い経験に照らして諄々と説いている。

概要はA少年時代①通信教育や満州国教育機関で苦学し②終戦後北朝鮮で収容所生活を送り③昭和二十四年日本の医師国家試験合格、人生に水の有難さを痛感し爾来無病で押通す④人間は絶えず動け⑤死にざまは人間最後の評価。B①ある女性が四人の子供を産み、うち三人が難病にかかる。母親は子供に謝罪するが、子供は逆に母親を慰め障害のまま凡ゆる資格を取って母子ともに明るい生活を送っている②ぽっくり神社とぽっくり寺は死に様を教える神仏③運は努力して得るもの、ツキは偶然。C①脳神経は用いるほど良し自転車は脳を強化する②知能テスト無用論。D①東京の一中学校で「おはようございます」「ありがとうございます」「しつれいします」「すみません」の名頭文字を取ったオアシス運動が流行したり②脚本家橋田寿賀子の作品「おしん」の耐え抜く人生を扱ったテレビ・ドラマが流行したのも「真の心」を求めた国民の声である。E人は高齢になると自分の一生はどうだったかを考えるようになるが、科学者・宗教家達は常に人命を預っている関係上自分は何のために生きているかについて幾度も考える。F人間の最も大切なところは何かといえば「心」と「体」の二つとなり、病気になるのは心を病むか体を病むかのどちらかであり、前者の場合大きく区別すると精神病・神経症・心身症ということになり、心の病気の重いものが精神病であり軽いものが神経症心身症である。（結）病人の家族、知人、医師、看護婦の真心が死を救い、そして病人の子供の願いが死を救う例が多い。

（北斗星）

日比谷物語 ⑲

山岸弘明

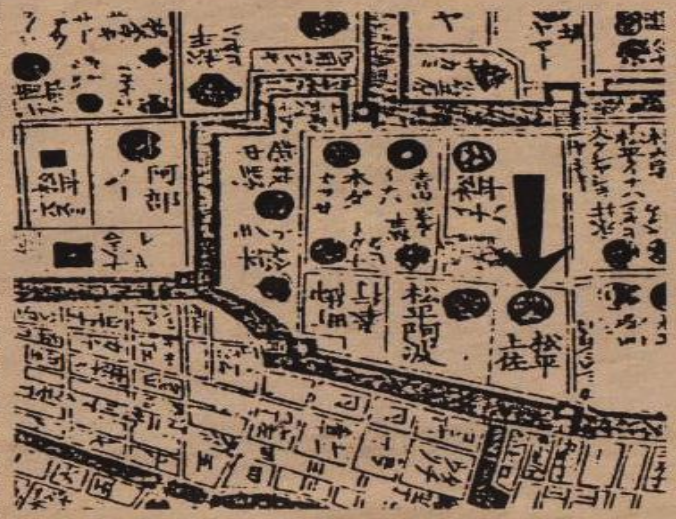
その後の山内土佐

日本一の良妻を得て出世街道を歩んだ山内一豊は㉔で紹介したが、今回は日比谷山内氏の続編である。当初の山内土佐藩邸は都庁第一庁舎一画の二千坪だが、元禄時代、宝永時代と二度にわたる添地賜邸で、後期には都庁のほとんどを占め、幕末に至る。

山内家の四代目は筑後守（土佐守）豊昌で寛文九年（一六六九）から三十年間、このころ元禄文化が華ひらいて消費経済がつづきの難民救済につとめたので領民から慕われるが、次の土佐守豊隆は父に似つかぬ放蕩大名。治政十四年の享保五年（一七二〇）に亡くなったとき、藩士領民が大喜びしたという。

七代土佐守豊常は十歳で襲封、六年後に逝去するが、この豊常の後見役となった家老の山内規重と儒官の谷泰山が土佐に学問の目を開かせる。この芽はやがて大きく育って時代の主役をになうことになる。

豊常には実子がなく規重の子豊敷が養子に迎えられ、四十年



天保九年ごろの日比谷（都庁の一画に松平土佐とあるのが山内藩邸）

すすむが、土佐藩でも武芸や鷹狩りがなおざりにされる一方で、能に熱中し、その費用捻出のために大量の木材が売りさばかれた。豊昌はまた、農民のあり方を示した天和の改革や藩政の基本を解いた元禄大定目を定め、緒方宗哲を招いて藩学の振興をめざしたが、残念ながら定着しない。

次の土佐守豊房も名君の誉れが高い。五代将軍綱吉の末期はその独裁政治の乱れと天災、インフレなどが庶民生活を苦境に陥れていた。豊房は大災や不況におよぶ藩政を布く。このころ高知城が焼け、災害復旧に藩財政は一挙に破綻を招く。享保十八年には思い切って行政改革を断行、さらに専売制を実施したので領内には強訴や一揆、米騒動などが多発している。

この後、山内藩は豊策、豊興、豊資、豊熙、豊惇（いずれも土佐守）がつづく。豊惇は襲封後わずか十余日で急死し、一門の豊信＝山内容堂を迎えることになる。容堂は大老井伊直弼らと対立して安政の大獄で隠居・謹慎となるが、のち公式合体を唱え幕末の政局で活躍する。最後の藩主が豊範。西南雄藩の一つとして明治維新へ大きく歩む土佐藩であった。

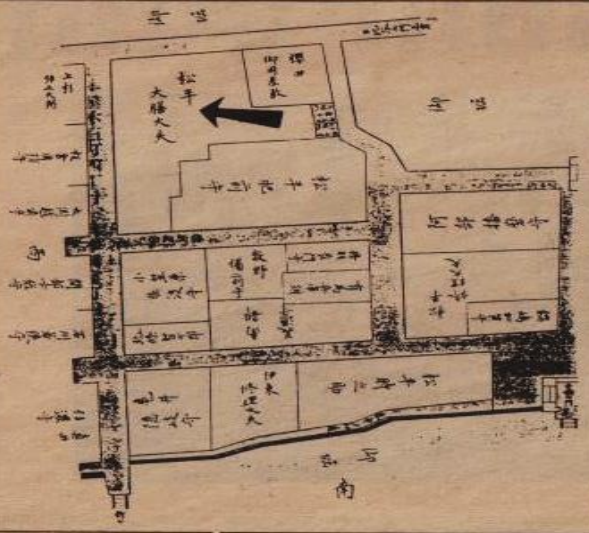
日比谷物語 ⑳

山岸弘明

その後の長州毛利

⑫で慶長六年（一六〇一）、毛利秀就が日比谷公園東京地裁寄りに賜邸されたことを書いた。⑫は五代吉元まで紹介したので、今回はその後の長州（山口県など）毛利藩になる。

日比谷毛利邸は賜邸当時、日比谷公園の約六分の一だが、享保十六年（一七三一）天保九年（一八三八）と二回にわたる添地賜邸があり、後期は四分の一強にあたる約一万五千坪の大邸宅になっている。この間、藩主は吉元の後、宗広、重就、治



文久元年の日比谷（松平大膳大夫とあるのが毛利藩邸で、元治元年には焼失して空地となる）

親、斉房、斉熙、斉元、斉広、敬親とつづく。

重就は毛利家中興の英主として知られている。当時の長州藩は相つぐ凶作で藩財政は悪化の一途をたどり、宝暦八年（一七五八）には藩負債が銀四万貫にも。重就は増収のため貞享検地を実施して四万石を加え、この増徴分を基金に、瀬戸内海の遠浅部分を埋立てて新田をひらく干潟造成事業を興す。北前船に目をつけ、中継貿易も。

斉房は主要産業である塩の生産制限で価格安定をはかり、蝋を大阪市場に送りだす。さらに斉元のとき御内用方を設置して、生産者から廉価で買占めた作物を大阪で売りさばこうとするが、怒った領民が大規模な一揆や打こわしをくりかえして内用方をつぶした。最後の敬親は村田清風を登用して藩政改革を。しかし、こうした相つぐ施策も藩財政の立直しにはいたらない。

幕末期は維新革命の主役になっている。激動の時世を体験し、血の抗争をくりかえす。元治元年に起った禁門の変は長州藩を重大危機におとし入れた。京都を追われた後、英・仏・米・蘭四カ国連合艦隊の猛攻撃を受け、幕府の長州征伐へとつづいている。

この長州藩を回生させたのは高杉晋作の率いる奇兵隊らであった。近代軍制のもと、下級武士や農民を中心とした諸隊は、藩内の佐幕派を破り、第二次長州征伐では藩長連合のもと倒幕への第一歩を印すのである。この間の経緯は改めてふれる。

日比谷毛利邸は元治元年（一八六四）長州征伐に先だって焼打ちにあっている。藩邸にあった藩士らはいったん中、下屋敷に逃れた後、長州をめざして退去する。末期江戸図には単に元長州と記載されるのである。

日比谷物語

山岸 弘明

(81)

その後の佐賀鍋島

これまで江戸時代日比谷に在住した大名を紹介したが今回オーラスで鍋島藩の続編になる。

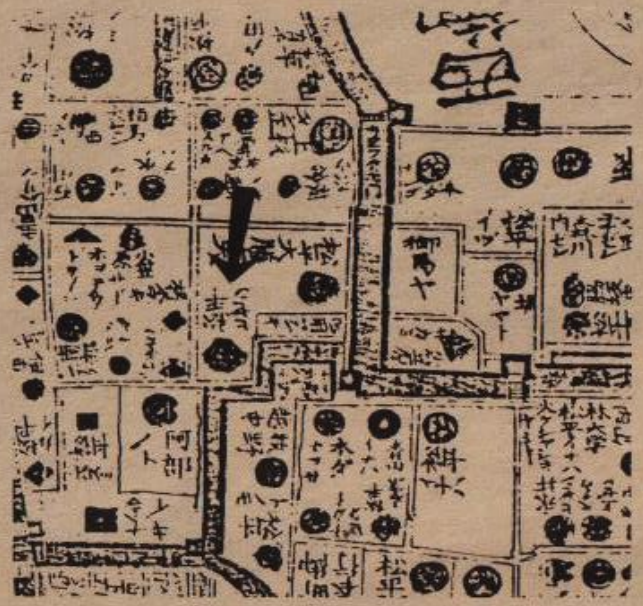
(11)で日比谷公園の正面入口一画にあった佐賀三十五万石松平鍋島藩の四代吉茂までを書いた。鍋島藩はこの後、宗茂、宗教、重茂、治茂、斉直、直正、直大とつづいて幕末を迎えるが、この間元録十年（一六九七）いったん甲府中納言添地としてさしだし、甲府綱豊が六代将軍に迎えられた宝永三年（一七〇六）旧藩邸跡地に復帰した。

茂が六府方を設置する。六府は山方、牧方、陶器方、搗方、貸付方、講方からなり、搗方では有明干拓による新田開発を。陶器方は藩の主要産業である有田焼を全国の市場へ送りだす。しかし、この改革も根本的解決に結びつかないままに、英軍艦フェートン号事件が起って、斉正の頓死も。

一進一退をつづける鍋島藩を維新の雄藩に育てあげるのが直正である。大地主から土地を没収して小作農に再分配する均田制を実施。陶器や小麦といった主要産業を藩の専売制として内外の貿易収益をはかる。大阪商人も舌を巻く〝経済大名〟ぶりを発揮している。

軍制改革による強兵策にも取り組む。大砲を鋳る反射炉が築かれ、造船所や小銃工場が生まれる。一大洋式軍事基地が誕生したのである。

鍋島藩は内政第一主義をとって藩士に尊攘運動に加らせなかったので、討幕を決めたのは慶応三年（一八六七）になってからだ。藩の財力と近代兵器は新政府軍の柱となって明治維新をすすめる。明治元勲の大隈重信、江藤新平らを送り出すのであった。



天保九年の日比谷図（松平ヒゼンとあるのが日比谷公園鍋島邸）

このとき、大田原山城守邸跡地が添地賜邸され、天保九年（一八三八）大幅な増地があった。

鍋島は大藩ではあったが、元録期以降の消費経済進捗で藩財政の窮乏に苦しむ。江戸中期、吉茂、宗茂が財政再建をめざすが、享保十一年（一七二六）佐賀城の焼失、十四年の大飢饉、寛延三年（一七五〇）大規模な農民一揆とつづいて、ますます悪化する。

天明三年（一七八三）には浅

日比谷物語

山岸 弘明

(82)

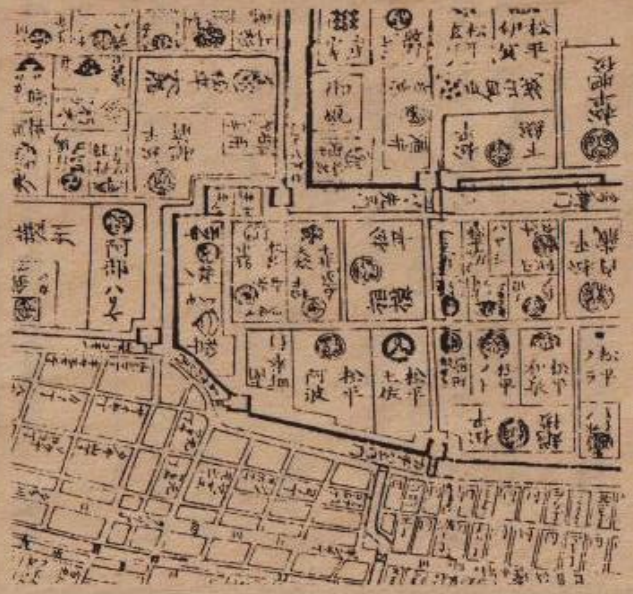
日比谷雄藩

嘉永六年（一八五三）アメリカ艦船を率いたペリー提督の来航は、幕府政治を根底からゆさぶることになる。国内は開国か攘夷か、勤皇か佐幕かで沸きかえり、一気に明治維新へとすすむ。

大老井伊直弼は通商条約の調印、将軍後継問題で独裁体制を布くが、一方直弼への反撥も高まっていた。万延元年（一八六〇）には桜田門外で水戸浪士に暗殺されるというショッキング

日本の夜明けは日比谷雄藩からはじまる。薩長土肥というが、薩州鹿児島島津藩は中屋敷（はじめは上屋敷）が日比谷電々総合ビルにあり、長州山口毛利藩上屋敷は日比谷公園に、土州高知山内藩上屋敷も東京都庁に、そして肥州佐賀鍋島藩邸は日比谷公園にあった。

このなかで、まず幕末史の引き金を引いたのは毛利敬親である。井伊大老が倒れると、〝外には積極的に開国し、国内では公式合体で強力政権を〟を藩論を決め、公武両者から好評を。



安政二年の日比谷図（薩長土肥藩邸が軒を並べる）

〜〜〜

日比谷物語 ㊸

山岸　弘明

薩長同盟

蛤御門の変、下関戦争とつづいた敗戦は、長州山口毛利藩をますます苦境に追い込む。蛤御門では御所に向けて発砲したことから、長州を討てとの勅命も受ける。

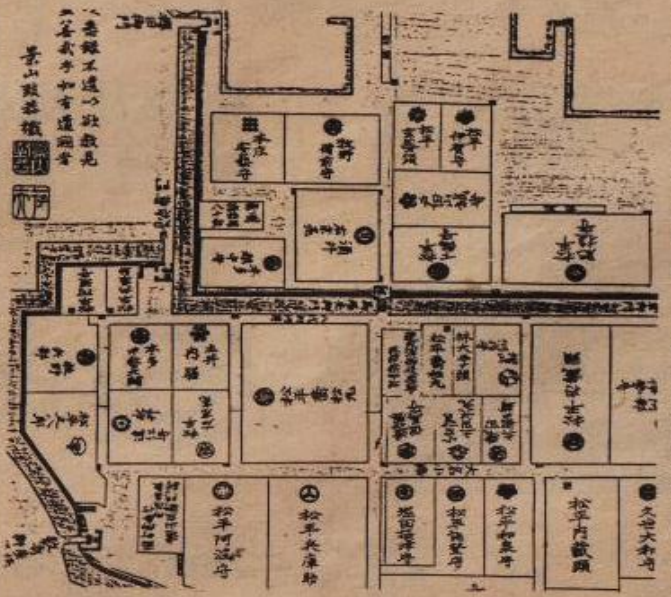
幕府にとっては尊攘派の拠点であり、何かと幕政の批判をつづける長州は、まさに目の上のタンコブ。千載一遇のチャンスでもあった。尾張藩主の徳川慶勝を討伐総督に。中国、四国、九州から集まった二十一藩十五万の軍勢が長州国境を取り囲んだ。このときは謝罪のうえ、担当した三家老の首を差し出して、ことなきを得るが、こうした解決方法に藩内尊攘派の不満が高まった。

外面恭順を表わしながら幕府との一戦に備えるという武備恭順が決まり、元治元年（一八六四）に高杉晋作らの松下村塾門下生が藩論を統一。大村益次郎による軍制改革がすすみ、倒幕色が一段と深まる。慶応二年（一八六六）坂本竜馬の仲介で薩長連合ができる。倒幕運動が現実のものになったのである。

一方の薩州鹿児島藩の柱は島津斉彬。斉彬は㉘の島津藩邸で紹介した。十四代将軍継嗣問題、通商条約での開国論など中央政界に大きな発言力をもってくる。斉彬のもとで育った進歩的考え方は薩州倒幕運動の柱となる。生麦事件を契機にイギリス軍艦と戦うが、利非すとみると講和を結び、イギリスとの関係は一転し親密に。

次の久光は公式合体論をすすめ、八・一八クーデター役には朝幕周旋にのりだす。元治元年には攘夷をめぐって十五代将軍慶喜と対立、尊攘派からも悪評を受けて孤立するが、第一征長で長州の謝罪とりまとめに尽力。薩長同盟ができると長州再征に反対も。

慶応三年十月、慶喜は大政奉還を行なうが、同じ日薩長両藩に倒幕の密勅がくだる。十二月の小御所会議では尊攘派が徳川将軍の辞官、納地を主張。これは徳川家への挑戦そのものであった。佐幕派の薩摩屋敷焼打ちを契機に、幕府軍の京都進撃がはじまる。鳥羽伏見の戦いを皮切りに戊辰戦争へと連がるのである。



嘉永二年の日比谷図（幕末風雲急を告げている）

日比谷物語 ㊹

山岸　弘明

江戸城無血開城

最後の将軍となった十五代慶喜の在位は、わずか一年にすぎない。慶応二年（一八六六）十二月に就任、翌三年十月大政奉還を行なう。徳川幕府開府以来、二百六十五年間の歴史に終止符が打たれたが、この大政奉還がすべてを解決したことにはならなかった。

あくまで倒幕をめざす新政府軍五千と、大義によって君側の奸を一掃するとした幕府軍一万五千が鳥羽伏見にまみえたのは、四年二月のことである。しかし、すでに士気の衰えた幕府軍は、近代軍制のもと錦旗をなびかせて進撃する新政府軍の敵ではなかった。全軍総崩れとなると、慶喜は松平容保ら数人を伴なって、アメリカ軍艦で江戸城に帰り着く。

新政府はさらに追い討ちをかける。慶喜征討の大号令を発し、諸藩に態度表明を迫る。鳥羽伏見の勝利を目の前にみた西日本の諸藩は、たちまち新政府に。ただちに東征大総督に有栖川宮熾仁親王を任命。東海、東山、北陸の各道へ鎮撫総督軍が出発する。その中に参謀西郷隆盛があった。東征軍は三月十二日品川、板橋に陣をすすめて江戸総攻撃態勢が固まる。

一方、大阪から逃げ帰った慶喜は強硬論の小栗忠順を罷免して勝海舟を登用。自らは江戸城を出て寛永寺で謹慎生活に。勝は外国の軍事介入や、頻発しはじめた農民エネルギーによる暴動を恐れ、戦闘中止につとめる。十三日、田町の薩摩藩邸に西郷をたずね江戸城の無血開城へ。こうして江戸城は四月十一日新政府軍に明けわたされ幕府は完全に消滅する。

混乱期の日比谷をみよう。新政府は四月はじめ諸大名に江戸邸引払いを命ずる。引払い届出をみると、倒幕諸藩はすでに四～五年前から藩主家族を引き上げ、その他も大政奉還後、国表に引き上げずみの大名が多かったのでスムーズに。一部の残留組も布告を受けて家臣へ帰国命令を。東京府史には〝七日、諸藩主およびその臣隷の家眷、江戸にあるものことごとく復帰せしむ〟とある。こうして日比谷は一時廃墟の町に。落日迫る江戸に不安と焦躁がみなぎったとき、三百年つづいた日比谷の栄光の一幕が静かに降りた。

慶応三年、幕末期の日比谷図

日比谷物語 ㊺

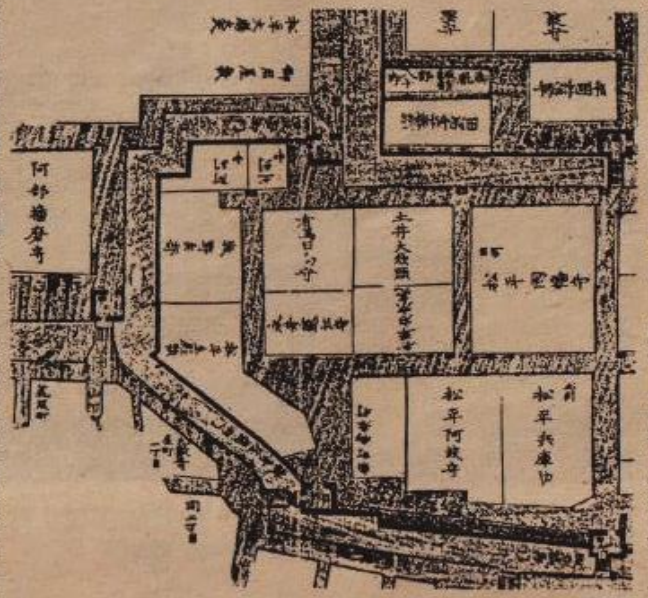
山岸　弘明

混迷する幕末諸藩

㉜㉝㉞と薩長土肥のはなばなしい維新エネルギーを紹介したが、この他の日比谷藩主たちはどう対応したのであろうか。ある藩は恭順、新政府軍の一員として活躍すれば、またある藩は奥羽列藩同盟に加わって城下を焦土と化した。歴史の流れは日比谷住民の明暗をいろどる。

続編で紹介した鳥取藩の池田慶祝は、十五代将軍慶喜の実兄だが、維新の戦いでは薩長軍の急先鋒として活躍する。慶祝はがって刃を交すこともない。藩論はやがて勤皇と決まる。鳥羽伏見の戦いでは藩長軍に加わり、戊辰の戦いがはじまると主力隊が東海道鎮撫隊の先鋒をすすみ、一部が東山道別働隊に。鳥取勢は勝沼で近藤勇の甲陽鎮撫隊を破り、上野では彰義隊をくだして奥州各地を転戦する。

大勢を見通して恭順し、新政府軍に協力する大名も多かった。ほとんどの藩が戦力も乏しく、戦争をさけたいという気持ちをもっていたからだ。三井ビルの牧野藩は代々幕府の要職を歴任した佐幕色の藩だが、早々に恭順を決めて新政府軍に加わる。当時の関東諸藩は軍制の改革が遅れていたので、槍隊二百人が旧幕軍隊の連発銃に挑んで多数の死傷者を出す。



文久三年の日比谷（幕末期の大名邸がつづいている）

ニュートーキョーの松平深溝藩は、藩主忠和が将軍実弟。当初は佐幕色が濃く、若い藩士の中に尊皇攘夷が根づよかった。戊辰の戦いがはじまると藩論を尊皇と決めて新政府軍に加わる。旧アメリカ軍艦に乗船した藩士二百五十人が大砲二門を引いて奥羽戦線を転戦、その行軍は難航をきわめた。十月角館に引き上げた藩士に慰労品毛布一枚ずつが配布されたという。

水戸斉昭の五男だから、父の影響もあって勤皇思想も強かったとはいえ、弟将軍をみかぎるにはそれなりの経緯があった。藩内は早くから尊攘派と佐幕派の対立が激しく、文久二年（一八六二）には勤皇派二十二名が京都の自藩本陣を襲うという二十士事件を起こしている。彼らは各地の勤皇志士と意を通じ、倒幕運動をすすめる。

第一次征長では反対派の勤皇藩士が大目付を斬殺し、つづく第二次征長では出兵も名がかり。はるか遠くから形勢をうか

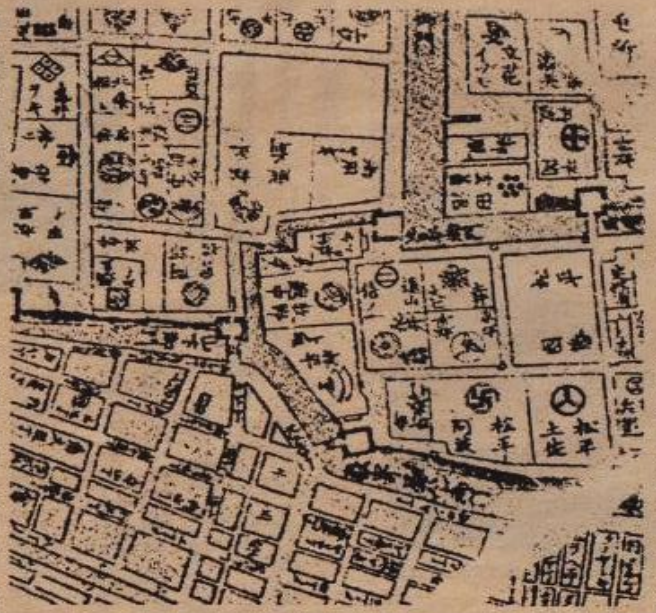
日比谷物語 ㊻

山岸　弘明

焦土と化した棚倉

前項に幕末の動乱期で激動する日比谷諸侯を紹介したが、今回はその続編である。有楽町ビルの高崎松平大河内藩は藩主の輝照が幕府の陸軍奉行並を勤めるなど、もともとは佐幕色が強かったが、慶応四年（一八六八）三月武器弾薬と二万両を献納して恭順を表わす。その後、時流の動くまま新政府軍に加わって上越国境の三国峠で会津勢と戦い、戸倉で会津藩に備える。

第一生命ビルの古賀土井藩は藩主利与が若かったので、家老小杉監物が藩論を恭順にまとめる。上落して勤皇を誓い、一万五千両を献上し、戊辰戦争では新政府軍の食料補給につとめた。電気ビルの加納永井藩、東宝ツインタワービルの高槻永井藩は恭順を表わしただけで戊辰戦争にはまったく関係なく終わる。



慶応二年の日比谷

しかし、一方では奥羽列藩同盟に加わって落城した日比谷藩主もあった。帝国ホテルの阿部正静、正功父子である。阿部氏は慶応二年に福島県の棚倉十万石に転じたが、慶応四年二月には旧領の白河十万石も併されていた。

両藩ははじめ勤皇佐幕どちらにも決めかねた大勢順応形であったが、奥羽鎮撫隊がすすむと恭順を表明、会津攻撃を命ぜられる。このため、いったんは新政府軍に白河城を明渡す。ところが一転して戦火にまみれるのは、その後仙台、米沢藩の要請を受けて、遅ればせながら同盟軍に加わることにしたからだ。同盟軍は逆襲して白河城を奪い返す。

新政府軍は都宮から転じた薩長鳥取軍を白河に進める。その兵数七百と大砲七門、一方の同盟軍も二千と大砲八門。この戦いは政府軍が勝ち、敗走する同盟軍を追って市街に乱入する。戊辰戦争最激戦といわれた白河戦争に勝った新政府軍は、改めて白河城に入場する。参謀は坂垣退助その人であった。

白河城攻防に敗れた同盟軍は棚倉に退き、再度の決戦を期すが再び新政府軍の猛攻撃にあって、さらに本営へと退却している。この戦いで棚倉城と市街は一瞬のうちに焦土と化し、阿部正静は所領没収のうえ謹慎の処分を受けるのであった。

日比谷物語 ㊻

山岸　弘明

江戸時代を終えて

一年半にわたって紹介しつづけた〝日比谷物語〟も、ようやく江戸時代が終わった。数寄屋御門のあった高速道路の下にたつと、有楽町マリオン、電気ビルの高層ビルがならび、その間を東海道新幹線が走っている。雑踏にもまれながら日比谷の町を歩む。かつての昔、先祖の栄光を守った江戸大名が起居し、江戸城への登城風景がくりかえされた、という面影はどこにもない。

家に迎えられた。高速道路と宝塚のところにあった外濠、日比谷濠に囲まれたこの一画は西の丸下に次ぐ幕政の中心地でもあった。ここから二十人を超す老中や若年寄が生まれる。日比谷公園には比丘尼屋敷やお庭番長屋があり、マリオン裏の朝日街には南町奉行所があって、大岡忠相や遠山景元も活躍している。

最後の日比谷大名は鳥取池田藩、阿波蜂須賀藩、笠間牧野藩、棚倉阿部藩、高槻永井藩、加納永井藩、高崎松平藩、島原松平藩、古賀水野藩、そして維新革命をすすめた薩長土肥の四藩であった。

のりや貝をひろい、魚をとって細ぼそと暮らした入江が、一変して大名屋敷になり、明治維新では明治元勲の町や陸軍の町に変り、そしてわが国近代産業の拠点に。日比谷の歴史はまさしくわが国の近世史そのものでもあった。

明治のご一新は新しい日比谷の誕生を告げる。次号からは明治、大正、昭和とつづく日比谷史を紹介することにしたい。

安政七年の日比谷図（江戸図の紹介もこれが最後で、次号からは東京図が中心になる）

日比谷物語 ㊽

山岸　弘明

東京遷都

慶応四年（一八六八）、東征大総督の有栖川宮識仁と鹿児島藩士西郷隆盛に率いられた新政府軍が、無血開城した江戸城に入ったのは四月十一日のことであった。

これより先の二月十三、十四日にわたって田町の薩摩藩邸で行なわれた西郷と勝海舟の会見で辛くも江戸城総攻撃が回避されていた。十五代将軍慶喜は江戸攻撃中止の条件といった一大名の降格を受け入れて謹慎する

させるしかない、と主張。上野のお山を包囲した新政府軍の近代兵器が猛然と火をふいた。上野戦争の勝利は徳川政権復活の最後の可能性を断ちきる。そして東北、北海道とつづく旧幕臣の抵抗のすべてが翌明治二年に終息する。

慶応四年三月十四日。江戸城総攻撃をめぐる西郷・勝会談が行なわれたこの日、京都紫宸殿では、大名・公卿を集め、五カ条のご誓文が発令された。明治天皇が神々に新しい政治方針を誓うという、この誓文は天皇神

上野での彰義隊の戦い

が、旧幕府勢力のすべてがすなおに新政府にしたがったわけではなかった。これに反発する旧幕臣の天野八郎、渋沢成一郎ら二千の彰義隊は上野寛永寺にこもり、ゲリラ活動をつづける。

幕府びいきの江戸市民も〝官軍かぜ〟を吹かす新政府に不信の念をあらわす。江戸の治安が乱れ、関東各地では農民一揆がおこり、旧幕諸隊が蜂起する。

こうした不隠な状況を打破したのが、長州藩の大村益次郎であった。大村は関東の混乱をしずめるには、拠点彰義隊を壊滅

格化の第一歩でもあった。

この年九月、明治と改元。十月には明治天皇がはじめて江戸行幸を果たし江戸を東京と改める。このときは天皇が京都、東京を巡り、親政をとることとし、東京には臨時政府にあたる鎮将府と東京府を設置する。そして明治二年三月、天皇の第二回東京行幸を機に京の都を東京に移す、いわゆる東京遷都が発令された。こうして東京は新しい首都としてよみがえる。日比谷も、官軍屯所や新政府の明治元勲邸へと、新たな展開をみせるのであった。

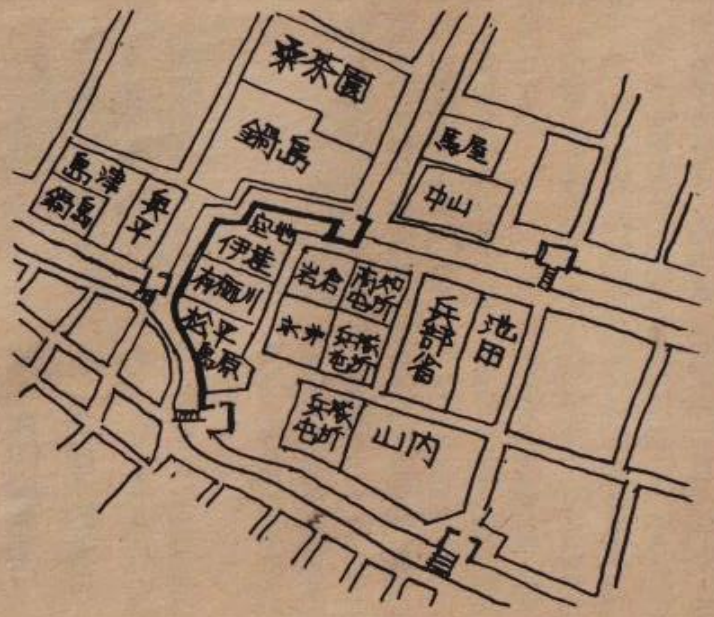
日比谷物語 ⑧⑨

山岸 弘明

新政府軍屯所

日比谷の明治の曙は〝勝てば官軍、敗れれば賊軍〟に象徴された戊辰戦争そのものであった。明治はじめの東京図をみると、維新の活躍組と新政府軍の屯所がめだっている。国際ビルの一画は最前線をすすんだ鳥取藩松平因州屯所に。ここはやがて兵部省、陸軍省と変遷して軍都日比谷の中心となる。

有楽町ビル、新有楽町ビルの一画は倒幕軍主力の鹿児島藩島津薩州屯所に。第一生命の一画、交通会館、東京都庁には高



数少ない明治元年の「東京図」写し（実際は明治二～三年のものだろう。新政府軍の屯所と明治元勲が目立つ）

知藩山内土州屯所。一方、南町奉行所のあった朝日街は慶応四年（一八六八）から明治元年（同）にかけて新政府の南町裁判所と改称され、東京府庁統合後は山内藩邸、薩州屯所と変っている。

日比谷に軍隊を集結したのは、江戸城から徳川将軍を追い出して明治天皇を迎えたとはいえ、いつ反薩長派が新宮城の奪還を図らないとも限らなかったからだ。新政府下の軍隊とはいえ、近代兵舎の新築まで手が回わらず、旧藩邸を中心に、日比谷・丸の内の諸大名邸があてられたのであった。

新政府は陸軍本部ともいうべき軍務省を皇居外苑におくが、二年七月には兵部省と改め、翌三年国際ビルの一角にあった因州屯所に入り、五年二月には陸軍省と改称。九年ころ桜田門の警視庁に去っている。陸軍省の国際ビル時代は、六年一月、徴兵令が発令、反対の暴動が相次いで陸軍建設の土台をおびやかす。五、六年には御用商人・山城屋和助の破産、省内割腹事件、三谷三九郎の破産と不正融資が明るみにでて、陸軍卿（大臣）山県有朋の責任が問われたのであった。

五年三月、兵部省添地から出火。折りからの強風にあおられた火はみるまに丸の内、銀座、京橋一帯を焼野原に。日比谷も国際ビル、第一生命、交通会館、朝日街の新政府屯所を焼失した。第一生命、ニッポン放送、農林中金の一画と国際ビルは再建されて軍部の中枢となるが、交通会館と都庁の大部分は、このあと放置されて有楽町練兵場に。二十三年になって三菱合名社に売却されるのである。

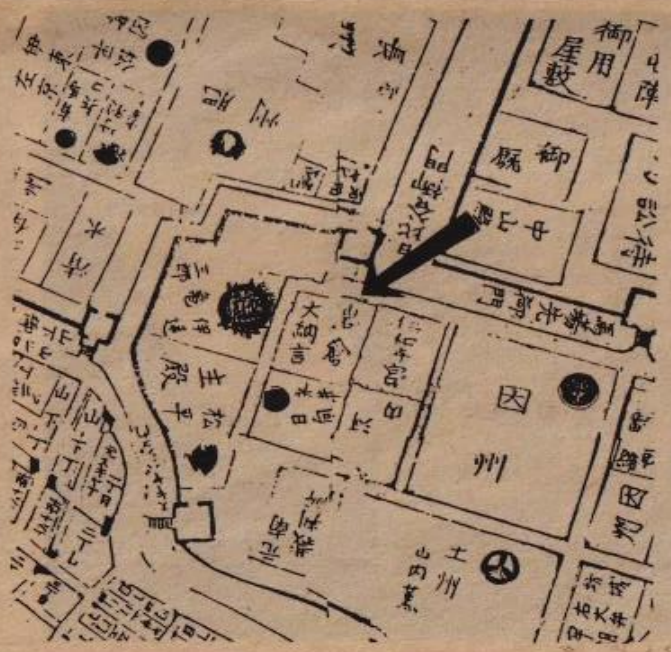
日比谷物語 ⑨⑩

山岸 弘明

倒幕演出者の岩倉

明治はじめの日比谷は、前回で紹介した新政府軍屯所と明治元勲邸にかわっている。パークビルからツインタワービルにかけての一画に明治元年（一八六八）からの一年間、倒幕運動の演出者岩倉具視邸があった。

岩倉といえば維新の大歴史ドラマをもっともダイナミックに生きた堂上公卿として知られている。中納言掘川康親の二男として生まれたが、平公卿岩倉具



明治二年の日比谷図（ツインタワー・パークビルの一画に岩倉邸があった）

る。このころの岩倉邸は垣根も破れ、雨漏れもするアバラヤであったという。

慶応三年（一八六七）になると、幕末の風雲はますます急を告げる。長州山口藩の木戸孝允、薩州鹿児島の西郷隆盛、土州高知藩の坂本竜馬らが岩倉村の日参し、明治維新の参謀本部にも。『神州万歳策』など多くの意見書や建白書がだされた。

この年十二月九日、岩倉はさっそうと小御所にのりこみ、王政復古と新政府を実現する。岩倉の仕組んだ維新へのシナリオが着々とすすむ。これは武力による幕府旧勢力の一掃でもあった。新政府軍は岩倉が草案した倒幕勅書と、錦の御旗をおしたてて東上し、維新の大業がなったとき、新政府の最高位に座したのであった。

新政府では右大臣をつとめ、明治六年の征韓論当時、三条実美の代理として太政大臣にも。十六年、五十九歳で亡くなり国葬の礼を受ける。昭和五十九年春の高校野球で全国制覇する岩倉高校は、彼の死後、その偉業をしたって全国から集められた募金で建てられている。

日比谷物語 ㊶

山岸弘明

東征総督有栖川宮

明治はじめの日比谷は明治元勲邸が軒を接する。東征大総督として江戸へ攻めのぼった有栖川宮熾仁親王もその一人だ。明治元年（一八六八）の東京大絵図など、維新直後の東京図に有栖川宮の名前が読める。一時期、煙突横丁のガード周辺に在住したことを示している。

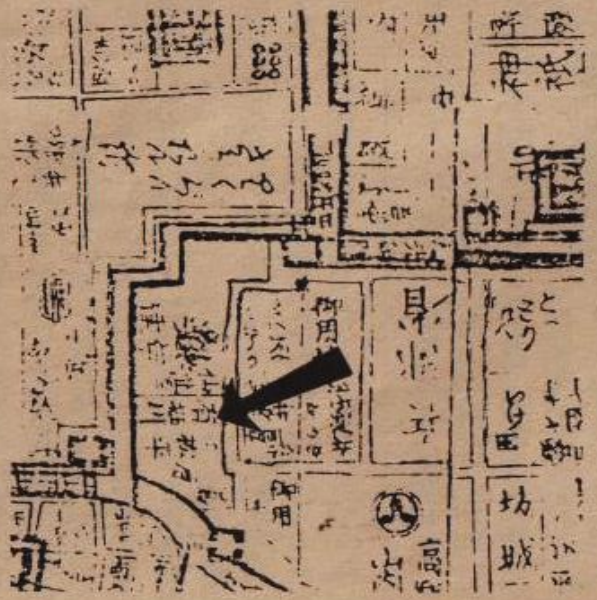
〝宮さん宮さんお馬の前でピラピラするもの何じゃいな。あれは朝敵征伐せよとの錦の御旗じゃ知らなんか、トコトンヤレナー

圧力で十四代将軍家茂に降嫁し、有栖川宮との婚約が解消された。

心に重い傷跡を負った宮ではあったが、慶応三年（一八六七）の王政復古で新官制の総裁職に就任。翌四年二月、戊辰戦争がはじまると、東征大総督となって東海、東山、北陸三道の新政府軍の指揮にあたる。三月六日の軍議では〝十五日江戸城総攻撃〟を決定するが、西郷隆盛・勝海舟会談を契機に中止され、無血開城へ。

この時、参謀として宮を補佐して新政府軍を指揮した西郷の最後もみとることになる。明治十年（一八七七）西南戦争がはじまると、再び征討総督に任命された。この遠征も政府軍の圧倒的な勝利に終わり、凱旋将軍として二度目のスポットライトを浴びる。二十八年逝去。六十歳であった。

この有栖川宮邸が日比谷にあったのは明治元年から五年ごろまでの一時期にすぎない。やがて品川区（いまの港区）広尾に大邸宅を構える。都立中央図書館のあるいまの有栖川公園である。



明治五年の日比谷図（有栖川宮邸が国鉄ガード付近にあった）

日比谷物語 ㊷

山岸弘明

中山大納言

明治はじめの日比谷は元勲邸がならぶ。明治天皇の祖父中山忠能もその一人だ。幕末混乱期、幼い明治天皇に倒幕密勅をださせ、新政府では最高位職に。中山邸のあったパークビル、ツインタワービル、朝日生命ビルの一画には大正天皇の養育所が建てられ、天皇もまた幼児期、日比谷に育つのである。

中山家ははじめ一百石の堂上公卿であったが、忠能の娘慶子が孝明天皇につかえて明治天皇の生母となったことで、幕末の尊王公卿として一躍脚光を浴び

に尽力。新政府議定、神祇伯などを歴任した。

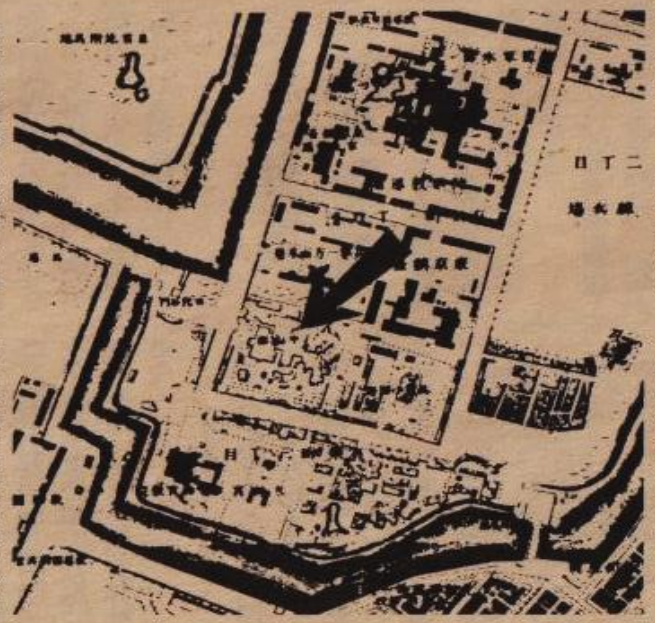
中山邸は維新直後の明治元年（一八六六）皇居外苑に大邸宅を構えるが、六年日比谷に転じ、三十六年までの三十年間ここに在住する。この間、大正天皇養育所ともなったから、大正帝も日比谷住民の一人といえる。十二年六月の東京日々新聞に「柳原典侍（愛子）ご出産後は中山邸に新殿ご造営移御」のニュースがのっている。この年、明治天皇の第三子として誕生した明宮（大正天皇）は、十二月八日日比谷中山邸に入居。天皇は幼少期をここにすごす。

る。天皇は五歳までこの中山家で育てられ、即位後も外祖父として絶大な権勢を振るう。

安政五年（一八五八）の日米通商条約では幕府の堀田正睦に引きづられる九条関白に対決、攘夷派公卿八十八人を集めて条約勅許を否決した。幕末混乱期には討幕密勅の御璽を得る。この勅許は鳥羽伏見の戦いとなり、徳川討伐の火蓋を切らせる。慶応三年（一八六七）十二月九日のクーデターで王政復古

四十五年、明治天皇の逝去で即位。しかし病弱で大正十五年四十七歳の生涯を終えた。

忠能の五男には奈良県で挙兵して敗れた天誅組首領の忠光がある。嗣子は孝麿で二十一年日比谷中山家を継ぎ、東宮侍従長や宮中顧問官、会計審査局長などを歴任。大正天皇の御大礼では旭日大綬章を受けた。三十六年、市区改正という名の都市計画で晴海通り建設が決まり、この中山邸が二分されるのを機に、日比谷を去ることになる。江戸時代の日比谷を伝えた最後の建造物でもあった。



明治十六年の日比谷図（「中山」とあるのが大正天皇養育所ともなった中山大納言邸）

日比谷物語 ㊸

山岸弘明

国民宰相大隈重信

大隈重信といえば、反骨精神を貫いた革新政治家として、早稲田大学の創設者として、日本の鉄道を誕生させた一人として有名だが、一時期日比谷の三井ビル一画に在住したことは意外と知られていない。

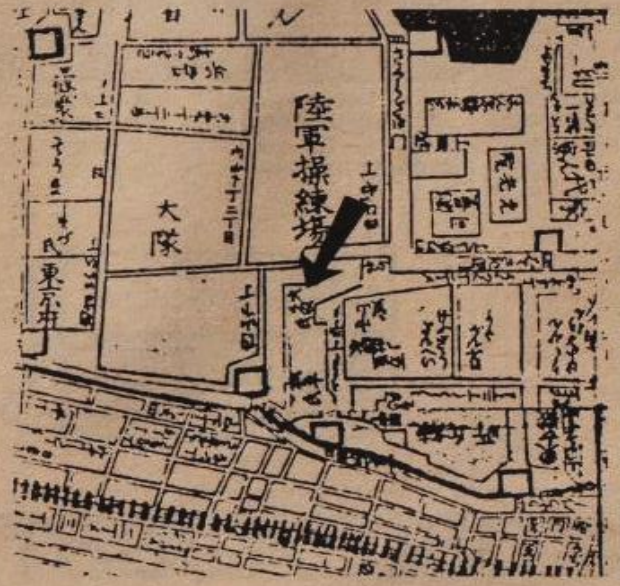
重信は幕末期、佐賀藩の上級藩士として生まれた。佐賀は当時、鍋島直正が藩政第一主義をとって尊攘の嵐をまぬかれるが、あきたりない重信は志士にあこがれて脱藩し、明治維新の大業がなったとき自藩の獄舎に時の上級官吏の生活はきわめて恵まれていた。明治維新を機に旧大名と並ぶ地位と生活に躍進したうえ、生来の派手好みであった大隈邸は、夜毎お祭り騒ぎをくりかえしたという。

大隈邸は七年神田錦町、九年飯田町雉子橋へ転居。十七年からは最後の本邸早稲田へ。早稲田大学に残る豪華な洋風庭園は東京名園の一つとしていまに伝えられている。

明治六年、西郷隆盛が征韓論に敗れると、重信は大久保利通を助けて副総理格となるが、利通が暗殺されると伊藤博文との権力闘争に敗れて閣外へ。野にいた重信はさらにはばたく。やがて立憲改進党を組織して自由民権運動の大立役者となり、十五年は早稲田大学の創設も。立憲改進党は日比谷に本部をおくので、改めてふれることになる。

重信は三十一年、板垣退助とともに内閣を組織して総理大臣に就任。大正三年（一九一四）にも再び返り咲き、民衆政治家として大衆人気がいやがうえにも高まった。

十一年一月逝去。日比谷公園で開催された国民葬に三十万人の弔問客が押しかけて人柄を偲ばせている。



明治七年の日比谷図（「大くま氏」とあるのが大隈重信邸）

あった。

天皇政権が成立すると、逸早く参与にすすみ、やがて大蔵・民部大輔（次官）へ。明治二年（一八六九）政府から築地西本願寺近くに五千坪の旧旗本邸を与えられるが、この築地邸は梁山泊とも呼ばれている。梁山泊は中国の水滸伝からとったもので、重信を慕って集まった友人や同志が天下国家を論じた。その中には旧千円札の伊藤博文、井上馨、五代友厚らがあった。

日比谷の重信邸は四年から七年八月までの三年間である。当

日比谷物語 ㊹

山岸弘明

伊達仙台藩

江戸時代の日比谷を代表する建物といえば南町奉行所だが、明治元年（一八六八）五月から七月までの二カ月間、市政裁判所にかわっている。

江戸開城後の江戸市政は旧町奉行に委任されたが、五月十九日江戸鎮台府設置を機に、町奉行、寺社奉行、勘定奉行の三奉行が廃止されて市政裁判所、寺社裁判所、民政裁判所となった。新体制のもと旧奉行の行政機関を完全に接収したもので、この

明治四年の日比谷図（三井ビルには仙台知藩事の伊達邸があった）

二カ月の市政裁判所は、七月奠都、鎮将府・東京府設置、九月の東京府開庁へのつなぎ役として重要な役割を担うのである。

ところで⑳から㉝にかけて、明治はじめ新政府を作った明治元勲たちの日比谷邸を紹介したが、こうした躍進グループの陰でひっそりと日比谷に息をひそめなければならなかった徳川一門や佐幕派大名もあった。

明治元年から四年廃藩置県までの三年間、三信・三井ビルの一画にあった伊達宗基、同じ年帝国ホテルにあった徳川清水昭武、篤守である。

伊達仙台藩といえば⑧～⑩で紹介した伊達政宗の子孫になる。関ケ原の合戦後、家康の信頼を得て六十三万石を領有。四代綱村のとき「伊達騒動」がおこって伊達家存亡の危機も体験する。

明治戊辰の戦いでは、朝敵の汚名を受けて二十八万石への大減封を。宗基の父慶邦は東北雄藩として新政府軍と会津の板ばさみにあって苦慮する。それが朝敵となるのは慶応四年（一八六八）閏四月、新政府に出した降伏嘆願書が参謀世良修蔵の手で却下されたためだ。憤激した伊達藩士が世良を暗殺し、奥羽越列藩同盟の盟主におさまった。この戦いで仙台藩は千三百名の戦死者をだす。

慶邦は十月東京に移され幽閉の身となり、十二月減封の沙汰を受ける。伊達家はこの時実子宗基が相続、藩邸も日比谷に移された。新藩邸は広大な旧邸とくらべるべくもなかった。宗基は二年版籍奉還で仙台藩の知藩事となり、四年の廃藩置県で深川に引越す。のち十七年七月の華族令で伯爵となった。

日比谷物語 ㊺

山岸弘明

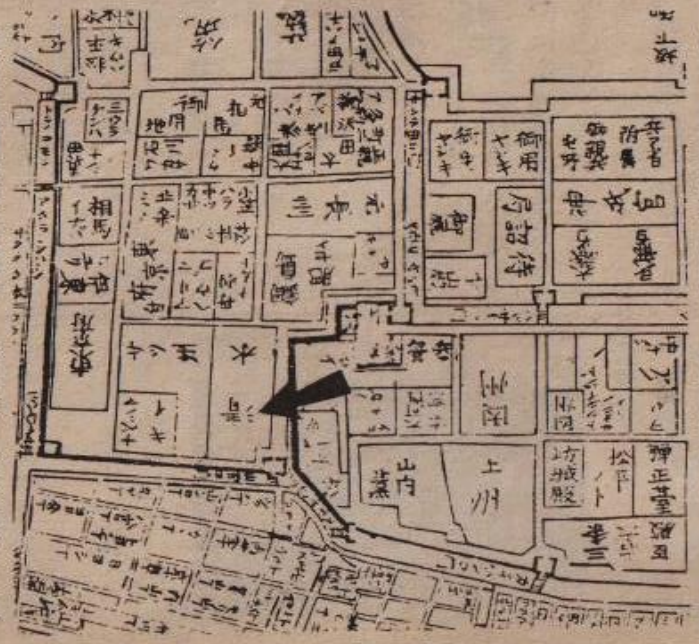
万博大名徳川昭武

㊹でひっそりと日比谷で息をひそめた伊達仙台藩を紹介したが、帝国ホテルの位置、に明治元年（一八六八）から四年まで在住した徳川清水昭武、篤守もその一人だ。昭武といえば十五代将軍慶喜の実弟で、幕末期のパリ万博の幕府館々長となった少年使節として知られている。

昭武は水戸徳川斉昭の六男だが、波乱の生涯は慶応二年（一八六六）兄慶喜が十五代将軍として、徳川宗家を継いだことからはじまる。当時の幕府は内外初代で、田安・一橋とともに将軍に実子のない時、後継者をだす名門である。この徳川清水家の帝国ホテル賜邸は江戸開城後の明治元年からの三年間だが、昭武自身は帝国ホテルに在住していない。

昭武はパリ万博が終わると条約締結諸国の親善訪問と留学を。随員には明治の経済界を背負った渋沢栄一があった。慶応四年、徳川政権が倒れると新政府から帰国命令がだされる。十一月帰国した昭武を待っていたのは明治と改元、新体制下にゆれ動く維新の東京であった。昭武は小石川の水戸藩邸に入り、兄慶篤の後を受けて最後の水戸藩主に迎えられる。水戸藩の幕末維新は勤王佐幕のドロ試合に終始していた。

明治元年の武鑑をみると、中に上屋敷山下御門とあり、当主・嫡子が記載されていない。伝来の家財を守る旧旗本が新当主を待ったことがうかがわれる。清水家には昭武に変わって水戸藩から弟の篤守が入り、帝国ホテルに在住する篤守は後伯爵にすすむが返上する。旧将軍の弟という肩書がそうさせたのかも知れない。帝国ホテルは四年奥平昌高となり、廃藩置県後、博覧会事務局と変わるのである。



明治二年の日比谷図（帝国ホテルの一画に旧御三卿の一つ徳川清水邸がみえる）

日比谷物語 ㊻

山岸弘明

明治の旧大名

旧日比谷大名街は明治元勲邸や新政府軍屯所とかわったが、一部は明治はじめまで在住する。坂本竜馬や板垣退助を生んだ土佐山内藩もその一つ。薩長土肥の一員として徳川幕府を倒したが、自らは新政府の要職に座ることをかたくなにことばんだ。日比谷廷には最後の藩主豊景が明治四年（一八七一）まで住み、二年の版籍奉還で土佐高知知藩事、のち侯爵に。土佐藩主といえば、幕末の英主として活躍した父容堂が知られるが、維新後箱崎に別邸を作り、酒三昧の余世を送る。

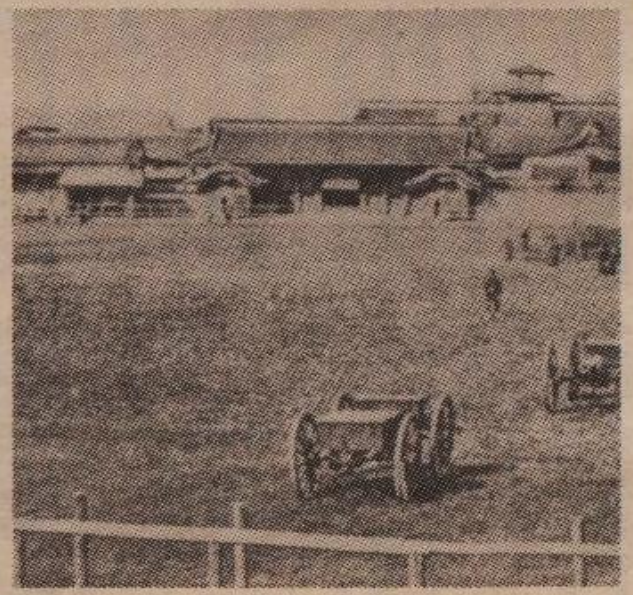
この山内藩に交通会館の上屋敷を譲った蜂須賀茂韶は二年から六年までの四年間ツインタワービル、パークビルの一画に移っている。茂韶は旧大名には珍しい近代感覚の持主であった。五年にはヨーロッパ外遊に旅立ち、オックスフォード大学留学も。のち華族会館のリーダーや各種事業に積極的に取り組み、フランス公使、東京府知事、文部大臣などを歴任。侯爵。

ニュートーキョーの松平忠和は明治元年再び旧住居に復して十年まで在住する。二年島原知藩事となり、廃藩置県後は東照宮宮司や宮内省御用掛などを勤めた。子爵。電気ビルの水井直諒も高槻知藩事。子爵。四年まで。

NTT日比谷の一画にあった薩摩藩邸は、同じ島津分家の佐土原島津藩に変っている。佐土原藩は島津本家貴久の甥以久、慶長八年の立藩。最後の藩主忠寛が明治元年から四年まで住んだ。二年佐土原知藩事となり、のち伯爵。子孫は今上天皇の弟五皇女清宮貴子内親王の降嫁を迎える。

帝国ホテルの四年、数ヵ月間だが、奥平昌邁邸になっている。中津十万石の最後の藩主で、幕末の中津藩からは福沢諭吉や大善薩摩の島田虎之助らがでている。二年、中津知藩事にすすみ伯爵を受けた。

江戸時代江戸城の一画として、大名邸街を形成した日比谷も、明治四年には旧大名の山内土佐邸、伊達仙台邸、島津佐土原邸、奥平中津邸が、六年には蜂須賀阿波邸が去り、最後までがんばった松平島原邸も十年には日比谷から転出している。日比谷はこうして名実ともに明治維新へとすすむ。



明治十年ころの日比谷旧大名街（有楽町駅方面から新有楽町ビルを望む）

日比谷物語 ㊼

山岸　弘明

公卿の進出

明治二年（一八六九）、薩州鹿児島藩島津忠義、長州山口藩毛利元徳、土州高知藩山内豊範、肥前佐賀藩鍋島直大の四藩主は、新政府に版籍奉還を願い出る。

明治の新政府は、将軍にかわって天皇を主権者にいただくが実際の政治は幕府を倒したこれら西藩の人たちで、薩摩の西郷隆盛、大久保利通、長州の木戸孝允、井上馨、山県有朋、伊藤博文、土佐の後藤象二郎、板垣退助、肥前の大隈重信など下級武士出身者であった。

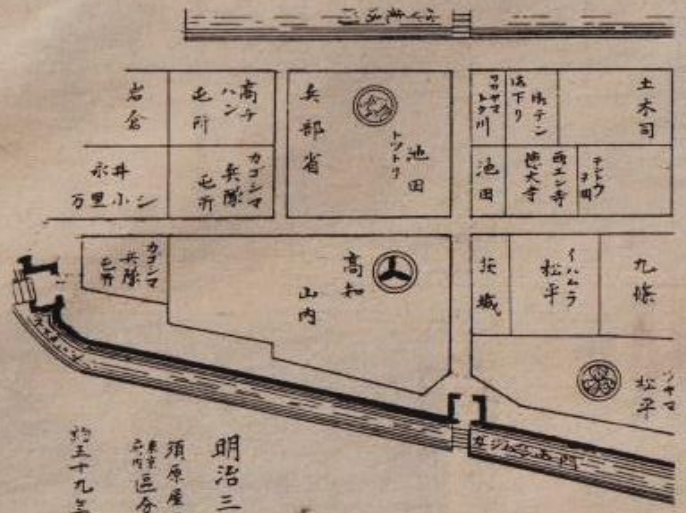
三条実美といえば、明治維新が任命され、旧藩主がそれぞれ就任する。日比谷大名もこの時、知藩事に横すべりした。この版籍奉還で旧藩主と公卿にも華族の称号が与えられ、八月には東京在住が命ぜられる。旧大名はともかく、千年京都を離れたことのない公卿の東京転勤は大変なショックであったという。旧公卿四百五十家が東京へ移転し、日比谷にも宮家や公卿が続々と移住している。明治二・三年の東京図をみると、日比谷周辺に三条、仁和寺、中御門、万里小路、徳大寺、坊城などの名前がみえる。

彼らは岩倉具視、三条実美、中山忠能ら攘夷派公卿をかついで政治を行なうが、中央集権の統一国家建設には、諸大名の版籍支配が大きな障害となりつつあった。

木戸、大久保、板垣、大隈の四人は、自らの藩主を説得して四藩主連名の版籍奉還を実現する。当然、諸藩もこれにならう。薩長土肥の下級武士を中心とした〝藩閥政治〟体制がこうして確立していく。

六月、地方官にあたる知藩事に活躍した堂上公卿として知られている。文久二年には勅使として江戸に赴いて十四代将軍家茂に攘夷を促した。新政府下では議定、副総裁、外国事務総督、関八州鎮将をへて、四年に太政大臣へ。十八年内大臣、二十二年には臨時総理大臣も。

仁和寺嘉彰親王は、伏見宮邦家親王の第八王子。一度仏門に入って仁和寺を名乗るが、慶応三年（一八六七）勅名をもって還俗。鳥羽伏見の戦いでは、征東大将軍に任命されて錦旗を受けた。会津征討総督をへた新政府では兵部卿、元帥、陸軍大将に就任。三年東伏見宮、十五年小松宮を名乗った。



明治三年の日比谷図（古図より見た丸の内から）――公卿や宮家が日比谷に移転した

日比谷物語 ㊽

山岸　弘明

万里小路

明治二年（一八六九）の華族令と引きつづく華族の東京在住令は、日比谷に宮家や公卿邸を続々と誕生させた。㊼で紹介した三条実美や中御門経之は尊攘派公卿として幕末史を彩ったが、今回は万里小路、中御門、坊城らの日比谷公卿を紹介する。

万里小路（までのこうじ）家は四年から二十三年までの十九年間、電気ビルの一画に住んでいる。日比谷公卿のほとんどが比谷在住時代は宮内卿、皇太后宮大夫、伯爵。

中御門経之も中山忠能、岩倉具視らとならぶ尊攘公卿の一人。維新後、参議、議定、会計官知事を勤め、明治三年に病いのため顧問に退いた。従一位兼一等。次男頼明が華族令で侯爵となった。

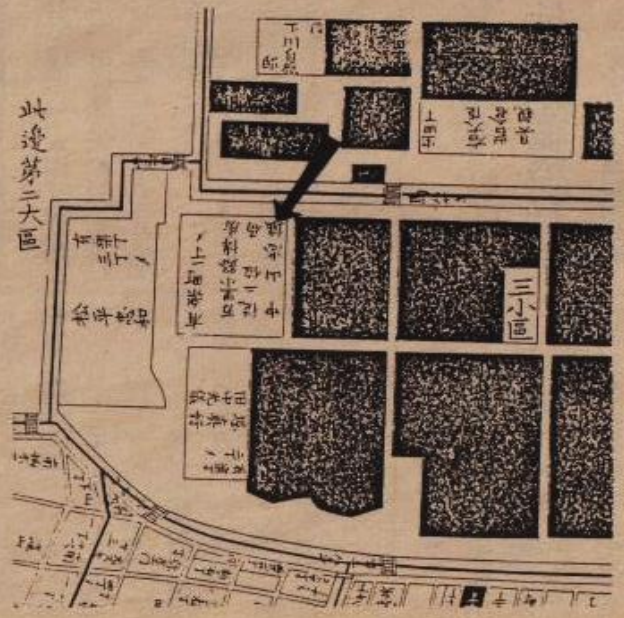
徳大寺実能と坊城俊政も尊攘公卿。徳大寺は明治天皇侍従長、内大臣、華族局長、侯爵。坊城は大弁、式部頭、伯爵へとすすむのであった。

明治二年の版籍奉還は新政府の中央集権体制への第一歩となったが、旧大名は依然、知藩事として領内を管轄していたので、旧態と変わることがなかった。四年、こうした変則的地方行政の一掃をはかる廃藩置県が断行される。旧大名の知藩事は免官され、各県に新たに任命された地方官が派遣される。こうして幕藩体制は終結、中央集権国家が完成する。

日比谷もこの廃藩置県を契機に大きく変わる。旧大名邸がこの地を離れ、変わって陸軍省、東京鎮台、陸軍練兵場や東京府庁、博物館、神道事務局など軍部や政治、文化の中心地へと育つのである。

在住一、二年にすぎないが、この万里小路家は中山大納言邸の三十年に次いでいる。

万里小路家は勧修寺高藤の子孫で儒教公卿甘露寺のわかれ。博房は幕末期の尊攘派公卿の一人として活躍する。文政七年（一八二四）の条約勅許では若手急進派として調印に反対。文久三年（一八六三）政変で、参内停止処分を受けるが、王政復古で参与に復帰、明治元年には新政府最高議決機関にあたる議定、会計官知事に就任した。日



明治八年の日比谷図（電気ビルの一画に万里小路伯爵邸があった）

日比谷物語 ⑨⑨

山岸　弘明

東京鎮台

明治はじめの日比谷は、軍都として新しい展開をみせる。㊽で国際ビル一画にあった鳥取池田藩邸が、新政府軍屯所、兵部省、陸軍省と変わり、九年ころ桜田門の警視庁に転じたことを紹介したが、この陸軍省管轄下にあった東京鎮台が九年（一八七六）一月から十九年十一月までの十年間有楽町ビルの一画にあって関連施設が点在する。

東京鎮台は明治新政府下の常備陸軍。四年の廃藩置県を契機に設立。ほかに仙台、名古屋、大阪、広島、熊本の五鎮台がある。常時の総兵力は三万で、うち東京が七千人。明治十年代の東京図をみると、本部のある有楽町ビルのほか、第一生命の一画に鎮台工兵第一大隊、国際・東京ビル一画に陸軍裁判所、陸軍教導団、監軍本部、教導団軍楽隊、軍法会議、都庁の一部に憲兵本部、憲兵屯所、日比谷公園に教導団騎兵隊、馬場先門の東京寄りには鎮台騎兵隊があり、日比谷公園とそごう、交通会館、都庁の一部は陸軍練兵場になっている。

有楽町ビルの東京鎮台では山田顕義、種田政明、野津鎮雄、大山巌、曽我祐準、彰仁親王、野津道貫、三浦梧楼、三好重臣の九長官が名前を連ねる。種田長官の九年、熊本神風連事件が起きた。熊本鎮台司令に乗りこんだ種田だが、泥酔中に神風連に急襲されあえない最後を。愛妾が両親に打った電文「ダンナハイケナイ、ワタシハテキズ、カワリタイソエクニノタメ」はあまりにも有名。侠妾小勝の名を高めた。

十年には西南戦争が起って東京鎮台勢が出陣する。征討の大任を果たした凱旋軍はあたかも軍列のようなさびしい帰京となった。十年前、江戸総攻撃を救った西郷隆盛への市民の惜別の情が伝わったのだという。

四代長官の大山巌は、日露戦争で大国ロシアを破った明治日本の救い神として有名。七代野津道貫は明治随一の猛将を謳われた。そして三好重臣長官は十九年、鎮台が日比谷を去り、二十一年師団と改称する。日比谷はこの鎮台移転を契機に軍都としての歴史の幕を閉じる。二十三年には残り施設も青山に引っ越すのであった。

明治十一年の日比谷図（古図よりみたる丸の内から）有楽町ビルに東京鎮台本部があった

日比谷物語 ⑩⑩

山岸　弘明

日比谷練兵場

明治はじめの日比谷は軍都として発展するが、日比谷公園もその一翼をになう。公園の江戸末期は日比谷寄りが毛利藩邸、鍋島藩邸、御用屋敷、神田寄りが南部、北条、小笠原、朽木、丹羽、有馬各藩邸である。

慶応四年四月江戸引払い令後の日比谷公園はほとんどが荒地に。明治はじめの東京図をみると、桑茶畑、上地、御用地などになっている。

長州毛利藩は元治元年（一八六四）第一回長州征伐に先だって焼失、その後放置されていた。当時、皇居周辺の旧武家地は大名が国元に引きあげたうえ、旗本も四散し、広大な屋敷や跡地が空地として放置されていたので、この活用が新政府の大きな課題に。

その一つがさびれた武家屋敷を開墾して桑茶を栽培しようというもので、この政策の推進で明治六年（一八七四）には皇居周辺に百十万坪の桑茶畑が誕生した。しかし、この桑茶政策も輸出が軌道に乗らなかったうえ枯死が多く、東京を首都として発展させていくうえで、この田園化は時代に逆行しているという批判も高まりやがて中止に。

空地となった日比谷公園が陸軍操練所と変わるのは四年夏以降のことである。十八年日比谷練兵場とかわり、二十三年陸軍諸施設移転までつづく。ここと都庁一画の操練場では連日、日比谷陸軍の訓練がくりかえされた。

五年一月八日には第一回の陸軍始めが日比谷操練場で行なわれ、以後毎年の恒例行事に。二十年まで十六回開催され、陸軍の増強で手狭となった二十一年、新設の青山練兵場に替る。

『東都花容月影譜』をみると「西にそびゆるは陸軍参謀部なり。東に当りて靄々然として雲際に峙つは鹿鳴館なり。日比谷操練場この間にあり。その地七、八町。茫々として一望眼に障るものなし。当時武を練りもって国興をしめる。毎年一月陸軍始めの日および十一月三日聖主誕生日に聖駕親臨し給うて兵を観、六軍の兵卒皆礼服を着し操練其の術を尽す。誠に一大偉観なり」。富国強兵を旗印にした当時の日比谷操練場も、東京新名所の一つにかぞえられるのである。

明治五年の日比谷図（日比谷公園は当時「日比谷操練所」と呼ばれた）

日比谷物語 ⑩①

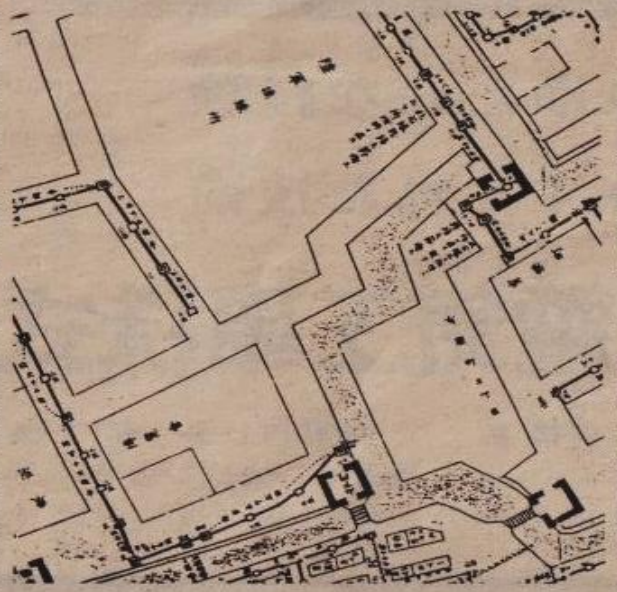
山岸　弘明

府庁と樋口一葉

⑨④で明治元年（一八六八）五月からの二カ月間、朝日街の南町奉行所が新政府軍制下の南町裁判所と変ったことを紹介した。この市政裁判所は七月、鎮台府が廃止されて鎮将府所管となったことを契機に、新橋寄りの旧柳沢藩邸に引っ越す。第一勧銀内幸町支店の一画。都庁の前身・東京府庁の誕生でもあった。

初代府知事・烏丸光徳は江戸に攻めのぼった東征軍幹部。参与兼陸軍将をつとめ、江戸開城と同時に江戸府知事に就任、このとき横すべりした。東京府の政府最下級官の少属に任命され、一応の生活が保障されるが、現木十三石の薄給の身であった。

一葉は五年三月、府庁長屋で誕生し、五カ月間をすごす。薩長中心の新政府下では、旧幕臣で中年男の義則に易進のチャンスはまったく閉ざされていた。この年退職して金融関係の仕事を転々とする。一葉の幼年期はこうした苦しい生活に追われるが、やがて自らの体験からくる貧しい女性の姿に哀切な叙情を込めた「たけくらべ」「にごりえ」「十三夜」などを発表。二十九年、病弱のため惜しまれながらその生涯を遂げる。二十四歳の若さであった。



明治八年の日比谷上水図（東京府の構内長屋で樋口一葉が生まれた）

市政は旧幕時代の慣習をそのまま継続することからはじまる。町奉行支配地と各種会所引をきつぎ、酒税、冥加金、地税といった租税引つぎなどが円滑、迅速に行なわれた。

府幹部のもとに市政、郡政の二局が設けられ、市政局には聴訟方、断獄方、社寺方、捕亡方などがおかれる。組織はその後変遷するが、明治二十七年までの二十六年間、ここで首都・東京村の地方行政を担当したのである。

東京府庁といえば、内幸町構内長屋で生まれた明治期の代表的女流作家・樋口一葉を忘れることができない。一葉の父義則は山梨県の貧農の長男として生まれた。初恋の人・淳子と結ばれないことを知ると、周囲の反対を押し切ってかけおちし、幕末風雲急を告げる江戸に辿りつく。安政四年（一八五七）のことであった。

二人は蔵町調所小使いや幕臣従者などの苦労の甲斐あって、やがて同心株を買って御家人となるが、念願の武士生活も一年にすぎない。慶應応四年（一六六八）には徳川幕府が崩壊して新政府軍に江戸城が明け渡される。義則は南町行所同心から新

日比谷物語 ⑩②

山岸　弘明

有楽町の誕生

明治四年（一八七一）の廃藩置県は日比谷の街を一新させたが翌五年四月はじめて有楽町の町名が生まれて、名実ともに日比谷の明治維新がはじまる。江戸時代は大名邸街や武家地に町名がなかったので、門名や俗称があてられていた。日比谷御門内、外、山下御門内、数寄屋御門内、大名小路、丸の内などであった。

この年の町名制定で有楽町、八重洲、山下町、内幸町などの町名が決まる。有楽町はその昔、泰明小学校の一画にあった織田有楽斎に由来する。有楽はウラクと読むが、いつのころかユーラク町と呼ばれた。日比谷や丸の内とならなかったのは、旧帝時代の代名詞的地名を改めて人心の一新を図ったものだろう。

有楽町誕生直後の日比谷を伝える『東京府志料』が現存して、活字にまとめられている。これは当時の東京府を町名別に詳しく紹介したもので、明治はじめの日比谷を伝える貴重な文献といえる。明治八年のこの資料から日比谷周辺を抜粋する。

有楽町一丁目＝この地元烏取、古河、高崎、高槻の四藩邸および役屋敷なり。今の陸軍省は烏取藩の邸地、陸軍兵営は古賀、高崎二藩の邸地なり。また華族中山氏、万里小路氏の邸あり。町名は慶長のころこのあたりに織田有楽斎の邸ありしというにより。

【土地】形勢＝西の方内濠に接し平坦にして低し。

【戸口】戸数＝二十一戸。内華族二戸、士族八戸、卒七戸、平民四戸、寄留二十五戸、うち士族十九戸、卒一戸、平民五戸。人口九十二人、内男四十六人、女四十六人。寄留三百五十八人。内男三百十七人、女四十一人。

【車馬】馬車一両、人力車一両、馬五匹。

現在の東商ビル、国際ビルから晴海通りをはさんだ朝日生命館、ツインタワービルまでの一画である。この一画には山県有朋ひきいる陸軍省や陸軍兵営があったが、人口には含まれていない。

華族中山忠能、万里小路博房は⑨⑧で紹介した。馬車・人力車はこの二華族が皇居への参内などに使用したものだろう。平民、卒、寄留などの分類も明治期ならではのものだ。

明治十一年の日比谷（四年から有楽町の町名が生まれた）

日比谷物語 ㉓

山岸弘明

明治始めの有楽町

前回、有楽町誕生直後の日比谷を伝える明治八年東京府志料の有楽町一丁目を紹介した。今回はその続編。

有楽町二丁目＝この地もと徳島、高知の二藩邸および南町奉行所の地なり。今の陸軍操練所は徳島、高知の二藩の邸蹟なり。

【土地】形勢＝東の方外濠に接し平坦にして低し。

【戸口】八十三戸。内士族一戸、平民八十二戸。寄留十五戸、内士族四戸、卒一戸、平民十戸。

【車馬】車＝人力車四両。

有楽三丁目＝この地元徳島、高知、島原、笠間四藩の邸地なり。今華族松平忠和の邸あり。

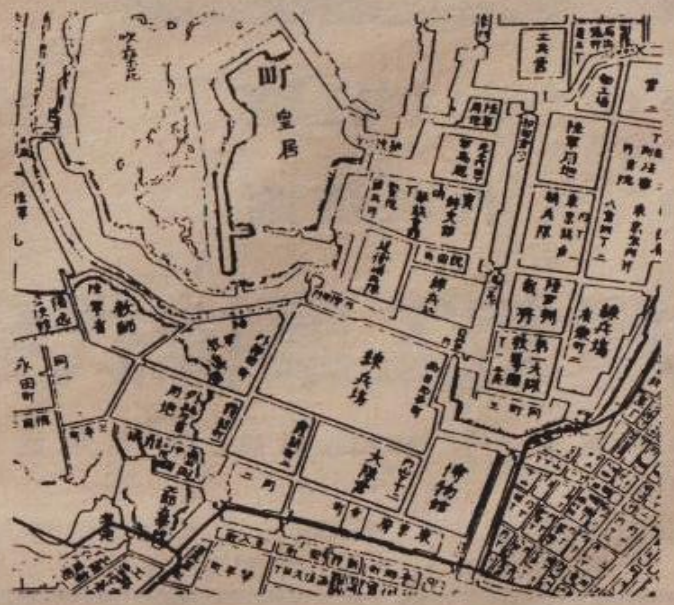
【土地】形勢＝西より南は外濠に接し平坦にして低し。

【戸口】十八戸、内華族一戸、士族平民十戸。寄留二十四戸、内士族二十一戸、卒三戸。人口七十二人。内男三十三人、女三十九人。寄留百三十人。内男七十九人、女五十一人。

【車馬】車＝馬車一両、人力車一両、馬六匹。

二丁目は朝日街から有楽町駅、都庁の一画で、三丁目は三井ビルから劇場街、ニュートーキョーの一画。都庁と交通会館は明治五年の大火で焼失、しばらく焼野原だったが八年から操練場となり、十一年ころからは練兵場と呼ばれるようになった。士族は大隅重信、田中不二麿ほか。大隅は㉓で紹介したが、田中も新政府の高級官僚として活躍するので改めてふれることになる。

こうした日比谷の華やかな人脈の反面で、平民＝一般市民の進出も伝えている。廃藩置県後の日比谷は政治・経済の中心地への道を歩むが、一方庶民の町への第一歩も印す。二丁目の朝日街がその典型的な例だろう。五年大火焼失後、しばらく街用地となるが、七年ころ一般市民の町として開放されていた。士族一、平民八十二戸を数えるのはこの朝日街の開発を示し、明治後期には社会運動の源流として名をはせる。項を改めて紹介することにする。



明治十二年の日比谷（有楽町二丁目のほとんどが練兵場になっている）

日比谷物語 ㉔

山岸弘明

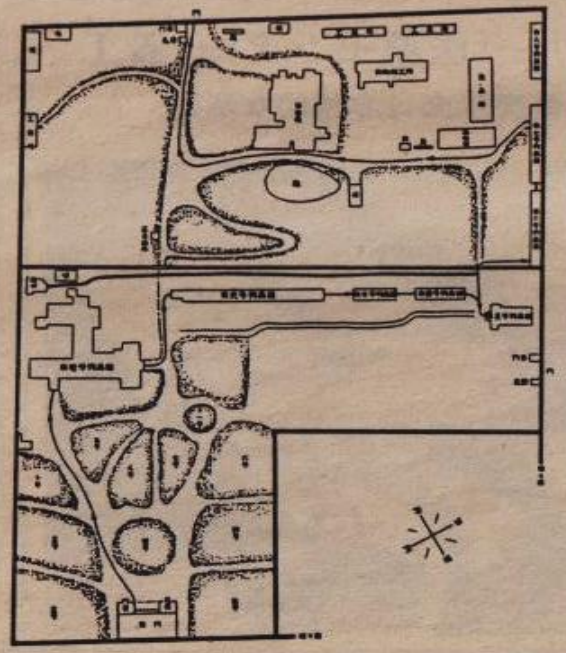
日比谷博物館

上野公園にある東京国立博物館は明治十四年三月から開催された第二回内国勧業博覧会の会場跡にはじまるが、その前身にあたる博覧会事務局と博物局が明治はじめの帝国ホテル、第一勧銀、NTT日比谷の一画にあった。

新政府は明治六年（一八七四）開催されるウィーン万国博覧会への出展を決め、その前年の五年、博覧会事務局をここにおいたのである。ウィーン万博本館の開館式にオーストリア皇帝夫妻が訪れ、ヨーロッパ訪問中の岩倉具視一行も立寄った。

政府はこの万博を契機に、博物館の設置と国内での博覧会開催をめざすことになる。事務局の主業務が現地に移された六年三月には文部省博物館、書籍館、小石川薬草園がこの博覧会事務局に合併される。

事務局のあわただしい博覧会開館準備がすすむ。旧藩邸が修理されて陳列館に変わる。ウィーン万博剰余品と博物館所蔵品、それに一般出品をあわせ、



明治十年ころの日比谷博物館（国立博物館百年史から）…この博物館はやがて鹿鳴館にかわる

の日本館は、慶応三年（一八六七）のパリ万博で徳川昭武に随行した佐野常民が実務上の責任者となり、ドイツ人ワクネル指導のもとに諸準備がすすめられた。

出展品は、実物の名古屋城金のシャチホコをメイン製品に、鎌倉大仏の張子など伝統的工芸品が中心に。現地へは佐野副総裁を団長に六十六名が派遣され、日比谷には留守部隊の三十九名が残った。

ウィーン万博では日本の伝統的技術が高い評価を受ける。日合併一カ月後のこの年四月、第一回博覧会を。翌七年三月には第二回博覧会を開催。それぞれ入場者十一万人を数えたと記録されている。

明治八年三月、博覧会事務局は博物館と改称されて内務省の所属になった。翌九年になると四カ月間の連日開場、十年から春秋二回の連日開場を行なうが、十四年は日比谷における博物館の最後の年となった。この年、博物館用地は約半分を鹿鳴館用地として没収され、一方、上野公園の本坊跡では第二回内国博覧会工事が急ピッチですすむ。日比谷博物館は七月閉館、十一月農務省会計局への引渡しを終え、上野公園へと転じたのであった。

日比谷物語 ⑩⑤

山岸 弘明

神道の町日比谷

日比谷の明治史を語るうえで、神道の果たした役割を忘れられない。新政府は版籍奉還直後の明治二年（一八六四）太政官の下にあった神祇官を太政官の上に改めて祭政一致体制を整え、翌三年一月には神道を国教とする大教宣布の詔書を発している。

大教宣布とは、これまでの仏教は幕府体制の遺物であったとする一方で、全国民の氏神・天照皇太神の子孫にあたる天皇への忠誠心を高めるように、宗教を通じて権力への服従をうながしたのであった。

日比谷が神道の町となったのは明治八年三月、三井ビルから劇場街にかけての一画にあった大隅重信邸に、神宮司庁出張所が引越してからである。

明治八年の松浦宏『東京大小区分総図』に、はじめて神道関係の施設名が登場する。これには神道支庁出張所、神宮大教院、神道事務局、神風講社取次所が列記されている。そして十年、神社司庁東京出張所から東京府知事に宛てた届書には、さらに皇太神宮遥拝殿、神宮教会所が加わる。この一画は首都・東京神道の拠点として発展する。

このうち神風講社を除く六施設は神宮司庁の同居人である。九年六月の記録によると、同庁の敷地面積六、九三〇坪、隣坪八八四坪と記録され、幕藩時代の旧牧野藩邸がそのまま神道六施設として使われている。これら六施設はそれぞれ複雑な経緯を辿る。

明治八年の日比谷（三井ビルの一画は神宮司庁、神道事務局、神道大教院、神風講社と変わり、国教・神道の一大拠点となる）

地主でもある神宮司庁は伊勢皇太神宮の東京出張所にあたる。明治五年の大教宣布にともなって東京に大教院が設置されるが、伊勢神宮の教化体制を固めるうえからも、政府の教部省とより緊密な連携プレイを必要としたのであった。こうして神宮司庁出張所が生まれる。当初この出張所は麹町区内（詳細不明）におかれたとされるが、やがて旧紀州邸跡に移転、中央との交渉に便利なこの地が選ばれた。こうして明治はじめの日比谷は、神道の町として新たな展開をみせるのであった。

日比谷物語 ⑩⑥

山岸 弘明

神宮司庁出張所

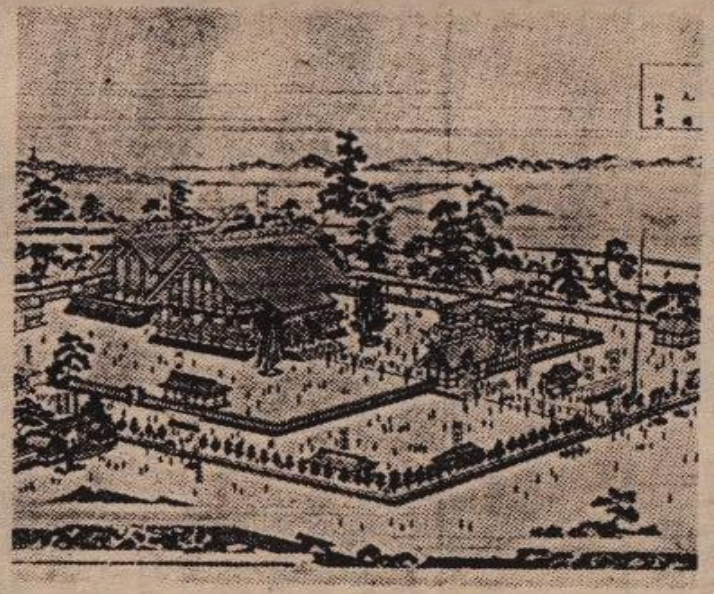
前回、日比谷三井ビルの一画が、明治八年（一八七五）三月から神宮司庁出張所など七つの神道関係施設で占められたことを紹介した。その中心となった神宮司庁は伊勢皇太神宮の東京出張所であったが、単なる事務連絡所にとどまらなかった。首都国教・神道の本拠地として神道教院の教化をはかり、東京神宮教会や神風講社を包括する総合信仰機関として展開する。

この神宮司庁につづいて一ヵ月後の四月からは神道事務局とその拝殿、神道教会所が加わる。当時、大教院を中心とした神仏合同布教方式は徐々に破綻をきたしていた。神道管長総代・稲葉正邦らは教部省の許可を得て神宮だけの布教組織・神道事務局を結成、この神宮司庁でうぶ声をあげる。

神道教会所は、はじめ神田錦町でスタート。日比谷移転後、地方の神道事務局を統合、次第に併置されるようになる。

設立当時の神宮司庁関連施設を伝える「東京日比谷御門内神殿新築図」が現存する。明治九年の図で、旧松平土佐、松平阿波藩邸跡（三井・三信ビル前の日比谷通り一画）に五間×七間の本社、九間×十一間の拝殿を中心に二重の囲いがめぐっている。

『東京大神宮沿革史』によれば、はじめ、その表門に高塀が回り、九年七月、その一部を削って大鳥居を建設したとある。この神殿は先に紹介した七施設の皇太神宮遥拝殿、神道事務局拝殿の併設仮殿と考えられる。伊勢から奉斎のための御霊代が奉安され、天照大御神、天御中主神、高皇産霊神、神皇産霊神の四柱大神が祀られたと書物にある。この仮殿は十三年、本殿とかわって撤去される運命にあった。



明治九年の日比谷御門内神殿新築図（皇太神宮遥拝殿、神道事務局拝殿の併設仮殿で十三年まで使用された）

その後、この仮殿跡地は、しばらく神宮敷用地として空地となるが、二十年、売却されて東京ホテル、ブラジル公使館、日本クラブとわかり、三十六年の区画整理で日比谷通りの一部、日比谷公園の一部、三井ビルの一部となっている。

日比谷物語 ⑦

山岸 弘明

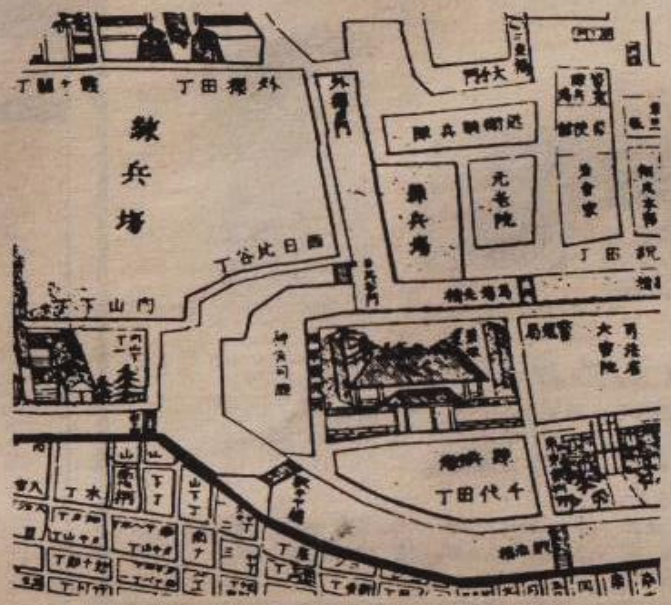
東京遥拝殿の建設

明治八年（一八七六）、日比谷三井ビルの一画は神道の町と変ったが、そのひとつ神宮大教院は神宮司庁に遅れること二ヵ月、この年五月の移転になる。

神道を国教と定めた政府は五年四月、教部省に教導職をおくとともに、東京に大教院、地方に中教院、全国の神社を小教院と定めて、布教活動を展開する。この年、神仏合同布教が禁止されたことを機に、四柱大神を日比谷の神道事務局に遷座して日比谷大教院を設けた。そして「日比谷大神宮の神殿は神宮司庁、神道事務局合併の建築にて本年三月落成をつけ、四月六日から三日間、正遷宮典式を執行せられるという。その場所は西北は皇居に近く、東西は市街に接する府下中央の地に定められしも諸人の参拝に便ならしめんがためなりという。されば神徳いよいよ光を添え更に士民が敬崇の念を深からしむいにいたるべし」とある。

遷座式には皇族、大臣、参議以下百余人が列席、快晴とあって参詣人が群集している。新神殿は本殿が二十六坪、拝殿四十四坪、事務所二十八坪。屋上に千木をあげ、清酒にして高潔、人を粛然として起敬せしむと当時の書物が伝えている。

こうして華々しいスタートを切った遥拝殿ではあったが、やがて神道事務局で祭神問題が起って神道界を二分する大騒動に発展する。伊勢の千家大教正は天照大神以下四神を主張し、出雲の田中大教正はさらに大国主命を加えた五神とすべきだとした。両派の争いに神道界に激しい対立を生むのであった。



明治十六年の日比谷（三井ビルは神宮司庁になっている）

て神風講社は神宮教会の下部組織として神宮教化を目標にした親睦団体であった。

神宮司庁では、移転したばかりの四月から東京皇大神宮遥拝殿設立に向けて歩みだす。教部大輔にあて創立の儀願出を出し、二カ月後には承認が降りる。同庁を中心に神宮大教院、神道事務局、神風講社が一体となった資金集めが始まる。明治天皇からの下賜金千円をはじめ、全国の神社や一般からの寄付金も着々と寄せられた。

こうした遥拝殿は十年八月に着工、十三年三月に端工する。この日の『東京曙新聞』には

日比谷物語 ⑧

山岸 弘明

神宮教院と平沼

日比谷大教院の祭神問題は神道界を二分する大騒動に発展したことは前回紹介したが、これにこりた政府は明治十五年（一八八二）神社を宗教から分離する、いわゆる神社宗教分離令を発令している。

この結果、宗教団体に当たる神宮司庁は日比谷大神宮の権利を放棄することになる。神宮教院では四、三七〇円の対価を支払って神宮司庁所有の土地建物を買収。同居人の神道事務局も独立して退去した。こうしてこの年五月、神宮教院の名を神道神宮派（通称・神宮教）と改めて、新しい日比谷大神宮がスタートする。

神宮教総裁には皇室ともっとも関係深い久邇宮朝彦親王の第二王子邦憲王（後の賀陽宮）を迎え、副総裁に梅江田信義が。初代管長には神宮司庁時代からの田中頼庸が就任する。田中は天保七年生まれの鹿児島藩士で、尊攘志士として東征軍にも加わった。明治四年神祇官となり七年神宮大宮司、九年大教正をへて、十年神宮宮司、十三年神道学務局副管長。三十年逝去。碩学の名は高かったが、経営にはまったく無頓着で、側近に不良もあって財政は乱れていた、と『東京大神宮（後身）沿革史』が伝えている。

明治二十年には経営に行きづまった神宮教が六、九三六坪の全敷地約七割にあたる五、三二六坪を売却する。この土地はまず平沼八太郎にわたり、ついで第百十九銀行、三井元方と転売されるのであった。

平沼八太郎は時に十八歳。名目人で本当の買い主はその父専蔵であったろう。天保七年埼玉県飯能町の貧農の三男として誕生した専蔵は、二十四歳のとき日本橋の材木問屋に飯炊きとして住みこむ。その後のエピソードは波乱万丈の立身伝そのもの。

慶応三年の米価騒動での大バクチがあたり、横浜村の土地投機、棉花相場で巨万の富を。明治十年賦合金取締役、市県議、横浜水道局長をへて、貴族院、衆議院にも。この間、多くの会社銀行役員を兼ねた。大正二年鎌倉村別荘で逝去。八太郎はこの専蔵二男で二代目当主。明治二十六年資料に洋紙商、大正はじめ資料では横浜銀行取締役と記載されている。

明治十五年ころの「神宮教院図」（『丸の内今と昔』から）初期の大神宮を伝える貴重な銅版画

日比谷物語 ⑨

山岸 弘明

神宮奉斎会

さて、経営に行きづまった神宮教大神宮(日比谷大神宮)が、旧神宮司庁側の土地建物約三分の二を失なったことで、明治二十年からは二千三百坪となったが、十三年(一八八一)に建てられた遙拝殿などは残りの三分の一に含まれていたうえ、売却地もしばらくそのまま使えたので大きな障害となることもなかった。

しかし、二十六年に至って、今度は教院の会計不始末が表面化する。この時、内務省にあて

『風俗画報』臨時増刊号(明治三十一年)に、この神宮奉斎会職員名簿がのっている。これによると管長は大教正・正七位藤岡好古、弁理・神田息胤、松本正泰、ほかに課長三名、録事九名となっている。同誌によると、ここに日比谷の真清水という清泉(井戸)があった。「その純清さは、府下にくらべるものなく、伊勢神宮の五十鈴川と相比し、いま大御神のご饌水となった」。

当時、この地で少年期をすごし、後に五代奉斎会々長となった藤岡好古はその著者のなかた答弁書には「金額数十万なるに帳簿書類の具備整頓したるものなきをもって、ほとんどその手がかりを得ず」とある。七月、神宮教管長田中頼庸が辞任して、藤岡・篠田両事務取扱いが就任。神宮教大神宮は経営健全化への道を歩むことになる。

二十八年、売却地に三井集会所が建設されると、教殿事務所は移転を迫られ、二十八年七月にその工事を起こして翌年七月に竣工。引き続き本殿修繕、拝殿工事も完成する。新体制による改革はさらにすすむ。神宮教は宗教から脱して、独自の立場から神宮精神を顕揚すべきである、として三十年三月、神宮奉斎会への改組も決める。

明治三十年ころの日比谷大神宮大祭(『風俗画報』臨時増刊から)当時のにぎわいがうかがわれる

で、「(井戸は)後々までも私たちの住んだ社宅の前にあり、町内の人々も重宝したものだが、大震災後の区画整理で跡形もなくなったのは惜しいものである。大鳥居の左方、往来に面して大名屋敷の名残りである太い格子窓のある長屋に私たちは住んでいた。右方の土手下にも職員の住宅があり(略)その土手上から練兵式をみたことがある。現在日比谷公園の東北隅にある石垣の土手が唯一の記念物である」。

日比谷物語 ⑩

山岸 弘明

結びの神様

日比谷大神宮は結びの神様としても知られている。『東京大神宮沿革史』によると「奉斎会の特色ある事業として終始一貫その重きをなしたものは神前結婚式である。そもそもこの挙式の由来は皇室婚嫁令に原因したのである。明治三十三年(一九〇一)五月十日のよき日、時の皇太子、後の大正天皇は宮中賢所大前において公爵九条道孝女節子姫とご結婚の儀を執り行なわれた。(この結婚式は)にわかに民間に多大な関心を与え、ついに神宮奉斎会はこれを会事業としてとりあげ、翌三十四年三月、本院講堂で簡楚、厳粛をきわめた神前結婚式を挙行した」と書いている。

この結婚式は、その後工夫されて一般にも開放された。わが国における神前結婚式のはじめでもあった。

明治四十一年十二月の『東朝新聞』をみると、日比谷大神宮を中心に流行した神前結婚式の記事がのっている。

「従来中流以上で自宅が手挟な向きでは料理屋で式と宴会を行なうものが多かったが、近ごろでは式だけ神前で執行し、婚礼の神聖を有たらしめんとするものが益々多くなっている」と、詳しく日比谷大神宮における神前結婚式の模様を取扱っている。

日比谷大神宮では三十四年から七年間で二千組が挙式し、この年は三月以来すでに五百組、さらに五十組が予定されている。希望者は氏名、媒酌人、版籍などを書いた申込み書を出せばよく、費用は特別一等五十円、以下二十五円、十五円、十円……。

この神前結婚式の盛況は日比谷大神宮を結びの神様として定着させる。「政府高官で日比谷大神宮におとずれぬ者なし」とうたわれたのも、このことによったのである。

三十六年の日比谷市街再編は日比谷大神宮をさらに便利にした。これまで帝国ホテル側は濠にさえぎられて行きづまりになっていたのが、取り払われて陸つづきとなり、参道も表裏両側から通じることになったからだ。左右にはやがて茶屋や料理屋がならび、門前街には桜も植え込まれた。明治末期から大正時代にかけて東京桜名所の一つにもかぞえられたのである。

日比谷大神宮の歴代会長

★神宮司庁大神宮時代
大宮司=田中頼庸(明治八年三月から)(神道事務局大教正=稲葉正邦、神宮大教院、神道教会所、神風講社は不詳)

★神宮教大神宮時代
初代教管長=田中頼庸(明治十五年一月から)
教管長事務長取扱い=藤岡好古・篠田時化雄(明治二十六年七月から)
二代教管長=藤岡好古(明治三十年から)
総裁=久邇宮嚴麿王(明治五年十二月—退任不詳)
副総裁=海江田信義(明治十五年五月—退任不詳)

明治十五年ころの神宮教院(一部を再掲)

日比谷物語 ㊃

山岸弘明

初代帝国議事堂

明治六年（一八七三）の征韓論は、その後の明治史に大きな影響を与えることになる。武力によって政府を批判した江藤新平が佐賀の乱で、西郷隆盛も西南戦争で敗れ、反政府運動は言論による結社、マスコミの場へと変わる。

七年一月、板垣退助、後藤象二郎らは国民の自由と政治に参加する権利を要求する民撰議院設立建白書を提出し、自由民権運動の風を巻き起こす。新聞・雑誌が相ついで創刊され、マスコミの言論姿勢が政府を悩ませ

ついに国会開設を決意する。天皇の名において十年後の開設を公布するのであった。

この年、国会期成同盟が中心となって自由党を結成、板垣退助が総理に就任する。翌年内閣の反藤長分子として参議を罷免された大隈重信が改進党を作り、民権運動は政党時代を迎える。

二十二年にはわが国の明治憲法が発布され、翌二十三年、第一回総選挙が行なわれた。とはいえ、当時の有権者は十五円以上の税金を収めた男性。一％の金持が選んだ新議員三百五十人が、第一回の帝国議会にのぞん

二ヵ月のはかない運命におわった初代仮帝国議事堂

〜〜〜

日比谷物語 ⑬

山岸 弘明

三代仮帝国議事堂

二代仮帝国議事堂は明治二十四年（一八九一）十月竣工、その後、大正十二年（一九二三）九月の関東大震災で大きな被害を受けるが、大正十四年九月火災で焼失するまでの三十四年間、国政の中心地として四十八回に及ぶ帝国議会を開催するのであった。

三代仮帝国議事堂は十四年九月起工、十二月二十二日竣工。工期はわずか三カ月にすぎない。昼夜兼行工事の結果、第五十一回帝国議会が予定どおり開式まで、十六年間におよぶ工期をへて現在の国会議事堂が完成するのであった。

日比谷帝国議事堂は延べ四十七年間、明治、大正、昭和の三代にまたがって六十九回の帝国議会を開催した。この間、山県内閣、松方内閣、伊藤内閣、桂内閣、西園寺内閣、山本内閣、大隈内閣、寺内内閣、原内閣、高橋内閣、加藤（友）内閣、清瀬内閣、加藤（高）内閣、若槻内閣、田中内閣、浜口内閣、犬養内閣、斎藤内閣、岡田内閣、広田内閣、林内閣、近衛内閣と二十二名の宰相を迎えた。

日比谷で最後の帝国議事堂（三代仮議場、昭和十二年まであった）

事件にもこと欠かない。日清・日露戦争、大正デモクラシー、関東大震災、原・浜口首相の狙撃事件、そして五・一五事件、二・二六事件をへて、日本が軍国化していく様を。日比谷帝国議事堂の歴史は、激動する明治・大正・昭和はじめ史を彩ったのである。

ついでといってはおかしいが、日比谷公園の南西はじにある古びた地裁別館は、明治三十六年から昭和二十二年までの貴族院議長官舎である。日比谷時代、貴族院は衆院議と平等の権能をもつ上院として帝国議会を構成したのであった。

日比谷物語 ⑭

山岸 弘明

鹿鳴館時代

明治十年代後半のわが国は、内外に多くの難問をかかえた重要期にあった。日本国憲法が制定される一方で、反政府運動の自由民権運動取締りが強化され、新しい経済政策が市民生活を圧迫。外交面では条約改正への機運がみなぎっていた。

政府は条約改正の交渉をすすめる上で、日本が開化国であることを外国人に認識させる必要があるものと判断。明治十三年（一八八〇）市内に壮麗な外務省接待所の建設を決める。大和田陸海軍楽隊と百二十発の祝賀花火がパーティーを盛りあげ、午前一時の閉会後新橋↔横浜間に特別列車が運行された。

鹿鳴館の竣工は新しい明治史をいろどる。世にいう鹿鳴館時代でもあった。食生活に、衣服に、住生活に……。欧風化の波はまたたくまにひろがっていった。鹿鳴館では外国使臣を招いて園遊会や舞踏会、バザー、音楽会などが催される。洋装婦人をともなった高官や高級軍人らが、連夜にわたり社交ダンスのステップに興じた。

時の総理大臣・伊藤博文みずから仮装舞踏会を催せば、外務大臣・井上馨、後の総理大臣・山県有朋、三條実美らが連日、日比谷に参集した。しかし、こうした上級社会の饗宴は、デフレーションになやむ一般庶民の反感を買うばかりか、外国人の嘲笑を買うことになる。明治二十三年四月、諸外国との条約改正交渉が失敗に終わったことがわかると、政府はあっさりと鹿鳴館の閉鎖を決める。わずか八年間のはかない運命であった。この年、宮内省管括とかわり、二十七年、華族会館の所有に帰すのであった。

レンガ造り二階建てイギリス風建築の鹿鳴館（国際社交場として、その名が世界に轟いた）

日比谷物語 ⑮

山岸弘明

東京ホテル

第一一一回で華やかな鹿鳴館を紹介したが、鹿鳴館を豪一つはさんだ三井、三信ビル前の日比谷通りに、外国人向けホテル・東京ホテルが竣工している。明治二十年（一八八七）六月、鹿鳴館全盛期で、帝国ホテルに先だつ三年の昔であった。

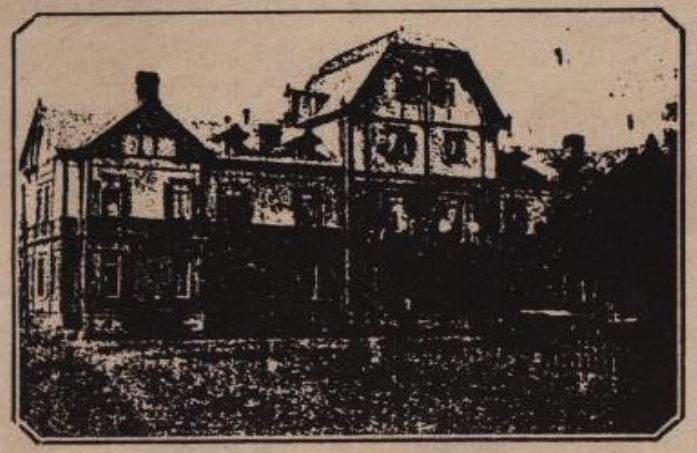
この日の『朝野新聞』に開業広告がのっている。「本月二十二日開業式執行。二十三日より営業仕り、料理は欧米各国の正式により献立いたし、食料品は良品を相選み内外ともお客様の嗜好に適するよう調理仕り候。かつ仕出しもいたしますれば何とぞ開業当日より賑々しくご来賓願い上げ奉り候。料理定価上等金七十銭、中等金五十銭、並等四十銭。その他はお好み次第」。

横浜回船問屋の鹿島屋が発起人。木造二階建洋館で客室約二十五。ビリヤード、カルタ、舞踏室、内外新聞従覧室などを完備。当時東京随一と評されるのである。

もっとも東京三十年を書いた田山花袋によれば「今の有楽門から桜田門に通ずる堀に添った路（晴海通り）は雨が降ると道が悪く、車夫は車の泥濘に埋れるのをこぼしたところである。そしてこれが少なくとも明治二十七、八年まではそうであった。そして日比谷の大神宮（三井ビル）に行く途中にグランドホテル（東京ホテル）という、今ではあんな小さな外国旅館などみたくともみれないようなホテルがあった」と変る。

この東京ホテルに二十二年フィリピン独立の父と慕われたホセ・リサールが逗留している。スペインの植民地支配者からの弾圧と迫害に立ち上ったリサールは、故国を追われて各地を転々とし、三十五歳の若さで刑場の露と消える。

明治中期のホテル経営は苦しいものだった。二十七年二月の『時事新報』には「目下府下の西洋旅館は一体に霜枯れの色あり。帝国ホテルのごとき六十余の間数ある大ホテルすらわずか六組ほどの宿客あるのみ」と書いている。お目あての鹿鳴館すでになく、近くに帝国ホテルも誕生した。開設八年、政府の欧化政策に躍らされたこの小ホテルも静かに看板をおろすのであった。



東京ホテル（写真は明治三十一年、ホテルの後身・日本倶楽部仮会館時代のもの。『風俗画報』から）

日比谷物語 ⑯

山岸弘明

日本倶楽部仮館

三信・三井ビル前の日比谷通りは明治二十年、日比谷大神宮仮拝殿跡地から東京ホテルに変わり、二十八年経営不振のため閉館されたことを前項で紹介した。

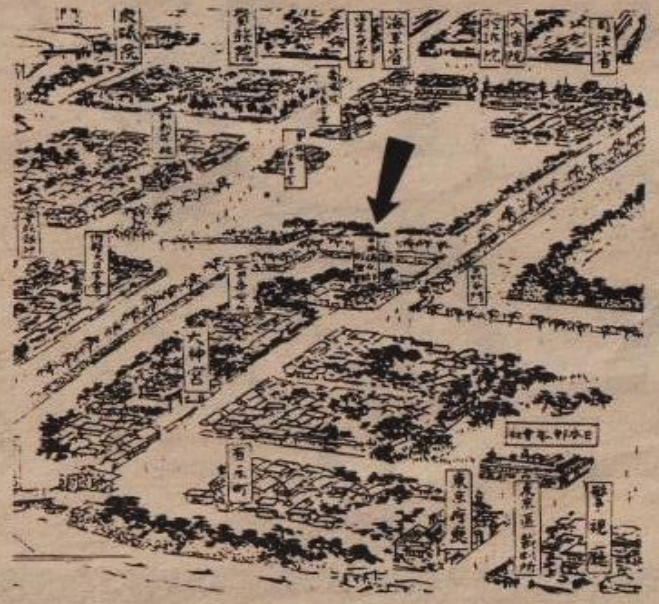
この東京ホテルは明治二十八年（一八九五）ブラジル公使館に替わり、三十一年には日本倶楽部仮館になっている。ブラジルは南アメリカ大陸東部の大国。四年前のクーデターで王制が崩壊、連邦共和国に替わっていた。移住民を中心に人種もまちまち。四十一年には、日本からも百五十八世帯、七百八十一人が入植する。日比谷公使館時代、移民の話があったかどうか、両国の関係は着実に結実するのであった。

日本倶楽部は社会の交際をすめ、内外人の好誼をはかることを目的にした社交会。三十一年七月、旧ブラジル公使館を仮館として発足した。この年の『風俗画報』によると、定員が五百名で入会金二円、会費一カ月三円。室内の装飾はイギリス、フランス風で食堂、ビリヤードなどを備えたとあり、会長には子爵の岡部長職、副会長長岡護美、渋沢栄一、名誉書記早川千吉郎となっている。

倶楽部が仮館としてスタートしたのは、すでに建物が老朽化して手ぜまであったこと、市区改正案が決定してこの地はやがてなくなる運命にあることなどによる。幸か不幸か、翌三十二年一月、この仮館が焼失して市区改正をすすめるきっかけにも。

倶楽部はその後も日比谷と深いかかわりをもつ。この年電気ビルの交差点側に転じて、大正七年（一九一八）帝劇裏の一画に移る。大東亜戦争をへた昭和四十一年（一九六六）国際ビルの竣工でその八階へ。社団法人・日本倶楽部は明治、大正、昭和の激動三代をこの日比谷に送るのである。

電気ビル時代の土地所有者は清棲家教伯爵になっている。清棲家といえば天皇家ともっとも深い関係をもった筆頭親王家。伏見家邦家親王の四男で、他の四兄弟は小松宮、華頂宮を名乗り、北白川宮、閑院宮を相続した。明治二十三年から昭和二十年までの五十六年間、その子幸保と、この一画を所有。当初、日比谷に実在した可能性がつよい。



明治三十一年の日比谷図（日本倶楽部仮館が三井、三信ビル前の日比谷通にあった。『風俗画報』から）

日比谷物語 ⑰

山岸弘明

帝国ホテルの開業

明治二十年（一八八七）、東京随一といわれた東京ホテルが三年、三信ビル前道路に建設されたことを一一五回で紹介した。この東京ホテルに遅れること三年。二十三年十一月に帝国ホテルが開業する。

隣接する大和生命ビル、NTT日比谷ビルの一画には、十七年から鹿鳴館が絢爛と華ひらくが、ここに集まる外国人賓客の宿泊する施設は、広い東京に東京ホテル一つというさびしさ。

ヵ年の工期をへて全館落成を迎える。設計・渡辺譲。施工・日本土木。工費二十二万円。木造レンガ三階建の壮麗なルネッサンス建築が宝塚劇場にあった外濠に影を映した。建坪七百四十坪、延坪千三百坪。

この年十一月の『東京日々新聞』には「まず入口庭前の構え、馬車回しの模様など申し分なし。馬車人力車置場あり、また馬屋あり。玄関の正面に広間あり。いと広やかなる談話室あり。この室には数脚の椅子を備え、ピアノ、オルガン等の備えあり。玉突場あり、舞踏室あり。いずれも百畳敷位の室なり。この舞踏室はもっとも広く五、六百人も集まるべき会合には、この室をもって臨時の食堂にあつる由。

一階、三階はすべて寝室にあて、装飾は特別、上、中、下の四段にわかちあり。すべて寝室六十有余間ある由。しかしその一室一日の料金は五十銭以上七円まで。食料は朝食五十銭、昼食七十五銭、夕食一円。また特別の料理はいかほどにても客のもとめに応ずる」とある。帝国ホテルは二十三年十一月二十日、開業式を挙行するのであった。

日本初の本格的ホテルとして誕生した初代帝国ホテル

それも満足のいくものではなかった。

井上外相は新生日本の首都にふさわしいホテル作りを決意。二十年一月には渋沢栄一、大倉喜八郎、浅野総一郎ら、当時の実業界を代表する人たちが集まった。資本金二十六万五千円。有限会社・帝国ホテルの誕生であった。

内山下町二丁目の現在地は、農林省の陳列所と外務省、宮内省用地で、政府は帝国ホテル建設のため、農林陳列所を引越して、官有地の貸下げを決意する。こうして二十一年から約三

日比谷物語 ⑱

山岸弘明

二代目帝国ホテル

明治二十三年（一八九〇）十一月、政府の国策ホテルとして開業した帝国ホテルではあったが、その草創期は苦難に満ちたものだった。政府、宮廷関係の賓客宿泊所にされたとはいえ、宿泊客は一日平均十四人にすぎない。二十四年には日比谷帝国議事堂が焼失して仮議場になったり、政府主催の天長節祝宴会場などに使われて、ようやく息をつなぐ。

帝国ホテルが営業的に一人立できるようになるのは、三十年代後期のことである。三十一時期欧米人客の減少をみるものの、大正五年下期には投宿者数延一万四千人を記録するのであった。

帝国ホテルでは、設備老朽化と増加する外人客の需要に対処すべく新館建設を決める。

「その内容は、本館に西隣する内務大臣官邸敷地三千八百八十七坪を借用して、ここに新館を建築するものである。これにはまず現入事院ビルに隣接する霞ケ関の地を選び、ここに大臣官邸を移築して内務省に寄付し、しかるのち旧官邸を除去して、その跡に新館工事を行なうという順序でことをすすめる必要があった。右の案によれば前積延六千坪とし、建築および装飾什器一切の費用を百三十万円と見積り、起工後およそ二年を経て完成することになっていた」

後に帝国ホテル社長に就任するホテル王・犬丸徹三著『ホテルと共に七十年』にある"帝国ホテル略史"にこう記されている。

新館すなわち二代目帝国ホテルは名建築家といわれた米国ライト博士の設計。大谷石づくりの大ホテルだが、ライトの完璧主義は工期を大幅に遅らせる。この間、八年十二月別館、十一年ホテル本館と相次いで焼失、大正十二年九月一日、あの関東大震災当日に竣工式を迎えるのであった。

関東大震災の日に竣工式を迎えたライトの名作、二代目帝国ホテル（『ホテルと共に七十年』から）

室町春秋

チャレンジさせる意

四月一日は各社でいっせいに入社式が行われたが、三井物産では江尻社長がとくに若王子マニラ支店長の救出を知らせたところ、まさにピカピカの新入社員がいっせいに歓声をあげたという。こうしたことも珍しいが、おそらく入社早々に会社との一体感を、巧まずして、盛り上げることになったであろう。

さて、今年の入社式での社長訓話に、「チャレンジ」という言葉が重なった。

三井銀行の神谷社長は、こういっている。

「当行では……それぞれプロフェッショナルな人材を育成する研修を強化しています。新入の皆さんには、何事にも積極果敢にチャレンジし、自分の潜在能力を思う存分に発揮してもらいたいと思います」

また、三井生命の鬼沢社長も、こういっている。

「若い皆さんに特に望みたいことは、何事にも失敗を恐れず、チャレンジしていただきたいということであります。今日のような変革期においては、常に情報の先取り、状況への敏速な対応を図っていかなければなりません」

ところで、英語の〝チャレンジ〟とは？ 普通の辞典で、まず出てくるのは「挑戦」である。あとは決闘を申入れる、決闘状そのもの、あるいは難詰、誰何（すいか）といった意味もあり、ちょっとモノモノしい。「戦い」を挑むのではなくても、「挑む」という積極的な意味は賞えるだろう。

「いどむ」の意には「人の心を興奮させる」こともある。史記に「琴心をもって、これにいどむ」の語があり、「しかける」の意もある。琴心とは、琴を弾じて思う心を表わすことである。琴意ともいう。

挑ませる側にも〝琴心〟が必要なのであろう。（公木子）

日比谷物語 ⑲

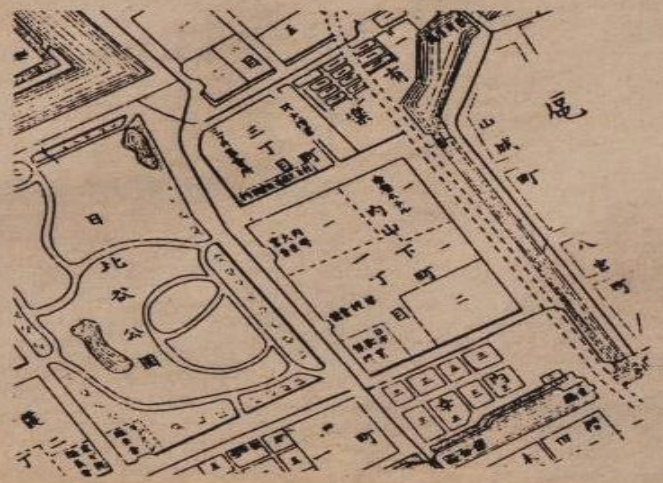
山岸弘明

喜賓会と内相官舎

明治二十六年（一八九三）、帝国ホテルの公園側に喜賓会が建設された。隣接地は二十三年、帝国ホテルが生まれ、同じ年鹿鳴館が華族会館に変わっていた。

喜賓会は交通公社の前身、日本旅行協会（ジャパン・ツーリスト・ビューロー）のそのまた前身である。ヨーロッパ各地を見聞した益田孝が提唱して、蜂須賀茂韶、福沢捨次郎、南貞助らが中心となった。「その事業たるやいささかも営利の性質を所に移り、大正三年、新組織へと改組するのであった。

明治二十五年から大正七年までのこの一画は内務大臣官舎（公邸）となった。この官舎の初代は第一次桂内閣の児玉源太郎だが、次の芳川顯正内相の時、日比谷公園で日露戦争講和反対国民大会が起って、官舎焼打事件に発展する。暴徒化した市民は日比谷周辺を火の海と化すが、項を改めて再び触れる。内相官舎は再建されて、原敬、平田東助、大浦兼武、一木喜徳郎、後藤新平、水野錬太郎と歴代内相がつづいた。



明治三十七年の日比谷付近図（内務大臣官舎、華族会館、帝国ホテルが内山下町に並ぶ）

〜〜〜

日比谷物語 ⑫⑪

山岸 弘明

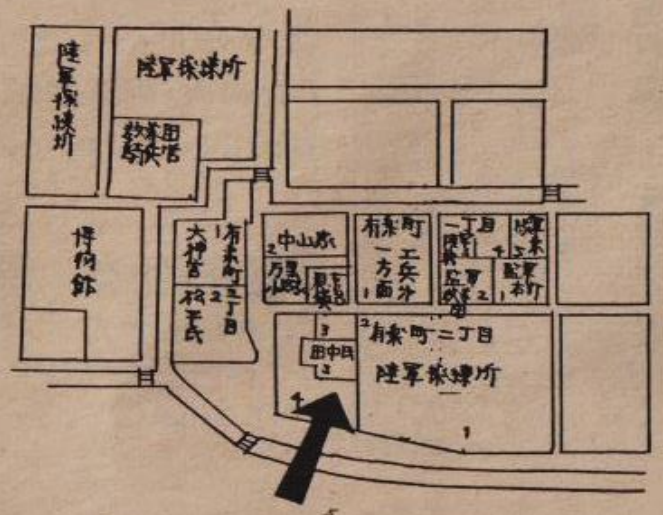
庶民の町の誕生

明治四年の廃藩置県を契機に、日比谷は政治の中心地として脚光を浴びる一方、庶民の町への第一歩をしるす。その典型的な例が有楽町駅前の朝日街、中央通り商店街の一画であった。

ここは江戸時代の南町奉行所跡。維新後市政裁判所、鹿児島藩屯所とかわり、三年図の一部に執次已としたものがある。五年（一八七二）大火で焼失、直後は御用地となるが、六年ころ田中不二麿、堀真好邸となり、幕でもあった。十年代前期まで。

十三年、一九年図では早くも現在の町並がほぼ整ってくる。四列の町並の最初の二列が、いまの一列目、三、四列目が二、三列目で、外濠土堤の空地が旧公害研究所の四列目。八年のこの一画の住民は八十三戸、うち士民一戸、平民八十二戸と記録されるのである。

明治期のこの町の思い出を銀座の野口孝一が『明治の銀座職人話』の中で語っている。「明治時代の数寄屋橋は後の数寄屋橋と位置が違っていた。鍛冶橋の方からきた外堀は橋の手前で丸の内よりに曲っていて橋は南北についていた。橋のところは両岸から堤防が突き出ていてその狭くなったところに橋がかかっていた。長さ三間、幅一間くらいの小さな木橋であったと思う。橋の下の川底には大きくて平らな御影石が三枚敷き詰めてあり、四六時中ゴーゴーと音をたてて実にきれいな水が流れていた。これをこの界隈では〝数寄屋橋のゴーゴー〟と呼んでいた。見付門は数度の火災で焼失したというが、両袖に潜り戸を抱く黒塗りの門で、かなりみすぼらしい御門だった」。



明治十二年の日比谷図（田中氏とあるのが文部大輔・田中不二麿邸）

長屋の一部は民家にかわった。

田中は名古屋藩出身の勤王志士。幕末は金鉄党をひきいて国事の周旋に奔走。維新後は司法大臣などを歴任した。田中の名を高めたのは文部大輔時代の十二年、これまでの就学制をゆるめた教育令の発令であった。数度にわたる渡米知識を生かして教育改革に取組むが、一方では〝アメリカかぶれ〟とも評されて、この改革も一年で再改訂の運命に。〝明治朝令暮改〟の一

日比谷物語 ⑫⑫

山岸 弘明

三島幌馬車工場

前項につづいて『明治の銀座職人話』（野口孝一）から、明治後期の朝日街、中央通り商店街周辺を紹介しよう。

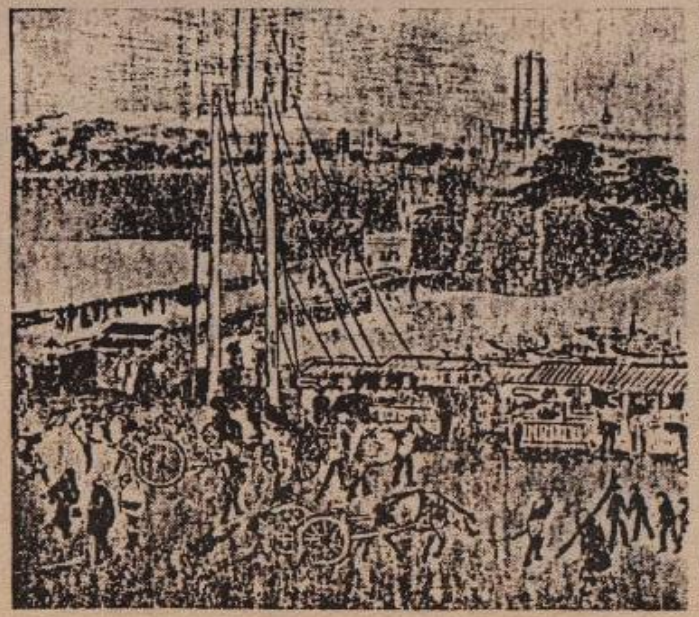
「数寄屋橋を渡ったところは朝日新聞社（現マリオン東側）だが、ここは大正のはじめまでは土堤つづきの見付御門（正確には旧松平邸）の墨壁のあとであった。その土手の斜面は芝生で覆われ、点々と黒松が植えてあった」。

同じマリオンでも西側の旧日本劇場側は旧南町奉行所前広場部）があたりに取残されたように立っていた。長屋は二階建で、一階の羽目板は柿渋黒塗りの鎧張り、二階は白壁で各戸ごとに武者窓が切ってあり、屋根は切妻で、その頂きの両側に鯱がのっていた。長屋は四、五軒つづきで、この付近の往時の面影をとどめていた。この大溝の先は通路がそのままひろがったような空地となって土堤へつながっていた。土堤はなだらかで青草がはえ、子供たちの格好の遊び場であった。

土堤の裾には三島という幌馬車の修理工場があった。広い空地をわがものの顔に古馬車の残がいを所せましと野ざらしにしていた。空地の突当たりの工場には数人の工員がいたが、仕事をしているやら遊んでいるやら分からずいたってのんびりしたものだった。

このとなりは丸谷という弥左衛門町の和紙問屋の隠宅であった。丸谷は〝江戸川〟という手紙用の巻紙を扱っていた。この隠宅は〝吾妻新誌〟の発行所ともなった。ご隠居のお妾さんがここで首吊りをしたというわさが流れて当時の界隈はその話で持ち切りだった」。

後に市電車庫→市電気局となった東京交通会館の明治三十年代であった。



明治中期の数寄屋橋付近（外濠が銀座と有楽町を分けている。石垣の内側に日比谷があった）『明治の銀座職人話』から

日比谷物語 ⑫③

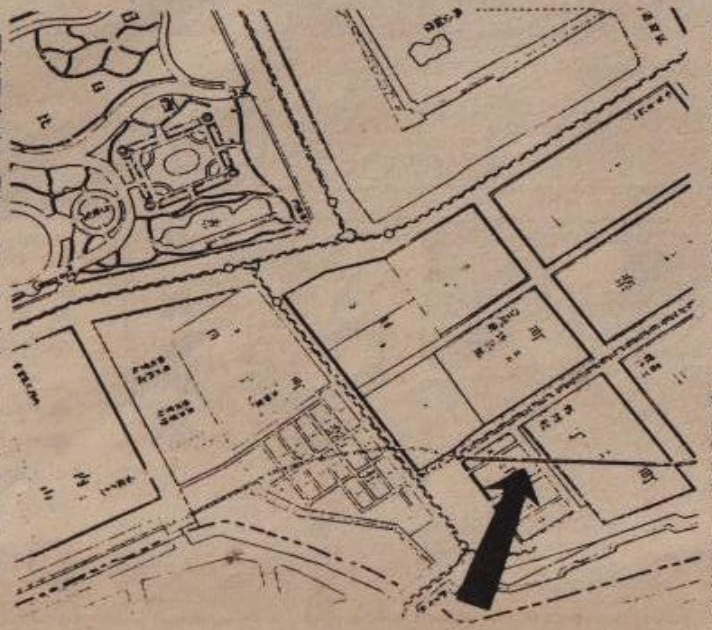
山岸 弘明

棟割長屋の町

明治期の朝日街、中央商店街を伝える『明治の銀座職人』（野口孝一著）の続編。「丸谷の隠宅から一軒おいてとなりの角にはメソジスト教会があり、さらにその棟隣り二、三軒先に路地があって、その路地にそって平屋建の九尺二間の棟割長屋が立てこんでいて、職工さんとか、あんま、女髪結、左官、大工、安月給取りや、戸口に植込みのある小粋な住まいにはこの付近の小金持の妾宅などがあった。

この隣りは有楽町の市川床といって日本かみそりの腕利きで、この界隈では評判の髪結床だった。主人は長いあごひげをたくわえ、職人気質の腕自慢、一風変わった人物だった。店は簡素なガラス戸の構えで、土間へ入った右側に客用の腰かけが置いてあり、奥の正面には黒の太々しい額縁に入った大鏡が四、五枚はめてあった。散髪用の椅子ときたら大型の角ばったもので、左右に肘かけがあって、その先に竜頭の彫物がしてあり、背後には伸縮自在の頭かけが付いていた。髪の洗い場は木でできており、そのなかに銅の打出しのかなだらいがあった。客持ちの壁には横浜絵というガラス絵がかかっており、灯油は生たきのガス灯だった。夏場になると、客のサービスに小僧が高いほう歯の高げたをはいて、お化けのようなばかでかいうちわであおいでくれた』。

中野区白鷺の小川源一郎の父も明治二十七年から八年間この一画に住んだ。「歌舞伎座出方（茶屋）の東方棟梁をつとめ、ここから築地にかよった。小さな家並のならんだゴチャゴチャとした町で祖父のとむらいもここからだした」と父の存命中に聞かされる。



明治四十年の麹町区図＝部（分有楽町駅周辺の高架工事が進んでいた）

日比谷物語 ⑫④

山岸 弘明

有楽泉

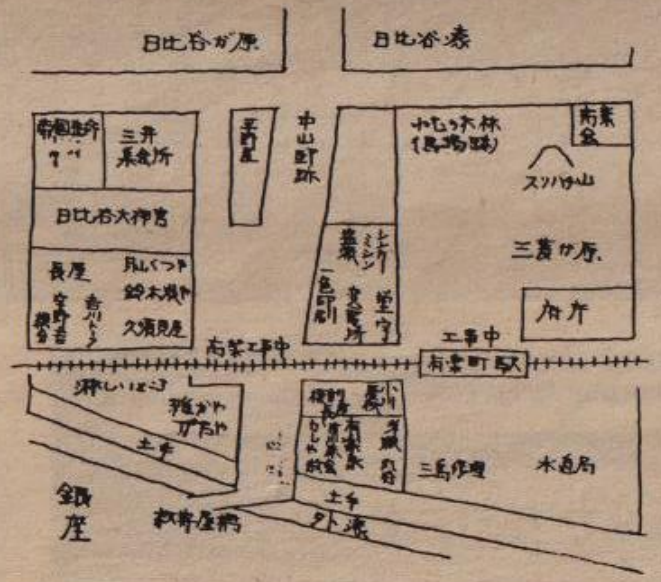
明治期の朝日街と中央商店街の一画は棟割長屋のつづく庶民の町でもあったが、この長屋造りの一隅に〝有楽泉〟という銭湯があった。『明治の銀座職人語』（野口孝一）をつづけよう。

「（前項で紹介した）市川床の隣りは有楽泉という湯屋だった。ドーム型の屋根でパラペットは白壁が塗り込められ中央にうと木札を渡し、拍子木を打って奥へ知らせた。一つチョンと打つと男性、二ツチョンチョンと打つと女性と知らせる合図で、番頭はそれで客が男か女であるかを知るのであった。

有楽泉の先の角は八枚入りのガラス戸のはさまった洋服屋であった。侵敷きの店には仮ぬいの服を掛けたマネキンがあり、その横手に洋反物が井桁に積重ねてあった。この店はいつみても人の気配はなく、しごく閑散としていたが、当時の洋服屋の商売はこんなものだった。

この横通りのはずれに、そのころとしては物珍らしい白馬堂小川という看板屋があった。店は小さいが、その付近の空地をわがもの顔に大きなトタンの看板を取っちらかしていた。この店は早いころ上野広小路へ移転して行った」。

この洋服屋と小川看板の前に赤れんがを積み重ねた高架鉄道と有楽町駅が完成するのは、その後、明治四十三年（一九一〇）六月のことであった。この一画にはやがて平民社が生まれて社会主義運動の源流に。そして四十一年には有楽座が誕生して新たな展開をしめすのである。



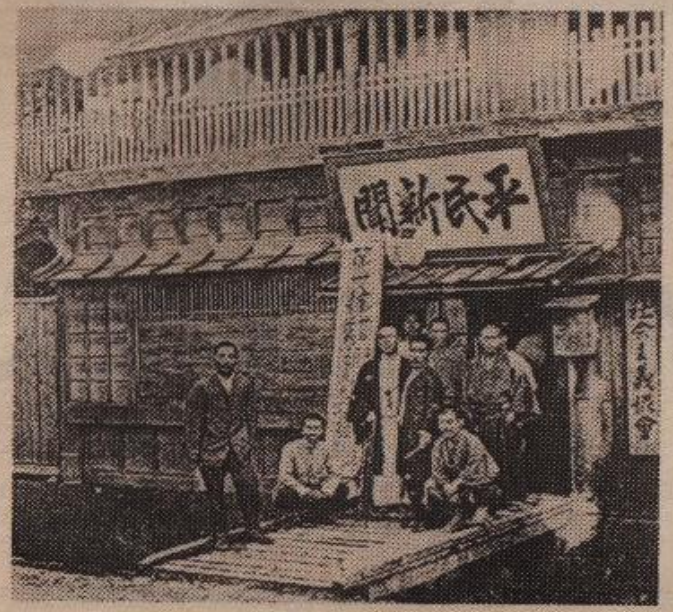
明治中後期の日比谷（『明治の銀座職人話』から作図）

日比谷物語 ⑫⑤

山岸 弘明

平民社と幸徳秋水

明治三十六年（一九〇三）、有楽町朝日街のマリオン側に設立された平民社は、日本における社会主義運動の源流として知られている。この年『万朝報』をあきたらずに退社した幸徳秋水と堺俊彦が、この一画で『平民新聞』を創刊。紙面には日露戦争に向けて高まる好戦熱にあっ向から対抗する反戦論がおどった。社会主義者が公然と世人に姿を表わす、この平民社の行く手には茨の道が待ちうけていたのであった。



明治後期、高まる好戦論にまっ向から対決した平民社。周囲を囲んだ小川と石垣が南町奉行所の面影をただよわせている（写真集『日本社会党』から）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

不屈の社会主義運動家として名高い荒畑寒村の『平民社時代』に日比谷当時の思い出がのっている。「日本劇場（現マリオン）の裏あたりの角が平民社で、日比谷公園よりの角に中山二位局だかの邸があり、その中間に住家が並んで一ブロックを作っていた。そしてやや広い溝がこの一郭をとり巻いていて、どの家も小さい木の橋で前は三十間ばかりの道路を隔てて数寄屋橋教会、有楽泉という名の銭湯、冬になると焼芋屋に変わる氷水屋などが軒をならべていた。

平民社はやせた松の木をのぞかせた二階家で、階上の十帖、七帖半の二つ間が編集室。階下の九帖、四帖半、三帖、二帖の四室が応接室、食堂、寝室、販売発送などの事務室にあてられていた」。

わが国最初の女性社会主義活動家・西川文子も、平民社の一員。「編集は幸徳氏、堺氏、西川光二郎氏、石川三四郎氏の四人で、発送には斉藤兼次郎氏と神崎順一氏、柿内武郎氏がいられて、台所やちょっとして会計を私と延岡さんとでしていた」（『平民社の女』から）当時この平民社に社会主義者のほとんどが集まったという。

政府の迫害もつよまる。相つぐ発行停止処分と責任者の入獄と罰金刑を。『週刊直言』への改題をへた三十八年、二年間の平民社時代も終焉を迎える。

悲劇はこれにとどまらない。四十年、堺と西川がおこした日本社会党が結社禁止令を受け、四十三年には赤旗事件、大逆事件として逮捕された幸徳以下幹部が刑死を受けるのであった。社会主義運動の冬の時代がはじまる。

日比谷物語 ⑫⑥

山岸 弘明

数寄屋橋教会

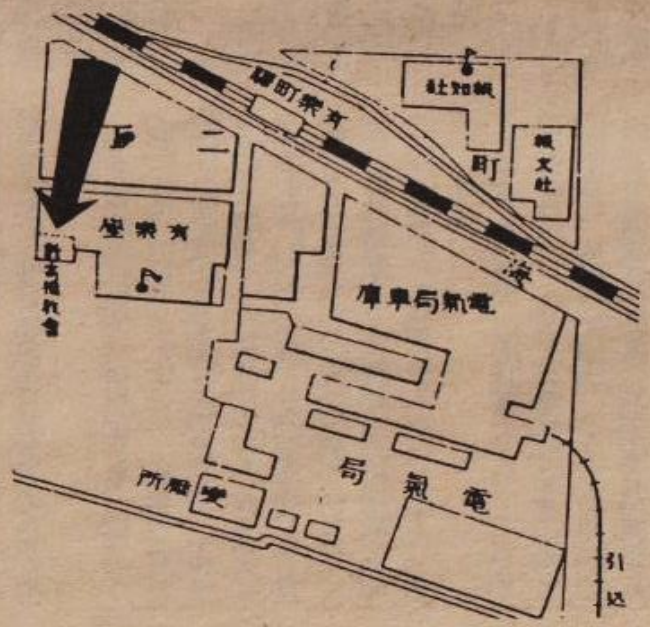
一二一回〜一二五回で、旧南町奉行所跡地が庶民の町へと変わっていく様子を紹介した。前項の荒畑寒村著にある数寄屋橋教会は、明治十八年（一八八五）から大正十二（一九二三年）までの三十九年間、有楽町駅前朝日街の朝日別館一画にあった。

江戸時代のキリシタン禁制はよく知られるが、新政府にかわった明治維新でもスンナリ解禁されたわけではなかった。慶応四年（一八六八＝明治元年）切支丹邪宗門として再び禁止され、橋、十八年から有楽町に移ってメソジスト数寄屋橋教会となった。関東大震災まで。

「スレートがわらのトンガリ屋根、二階建洋館でかまぼこ型の窓はよろい戸だった。日曜日ごとに西洋だいこやタンバリンを打鳴らして『神の子供やさけべやうたえ』とどなるのだが、当時の庶民は一向に振り向きもしなかった」（『明治の銀座職人話』から）。キリスト教会が一般に普及するのは昭和に入ってからだという。当時の教会運営の厳しさを窺わせもする。

荒畑はこの教会牧師を綱島佳吉としている。綱島は霊界の巨人ともいわれた人。岡山県に生まれ、同志社大学卒業後エール大学に学び、京都霊南坂教会、番町教会牧師などを歴任。この間、ドイツ平和会議、ロンドン会衆派大会では日本代表なども つとめた。

わずか二十五歳で悲劇の生涯をとげた明治ローマン主義の先覚者北村透谷も、この数寄屋橋教会で受洗している。透谷を政治から文学の世界に転向させる契機を作った石阪ミサが熱心な会員で、二人は明治二十一年十一月、数寄屋橋教会牧師田村直臣の司会でキリスト教式の結婚式をあげる。透谷十九歳であった。



大正十年の日比谷図（有楽町に並んで数寄橋教会が見える。現代のマリオン裏、朝日別館の一画に当たる）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

翌明治二年には長崎県の浦上村で三千二百人が捕えられ、うち七百人が生命を失なうといういたましい洗礼も受ける。数寄屋橋教会は禁制礼撤去後の七年、東京初のキリスト教々会として誕生した第一長老教会から九年四月に分離した銀座教会（現在の同名教会とは別）の後身になる。銀座当時の記録をみると会員数二十八名、牧師ガルゾルス指導のもと原胤昭、戸田欣堂、田村直臣ら明治期の代表的神学者を送り出している。十三年京

日比谷物語 ⑫⑦

山岸弘明

亀岡とガード周辺

ニュートーキョーからガードにかけての明治期も商店、工業の町、そして一般住居へと変遷をつづける。ここは江戸後期の島原藩邸で、一部が有栖川宮邸となり、旧藩主松平忠和が明治十年（一八二三）まで居住した。永井保著の『銀座ばやし』がこの一画と銀座・対鶴館のかかわりにふれている。

「（亀岡勝知は）明治維新、有栖川宮家の財政顧問といった資格で江戸に入ると大蔵省の役人もつとめた。折りから政府は大名屋敷跡を民間へ売り渡すことになり、亀岡も一枚加えられて土地の払い下げをうける。当時坪二銭で買い受けた土地の広さは、いまの朝日新聞社（現マリオン）から土橋のあたりまで及んだ（？）という。（その土地も）藩から扶持をもらえなくなった武士たちに、自立の糧としてほとんどわけてしまう。時勢に応じた商売をはじめる決心をして富家を孕めると、対鶴館という旅館を開業……」。銀座・対鶴館ビルの前身であった。

亀岡家がこの一画を所有する期間や、その後の経緯はつまびらかでない。十二年図の一部に共立病院としたものがあり、三十八年の『東京案内工場表』には信陽堂＝印刷・銅版・活版、十七年六月創立としてこの地番が記入されている。

十九年の参謀本部陸軍部測量局地図をみると、次々と小建物が増築され、二十八年図では藩邸が取り払われて区画整理された町並が誕生する。旧道沿いに横四列、縦六列の十九区画。四十三年、山手線有楽町駅の誕生でガードが新設されて二分。直後の写真では平屋建のしもたやが ならぶ。この町並は大正十二年（一九二三）の関東大震災までつづくのである。

明治後期資料では、この一画住民として大日本実業界、シンガーミシン裁縫学院、内外新聞、伊藤製版、渡辺松太郎、牧野逸馬、秋山事務所などの名前が読める。三十六年『風俗画報』には「内外新聞ははじめ自由新聞、明治新聞ともいいし、本年三月改題。世に聞こえぬ新聞ながら、積極の方針をとり、当議直言、快論痛切、もって内治外交の革新を期すという。社長小野藤太、主筆織田純一郎」。

明治三十六年の日比谷（工事中のガードが点線で示されている。この一画は区画貸され、庶民の町へと変る）

日比谷物語 ⑫⑧

山岸弘明

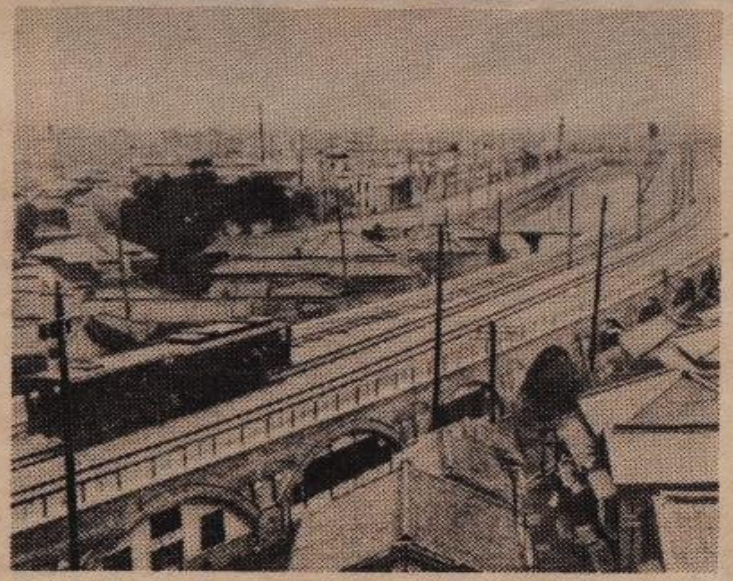
大日本実業会

前回紹介した大日本実業会は、実業の日本社の前身である。総合経済誌として出版界に異才を放った同誌の創刊は明治三十年（一八九七）六月のことであった。創立者・増田義一と光岡威一郎は東京専門学校（早大）の同窓で、当初京橋に本社を構えるが、三十一年七月麴町区有楽町三丁目一番地に移転している。

「現在のニュートーキョーのあたりにあたると思われる。庭先は大きな松の木のある土手をへだてて、いまは埋立てられて高速道路となった皇居の外濠に面していた。邸内には母屋につづく十四、五帖の土蔵があったこれが事務所に使われた」と、同社の『七十五年史』が伝えている。三十三年五月、健康を損なった光岡が、この自邸兼事務所を増田にゆずり、三ヵ月後に死去する。大日本実業会もこの年、飯田橋に退くのであった。

野口孝一著『明治の銀座職人話』では、この一画を「日本劇場（現マリオン西館）の向い側は雑貨屋とげた屋が二、三軒あるくらいで、人通りもなくさびしい町だった」としている。現在同地に八階だての隆和ビルを構える小川家（担当主・利夫氏）であった。小川家は明治十年代から親子四代にわたる日比谷住人。親戚でタバコ屋とげた屋の店をならべた。「（明治十六年生まれの）父小三郎も銀座の知り合いに寄留していることにして（学区外の）泰明小学校にかよった（小川キミ）」と『有楽町有情』にある。明治三十四年には同じ隆和ビル経営の更科が開業。やがて〝売上げ日本一〟と称されることに。

ここと次回紹介するガード先の一画は、明治十年代から日本橋北島町の清水米蔵、栄蔵所有地であった。中央区内神田にすむビル経営・清水精一によれば「日比谷の土地は曽父米蔵が坪二円五十銭で購入したものだそうです。文政十二年生まれの曽父は幕末期に神奈川県の大和から江戸に出。いろんな仕事を手がけながら、土地を取得していったようです」大変革の世代に苦労の末、一代で財を為した。立身伝の持ち主でもあった。清水家は、関東大震災と終戦をはさんだ約六十年間、この地の深いかかわりをもつことに。改めて紹介することにしたい。



明治四十三年、有楽町駅開業直後のガード周辺（平屋建てのしもたやが並んでいる）

日比谷物語 ⑫⑨

山岸弘明

明治以来の労舗

明治時代のガード周辺を伝える続編。「(現在のニュートーキョーからガードにかけての一画は人通りもなくさびしい処だったが)その先の横町角に久寿美屋酒店、少し離れて月山靴店と鈴木炭屋があった。そしてその裏側には長屋が立てこんでいて、そのなかに豆腐屋が一軒あったのを覚えている」(『明治の銀座職人話』から)。

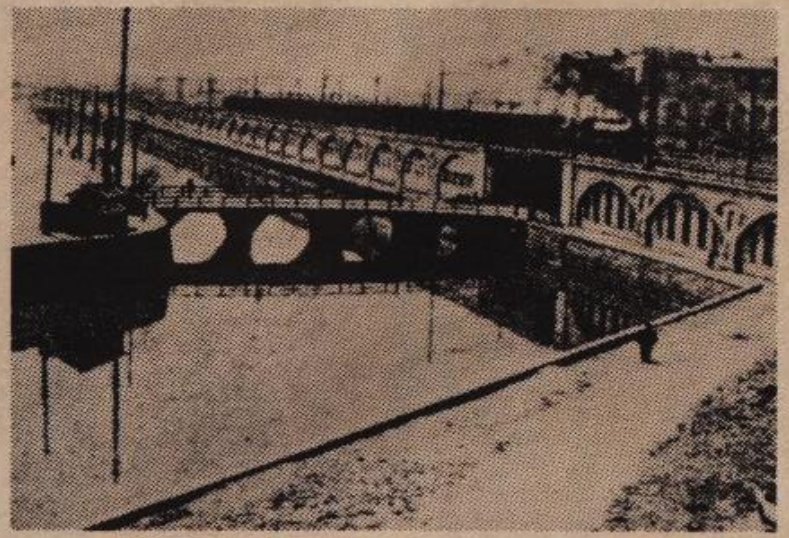
久寿美屋酒店は現在の小谷ビルである。明治十年、小谷晋松創業と伝えられる数少ない日比谷老舗。二代美太郎は明治二十三年生まれで、大正十一年、酒店のかたわら日比谷ビヤホールを開業、昭和はじめの初代小谷ビルを興した。現在は昭和三十九年竣工の二代目。

月山靴店は現在の第二日比谷ビル。昭和六十年までこのビルの所有者であった築山家の昔が、この靴店であった。「あの時分は(日比谷警視庁の)近くで主人と二人、クツ屋を開いていたの。お客さまといったら(警視庁の)騎馬巡査のみなさんと帝国ホテルの異人さんぐらいだった」と築山ギンが語っている(『有楽町友情』から)。大正時代に食堂兼甘いもの屋にかわり、昭和四十年代に築山ビルをたてた。

鈴木炭屋とあるのは、日比谷住人のなかでもっとも古いといわれている新屋そばのことだろう。家伝では、現当主荒井康治の曽祖父が明治三年、この地で薪炭業を開業している。終戦直後の混乱期に食べものの商売に転向したのだという。屋号も地元で知られた旧職にちなんだ。

吉川豆腐店は健在も同じ地に埼玉屋豆腐店としてがんばっている。明治三十年ころ初代が埼玉県から上京して店をだした。戦時中強制疎開のため一時取りこわし、戦後に再開。現在は三代目。

ほかにも明治時代からの日比谷住民がいる。常磐ビルもその一人だ。明治時代に、二代目当主宮沢三郎の父がここで常磐ずしを開き、末期には植田商店が引越している。この項で紹介した店々は、大正、昭和にかけて日比谷を代表する商店に成長していくことになる。それぞれ再び紹介することにしたい。



明治四十三年ころのガード周辺(高速道路となった外濠手前の空地は、大雅とラクチョービルにあたる)

日比谷物語 ⑬⑩

山岸弘明

宇野吉親分

有楽町一丁目東宝街裏側の明治中後期は長屋のたてこんだ庶民の町であった。「この長屋(の一画に一時期)宇野吉五郎親分が住んでいた。もとは金春大工といわれ、新橋花街を根城に仕事をろくすっぽしないで乱暴狼藉をくり返し、新橋芸者をちぢみあがらせていたという。しかし明治十年ころ食いつめてこの地に移り、ここでも顔をきかせて何ごとにも口をはさんでピンハネをして隣近所の嫌われものになっていた。この宇野吉親分、なんの風の吹きまわしか晩年になって(一二四回で紹介した)有楽泉のおやじに納まっていた。

この一角はじめじめしていて陰気くさく、空家もあった。いつのころであったか、この空家に幽霊がでるといううわさがたち、それを新聞記者がかぎつけて新聞にのせたからたまらない。たちまち評判になって夕涼みがてら物見高い人々がわんさと押しかけ一時は警官が出勤するさわぎとなった。

この先(東宝日比谷ビルの一画には)日比谷大神宮があった。神殿は南向きで、さほど大きくなかった。参道は玉石を敷きつめ、桧づくりの社殿は一段高くなっていて、金系の縁どりをした真紅な御簾がいつも下がっていた。社殿は檜の木立ちにおおわれて境内はいつもきれいに清掃され、神々しい雰囲気をたどよわせていた」(『明治の銀座職人話』から)。

明治四十五年、かぞえ年六歳でこの地に引越した植田商店の植田義己は、同社の日比谷進出百周年記念出版『日比谷一〇〇』のなかで「(明治末期から大正時代にかけての日比谷は)静寂そのものでした。というのも現在の映画街周辺の広大な地域はすべて日比谷大神宮のものだったからです。それと日比谷を代表するもう一つの建物が帝国劇場。この二つは有楽町にありながら日比谷大神宮、日比谷の帝国と呼ばれていたのです。そのほかほとんど住宅。夜になると真っ暗で人通りもなく、追いはぎができるほどでした」と書いている。この一画がアミューズメントセンターとして今日の興隆をみるのは、大阪宝塚の小林一三が東京進出をはたした昭和九年以降のことであった。

明治三十七年の鉄道敷設線路図(高架工事が進む日比谷周辺は静寂そのものだった)

日比谷物語 (131)

山岸弘明

三菱の丸の内進出

明治二十一年（一八八八）八月、勅名をもって公布された東京市区改正条例は、日比谷の町を一変させた。明治十年代の日比谷から丸の内にかけては陸軍省用地が集中していたが、自由民権運動も下火になると、皇居周辺の警備もさして重要でなくであった。陸軍省の移転費用百五十万円は、日比谷・丸の内十万坪の軍用地払い下げでまかなうこととした。

「いよいよ売ることには決定したが、金額が大きすぎるので問題にならない。そのうちに條約改正の議もようやくすすみ、東京市内の地価が著しく騰貴したため所要資金が得られやすくなった。そこで第一に内務省に相談して某営利会社に払い下げようとしたが、到底予定通りの金額が得られず、二十二年十一月には東京市に託して入札させたが、予定の半額も入手できぬありさまとなり、これも中止となった。やむを得ず当時有力な五、六の財閥を説いて入札を試みたが、百五十万円といえばなかなかの大金である上、当時利用の方法も一寸つきかねたので、誰も政府の所要金額に入札して引受ける人はなかった。

最後の切札として松方大蔵卿から三菱社長・岩崎彌之助に購入方の慫慂があった。三菱社にとってもなかなかの大金であったが、国策に協力する意味で決然その購入を引受けた。しかし、さすがの三菱社でも到底一時払いは不可能だったので、一年一か月の間に八回に分納することとして落着した」（『丸の内今と昔』から）。

当時の三菱は海運業を中心に政府の保護をうけながら政商としての密接な関係を築きつつあった。「世人はその無謀さに驚いた。ところが当の彌之助は一向平気で『竹を植えて虎でも飼うさ』とうそぶいたという。後世、虎がレンガや鉄筋コンクリート造りの大厦高楼となり、所が変ってポプラやいちょうの並木になろうとは、まったく当時の人々の夢想だにしなかったことだろう」（同）。

明治三十五年ころの三菱が原（一時、丸の内・日比谷一帯は追剝ぎや殺人事件が相次ぐ荒地に変った）

〜〜〜

日比谷物語 ㉝

山岸弘明

日比谷交差点

東京を産業都市として発展させるため市区改正は、第一二六回で紹介した。明治二十一年（一八八八）八月、勅名をもって公布された市区改正条例も、その後は遅々としてすすまなかった。

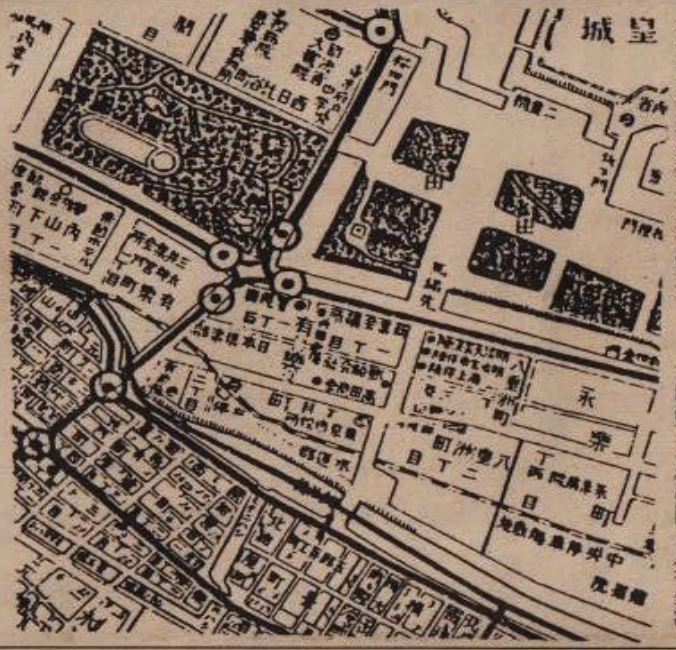
日比谷交差点周辺は、日比谷御門や数寄屋橋御門はすでに撤去されていたとほいえ、町並みは旧幕時代そのまま。南は日本生命、宝塚の濠池でさえぎられたうえ、道路も曲がりくねっていた。計画では、日比谷から銀座への道路、日比谷から内幸町をへて西新橋へ抜ける道路を完成させること。すなわち、日比谷交差点の新設、練兵場跡地を公園とすることなどであった。

明治三十二年、この計画道路の中心にあった日本倶楽部仮館が焼失したことで、市区改正工事が開始されることになる。三十六年には旧永井飛弾守邸で明治元勲の一人でもある中山大納言邸と旧松平主殿頭邸が二分され、晴海通りと日比谷通りが生まれる。日比谷濠が埋立てられ、濠池地は東京市街鉄道会社、東京電燈会社用地などに。この時の日比谷地区画整理予算十一万四千円。うち二万七千円が濠池埋立費と記録されている。

中山邸はこの市区改正を機に日比谷を去るが、二分された跡地は南半分が平野家、長陽軒、幸楽らの飲食店、旅館街に代わり、一方の北半分は日比谷ビルと不平不満、不景気をなげきながらひと山あてようという人たちが集まる町・山かん横町へと変わっていく。そして旧松平主殿邸の飛地はタクシー会社、生命保険会社へ。明治市区改正は新しい日比谷の誕生を告げる。

市区改正を機に旧日比谷外濠埋立地に新しい地番が生まれる。日生劇場、宝塚劇場、コトブキビルの一画である。ここは旧外濠と土手敷で、土手敷は江戸時代、日比谷大名が賜邸地の一部とし、明治時代も旧来のまま使用されてきた。

この市区改正埋立の結果、三丁目三番の新地番に東京電燈会社九九〇坪、東京市街鉄道九八八坪、愛国生命七〇二坪、東京信託会社三四五坪、京釜鉄道一〇〇坪、神宮奉斉会六九九坪、清水栄蔵三二一坪と二八坪が新たな日比谷住民として加わるのであった。



（明治四十五年の日比谷（三十六年の市区改正で日比谷交差点が誕生している）

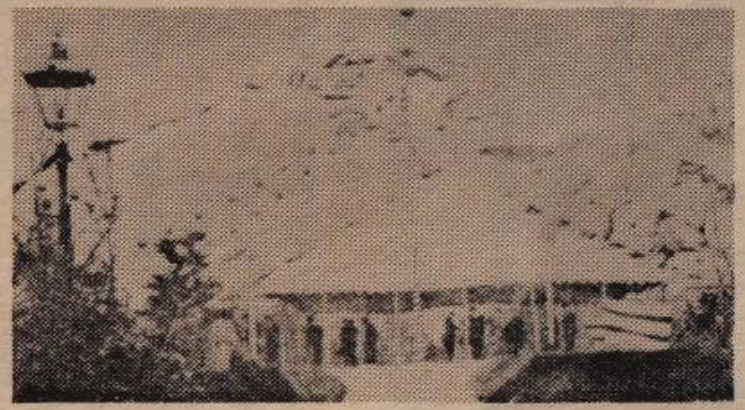
日比谷物語 ㉞

山岸弘明

日比谷公園の建設

明治三十六年（一九〇三）の日比谷区画整理は、明治後・大正期の日比谷を誕生させたが、その最大の話題は日比谷公園の開園であった。

練兵場跡地の公園化は二十一年十一月市区改正委員会決定、二十六年には東京市告示第六号で公式決定される。「麴町区内山下町二丁目一番地西日比谷町一番地元練兵場跡、自今公園と定め日比谷公園と称す。東京市参事会東京府知事・富田鉄之助」。二十一年には陸軍練兵場が青山に引越すが、その跡地が



日比谷公園開園式（明治三十六年、東京唯一の洋式公園として開場。当日は待ちかねた市民が殺到して自由に往来もできないほどだった）

すんなりと日比谷公園に変わったわけではなかった。その後も陸軍省が諸行事に利用したり、付属建物の撤去や濠地埋立で遅れ、計画段階に入ってさまざまな意見が出て、なかなか決まらない。

この間、日比谷公園は日比ケ原とも呼ばれる広漠とした原っぱに変っている。「練兵場の他に移転するにおよび塘は崩され石垣は破れて児童の土戯するを見受けぬ。西南隅に貴族院官舎あり。そのかたわら竹柵を結うて海軍予備校建築地の木標を建つ。日比谷公園の名は立派なるも、未だまったく公園の風致を添えぬ……」（『風俗画報』三十年十二月号）計画ばかりの公園建設に市民の批判が高まった。

わが国初の洋式公園・日比谷公園の建設を軌道にのせたのが東京農科大学の本多静六博士であった。たまたま市顧問・辰野金吾を訪ねた本多がむりやりその地形図を押しつけられる。「一週間ばかりかかって作った下図を持参したところ、辰野氏は大いに賛成されて早速私のことを町田市長に話し、私は市長から改めて公園設計を嘱託されることになった。私も本当のところ公園の設計は初めて。わずかに西洋の公園をみてきて、本を数冊もっているだけだから、はなはだ心細かった。だが、まだ日本には専門家がいないので私は異常な希望と決心をもってやり初めたのである。今日存する日比谷公園の車道、すなわり大道路は私がフリーハンドで勝手に描きあげたもので、公園敷地四万九千余坪をその大道路によって四つに区画し、その一区画を純日本風庭園とすることにした。と本多静六博士『体験八十六年』のなかで博士自身がしるしている。

日比谷物語 ㉟

山岸弘明

日比谷公園

第一二九回で日比谷公園の建設前史を紹介した。公園は明治三十五年（一九〇二）四月起工、翌三十六年六月一日、仮開園式を迎える。

「経営わずかに一年有半にして繁華熱閙のちまたに一閑境を現出せしめたる日比谷の新公園は、予記のごとく昨一日をもって開園の式をあげたり。前日の雨気まったく散じ朝来快晴の空清風を送りて軽衣の袂を払う近頃の好天気となりしより、四方の六大門および園内の各所には国旗球燈をかかげ、二ヶ所の音楽隊は盛にりゅうりゅうの響を伝えたり――」（『東京朝日新聞』）

午後二時の一般入場では、待ちかねた市民が殺到「一時に四方より乱入りてほとんど往来もかなわぬほどなりき」（『東京日々新聞』）と当時の各紙が伝えている。日比谷公園の開設は東京市民に熱烈な話題を提供する。

総工費約三十万円。五万一千坪の総敷地は後楽園球場の約五倍。洋風庭園三万六千坪、日本風庭園三万四千坪、池沼二千坪、遊戯場四千九百坪、競走場三千坪からなり、大まかなレイアウトは現在のそれとほとんど変わっていない。大噴水とつづく芝生地が当時の運動公園で、テニスコート周辺まで地裁寄りの日本風庭園がつづいていた。

有楽・日比谷・幸門ら六門があり、白熱ガス灯七十基、千二百燭光アークライト十基、ほかにあずまや二ヵ所、水のみ場十ヵ所、ベンチ百五十基、噴水二ヵ所、樹木は三百種二万四千本、花卉三十種一万二千株と記録されている。そして開設当初の水飲み場は、テニスコート近くに現存するのである。

日比谷公園がオープンした翌年の三十六年には日露戦争がはじまっている。総力をふりしぼって大国・ロシアを破り明治後期は維新以来の宿願でもあった〝富国強兵〟の実をあげるが、日比谷公園では祝勝会が相次いで時代の波を反映していく。

三十七年五月仁川海戦の勝利を祝って。九月遼陽城占領を。三十八年には旅順港占領、連合艦隊大勝利、英国東洋艦隊歓迎、帝国連合艦隊凱旋、東京凱旋軍歓迎会などなど――。旧首脳や軍人の国葬、戦勝大会といった国家行事がくりかえされて、日本が軍国化していくさまを見守るのである。

初期の日比谷公園（明治・大正期の日比谷っ子は、ここでタコあげや鬼ごっこに興じた。『警視庁の百年』から）

日比谷物語 ㊱

山岸弘明

日比谷焼打事件

日比谷公園といえば、開場直後の明治三十八年（一九〇五）に起きた日露講和条約反対国民大会と、日比谷焼打事件が忘れられない。

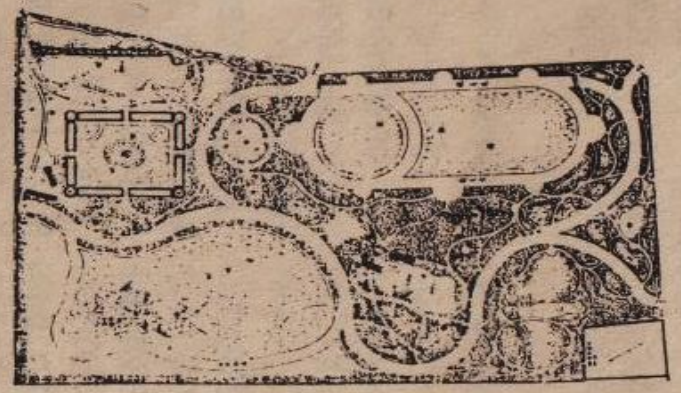
三十三年、わが国は北清事変の勝利で列強の仲間入りをはたし朝鮮支配の決意を固めるが、一方、中国東北部の満州を占領したロシアも撤兵せず、三十七年一月日露両軍が激突して、日露戦争が勃発した。

この戦いは東郷平八郎の率いる海軍が、仁川沖でロシア艦隊を撃破し、翌三十八年五月にはバルチック艦隊を撃滅する。一方、乃木希典率いる陸軍も遼陽・沙河の合戦で勝利を収め、肉弾攻撃で多数の死傷者を出した旅順も、二百三高地を占領して開城させた。

しかし、日本の戦力消耗はいちじるしく、ロシアも内乱で国民の戦意喪失が明らかとなっていた。こうして両国は戦争の早期終結を望み、アメリカ大統領の勧告を入れて講和への道を歩む。日露戦争の勝利は一部特権階級に莫大な利益をもたらせたが、一般市民は戦場に駆りだされたり、特別税やインフレに悩まされていた。この講和条件は、日本の戦勝国としての権利を大幅に譲歩したものであるとして、市民の怒りが爆発する。

九月五日、日比谷公園で行なわれた日露講和条約反対国民大会には三万人の群衆が集まった。大会は麴町署の中止勧告を無視、数十人の巡査の公園閉鎖を突破した人波で埋まる。講和条約破棄を要求する四項目の決議文を採択すると、皇居前に進み、二重橋で巡査隊と激突。この時、大会主催者の河野広中と大竹貫一が検挙され、群衆の激昂はますます高まった。

暴徒化した一行は、公園と日比谷口正門に近い内相官邸を焼打ちする。現在の帝国ホテル公園寄りになる。幸い芳川顕正内相は不在で難を免れるが、のち事件の責任を負って辞任も。夜に入って巡査派出所や電車が焼かれる。戒厳令下三日間にわたる空前絶後の大事件がくりひろげられた。日比谷公園はこうして事件の本舞台として、全国にその名を高める。国民的広場としての性格を鮮明に画いていくのであった。



初期の日比谷公園平面図（後楽園球場の５倍、５万1,000坪。大まかなレイアウトは現在も変わっていない）

日比谷物語 ㊲

山岸弘明

日比谷松本楼

日比谷公園といえば大正期東京新名所のひとつとして、洋食文化をひらいた松本楼が忘れられない。開園の翌明治三十七年（一九〇四）音楽堂横と心字池横に和洋一店づつの喫茶店開店を認めるが、この公入札を勝ちとった一人が、銀座五丁目の日本料理店・松本楼の小坂梅吉であった。

小坂は明治六年生まれの泰明小第一期生。三十一年父駒吉の松本楼を継ぎ、やがて銀座・日比谷を代表する名士に。市議、区議長をへて昭和十三年衆議員に当選、貴族院の勅選も受ける。

初代松本楼は敷地面積が百五十坪で建坪七十一坪の洋風木造二階建。白いハイカラな建物が新しもの好きの東京っ子を沸かすことに。この松本楼の変遷もわが国の近代史を垣間みせる。初期は国政中心地となった日比谷帝国議事堂隣接レストランとして与野党議員や半政府運動集会所に。そして文明開花後すすんだ洋食文化が、この松本楼で集大成されたといっても過言ではない。

「（明治末期から大正期にかけて）新しい魅力となったのは公園の洋風喫茶と洋食であった。家族づれで行楽し、中央の喫茶店（松本楼）で白いテーブルクロスをかけ、盛花を飾った卓で香り高いコーヒーをのみ、ナイフ、フォークを使って洋食を味わう」（東京公園課長・井上清著『回想』）新しい流行が生まれた。

小山内薫、北原白秋、高村光太郎、市川左団次らのパンの会が開かれたのもこの松本楼。

「大都のまっただ中、バンドに耳を傾けながら飲みも話もいたしたく」案内状にある。大正十二年魚河岸の築地移転規約に反対する人たちが小坂経営の松本楼を囲み、同じ年関東大震災で焼けている。現在は三代目。

松本楼とともに落札した三橋亭は本店が三橋際にあって店名とした。初期の女性社会主義運動家として名高い西川文子も常連の一人。著書『平民社の女』に、三橋亭でおしることを食べる記述がある。昭和五年ごろまで。二年の電話番号簿では本店下谷塚原東太郎、日比谷店中村義雄となっている。日比谷パークセンターがその後身。明治三十八年には高柳亭と麒麟亭が誕生する。現在の日比谷パレス、南部亭であった。

初代・松本楼――ハイカラな白い洋風喫茶室兼レストランが明治末期から大正期の東京人の人気を呼んだ（『日比谷100』から）

日比谷物語 ㊳

山岸弘明

日比谷図書館

明治四十一年（一九〇八）日比谷図書館が竣工している。「一昨年基礎工事にとりかかり昨年七月二日はじめて建築工事に従事せし日比谷の市立図書館は、今やほぼ工を終えて市に引渡される手はずとなりおれり。館は中央および左右両翼の三部に分れ背面に書庫あり、書庫を除くの外は皆木造にしてさながら山字形をなせり。階上の閲覧室は広壮にして中央に二本のコリンス三葉式円柱あり六個の吊燈天井より垂れ――」（『東京朝日新聞』）。

敷地面積六百坪、建坪二百九坪。総工費十万二千円。設計三橋四郎。蔵書数約十万冊と記録されている。閲覧は有料で、特別四銭、普通三銭、児童一銭。開館初日の十一月二十二日には児童室が超満員となったほか、非常な盛況と各紙が伝えている。現在の都立日比谷図書館は昭和三十二年（一九五七）の十月の竣工である。

小音楽堂は明治三十八年八月の開堂。当時としてはハイカラな八角形の鉄骨銅板屋根のバンド・ステージを中心に、鋳鉄製の椅子を配したもので総工費五千円。開堂式には陸海軍々楽隊が出演して聴衆を魅了した。

「この後は陸海軍が交互に演奏し、日比谷奏楽は、一躍万都の人気を博し多くのファンがつめかけた。このため、最初は無料であったが、後には整理のため金五銭の料金をとり、木柵などを設備して混乱を防いだ。日比谷奏楽が西洋音楽普及に貢献したことは非常なもので一般からも高く評価された」（前島康彦著『日比谷公園』）。この音楽堂は関東大震災で崩壊、現在の小音楽堂は二代目。

日比谷公園にはこの小音楽堂のほか、大正十二年（一九二三）七月にオープンした大音楽堂がある。東京公園文庫『日比谷公園』から再び関係文を引用しよう。「公園西隅に接するもと貴族院から東の方にかけて一帯は、中欧森林原野風庭園として設計されたもので、明治三十九年、戦役用徴発馬多数を一時ここに繋留したことがあったが、この時折角の樹木が馬のために樹皮を食い荒され、その回復ができないまま荒廃の状態で放置されていた場所を整理する意味でできたのがこの大音楽堂であった」。

明治41年、開館直後の初代日比谷図書館

日比谷物語 ㊴

山岸 弘明

日比谷公園の建物

前項につづいて日比谷公園の大音楽堂を紹介しよう。「東京市がこの大音楽堂建設を計画するにあたっては小村欣一、長与又郎など音楽界・演劇界の権威者と綿密に案を練り、和洋音楽はもちろん、舞踊・野外劇・民衆娯楽・社会教育的各種催しのできる野外劇場式の音楽堂とすることに決まり、予算六万四千円をもって着工した。

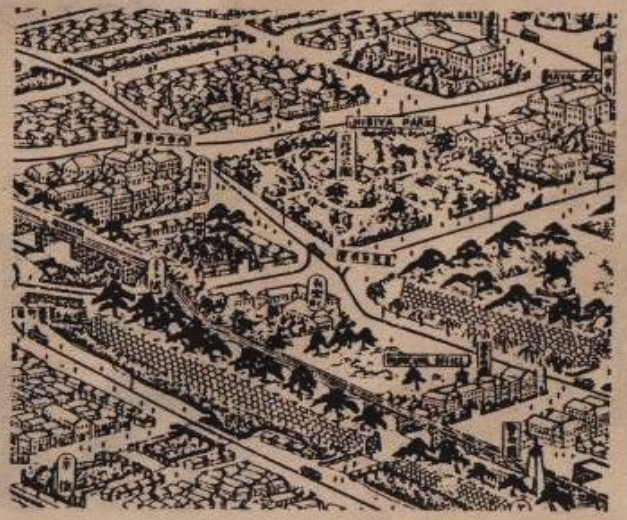
音楽堂の主屋は鉄骨板張りの小屋と楽屋からなり、ステージは五十三坪、聴衆席は三千二百、立席を加えればゆうに六千人が収容できる大施設で、その規模においても様式においても日本最初のものであり、当時はまだ美術館も公会堂も持たぬ東京において、完備した唯一の野外集会場として大評判となった」（『日比谷公園』）。

大正十二年（一九二三）七月開場式。その後、東宮御成婚奉祝市民音楽会、大正天皇銀婚式奉祝音楽会などの市民行事に開放されたほか、各種コンサート、舞踊や各種集会場として使用される。昭和二十九年（一九五四）十一月改修。現在は三代目。

有楽門を入った右側にバンガロー様式の古びた建造物が目につくが、これは明治四十二年に竣工した東京公園資料館である。当初の公園事務所で、日本最初のドイツ風バンガロー建築として知られる。設計福田重義。工費八千円。貴重な公園関係資料が三万八千点が陳列されている。

日比谷公園のレイアウトは明治三十六年のオープンから今日までほとんど変わっていない。大正九年、地裁寄りの和風庭園にテニスコート三面がつくられ、十一年、十三年と拡張されて五面となった。テニスコートに隣接する草地は開園直後、幼児遊園とかわり、大正時代には鹿などの動物飼育も。この児童遊園地も昭和四十五年に廃止される。このほか市政会館、日比谷公会堂、運動場の大改造など、昭和の変遷は改めて紹介することにしたい。

日比谷公園には史跡やエピソードが数多く知られている。六つの門にすえられた巨石もその一つ。日比谷門は旧赤坂御門と四谷御門の礎石で、幸門は幸橋御門、桜門には「鍛冶橋御門」および数寄屋橋御門旧礎をもって建造。明治三十五年六月」の文字が彫られている。このころ取りこわされた旧御門礎石をここに集めたのであった。



明治40年の日比谷図（明治末期から大正期にかけての日比谷は、公園と大神宮の町であった）

日比谷物語 ㊵

山岸 弘明

首かけイチョウ

一三四回から一三九回にかけて日比谷公園内の諸建物の変遷を紹介した。公園にまつわる史跡やエピソードも多いが、日比谷見付跡と本多博士の首かけイチョウは余りにも有名だ。

交差点に接した有楽門を入ると、すぐ左手にうっそうとした木立ちに囲まれた石垣が目につくが、このあたりが二六回で紹介した江戸時代の日比谷見付跡になる。寛永四年、広島城主の浅野長晟が濠と石垣を作り、六年に仙台城主の伊達政宗が冠木門を築いた。明治三十六年（一九〇三）日比谷公園建設にあたり、石垣と濠の一部を保存し、いまに及ぶ。明治四十七年ころまでこの見付跡に大カエデがあった。一説では日比谷御門創立当時のもので、樹齢三百五十年とも。

松本楼前の首かけイチョウは、江戸時代旧牧野藩邸前の道路敷にあった老大イチョウのことである。市区改正の結果。この老木も切り倒される運命にあった。見かねた公園設計者の本多静六博士が自らの首をかけて市参事会星亨に談判、移植費四百六十万円をかけて現在地に移した。

明治四十年一月、森鷗外は雑誌『心の花』に短編小説「有楽門」を発表する。「『日比谷公園有楽門。お乗替はありませんか』三田より来れる電車はとまりたり。所は日比谷公園近く、時は大祭日の夕なればこの停車場にもあらゆる階級、あらゆる年齢の男女二十人あまり押し合いて立てり。午後より晴れたりし空、ようやく雲におおわれて傾きかかる冬の日は近き際に繻に残れる空気の浅ねぎ色をもはや久しくは保つまじう思れる停車場に待てる群衆は先を争いて車にせまりぬ」。書き出しの一節だ。

四十一年七月の読売新聞に麴町署の取締り記事がある。「昨今、夜の日比谷公園はまったくの堕落男女の野合場と化し、毎夜少なくとも十組ぐらいを発見する由にて、風致上すておきがたしとて、毎夜十数名の密行巡査を派して厳重に取締りおれるが、昨夜は下宿屋主人田中源七と庸人小山たけ、学生宮本末五郎と官吏下女松本きん――」とくに実名を秘すとして、官吏某、銀行員、工学士令嬢、女事務員などが紹介されている。アベックの名所のはじまりでもあった。

明治40年の日比谷図（日比谷公園はこのころからアベックの名所になっている）

日比谷物語 ㊶

山岸弘明

三井集会所の誕生

市区改定は日比谷を経済の中心地として生まれ変わさせる。埋立て地には明治三十六年東京市街鉄道会社、東京電燈会社が入り、この一画に二十七年からは三井集会所があった。

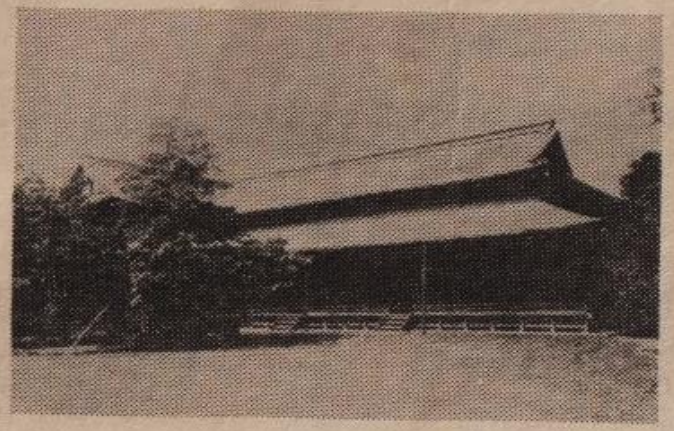
三井がこの土地を入手する経緯は第一〇九回で紹介した。明治二十年（一八八七）、乱脈経営で行きづまった神宮教院が、それまでの負債を弁償するため祠宇地を除く五、三三六坪の売却を決める。五年前、四千四百円で入手した六、九三六坪の約八割が四万円になったのだから、約十倍に急騰したことにも。

こうした教院経営に信徒らは売買無効の訴えを東京始審裁判所に提出している。「該地所、建物などしっかい神宮司庁より買取りここに神宮教院を設置せり、いまの教院これなり。その後該地所、建物買得などに関する負債弁償する能わざるよりやむを得ず該地所、建物を平沼八太郎へ抵当となし、なお転じて第百十九国立銀行へ抵当とし、金四万円を借受けたり――教師信徒らにおいて右地所建物に対しいささかも嘴を入るべき権利これなきものなり」（判決文から）。

平沼八太郎も第一〇九回で書いた。第百十九銀行は明治十一年十二月設立、十八年には第百四十九銀行を合併するが、二十八年七月、三菱合資会社に吸収される。この土地が三井組大元方の所有に帰すのは二十二年ごろのことであった。

二十七年には三井集会所本館が落成する。この年十月十九日の『国民新聞』には「昨十八日落成。旧幕時代の御殿向に模し旧大工頭柏木俊一郎が設計した。大広間二、舞踏室、演芸室、庭園あり。とくに庭園は大河内子爵自らの設計で国内珍奇の木石を集めた」と書いている。

洋館とも呼ばれた新館が完成するのも、このころであった。『三井不動産四十年史』をみると「当時三井の接客所であった有楽町三井集会所構内に、内匠寮技師の設計による洋式を加味した『宮殿式』和風平屋建ての新館を建築して、客室、食堂、球戯室および庭園に数寄をこらし、明治三十二年一月に竣工させた」と記録されるのである。



旧幕時代の大名邸を模した三井集会所
（明治三十一年には伊藤博文も迎えた）

日比谷物語 ㊶

山岸弘明

三井集会所

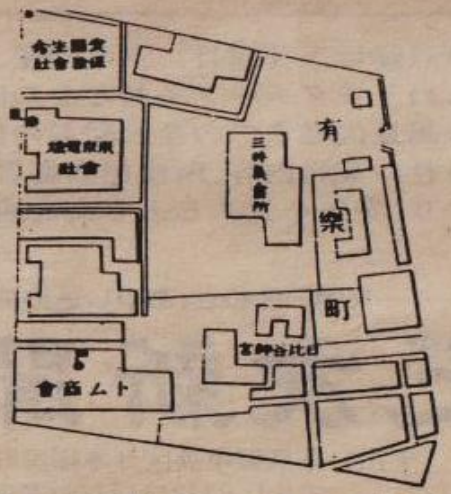
三井集会所新館の記録に、三井合名不動産課・大西儀八が書いた『関東大地震と不動産』がある。

「洋館と称する栂材を使用した木造入母屋造り天然スレートぶき平屋建があった。間取は車寄せ、玄関、広間、和室（八帖）、食堂二室、厨房、ほかに玉突場一室で（略）南側に幅六尺の廊下つき、その外にぬれ縁がつき、庭に降る階段が東向きに一つ、南向きに二つついていた」。現在の三信ビル正門とツインタワービル、そして東宝側道路敷の一画にあたる。設計・横河民輔。ほかに二階建かわらぶき土蔵、供待、馬車置場、倉庫などがあった。

同文書によると「北側に少々曲り、正門があった。この門は大きな黒塗りの切妻屋根をもつ立派な門でした。北側は公園側と同じ柵塀、東側は両面ナマコ板張り、高さ十八尺くらいの防大塀で南側は煉瓦塀であった」。四十三年一月の三井合名会社決算付属表にある財産目録には、有楽町三井集会所。二、三六四塀、六万七、二一二円と記録されている。

さて、カットに使用した大正十年（一九二一）丸の内地図や、明治四十三年陸地測量部地図などをみると、愛国生命寄りに、板塀にかこまれた逆L地形の建物が目につく。三番地七号のこの地盤は、三十六年の日比谷濠埋立てで産まれた三四五坪。大正元年十月、東京信託から三井合名が買いたした。明治三十年代には、この一画に三井善遊会が建設され、やがて三井物産所有に。

この三井善遊会の後身に、外車輸入商社・ヤナセの創草期があった。三井物産自動車係から独立した梁瀬長太郎が「輸入自動車の一手販売権ならびに輸入砿油類の一手販売権を三井物産より譲り受け、同時に日比谷公園前の約二百七十坪の店舗および工場設備を三井物産より拝借し、麴町三丁目三番地で営業をはじめた。ここには現在は三井銀行の日比谷本店がある。店頭の看板は金色で『三井物産株式会社砿油および自動車一手販売』と『梁瀬商会』の二枚であった」。大正四年五月、本店設置、翌六年一月本店を呉服橋に移転して日比谷分工場に。七年一月、社業の発展とともに「商会発祥の土地を三井物産に返還し、日比谷工場は有馬家より借用の千坪に移転」二代目社長・梁瀬次郎の書いた『わだち』の一文である。



大正10年の三井集会所周辺（「三井集会所」とあるが本館で、右斜め下が洋館、左上は本分にある３番地６・７号）

日比谷物語 ⑭

山岸 弘明

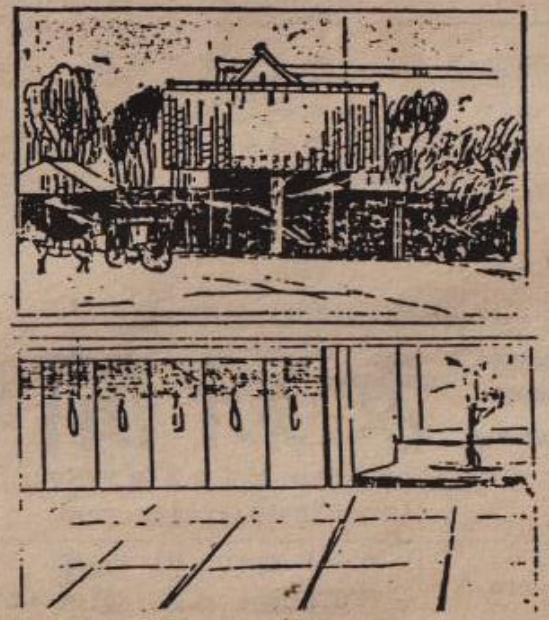
二六新報と集会所

第一四一回で三井集会所の本館が明治二十七年（一八九四）十月に竣工し、つづいて三十二年に新館を完成させたことを紹介した。

明治三十一年十月の『風俗画報』新撰東京名所図絵をみると「今を去る五年前に関する秘密会議を開かるるところなりという。各商店員一同を集め遊戯運動などをなすことあり。ゆえに同所内には玉突場、自転車、大弓など種々なる器具を設置する。この三井家の高名は稚童といえどもよく知るところなり。

このように三井集会所はグループのクラブとして使われる。三十一年一月六日の『報知新聞』によると、黒めがねの総理大臣・伊藤博文も得意のステッキをつきながら来所した。

三十一年四月『二六新報』の三井攻撃がはじまるが、その書き出しもまた三井集会所であった「麹町区有楽町にここに掲げるがごとき厳しき御門あり。これぞ世にも名高き三井集会所にして、三井一門がだればかることなく奢侈ぜい沢をきわめる表面の本陣なり。集会の定日は毎土曜日にして、つまり三井一門の倶楽部なるが、料理その他は新橋の花月楼これを承り、ほかにたぐいなき一席四円の御祝儀ゆえに我れも我れもと芸者連の争うて、これに赴く――」。



明治三十一年の集会所入口と内部。三井攻撃を始めた『二六新報』に掲載された。

――明治維新の際におよび政府御用為替方を命ぜられしより、新たに私立銀行の組織とし、同二十九年にいたり合名会社三井銀行と改めたるものにて、実にわが国私立銀行のこう矢とす。また同家に属する商店および工場は、三井物産、三井鉱山、三井呉服店、三井地所部、三井工業部などにして、これに関連する諸支店より来会するものなれば、この集会所においても春季運動会などはその雑踏云わずも明らけし」と紹介されている。

「周囲の椽は古風なる高欄をもって打繞らし、その間々に階段を設け御簾を巻上げたるよう、九重の雲もたなびくかと疑がれるるばかり――」とある。

二六新報の三井攻撃は六月二十九日中止の弁をもって終わる。「今日の富豪として三井の速かなる反省悔悟を多とし、この一点攻撃に用いし同じ筆を以ってあえて三井の雅量を歎称する所以なり」。

訂正　前回は第一四二回でした。

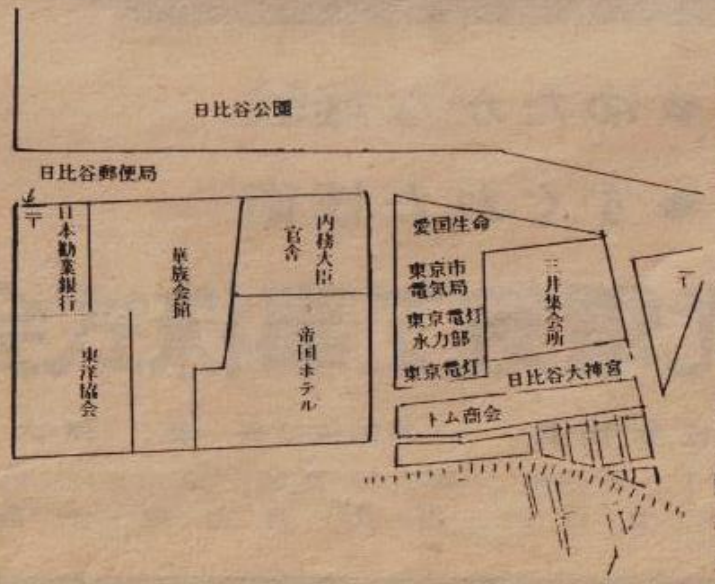
日比谷物語 ⑮

山岸 弘明

三井家憲の制定

明治三十三年（一九〇〇）三井集会所において、〝三井家憲〟が制定された。この年七月一日の『中外商業新報』には「かねてうわさありし三井家憲はいよいよ出来し、一月から実行せられたるをもって昨日は午前九時から有楽町三井集会所において家憲実施報告祭を施行せり。参集者は三井各家の主人夫妻および井上伯爵、渋沢男爵など。祖先の霊前に家憲を朗読して正午ごろ式を終わりたるよし。記ておこう。明治二十七年十月、三井組大元方から三井地所部へ。三十一年十一月、三井銀行にかわり、さらに四十二年十月三井合名へ。のち昭和十五年八月には三井物産、十六年七月三井不動産に引き継がれるのであった。

明治三十六年の日比谷地区濠埋立工事は新たな日比谷住民を迎えるが、その一つが、同じ年誕生した東京市街鉄道であった。明治五年、新橋―横浜間にわが国最初の蒸気機関車が走ったが、これは市内交通機関とはいえず、えらく高額であった。



大正六年の日比谷（有楽町三丁目に三井集会所と、愛国生命、市電気局、東京電灯などが記されている）

十五年六月、新橋から日本橋までレールの上を走る馬車鉄道が誕生して、路面電車時代の幕開けを迎えるが、その後も二十年間、馬が客車を引っぱるという、非効率的、非衛生的交通網が東京の足を牛耳ることになる。そして日比谷の埋立地に、東京市街鉄道会社が設立された三十六年、この馬車鉄道のレール上に東京電車鉄道会社がわが国最初の電車を走らせ、一足遅れて有楽町―神田橋間に、この市街鉄道が二番目の電車を開通させるのである。のちに交通会館のところにできた市交通局、都電の前身でもあった。

念のため東京市へ三万円、京都市へ二万円などを寄附」とある。この家憲は三井創業の主高利の長男・高平が享保七年（一七二二）に子孫に残した遺書を二百年ぶりにまとめ直したもので、三井グループ発展の礎ともなっていく。

三井集会所は関東大震災を免れるものの、昭和三年取壊しの運命に。「震災後の変遷は改めて紹介することにして、この間の、三井内の所有権の推移をまとめ

日比谷物語 ⑭⑥

山岸 弘明

東京電灯

明治後期から大正にかけての東京図をみると、宝塚劇場周辺に電灯会社の名前がある。東京電力の前身、関東配電のそのまた前身・東京電灯会社の本社ビルである。

わが国に電灯が灯ったのは明治十一年、電信中央局の開業祝賀会でイギリス人教師エルトンがアーク灯を試灯したのが初めて。その後、電灯実用化の機運が高まり、十五年、矢島作郎、蜂須賀茂韶らが発起人となって、この東京電灯社が発足した。

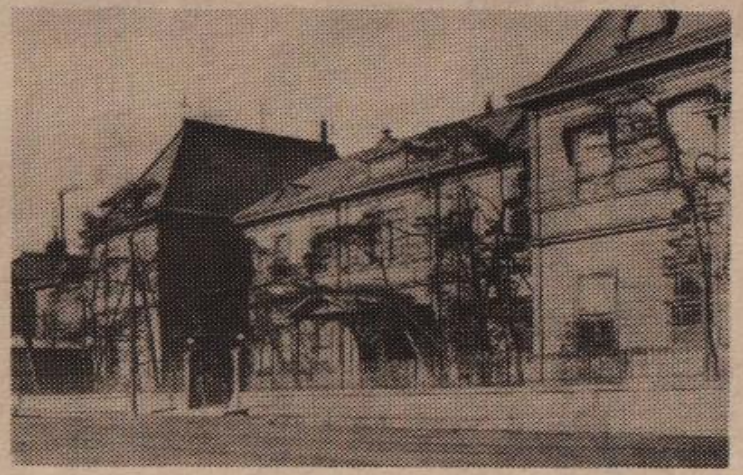
圧倒的な人気で迎えられた電灯だが、そのまま順調に受け入れられたわけではなかった。二十四年一月、竣工したばかりの日比谷帝国議事堂が焼失すると、漏電説が流れ、世間は電気を危険視する。このころ、せっかく取り付けた電灯を廃止するものも続出して、業界は苦難の道を歩くことになる。

しかし、電気関係者の地道な努力が報われる時がきた。三十五年、折りからの需要増に対処して発電所の増設を決め、同じ構内にあった本社の日比谷移転を決定する。この年十月、本社はいったん内山下町一丁目一番地に移り、翌三十六年十二月、新装になった宝塚劇場の新社屋に移転する。同社がこの地に在住するのは二十二年間。この間、業績は順調にのびるが、大正十二年（一九二三）九月に起った関東大震災で焼失し、職員百十七名を殉職させた。十年ころの丸の内地図などをみると、東宝会館が本社、宝塚会館が同水力部と記載されている。

十四年六月、東京電灯社は芝田村町に引越し、日本の電気事業はこの関東大震災を機に一大発展をとげるのであった。

この年十一月、銀座大倉組前でブラシュ電気商会がアメリカから持参した発電機で、二千燭光のアーク燈を実演展示し、石油ランプすら全国にゆきわたらない東京市民に猛烈なインパクトを与える。

同社が本格的な営業活動を開始するのは、二十年以降のことである。この年、浅草に本社兼発電所を竣工させて、発電を開始する。電灯業界の嚆矢でもあった。工場や官庁機関を中心に送電がはじまる。皎々たる電灯の輝きは、人々を魅了、契約件数も躍進の一途に——。



東京電灯会社本社（宝塚会館の地に二十二年間あったが、関東大震災で焼失した）

日比谷物語 ⑭⑤

山岸 弘明

東京市街鉄道

第一三九回で東京市街鉄道会社の誕生を紹介した。明治三十六年（一九〇三）九月の『中外商業新報』に有楽町↔神田橋間に開通した二番目の路面電車の記事がある。

「東京市街電車は昨十五日午前八時より開業したり。車体は東京電車と大差なきも、乗客が窓外に頭部などを出さぬように二条のポートを横にわたし、停車標識に見やすさ、乗降口の閉鎖簡便にして発車の際は呼子笛を吹き車体前後に神田橋行き、数寄橋行きの標識を掲ぐる。昨路面電車は三社時代を迎える。そして三十九年、これまでの三銭の運賃では、当初予定した利益が得られないとして、一挙に五銭への値上げを申請している。

反対する市民決起大会が九月五日、日比谷公園で開かれ、興奮した群衆は電車を破壊して気勢をあげる。この値上げ問題を契機に、三社は合併して東京鉄道会社となった。そして四十四年八月には、民間会社となった。そして四十四年八月には、民間鉄道国営化の波にのって東京市電気局に買収も。大正期の第一期電車黄金時代の幕開けでもあった。一、〇五四両、九八・八キロ。市買収時の車両数と走行距離の累計記録が残っている。

日比谷の東京市街鉄道会社といえば、夏目漱石の「坊ちゃん」が忘れられない。生一本で純真な坊ちゃんが、いなか中学の教師となるが、教師間の権謀に憤慨して教頭をなぐって帰京する。正義感と反骨精神がみなぎった主人公の再就職先こそこの街鉄だった。

市電に変わった四十四年、交通会館に市電気局が誕生する。そして跡地は大正八年ころ、隣接する東京電燈に吸収されるのであった。

東京市街鉄道の電車と日比谷交差点（明治三十九年のもの）

日比谷物語 ⑭⑦

山岸弘明

有楽町駅の開業

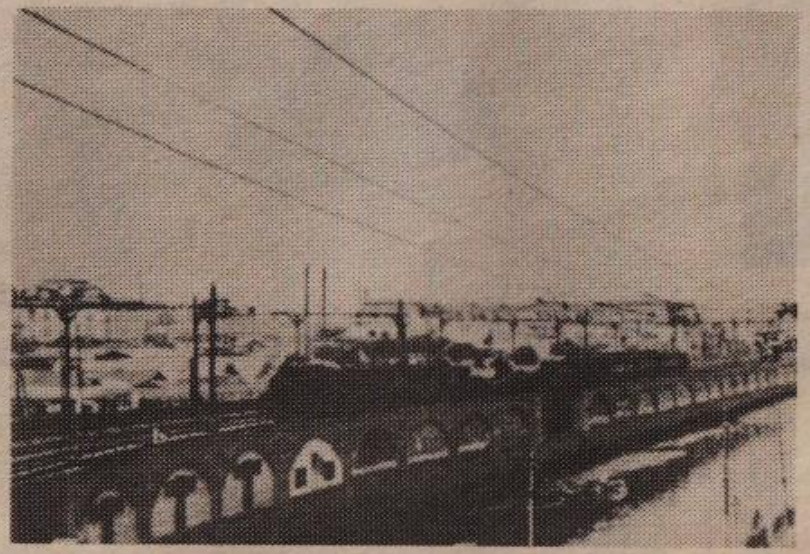
有楽町駅は明治四十三年（一九一〇）の開業である。わが国鉄道の誕生は、五年の品川―横浜間開通にさかのぼるが、山手線はこれに遅れること十三年、明治十八年赤羽―品川間に初の電気機関車を走らせたことにはじまる。その後こまざみに増設をくりかえした。

有楽町駅開業当時の山手線は上野、田端、池袋、新宿、品川、烏森（現新橋）間を走ったこれまでの路線を延長したもので、この年九月には、さらに呉服橋駅（東京駅の仮駅）までのび、大正三年（一九一四）十二月には東京駅が誕生する。

明治二十六年六月、おりから開催された第九回帝国議会で、山手線建設と浜松町―東京間の高架化が決定する。この工事は三十三年九月からはじまるが、当初は高架線の騒音や電動の被害、立退き反対など阻止運動が起きたり、技術面での難航や日清、日露戦争にともなう予算不足など、再三の工事中断もあって工期は十年にもおよぶ。

当時の工事の模様を後の有楽町駅長・橋川政人が『有楽町今昔』（有楽町今と昔から）で語っている。「有楽町を中心とした烏森―呉服橋間の工事を請負ったのは鹿島組だった。当時は人夫さんは大勢集めることができて労力には苦労しなかったという。町とびは大部分が神田とびで、長さんという有名な親分が芝にいて、レンガ積みはこの親分の指図によったというが、有楽町駅周辺の高架線工事は思いのほか難航であった。

それは東京あたりから有楽町にかけて、いまの皇居のおほりと同様にほりがのびてきており、高い石垣の堤防の上の老松があり、これを切り倒して石垣を取壊して掘り下げ、軟弱な地盤を固めなければならなかったからだ。当時の現場監督で鬼といわれた今村信雄氏の話によれば、地盤が軟弱だったために約十九メートルの松丸太を十五メートルの高いヤグラからヨイトマケで打込み、あとはまた明日などと息を抜くと、次の朝には打ち込んだはずの杭がすっかり抜け上ってしまう、ひどい泥湿地帯であったという。この難工事を克服して、明治四十三年六月十五日、有楽町駅は開業のはこびとなった」。



難工事のすえに完成した高架鉄道（山下橋周辺から帝国ホテルと有楽町を望む。手前の濠はコリドー街に変っている。

日比谷物語 ⑭⑧

山岸弘明

有楽町駅

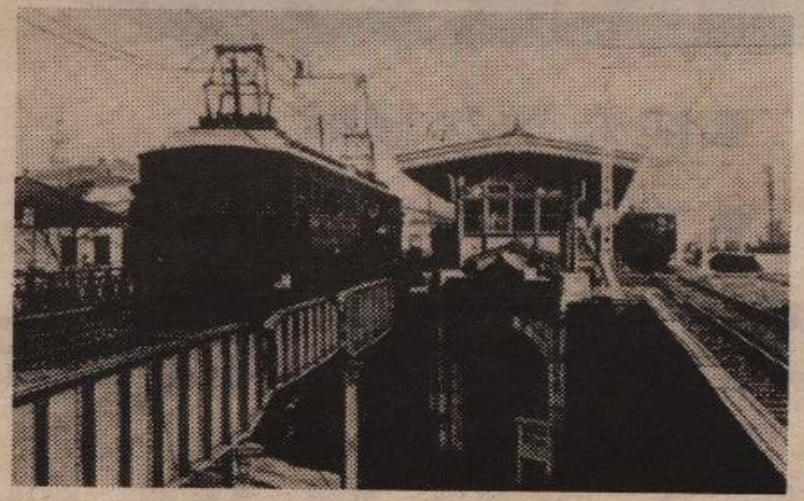
前回、有楽町駅が明治四十三年（一九一〇）六月に開業したことを紹介した。新橋から東京駅までの間に、当時難航の末に完成したアーチ型レンガがみられる。ドイツ人技師ヘルマン・ルムシュテルの設計で約十㍍のアーチ型ブリッジを連続させて、高架線にしたものだ。明治三、四十年代の東京図には、予定線として点線で結んだものが多い。帝国ホテル裏を抜け旧松平島原藩邸、旧南町奉行所跡、東京府庁をへて呉服橋駅につなぐ、新しい東京市街交通網の幕明けでもあった。

当時の有楽町駅は電気ビル前の日比谷口が一カ所。正面は車夫やエンタクたまり場になっていた。駅前の有楽町ビル付近には、木造の丸の内署や東京日々新聞社（毎日新聞社の前身）があり、報知新聞社、読売新聞社などが続々と誕生していた。

幅九㍍、長さ九十㍍のホームが一本、列車もポギー車一、二両といった編成。一日の乗降客は約千人であったという。初代駅長は永島松之助。以下、横手国太郎、岡田竹次郎、兵藤継太郎とつづいて、五代吉川忠一時代に関東大震災を。駅員は当初が九名、大正中期十五名、戦前昭和十五年八十四名。この乗降客数も一日一万二千人（大正中期）十三万人（昭和十五年）とふえる。東京市の中心地として、銀座の玄関駅として、着実にその業容をひろげるのであった。

大正十二年（一九二三）九月、関東地方を襲った大地震は各地に多くの被害をもたらすが、レンガを積みあげた有楽町駅と高架線はビクともしない。不幸にもホームと駅舎は日比谷一帯の火災で類焼し、この大震災を機に有楽町駅は大きく変わる。中央部分のアーチを使って駅中央部を横断する道路が生まれ、銀座口が開かれる。

「大正時代駅を利用した旅客の服装は、男も女もまだ洋服を着用している人はきわめて少なく、ほとんど和服で袴をつけていたが、若い女性の間では紫の袴が大流行であった」（『有楽町駅今昔』）。銀座口には有楽座があり、ここへ通う演劇ファンの利用が多かったという。



開業当時の有楽町駅。ルムシュテル設計のドイツ風高架駅で駅長以下９人で開業した（有楽町駅開業70周年記念入場券から）

日比谷物語 ⑭⑨

山岸 弘明

新劇の有楽座

日比谷がアミューズメントセンターとして脚光を浴びるのは、東宝が有楽町進出をはたした昭和はじめのことだが、明治末期には有楽座と帝劇が開場して、その基盤を築く。

江戸時代から引きつづいた明治中期の劇場は、歌舞伎界の興盛とともに独特の発展をとげていた。舞台には回り舞台や花道があり、客席は桟敷と枡席。主要席券は茶屋を通じて販売された。こうしたこれまでの劇場経営を改め、近代劇場の端緒を開いたのが、わが国初の洋風劇場として知られる、この有楽座であった。明治四十一年（一九〇八）十二月オープン、大正十二月（一九二三）九月関東大震災で焼失するまでの十五年間、朝日街、二、三列目の一画になる。

ドイツ風洋館木造三階建て。舞台がほぼ六間、客席はすべて椅子席とし、定員九百人。総工費十数万円。「高尚な娯楽を供するを目的とし、諸演芸の向上発展に資す」（趣旨書）。有楽座株式会社は旧郡山藩主柳沢保恵伯爵を会長に永松篤巽、千葉松兵衛らの手で発足する。

有楽座は四十四年開場の帝国劇場、大正末期の築地小劇場とともに新劇活躍の場として演劇史上大きな足跡を残す。日比谷が新劇発祥の地とされるのは、支配人新免弥継の進撃理解によるところが大きいという。

四十二年十二月には小山内薫の自由劇場旗揚げ公演が開演された。自由劇場はわが国の演劇革新運動として高い評価を受ける。歌舞伎界の既製スターを再訓練して西洋近代劇を上演しようとした自由劇場は、歌舞伎にあきたらない新しい演劇ファンを集め、一大センセーションを巻きおこす。その全盛期を有楽座とともに歩むのである。

坪内逍遙の文芸座初公演は四十五年五月であった。島村抱月訳の「故郷」で、松井須磨子が一躍スターダムにのしあがるが、一方では二人の不倫の恋愛が表面化して〝明治フォーカス〟をにぎわす。このほか、井上正夫の新時代劇協会、小花菱の土曜劇場などがこの有楽座で旗上げ公演、明治・大正演劇史を彩った。大正九年九月、帝国劇場の翼下に入った。

明治41年に会場、新劇発祥の地といわれた有楽座

日比谷物語 ⑮⓪

山岸 弘明

初代帝国劇場

第一四三回で日本最初の洋風小劇場・有楽座を紹介したが、わが国の明治演劇史を飾った日比谷帝国劇場を忘れることができない。明治・大正期にかけ、東京新名所の一つとして「きょうは三越、あるは帝劇」とうたわれるのである。

明治三十九年（一九〇六）十月、福沢家の後援で、日本最初の本格的洋風大劇場建設をめざす発起人総会が開催されるが、ここには、明治の経済界を代表する渋沢栄一、西野恵之助、大倉喜八郎、福沢桃介らの姿が。劇場は初の財界人による劇場進出でもあった。

工事は翌四十年五月着工。敷地面積は二千三百十四坪。ここは三菱合資会社の所有地で、そのころ三菱ケ原といわれ、近くに近衛連隊の調馬場などもあった一帯の最南端であった」（『東宝・帝劇の五十年』から）

ルネッサンス風フランス式建築。洋風木造五階建て（地下含む）建坪六百四十五坪、外部は全部白レンガで表面をくるみ、白亜の殿堂とも。屋上には後にこの帝劇の象徴ともなった翁の立像を立て、内部は大理石の円柱、色とりどりの絵画、彫刻、刺繍が壁面をかざる。定員一千七百人。全席を椅子席とし、その豪華さは明治東京人の目を奪った。

四十四年三月、コケラ落しの初興業が華々しく開幕される。「帝劇のコケラ落し興業は、有力な幹部俳優の移籍や女優養成所の設立等々の話題で世上を夙ににぎわしていたことでもあり、初日があくと観客は待ちかまえたように詰めかけた。連日大入り満員で一の空席ものこさず四月三日の千秋楽を迎えた」（『東宝・帝劇の五十年』）。

帝劇では、尾上梅幸を座頭に松本幸四郎、宗十郎、宗之助を中心とした専属劇団を結成、歌舞伎座と帝都の歌舞伎ファンを二分する。四十五年には文芸協会のハムレットが上演され、大正三年の復活では松井須磨子が「カチューシャかわいや」を歌って満都をまかせた。

明治・大正期の帝劇は歌舞伎に、新劇に、女優劇に、そして外国人芸能人の招聘に、新しい演劇史の一ページをひらくのであった。

初代帝国劇場（経営は渋沢栄一らの財界有力者があたり、後に福沢桃介が会長に就任する）

日比谷物語 ⑮②

山岸弘明

山かん横丁

明治後期から大正期にかけて、日比谷パークビルの一部は〝山かん横丁〟と呼ばれていた。体制への不満や不景気を嘆きながら、ひと山あてようという人たちが集まったことから、この名がついた。二階建てのしもたやが二十くらい軒を並べたこの路地に、早稲田大学を除籍された青成瓢吉が出入りした。尾崎士郎の半自叙伝〝人生劇場〟愛欲編の舞台でもあった。

「山かん横丁という呼び名には嘲罵をふくんだ感情の底にもねっとりとくる親しさがにじんでいるではないか。それは〝山かん〟という言葉が身についた悪らつさを感じさせるよりも、むしろ底意のないほら吹きのたよりない希望にみちあふれた姿を象徴しているためであるからだともいえる。そんな名前はいま、東京の町をさがしたら無数にころがっているであろうが、しかしこの頃の(大正十年前後)丸の内の一角にどっしりとあぐらをかいた〝山かん横丁〟の存在は、たしかに天下の偉観であった。

大正十二年の震災で、このはきだめのような路地はひと押しにつぶされてしまったが、それから間もなく地区の改正が行われて〝山かん〟の梁山伯を偲ばしめたこの愛すべき路地は復興の機運にも恵まれることなく、根こそぎにとり払われたのである。それがため浮世を煙に巻いた豪傑たちも、どこかのインチキビルディングの安ホテルにちりぢりに消えていったらしい。今はあとかたもなくなっているが、住昔の〝山かん横丁〟は日比谷の交差点を電車線路にそって数寄屋橋の方向へ二、三町あるき、そこから左にまがった一郭を占めていたのである。

大正七年の日比谷図(山かん横丁は、日比谷交差点近くの現パークビルの一画にあった)

愛欲編巻頭の一節である。つづいて山かん横丁住民の詳しい描写がつづく。

「その曲り角にある三階建ての木造建築屋根には『大日本実業団総本部』という赤地に白く染めぬいた円錐形の広告塔が秋晴れの空に高く、丸の内一帯をへいげいしているのであった。その頃団長の武倉達也は当代の河内山宗俊と呼ばれて、彼の一にらみは一金千両なりとうわさされたのもまんざらうそではない。彼はそのころ不手際なゆすりたかりがたたって市ケ谷刑務所につながれていたが、しかしそれがためにこの広告塔はひとしお無気味な輝きを帯びて〝山かん横丁〟に君臨していたのである」。

日比谷物語 ⑮③

山岸弘明

人生劇場愛欲編

前項につづいて、尾崎士郎の『人生劇場・愛欲編』から〝山かん横丁〟住民を紹介しよう。

「さて、その横丁の道が行きどまりとなったところから小路が二つにわかれ、西側には古い二階建の長屋がゴタゴタと軒をならべている。空気は妙にうす暗く、しめっぽく、表どおりの明るさとの対照がいちじるしいだけに、何気ない気持でこの小路に入ってきた人たちは軒をうずめている看板のいかめしさにまず目をみはらぬわけにはゆくまい。路地の印象は一見すると、どこかうすぎたない淫売窟特有の感じに似ているが、この看板の行列をみあげると、何ということもなしにいらだたしくせき立てられるような気持ちになる。入ってみれば路地全体の空気が捨て鉢になって、肩をそびやかしているという感じでもあるが、それもおそらくは看板にうかんでいる極端に誇張された文字のせいであろう。

試みに軒なみの看板を順々に読みあげてみようか。『大帝国実業協会』『日本政治研究会本部』『日本珍図案工芸社』『新世界連盟創立事務所』『法律相談なんでもこい』『日支医学協会』『夢の日本社』『東洋義血団』『万有倶楽部』『全国職業案内所第三支部』『国民風俗改良会』『大日本航空青年連盟』『日本移動プロダクション女優養成所』等、等、等——。このいかめしく、もっともらしい看板の陰からさんまを焼くにおいがしめやかに流れ、赤ん坊の泣き声が聞こえてくるのである」。

人生劇場愛欲編では、青成瓢吉(実は尾崎士郎)がかよった〝山かん横丁〟新日本民主同盟を通じて大正末期の有楽町を実に活き活きと描き出す。尾崎が文壇登場のチャンスを摑むのもこのころ。次項で紹介する売文社の解体後、そこで知りあった高畠素之宅で食客生活を送っていた尾崎が、時事新報の懸賞に二位入選をはたしたことがきっかけに。やがて一位の作家・宇野千代との不倫の恋がジャーナリズムをにぎわす。

第一二二回で、非戦論を展開した『平民新聞』を書いた。社会主義運動は、明治後期、冬の時代を迎えるが、やがてこの山かん横丁に集まり、大正デモクラシーのうねりの中で新たな活動を展開する。

大正十一年開店時の山水楼の室内(当時、中国料理店は東京にまだ数軒しかなかった)『山水楼五十年小誌』から

日比谷物語 ㉓

山岸 弘明

売文社と山水楼

明治四十三年、赤旗事件での刑期を終えて出獄した堺利彦は、四谷によらず代筆業・売文社を開業、大正はじめこの山かん横丁に引越してきた。ここは大杉栄、荒畑寒村、山川均ら社会主義運動の絶好のたまり場となるが、大正九年二月、はげしい内部あつれきをへて十年間の歴史に終止符をうつ。「売文社がなければ社会主義の火種は弾圧の嵐で消えたろう」と『有楽町有情』で木下順二が語っている。

山かん横丁の社会主義運動家欠席だったのは、日比谷署の警部補ら四、五人で、忌諱に触れることがあればすぐ中止、解散という。大杉がタモトを分かってからは山川均の労働組合研究会を月二度開きました。出席する顔ぶれは変わりませんでしたね」（荒畑寒村翁）。（『有楽町有情』）

日比谷・山水楼も大正十一年この山かん横丁で創業している。「開店の場所は当時の麹町区有楽町、国電有楽町駅南口から皇居お濠端へ向って約百メートルくらい。通称山かん横丁といって、その昔ひと旗組の山カン連が巣食ったという場所で現在日比谷パークビルとなっている一角に三階建木造長屋があり、その端ここの六十坪を借受けて開業したのでした」（『山水楼五十年小史』）。山水楼は戦前、戦後の項で詳しく紹介する。

「店の入口右の庇がけの印判屋があり、調理場の裏路地からは岩波書店の印刷所の機械の音が騒々しく聞こえました」（同）。岩波書店社史によれば、直営の野村印刷（大正二年設立）といった。大正十二年九月の関東大震災で南神保町の店舗、事務所、有楽町の印刷所、今川小路の営業所、倉庫を焼失。損害約八十万円であったという。

浮世顧問・売文社（大正期、社会主義者の唯一の拠点となった。すわっているのが堺）『写真集・日本社会党』から

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

といえば、服部浜次洋裁店が忘れられない。服部氏は腕がよく、日露戦争で軍服の注文が殺到、その資金で東京へ出、有楽町・山かん横丁に洋服店を開いた。「その三階で、大杉栄と私がサンジカリズムの研究会を開きました。明治末のころです。月二回夕方から夜にかけてです。出席者は多いときで二十人、少ないときは四、五人。みな市電や新聞の印刷工、友愛会所属組合などの労組員です。とにかく無

日比谷物語 ㉔

山岸 弘明

日比谷警視庁

一五二〜一五四回にかけて、日比谷パークビルの一角に明治後期から大正期にあった〝山かん横丁〟を紹介した。同じ時期、この山かん横丁の隣り、第一生命の一画に赤レンガ三階建の警視庁がそびえていた。

警視庁は明治七年（一八七五）一月、当時の官庁街といわれた鍛冶橋、旧津山藩邸で開かれたのがはじめて。現在の東京駅線路敷内になる。首都東京市の警察本部という特殊性から警視庁と名付けられ、初代長には川路利良大警視が就任する。わが国近代警察の幕明けでもあった。

当初の警視庁は首都警保のほか、国事犯に対する権限が加えられたので、西南戦争、萩、神風連事件の鎮圧や警戒警備も。しかし、わずか三年後の十年一月、物情騒然たる当時の国内情勢を受けて一転廃止の運命が待っていた。

十四年一月再設置。翌十五年十二月には旧津山藩邸を建直した新庁舎の完成も。組織、機構、庁舎を一新した新生警視庁が誕生する。

この警視庁が日比谷第一生命に転じるのは明治四十四年三月のことであった。この日、赤レンガで包まれた新庁舎が竣工、大正十二年（一九二三）九月までの十三年間、ここに在住することになる。敷地面積三千三百坪、建築面積七百三十坪三階建て。総工費四十八万円と記録されている。

朝日新聞社がまとめた『有楽町有情』に常盤ビル・宮沢三郎の思い出がのっている。「赤レンガでねェ。お堀に面して堂々とした建物だった。当時珍しい自動車がしきりに出入りして騎馬巡査というのがいました。裏庭には馬小屋があって周りの道路は馬フンのにおいがしましたよ。警視総監の官舎がすぐ裏手でね。総監も毎朝のように馬で日比谷公園あたりを散歩するんだ。そのころのポリスは大抵、口ひげなんか生やしてね。おっかなかった。長いサーベルをガチャつかせて歩くんで、メンコをやっても『ガチャガチャがきた』って、ばらばらと逃げだしたもんです。学校の帽子を上背の腹にかくしましてね」。

明治44年竣工の日比谷警視庁（赤レンガが隣りの白い帝劇と対比して東京名物とされた）『警視庁の百年』から

日比谷物語 ⑮⑥

山岸弘明

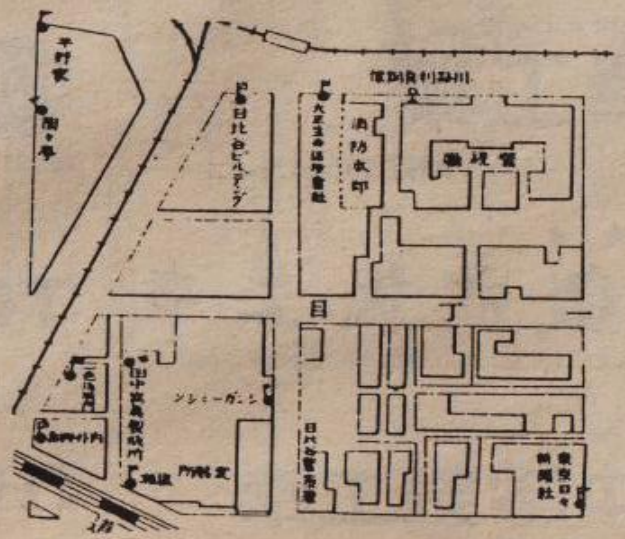
日比谷署と官舎

前回、日比谷警視庁を紹介したが、隣接する新有楽町ビルの一画に警視総監官舎があり、有楽町ビルには職員官舎があった。本庁と同じ明治四十四年(一九一九)の建設で、大正十二年(一九二三)関東大震災で焼失。再建。昭和はじめまで。

昭和二年東京電話番号には有楽町一丁目二番地のこの地に、総監、警務部長、保安部長、消防部長、官房特別高等課長、外事課長、日比谷署長官舎が記載されている。ズラリと高官官舎が並んだのである。

関東大震災を境にこの地を去る。それはまた、新しい日比谷の誕生を迎える基盤ともなっていく。

警視庁といえば、丸の内警察署の前身・日比谷署も忘れられない。明治四十二年三月、現在の隆和ビルあたりに二十坪ほどの木造二階建瓦ぶきを構え、麴町署日比谷分署としてスタート。四十三年八月、有楽町駅日比谷口の有楽町ビルのところに移転した。丸の内署の『首都中心の治安を担う』によれば「十二月、警視庁官制の改正により日比谷警察署に昇格し、ここに現在の丸の内署の礎が定められたのである。この庁舎の敷地二三一平方㍍、木造二階建であった」。



警視庁の位置を示す地図(大震災の前)

関東大震災では付近一帯が焦土と化すが、署は類焼をまぬがれた。「しかし、日比谷堀端にあった警視庁の建物が焼失したことからその跡地の一部に署をたてることになり、昭和五年十一月、地上四階、地下一階の鉄筋コンクリート建て一、五六五平方㍍の庁舎が完成した」(同)。現在の庁舎は昭和四十九年九月竣工、四代目である。

日比谷物語 ⑮⑥

山岸弘明

日比谷消防本部

明治末期から大正期にかけての日比谷に、東京消防庁の前身・消防本部があった。現在の第一生命ビルの一画で、正式には東京警視庁消防本部といった。

近代消防の幕開けは明治二年(一八六九)江戸時代の町火消しが東京府に配偶され、翌三年の消防局設置で消防組と改称されたことからはじまる。七年には警視庁が生まれ、十四年に再設置されたとき消防本部が特設され、二十七年に消防組規則が公布されて法的な位置づけがなされたという。日比谷時代の消防本部も警視庁の一部門として、東京全市の消防行政を担当したのであった。

東京消防庁の『東京の消防百年の歩み』に消防本部庁舎改築のいきさつが紹介されている。

「明治後期になると、十五年に鍛冶橋内に新築された警視庁々舎は、木造で二十余年の歳月が経ったため老巧化するとともに、警察事務の拡張により事務室が狭隘となり、改築の必要に迫られていた。このような時にたまたま、東京中央停車場(東京駅)の建築が計画され、警視庁の敷地が、東京駅の建築敷地内に包含されることとなったため、日比谷濠に敷地を移して新庁舎を建築することとなった。

工事は四カ年計画で、明治三十九年八月に着工し、同四十四年三月に竣工して同四月十六日、鍛冶橋内から新庁舎に移転した」。

新本新庁舎は洋風を模造した木造二階建て。警視庁本庁舎とともに、そのモダンな建物が日比谷街の名物となっていく。消防本部は大正十二年(一九二三)までの十三年間ここに在住するが、この間、学習院女学部、明治大学、救世軍植民大学館、深川大火、神田錦町大火、浅草田町大火、中央郵便局・帝国ホテル火災の消化活動を。消防学校の創設、一一九番の前身にあたる専用電話設置、消防ポンプ車の採用など徐々に消火態勢を確立していく。十七代本部長・室田景辰、十八代部長(大正二年から消防本部と改称)緒方惟一郎、十九代部長・高野多吉時代のことであった。

関東大震災では都内各地の消化活動にあたるが、正に焼石に水。部員の帰るべき庁舎も灰燼と化していた。この大災害を機に設備、組織を見直す近代化へ、一段と歩みを早める警視庁消防部であった。

大正時代の日比谷消防本部—当時最新鋭の消防車が並んでいる(『消防百年の歩み』から)

日比谷物語 ⑮⑧

山岸 弘明

明治四十五年図

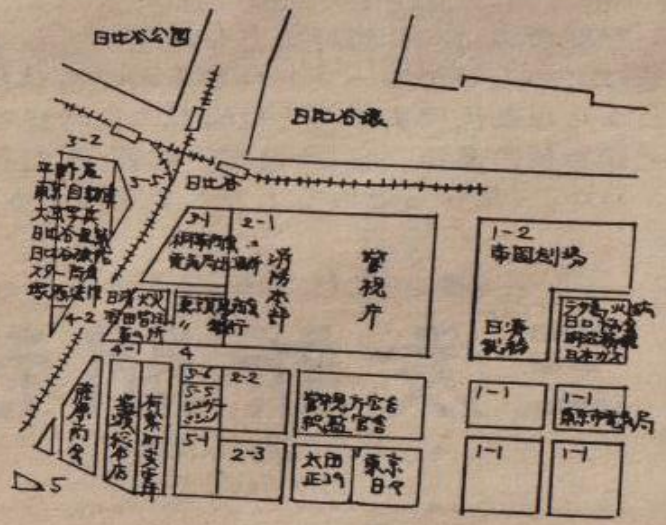
明治中期のビジネスマンは手代、番頭などと呼ばれて羽織、袴、前垂れ掛けが主流、江戸以来の商家の伝統を受けついでいたという。明治後期には月給取り、勤め人などと呼び直されて、洋服も増えたとはいえ、弁当をぶらさげて電車で通勤する姿に、洋服細民や腰弁とさきやかれもした。

しかし、三菱村の一丁ロンドンの誕生は、東京におけるビジネスセンターの嚆矢となったばかりか、こうした社会風潮をも見直しさせることになる。

さて、明治四十五年（一九一二＝大正元年）図の有楽町一丁目一番地は、この一丁ロンドンの南端にあたる一画。一二、六一〇坪、地価十三万三千円となっている。これまで紹介した帝国劇場のほか、東京商業会議所、日清生命保険、日本郵船などの名前がある。

一番地は、その後の町名変更で丸の内に組込まれるので、現在の有楽町は二番地からになる。警視庁、消防本部、警視庁官舎、太田政弘邸などがあり、一部は152～154回で紹介した山かん横丁に変わっていく。

現在、電気ビルになっている一画は当時の五番地で、一・三号の五六一坪が青木友子、四号の九六〇坪が桜井小太郎、四・五号九三〇坪が清棲家教所有地。有楽町変電所、塩瀬総本店、藤原商店の名前がある。桜井は明治三年生まれで旧金沢藩士・桜井梅室の嫡孫。海軍技士、三菱地所技師長をへた後の日本建築士学会理事長である。清棲は日本倶楽部で紹介し、変電所以下は改めて登場することになる。



明治45年の有楽町１丁目地籍図写し（１番地の一部を省略）所有者は内務省用地二、四三一坪。ほかにもう一筆、三菱合名所有地四八八坪があって、後に東京日々新聞になる。現在の丸の内署、大正生命、ニッポン放送、そして有楽町ビル、新有楽町ビルの一画である。太田は明治二年生まれの警察、行政畑高官。後の貴族員議員である。

三、四番地三、〇〇九坪は旧中山大納言邸跡。市区改正で二分され、パークビル側が桐華生命、電気局出張所と東京貿易商会、日清火災、羽田智証事務所。この一画は日比谷ビルとなり、

日比谷物語 ⑮⑨

山岸 弘明

地籍地図台帳

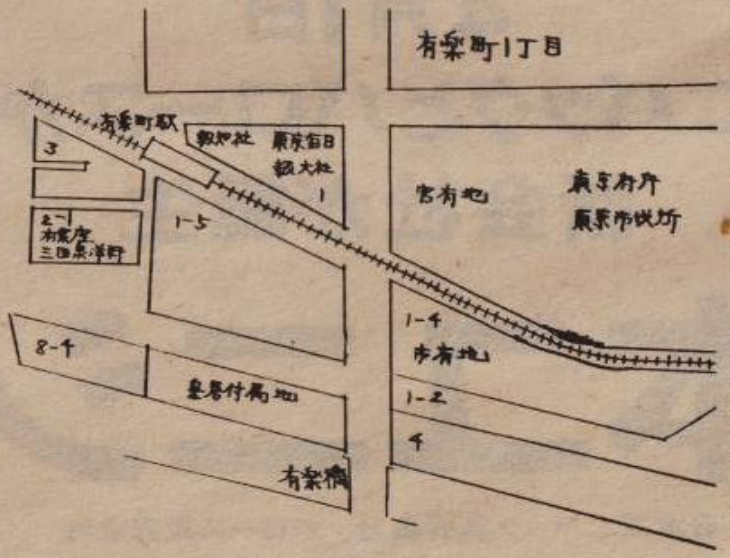
前回につづいて明治四十五年（一九一三＝大正元年）の有楽町二丁目を紹介する。現在の都庁、交通会館、そごう、そして朝日街、中央通り商店街の一画であった。

新宿移転をすすめる都庁は明治二十七年、新庁舎建設以来有楽町にいつづける。地籍地図台帳では東京府庁、東京市役所、官有地、市有地。八番地四号の開場した有楽座と併設レストラン三田東洋軒の名があり、この一画には第一二一回～一二四回で紹介した棟割長屋がつづいていた。渡辺保全は東京への高額納税者として知られた渡辺治右衛門が社長。三十三年資料では個人国税一、一八四円。この年開催された第一回貴族院多額納税者議員選挙で一位当選した。

そしてそごうの一画には報知社、東京毎日、報文社があった。報知社は明治三十九年この地三四七坪も市有地で、旧土手敷外濠石垣跡。大正十三年に電気研究所が誕生、後に公害研究所に変わったところである。

この市有地つづきの土手敷・皇居付属地と一番地一、一二一坪の三菱合資所有地は、市電、後の都電本拠となっていく。明治三十八年東京市街鉄道がこの一画を車庫と、その引込み線用地として借地し、四十四年東京市が買収して市電気局車庫となった。大正七年本庁舎が竣工、文字通りの市電本拠としての使命をになう。現在の交通会館はその後身である。

朝日街と中央通り商店街の二、三番地一、二三一坪は地価五万円で渡辺保全会社の所有地になっている。明治四十一年に



明治45年（大正元年）の有楽町２丁目の地籍図写し。都庁とそごう、朝日街以外は空地になっている。

で、東京日々（毎日）は四十四年有楽町ビルに進出、報文社は四十二年から大正九年火災焼失まで。

明治三十六年から四十年にかけて行なわれた日比谷の地区改正工事はこの一画を一新する。数寄屋橋周辺は旧御門撤去後、荒地のように放置されるが、このとき外濠石垣が撤去され、日比谷交差点から銀座方向にかけて直線に晴海通りが完成する。数寄屋橋も旧幕時代のものを一新して木製の大橋がかかった。後に〝君の名は〟で名をはせたコンクリート橋は、昭和三年にかけかえられたこの橋の後身であった。明治四十五年図は市区改正直後の日比谷を詳しく物語っている。

日比谷物語 ⑯1

山岸弘明

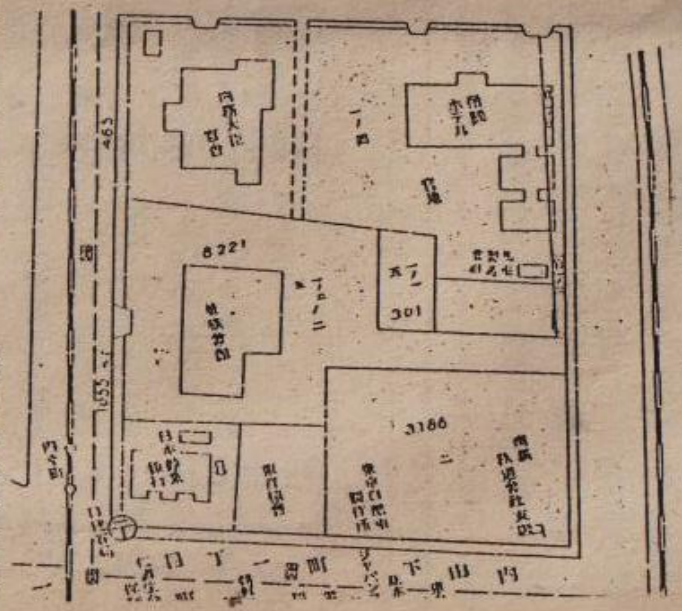
東洋協会と満鉄

明治四十五年（一九一二＝大正元年）市区調査会が発行した『地籍地図・地籍台帳』で内山下町、現在の帝国ホテル、NTT日比谷、第一勧銀の一画をみよう。

内山下町の地籍所有者は華族会館と南満州鉄道の二社。第一二〇回で紹介した華族会館は一番地一、二、五号、五番地二号を所有し、あわせて八千八百坪、地価十五万三千円。南満州鉄道は南東角の三千二百坪、地価五万五千円を所有し、華族会館敷地には帝国ホテル、内務大臣官舎、東洋協会、馬車製造会社があり、南満敷地には同社支店と東京自動車製作所が記載されている。

東洋協会は明治三十一年四月に設立された台湾協会の後身になる。台湾在留者と国内有志との交歓機関で、初代会頭が桂太郎、以下名誉会員として山県有明、伊藤博文、西郷従道、松方正義、大隈重信、坂垣退助、乃木希典ら明治の元勲、偉人がズラリと名前つらねる。

設立当初は新宿に仮事務所をおくが、同じ年、新館が落成した華族会館に移っている。上野から移設した旧会館仮事務所がこれ。敷地面積八百坪、総建坪二百余坪。「かわらぶきで清閑にして結構。美しさをきわむ」と当時の書物が伝えている。台湾協会は明治四十年東洋協会とかわり、昭和はじめ東拓ビルを竣工する。後の第一大蔵ビルで、昭和四十七年（一九七二）第一勧業銀行本店ビルの完成で吸収される運命に。



明治四十五年の内山下町一丁目（鹿鳴館から変った華族会館、内務大臣官舎、帝国ホテルなどが並んでいる）

南満州鉄道（満鉄）は、明治三十九年、政府の半額出資で設立された国策会社。日露戦争以後、日本の満州（現中国の東北）経営をになうことに。鉄道を中心に炭鉱、鉄鋼、重工業、商業などあらゆる部門に拡大し、満州国成立後は全満の鉄道を一手に握っている。「その権勢、あたかも独立国のごとし」と当時の書物が伝えている。昭和二十年（一九四八）八月の終戦は、満鉄終焉のときでもあった。莫大な金資産は新生・中国に没収されたのである。

内山下町のこの地に満鉄が支店を構えたのは明治三十九年から大正はじめ、その後、東洋協会の一部に。東京電力本店（新橋ビル）の前進でもあった。

日比谷物語 ⑯2

山岸弘明

自動車と馬車製造

第一五六回で紹介した明治四十五年（一九一二＝大正元年）の『地籍地図台帳』に東京自動車製造会社と馬車製造会社があって、その新旧二社の対比が興味をそそらせる。今項はこの二社と第一五五回にでてきたビリヤードの三社。

日比谷・東京自動車製造会社は明治四十年、わが国最初の国産ガソリン機関乗用車タクリー号製作で知られたのは三十二年のことで、当初はその需要のすべてを輸入に頼っていた。

この間、東京自動製造らの国産化への努力がくりかえされて第一号車の誕生も。しかし、実用化への夢は遠かった。わが国で本格的生産体制が確立されるのは、昭和はじめ国の援助を受けた運用トラックまで持たされる。帝国ホテルの一隅に同社が在住するのは明治三十年代後半から大正はじめ。ガソリ国産車第一号の完成もみたものの、その経営は茨の道を歩んだのであった。

一方の馬車製造会社はほぼ軒を接した東京電力ビルの一角。わが国馬車の歴史は古く、幕末末期、外国公館が東京↔横浜間に開設した異人馬車がはじめてだという。その後、これをまねた乗合馬車が試作され、明治五年新橋↔浅草間を営業運転。十五年にはレールに乗せた客車を馬車が引っぱる馬車鉄道の開発も。一方、皇室や華族、高官らによる個人馬車も盛んで、車大工技術の向上とともに馬車全盛時代を迎える。

しかし、市街鉄道が発達する明治後期には次第に都心から影をひそめ、交通網の発達していない地方都市へと舞台を移していくことになる。この馬車製造会社の詳細は伝わっていないが、社名や会社組織になっていること、都心部にあることなど、当時の代表的馬車会社を窺わせる。

有楽町三丁目で紹介した球戯場は、いまのコトブキビルにあった。球戯はビリヤード、草創期のビリヤード場である。ビリヤードが日本に普及しはじめるのは鹿鳴館時代というから、そろそろ一部上流社会でプレイが楽しまれはじめたころ。やがて、大正時代にすすんで大衆競技として発展する。山田浩らの世界的プレーヤーを出現させるのである。

明治四十二年の日比谷図（この図にも自動車と馬車製造らしい建物がみえるが、社名記載はない）

日比谷物語 ⑯③

山岸弘明

ミシン洋裁学院

明治末期から大正期にかけての日比谷を代表する街に、電気ビルと日比谷パークビル、朝日生命ビルの一画があった。明治四十五年（一九一二＝大正元年）『地籍地図台帳』の電気ビルにはシンガーミシン裁縫学院、藤原商店、塩瀬総本店があった。このほかこの街ならではの明治大正史を秘めた会社や商店を順を追って紹介する。

シンガーミシン裁縫学院は、わが国最初の本格的ミシン専門学校である。明治四十年の『東京案内』（東京市発行）をみると、三十七年七月、神田神保町で開校、同じ年十二月に有楽町三丁目のニュートーキョー周辺に転じ、さらに三十九年、電気ビル北中央に移った。その後、昭和二十年（一九四五）までの四十一年間日比谷に在住する。

ミシンは一七九〇年イギリスの発明だが、当初は実用にほど遠かったという。一八五一年アメリカのシンガー社が独創的改良を加えて、今日の机上型ミシンを開発。明治中期からわが国にも輸入されだした。その後、大正時代まで外国品に依存し、国産化がはじまるのは第一次大戦以後のことになる。

このミシン裁縫学院は洋装化がすすむ社会風潮にこたえたもので、主婦や独立自営婦人のためにミシン使用の洋裁を教授。シンガーミシンの輸入販売や斡旋も行っている。普通、高等、研究、全科の四科程に二百八十人の生徒が受講する。最先端技術をマスターした職業婦人が巣立ち、後のファッション界を背負ったのである。創設初代校長は秦利舞子。

シンガーミシン裁縫学院は大正九年九月、私立シンガー裁縫院と改め、シンガーミシン会社の経営に。関東大震災をへて再興、昭和十年ころまで。その後の電話番号簿をくくるとシンガー機械社になっている。

日比谷交差点に面したパークビルの西半分の大正期は日比谷ビルディング。洋館木造三階建で三角形の敷地いっぱいに建てられた雑居オフィスビル。帝劇、警視庁、消防本部、大正生命ビルとならんで日比谷大正街を作っていた。関東大震災ではこの一画のすべてが焼け野原に。日比谷ビル跡地は戦後、昭和二十七年の日活ビル建設まで、空地、駐車場とされるのである。

大正後期の日比谷ビルディング（大正のたたずまいを偲ばせる木造の洋館三階ビルであった）

日比谷物語 ⑯④

山岸弘明

睦屋と塩瀬総本店

明治、大正期の電気ビルには、当時の日比谷を代表した老舗睦屋と塩瀬総本店があった。

睦屋の歴史はわが国近代化交通史の縮図を思わせる。有楽町駅が開業した明治三十二年（一八九九）ころ、当時花形交通機関であった人力車の需要増を見込んで、日比谷に引越したという。駅創業当時を知る世田谷区の中川謹一氏は「有楽町駅はドイツ風の高架駅で、明りとりのついたホームの屋根が評判だった」氏が語っている。

人力車はやがて電車や自動車の発達とともに衰退の運命を。睦屋が人力車を廃業するのは大正中期。引越し請負とかわり、十二年の関東大震災を契機に睦屋自動車に。昭和十六年（一九四一）の電話番号簿には「睦屋ツーリスト」とある。昭和二十年戦災まで。

塩瀬は日本橋明石町・塩瀬総本店の旧店になる。明治三十五年から昭和十一年まで。昭和七年『大東京年鑑』によると「本邦菓子製造界に名声ある塩瀬本店の開業は実に一千年（別誌では七百年）にして東山義政は当家の製菓を激賞し、とくに五七の桐の商標を許し、日本第一番本饅頭所と天書した桜の大看板を当家の祖先林浄因に贈った」と書いている。浄因は中国に渡って菓子技術を習得、爾来連綿として今日につづく。

江戸時代は数寄屋橋をはさんだ銀座側にあり、銀座大火で罹災、日比谷に移ったのだという。『明治の銀座職人話』には「（電気ビルの一画に）塩瀬の饅頭で有名な塩瀬総本舗の工場が（ポツンと）淋しげに残っていた」とある。宮内庁御用達。昭和十一年塩瀬ビルを東宝に売却。日比谷時代当主の渡辺亀三郎氏は長く町会長を勤めた。

明治三十七年の日比谷図（睦屋と塩瀬総本店はこのころ電気ビルの一画にあった）

日比谷物語 ⑯⑤

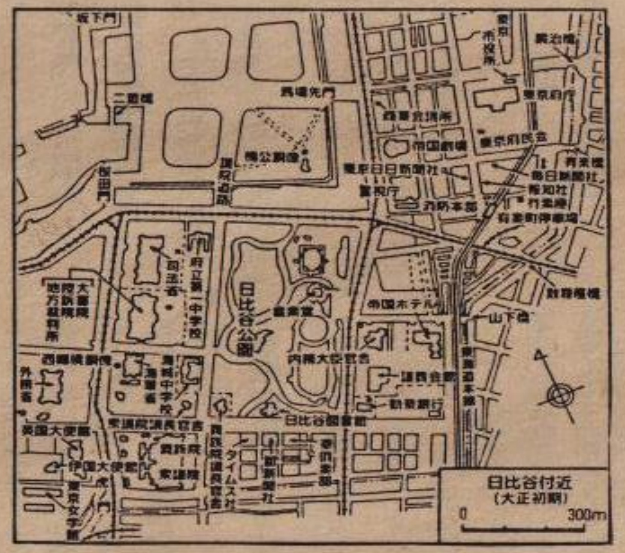
山岸弘明

大正政変と日比谷

明治四十五年十二月、明治天皇の逝去で大正と改元されている。大正天皇は先帝の第三子で母を柳原愛子といった。幼少期を日比谷交差点の一画にあった中山大納言邸ですごしたことは第九二回で紹介した。

「(ここは)明治の中ごろ、大正天皇の生母愛子局をだした柳原伯爵家のお屋敷(中山邸内のご養育所)となり、大正天皇のご幼少のころここでお育ちになった。父から聞いた話では白かり。依然、薩長元老による藩閥政治がくりかえされていた。

憲政正常化をめざす政友会、国民党とこれを支持する民衆は立上がって藩閥打倒をめざす。大正元年陸軍の横車で西園寺内閣が倒れて桂内閣が登場すると、不満が一気に爆発する。二年二月十日、日比谷帝国議事堂周辺は数万の民衆が取り囲み、やがて暴徒化する。警察官とこぜりあいをくりかえしながら、交番を焼打ちし、政府御用新聞といわれた『二六新聞』や『国道新聞』を襲う。



大正初期の日比谷付近図

〜〜〜

日比谷物語 ⑯⑦

山岸弘明

大正時代の日比谷

大正時代の日比谷は西北に皇居、北に東京の中心地丸の内、東に銀座、西に官庁街をひかえ、そして自ら日比谷公園、東京大神宮、帝劇を擁した東京名所地として発展する。「東京の中枢は丸の内。日比谷公園、両議院、いきな構えの帝劇に、いかめし館は警視庁、諸官省ズラリ馬場先門、海上ビルディング、東京駅、ポッポと出る汽車どこへ行く。ラメチャンたらギッチョンチョンでパイのパイのパイ。パリコとバナナでフライフライフライ」大正八年、浜田知道の作った東京名所の歌が日比谷の繁栄ぶりを伝えている。

日比谷が興盛を誇った明治～大正初期にかけての銀座はまだまだ人かげもマバラで、盛り場の称号も浅草や日本橋、神田、人形町に奪われていた。銀座が今日の基礎作るのは、この時代にカフェーやレストランを中心とした飲食店とデパートが相前後して進出したからであった。明治四十四年、カフェーのはしりとなった銀座プランタンが誕生、永井荷風、北原白秋、小山内薫らの文化人が集まる。白いエプロン姿の女給たちのサービスが人気を呼んで、やがカフェー全盛時代を迎えることに。銀座の興盛は日比谷、有楽町に新たな展開を告げる。

「大正時代駅を利用した旅客の服装は男も女もまだ洋服を着用している人は極めて少なく、ほとんど和服で袴をつけていたが、若い女性の間では紫の袴が大流行であったという」（橘川政人『有楽町駅舎今昔・有楽町今と昔』から）大正九年一万二千人とある有楽町駅乗降者数が、昭和二年六万となり、十五年には十三万人をかぞえる。大正～昭和戦前にかけての銀座の発展は、その表玄関たる有楽町駅の躍進につながっていくのであった。

同じ『有楽町今と昔』に池田弥三郎氏の銀座・有楽町あれこれが載っている。「（大正時代、銀座から）橋をわたって、いま朝日新聞（現マリオン）のあるところも、あらあらしい地肌をむきだしにしたままの広っぱであって、やがて自動車置場がタクシー会社か何かになって低い塀で囲われていた。……」

大正時代の日比谷交差点からみた大正生命、警視庁、帝劇方面。（『有楽町六十年』から）

日比谷物語 ⑯⑧

山岸弘明

大正の日比谷っ子

外堀の向う側は麹町区、こちら側は京橋区だったから、区立の小学校の通学区域は異なっていた。向うは日比谷小学校、こちらは泰明小学校であった。しかし、有楽町から泰明小学校へ越境入学してくる者がいないわけではなかった。後に毎日新聞社になったあたりには、警視庁の官舎などがたっていて、そこに住んでいても泰明小学校に通っているこどもたちかいた。

まいの日比谷小学校のこどもがでてきて、いろいろと意地悪をした。泰明に通っている子が要領よく逃げてうちへ入ってしまうと、こっちは一人で追いかけられるので数寄屋橋を渡り切るまで怖かった。しかし時には日比谷小学校のこどもたちが大挙して押し寄せてきて、そうなると、数寄屋橋公園が喧嘩の場所になった」。

池田弥三郎著『銀座十二章』にも同じような記載がある。「数寄屋橋公園ができたのは大正三年五月のことだというから私の生まれる半年前にできたわけだが、この小公園は私に自転車の練習をさせる場所を与えてくれたり、数寄屋橋の向う側にすんでいる日比谷小学校の生徒との縄ばり争いのけんかの場所を与えてくれたりした。

数寄屋橋の向う側は麹町区で、したがってそこの住民のこどもたちは学校が日比谷小学校であった。そのこどもたちが越境して数寄屋橋公園で遊んでいるのを見つけると私たちはまず遠くから石をぶつけ、ひるむところを乗をたのしんで追い回し追払った。向うが小人数だと彼らは『泰明学校ポロ学校、あがってみてもポロ学校』とはやしながら橋を渡って逃げて行った」。

日比谷のこどもたちの通学区は東京地裁にあった日比谷小学校だが、多くの児童が川一つ挟んで泰明小学校に越境入学した（『泰明百年ものがたり』から）

日比谷物語 ⑯⑨

山岸弘明

おでんの岩崎

有楽町駅周辺の大正期を高浜虚子が〝丸の内〟のなかで語っている。「震災ずっといぜんのことであった。今はもう昔がたりになったが、あの小さい劇場の有楽座がたったはじめに、表に勘亭流の字で書かれた有楽座という小さい看板が掛かっていたのに私は奇異の目をみはったことがあった。（略）帝劇の屋根の上に翁の像が突ったっていたのも同様であった。はじめは何だか突飛な感じがしたが、しかしすぐ目になれた。汽車の中おいしそうにおでんをたべている。有楽町駅に上って眺めると帝劇の屋根の上には電燈がたくさん灯っていて、そこが歓楽の境であることを思わしめる」（『大東京繁昌記』）。

このおでんやは、ガード下日の基にあった「一膳めし屋・岩崎」のことだ。「このめし屋の経営者は社会主義者の岩崎善右衛門さんといい、もとは新橋の芸者町で人力車夫をしていた。車夫のころ刑事が尾行していて、岩崎が芸者をのせて走りだすと刑事もそのあとから別の車で追跡するシーンもあったという。まことに絢爛と混乱していた時代というよう。岩崎は義侠心の強い人で、のち千葉の中山へ個人で養老院を開設し社会事業につくした。

大正大震災前の有楽町付近（警視庁はまだ有楽町にあった）

岩崎は二十四時間の徹夜営業をやり、酒あり、おでんあり、安くていつでもで、戦前まであった」（有楽町＝交通会館編）。店には〝働かざるもの食うべからず〟の看板が大書され、新聞記者たちのたまり場でもあったという。旧日比谷劇場裏手のガード近くにある〝食事・岩崎〟がこの後身。孫・博茂氏が安さの伝統を守っている。

日比谷物語 ⑰⑩

山岸弘明

大正の有楽座周辺

瀬田兼丸氏の書いた『遠ざかる大正・私の銀座』にも大正期の日比谷がある。

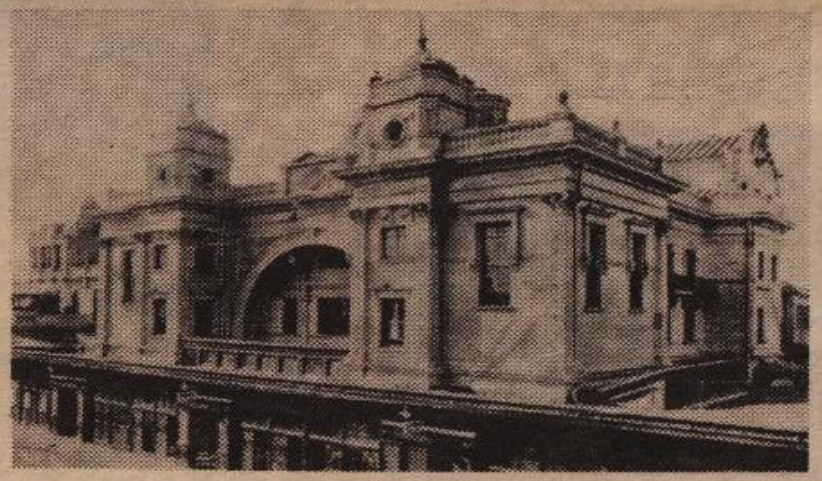
「カフェプランタンは画家・文士・一流歌舞伎俳優たちのサロンであり、そこに漂ようものは温かい家庭的雰囲気であったようだ。その盛事のエピソードは伝説の世界になろうとしている。だが、このプランタンが有楽座に店を出していたことは余り知られていない。

有楽座は有楽町二丁目（中央通り商店街）にあった。私が松旭斉天勝の奇術をみに行ったころは日本劇場や朝日新聞（マリオンの前身）の建物はまだなく、電車通りに面してトタンぶきバラックのタクシー会社があるだけであった。冬など吹きっさらしの広っぱで、有楽泉という浴場をはさんで両側に民家が三、四軒づつ、その右のはずれ外濠に面した白亜の殿堂が有楽座で、小じんまりとしたよい小屋であった。（略）この有楽座では新劇や文芸座のような歌舞伎の世界と西欧的演技の調和を求めるというような実験的舞台が、しばしばくり広げられていたのである。

プランタンの太郎さんは毎日のようにこの有楽座の出店に遊びに行った。太郎さんとは女形一筋、歌舞伎の世界に貴重な存在になっている前進座の五世河原崎国太郎さんのことである」。

池田弥三郎著『銀座十二章』には「震災までは外濠に橋が少なくて、数寄屋橋から北へは、鍛冶橋までなかった。だから有楽座へは数寄屋橋を渡って、今の朝日新聞社となる前の土地を回り道して行った。大正の初年ころ（七年の市電気局本庁舎建設まで）は電車の引込線が濠に沿って通っていた。

（有楽座は明治四十一年の開業だが、翌年十二月小山内薫の自由劇場公演を契機に新劇運動の拠点となった）当時の小山内氏は文壇にも劇壇にも抜きんでた存在であったから、その演劇の拠点となった。有楽座は若い文士たちを数多く集めるところとなった。少し飛躍した言い方であるが、もし銀座とつい目と鼻の先に有楽座ができなかったら、大正期におけるかおり高き銀座もまた生まれなかったかも知れないと思う……」。



新劇発生の地とも呼ばれる有楽座（現在は有楽町駅前の中央通り商店街になっている）『帝劇の五十年』から

日比谷物語 ⑰①

山岸弘明

今日は帝劇

谷崎潤一郎は、その『青春物語』のなかで、有楽座の隣のレストラン〝東洋軒〟のテーブルについている永井荷風に、自作『刺青』の載った第二期『新思潮』の十一月号を手渡しに行った前後のことをこう書いている。

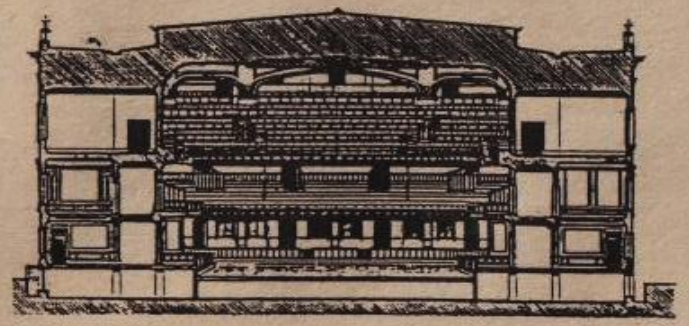
「私は（永井荷風）先生の姿を見かけると、もっともよい機会を摑むために、その跡を追って歩いた。すると夕方になって先生は食堂に入って行かれた。（それはあのなつかしい有楽座の往来の方に別に入口の付いていた、何とかいうレストランの階下の部屋であった）私はあの食堂から化粧室の前をすぎて有楽座の廊下へ続く通路の間を行ったり来たりしながら、それとなく先生の様子をうかがったものだった」池田弥三郎『銀座十二章』。

明治四十四年四月開業の帝国劇場も、大正時代の日比谷を代表した東京名所の一つになっていく。パリの国立劇場にならったという純洋風建築で、館内は全席いす席。松井須磨子の「カチュウシャかわいや」が一世を風靡し、川上貞奴も負けじと舞台に挑んだ。「今日はお芝居、あすはぜひ三越へお出かけください」。大正時代の小市民文化とバタくさい西洋趣味の当時の風潮をたくみにとらえた三越のCMはやがて「今日は帝劇、あすは三越」とうたい直されていく。

『帝劇の五十年』に大正期の俗謡が紹介されている。「へ当時東京ではやりのものは、帝国座女優劇、国技館、ゴム輪の人力車に活動写真、マントを着た女学生に芝居の案内者、ベールをかぶった芸者を乗せて自動車プップップー。

そのころ帝劇の番組に印刷された『今日は帝劇、あすは三越』のCMは当時の消費ムードを物語っていた。歌舞伎の女形に女優を演じさせる試みは失敗したが、女優の現代劇は帝劇名物として成功した。そして簡便な切符制度、食堂利用の食事、チップの廃止、観劇時間の短縮など帝劇は時代に先がけたのであった。（渋沢秀雄）」

大正時代といえば、日比谷公園のお昼のドンも忘れられない。明治四年から五十年間、空砲を打上げて正午を知らせたが、大正十一年五月、聞こえる範囲も限られたとして廃止の運命が待っていた。



「今日は帝劇、あすは三越」とうたわれた初代帝国劇場の断面図（『帝劇の五十年』）から

日比谷物語 ⑰②

山岸弘明

一色活版印刷所

電気ビルの晴海通りに面して、大正から戦前まで一色活版印刷所があった。わが国に活字を組合わせた活版印刷が普及するのは明治はじめのことだが、その後、写真製版技術や多色印刷技術の発達で印刷業界は拡大の一途をたどる。

明治後期から昭和戦前期にかけて、この日比谷が印刷や製版の町ともいわれたのは、東京日々（毎日新聞の前身）、報知、読売、朝日新聞がこの地で新聞世界大戦のころから、雑誌や単行本の発行部数も増えて一挙に活況を呈してくる。創業十年で大臣の旧邸を買取った人もいたよ」祖父、父と二代にわたってこの一色活版所で働いて独立した葛飾区の田中潔氏が著者への手紙に書いている。

最初の洋館は二階建の壁面いっぱいに、水色のペンキを塗ったひときわめだつ木造建築だった。関東大震災で被災、紙類の多い印刷屋の火はみるみるうちにひろがった。そして昭和はじめ鉄筋コンクリート三階の新社屋が竣工する。社長一色忠雄。中堅印刷業者として着実に進展するが、昭和二十年（一九四五）の敗戦を機に日本橋三代町の現住所に転ずるのであった。

印刷業界といえば、戦後の混乱期、朝日街でマルミデパート（マーケット）を開いた有楽シネマ一帯の前主、三好長治も曽祖父、祖父、父三代つづきの三友社印刷社。ラクチョービルの明治・大正期には有楽社、九十九印刷、青霞堂印刷があり、隆和ビルの一画には伊東製版印刷があり、大正時代から戦前まで中央文芸製版があった。

街を形成、印刷関係の需要があったこと、築地に印刷板や活字の専門店があって便利だったなどによる。

一色活版は明治中期、中央区新栄町の創業だという。大正二年（一九一三）日比谷の毎日電報社跡に転じた。「（明治二十五年ころの印刷職人は）日当が十銭、欧文の活字組ができる人は十五銭以上だった。暗くて狭い工場で、朝早くから夜九時ころまで働いても食べるのが精一杯。みんな粗末な弁当をもって工場へ通っていた。こんなせいもあって活版工場の人は結核患者が多かったね。ところが第一

関東大震災で燃える一色印刷社（左）。右隣は電気倶楽部ビルと考えられる。（有楽町方面から）

日比谷物語 ⑰③

山岸 弘明

タクシー自動車

明治から大正と改まった元年（一九一二）八月、マリオンの地にタクシー自動車が誕生する。わが国最初のタクシー会社であった。

「T型フォード六台で営業を開始。料金は一マイル六十銭、〇・五マイルごとに十銭加算した。この年の自動車登録台数は全国で五百二十一台。自動車運転手が高級な職業とみなされ、青年の憧れの的となった」（『国際自動車労働組合二十年史』）。

しんだという。『銀座ばやし』で永井保氏が書いている。

十年の丸の内図では東京タクシーとあり、ほかに朝日タクシーとした資料もある。この図からは構内が詳しく読みとれる。旧日劇側は八の字になった事務所と控え室。旧朝日新聞側が車庫で背の低い塀をめぐらせていた。社長は政友会の長晴登代議士。しかし、震災の直前に経営が軌道にのらず廃業に。

十二年、旧朝日側には萬歳生命が建設されて、隣接する外堀土手敷空地に浄瑠璃座が建った。萬歳生命は明治三十九年創業。後に日華生命に吸収されて日華萬歳生命と変わる。現在の第百生命である。日劇は空地。

両建築の生命は、実にあっけないものに。

この年九月、関東一円を襲った大震災は新築家屋を炎で包み、震災後は間組材料置場（日華生命所有地）をへて朝日新聞に。浄瑠璃座も大正十三年、邦楽座を誕生させる。一方の日劇側は震災直後、同じ有楽町一丁目三番地の社屋を焼失した大正生命が入って、昭和四年には日本劇場の建設がはじまる。マリオンの大正時代であった。

「（この当時のタクシーは）幌馬車に毛が生えたような格好であった。胴体からはみでてバンパーとステップが取付けてあり、ヘッドライトの光源はアセチレン発生機からとっていた。ハンドルにはゴム製ラッパの警笛がついていた。エンジンは前から鉄棒をさしこみ、勢いよく回転して始動させた」（『明治の銀座職人話』）。

このタクシー会社の裏にカーバイドのカス捨て場があって、近所のこどもたちはこの燃え残りで手製ランプを作って、数寄屋橋のたもとの石垣から通じていた下水道のトンネル探検を楽

大正時代のタクシー＝３年ごろ第１次全盛期を迎え、辻待ち人力車と交通機関の首座を争った（国際自動車労組合二十年史）

日比谷物語 ⑰④

山岸 弘明

天勝と日比谷

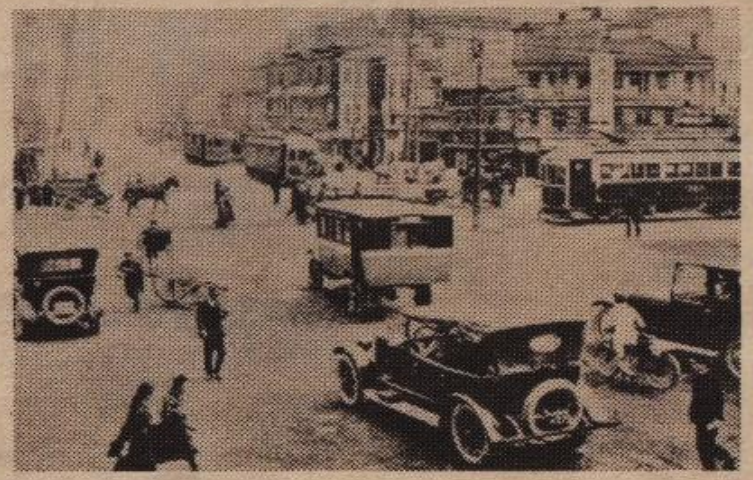
日比谷朝日生命ビル、東宝ツインタワービル一画の明治後期～大正期は千五百坪ほどの三角街になっていて、料亭と旅館がならんだ情緒あふれた町なみだった。

この三角街の中心は京都平野屋支店で、明治三十六年（一九〇三）市区改正のときオープンしている。「日比谷の交差点を内幸町の方向へ踏切った左手をみると〝平野屋〟と書いた提灯が二階の軒先に吊るされて風に

天勝は魔術の女王とうたわれた女流奇術師。名人・天一の門に入り、十五歳の一門渡米で日本奇術の名を高めた。帰国後、美しい姿体を大胆に披露して有楽座や浅草帝国館のファンをわかせ、明治後～大正期日本一の人気スターとして君臨する。

平野屋は大正十二年の関東大震災で焼失するが、天勝と日比谷の関係はつづく。直後の十四年、日比谷大神宮本殿（後の日比谷劇場）隣接地に旅館水明館を開き、ここには天勝興業事務所をおいて実弟の吉沢広吉氏が責任者になった。「三信ビル前のこじんまりとした日本式旅館でね。天勝もときどききていました」戦前からの住民の話だ。天勝は昭和十年引退して、二十年逝去。水明館も強制疎開でなくなった。

皇居寄り角日比谷交差点に正対して長陽軒が立つのは大正はじめのことであった。純日本式の三階建で、正面には店名の看板とならんで、キリンビール、仁丹の広告塔がたてられ、いかにも大正期の料亭らしいたたずまいをみせる。関東大震災まで。



大正時代の朝日生命ビル一画（キリンビールと大書したのが長陽軒）
―『東京・昔と今』から―

ゆられるさまが客をこまねいているようにみえた。風雅な日本建で純日本式料理が特色で自然に盛大に極めたものであった。

家をとりもつ赤前だれのすてきはほとんど京都からの輸入品であった。その輸入品が古代的情緒をたっぷり含んだ京都なまりで『お入りやすいな』小首をちょっと傾けられては近代的な非凡も天才も懐古的気分でついのれんをくぐったものである」（『縦横よりみたる東京』前田義教著）。大正十年、この平野屋が松旭斎天勝の経営に移った。

日比谷物語 ⑰⑤

山岸 弘明

大神宮門前町

一〇五回から一一〇回にかけて明治、大正期の日比谷を代表した日比谷大神宮を紹介した。有楽町南半分のガード周辺は、この大神宮門前町として発展するのであった。

「日比谷大神宮というのは通称で、はじめ伊勢神宮の分霊を祀る神宮司庁東京出張所として生まれ、社殿の創建にあたって明治天皇が金千円を下賜された、という由緒がある。その後神宮教院、神宮奉斎会本院となったが、『境内桜樹多く、花時美観を呈す』と東京案内で花の名所にあげられている。現在の東宝劇場と東宝会館の間あたりから表参道を行くと日比谷一数寄屋橋の通りへ抜けられた。維新後は明治天皇の御生母中山二位局の邸もあって、きれいな泉が湧いていた。静かな環境で花どきはさぞ美しかったろうが、大正の中頃に神宮の財政上の理由で表参道一帯を整地し、料亭などができてその花も姿を消した。

社殿に向って右手の境内と国電ガードの間あたりには、すでにかなり民家が建てこんでいたが、まだあちこちに大きな空地があった。大正時代の夏の宵、銀座に隣りあった町内が、毎年合同で開く素人角力の会場は『日比谷の交差点の手前の左側、大衆向きの料理屋や宿屋が並んでいる間を入ると、その裏手に大きな空地があった。いまは飯田橋に移ってしまった日比谷大神宮のそばだった』(大正の銀座赤坂=多賀義勝)。『有楽町今と昔』で交通会館編集部が大正時代の日比谷を記している。

桜にかわって登場した料亭に大松閣、山水楼、花の茶屋などがあった。大松閣は大正八年の創業になる。帝国ホテルに面した現在の東宝会館の一角にあたる。森のレストランとして知られる松本楼の当時社長・小坂武雄の経営で、日比谷大神宮の結婚式場部門を兼ねる。大神宮では明治三十四年以来、神前結婚式を行なって結びの神様と親しまれたが、披露宴会場としてのものたりなさがあった。小坂は大神宮との二人三脚で豪華な式場完備の料亭を竣工させるのであった。

関東大震災直前の日比谷公園（大神宮のまわりに料亭や売店がならんだ）

日比谷物語 ⑰⑤

山岸 弘明

料亭と旅館の街

明治後期～大正期にかけての日比谷朝日生命ビル、ツインタワービルの一画は、料亭と旅館が集まった三角街であった。日比谷公園と日比谷大神宮という二つの東京名所にはさまれ、おのぼりさんや市民の行楽地として食べもの商売が繁昌したのである。

大正八年（一九一九）には、電気鍋の幸楽が誕生している。洋風化の代表格となった牛鍋も、当時はすっかり食生活に定着していた。店舗は豪華な三階建て木造の料亭建築であったが、四年後の関東大震災で罹災、昭和はじめまで仮店舗で再開。

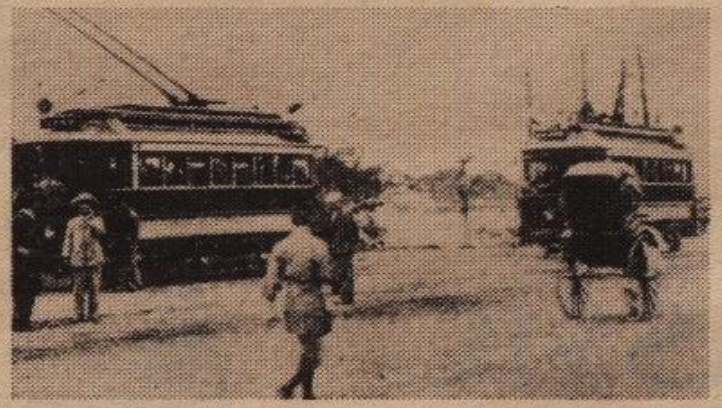
この幸楽を有名にしたのは赤坂に映った昭和十一年、二・二六事件の舞台として一躍社会の耳目を集めたからだ。反乱将校らは幸楽と山王ホテルを占拠、投降までの三日間本部に。事件をきっかけに日本は軍事色を深め第二次世界大戦に。歴史を大きく塗りかえていく。

明治四十五年『地籍図』にあった日比谷旅館は、大正五年の『東京法人要覧』では日比谷ホテルに変っている。「二年七月創業・資本金五万円。菊沢亀一郎。本社は経営困難のため目下整理中。営業せず」。跡地は八年陶々亭になる。陶々亭は昭和三十九年、ツインタワービル建設のため、東宝に買収されるまでの約五十年、日比谷と深いかかわりもつことに。昭和の項で詳しく紹介する。

この三角街には、洋館、三階の木造建築でみるからに明治の写真屋らしい風情を備えた大武写真館があった。主人の大武文夫は明治二十八年の山形生まれ。当時ようやく浸透しつつあった写真術を学んで四十二年上京、この地で写真店を開いた。宮内省ご用達。平和博、ドイツ万国写真展、時事新報社賞など入選。

大正十二年の震災で焼け、昭和はじめの区画整理で新市街（当初は九重ビル裏あたりともいう）に復した。その後、顯、和夫と代替わりして昭和十六年ころまでつづく。

明治・大正期の情緒をただよわせながら独特の展開を示したこの三角街も、関東大震災の猛火は一握りの灰燼と化すことに。その跡地には現在、朝日生命、ツインタワービルが大空に向かってきっ立している。大正ロマンが再びよみがえることはなかった。



料亭と旅館の三角街から大正時代の日比谷交差点、人力車の姿もみえる。
―『有楽町六十年』から―

日比谷物語 ⑰⑦

山岸弘明

震災前の大正生命

震災前の有楽町一丁目はこれまで紹介した警視庁、日比谷署、消防本部の町であり、昭和の新聞街で紹介する東京日々（毎日）新聞、そして大正生命があった。

大正生命は創業以来、日比谷と浅からぬ因縁を持っている。大正二年、当時総合商社として活躍した鈴木商店の肝入りで創業されたもので、資本金五十万円。現在地に木造洋館二階建の初代本社ビルを構えた。

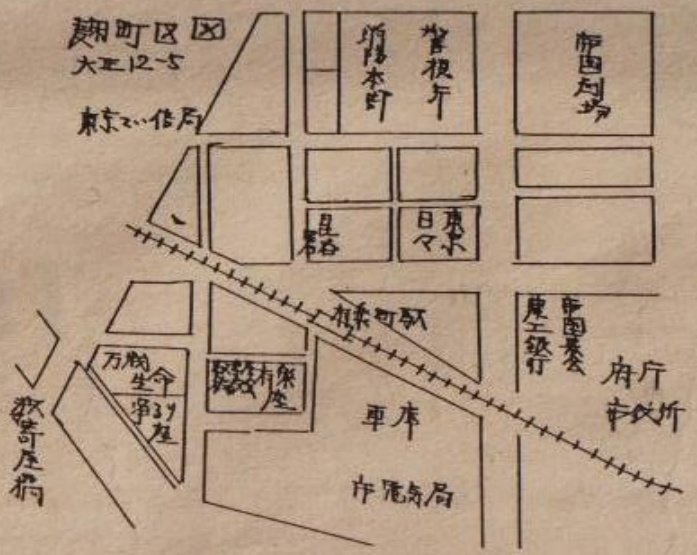
保険年鑑によれば「鈴木商店の営業地盤がバックとなったことはもちろんだが、曹洞宗の総持寺と永平寺の後援も得て事業すべり出しは順調で、昭和六年末には契約高一億円を突破して業界の注目を集めた。しかし、その翌年、鈴木商店が経営破綻をきたしたことが響いて契約高も逐年減少した。昭和七年、鈴木商店の中心で同社の創立者である金子直吉が取締役を辞任したことにより、経営の実権は金光家が掌握することになった。大正七年日本教育生命が同社の姉妹会社となり、経営陣も社長柳原、専務金光という顔ぶれで両社の協力関係が長く続けられた」と書いている。

社長の柳原義光氏は大正天皇生母柳原二位局の血縁で、支配人金光庸夫氏は後の東京商工会議所会頭、貴族院・衆議院議員であった。震災後、金光邸をマリオンに構えるので改めて紹介することになる。

同社は大正十二年関東大震災で本社屋を焼失。直後にマリオン、朝日街の二代にわたる仮社屋をへた昭和十一年、創業の地になる現在地に復帰するのである。

日比谷交差点に接したパークビルのところは木造四階建洋館の日比谷ビルと山かん横丁があって、これまで紹介した。大正五年の東京法人要覧には、この一画所在法人として、武蔵電気鉄道（明治四十三年から）、千代田ビルブローカー、茂鉄道、帝国美術漆料（四十五年）、中央興信所、木所沢鉱山（大正二年）、毎日通信出版（三年）、押野工業所（四年）などが掲載されている。

電気ビルの一画も山かん横丁とならんでゴチャゴチャした町だが、ここには一色印刷、シンガーミシン、内外興業、塩瀬総本店、春日歯科、そして電気協会、電気倶楽部があり、市電気局変電所と有楽稲荷があった。



大正12年5月の日比谷図（4ヵ月後に起きた震災がこの一画をほとんど焼失させる）

日比谷物語 ⑰⑧

山岸弘明

有楽町稲荷

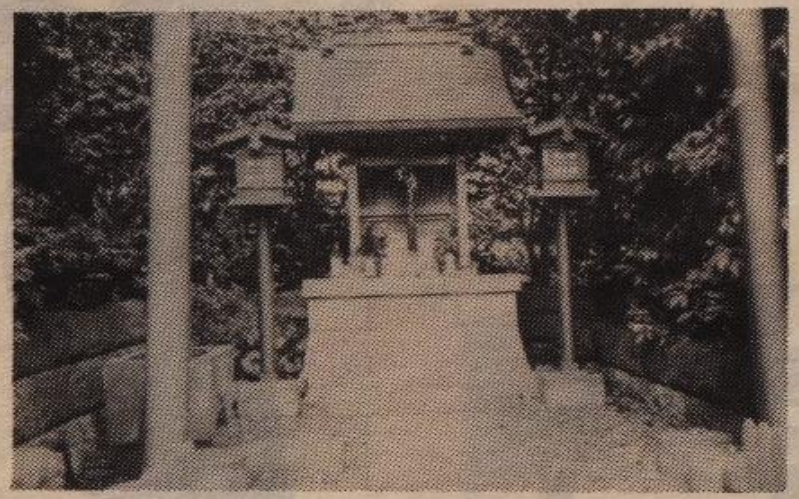
大正十一年、山かん横丁で山水楼を興した宮田武義会長は、震災前の有楽町を知る貴重な生証人でもある。「むかしの警視庁や消防本部、総監官舎、東日。ええ、みんな覚えてますよ。大正生命の方から横丁に入ってくると左手に花月がある。有名な料理屋でね。となりはオデッサとかいうバー。山かん横丁は、日比谷パークビルになっている一角に、三階建ての木造長屋が並んでてね。弁護士があったり、いろんな人がそこに入っていました。駅側の角に中国人の洋服屋があって、後に岩波の印刷所かなんかに変わります。そのとなりで通りに面した電気倶楽部の真ん前に店をはじめた三階建の洋館がありました。（電気ビルのところは）一色印刷に、有楽稲荷……ほかに何がありましたかね。古い倶楽部の建物も、もうはっきり覚えていないですね。私はまだ三十歳くらいの年ですけど、いま九十八になりますので大分昔のことですから（笑い）」（談話）。

有楽稲荷は現在も電気ビル北館の片すみに鎮座している。当社は永井飛弾守が天下泰平と子孫繁栄を祈念して安政六年に創立したものであります。社の傍にある手洗鉢は万延元庚申八月に駒野四郎兵衛……の八名が奉納した銘があり、当時から非常に信仰が篤かったことが偲ばれます。明治維新以後は町制の変革によって、稲荷神社もわずかにその跡形止めるばかりでしたが、明治四十一年東京市電気局有楽町変電所が設けられたとき祠堂も改修して、町内氏子とともにお祀りしてきました。大正十二年九月一日の関東大震災の際にも、周囲はみな燃焼したにもかわらず独り当地は災害を免れました。

昭和四十六年九月、有楽町電気ビルの新築にともない一時赤坂山王日枝神社に遷座されましたが、昭和五十四年一月再びこの地に復座しました」。大理石にはめこまれた碑文が社の由来を詳しくつづっている。

毎年この午には町会主催の大祭が執り行なわれる。

「むかしは、おこわをつくり、太鼓をたたいて盛大なお祭りをしました。いまでもときどきお稲荷さんにお参りにいくのですが、住んでる人もいなくなって随分さびしくなりましたね」（築山きんさん＝有楽町有情）。



災害にめっぽう強い有楽稲荷（その起元は大名屋敷のお稲荷さんだった）

日比谷物語 ⑰⑨

山岸弘明

愛国生命

震災前の有楽町二丁目には、府庁、市役所、市水道課、東京商工銀行、市電気局、報知新聞社、報文社があり、有楽座（高等演芸場）、数寄屋橋教会、電気局変電所、そして朝日街と中央通り商店街に有楽湯を囲んだ形で、二十軒ほどの商店と民家があった。

大正五年の『東京法人要覧』には、この朝日街に小樽漁港が載っている。「明治四十年創業。資本金六十万円。松尾寛三。海産物および漁業用品」。昭和「愛国生命の屋根はドーム型になっていて、その前面にまぶしい日輪がはめこんであり、それが太陽に反射してキラキラ輝いていた」（明治の銀座職人話）。

『日本生命九十年史』によれば「鈴木萬次郎氏が衆議院議員であったころ、菓子税法の廃止に尽力したことによって、全国菓子業者が氏の功労に酬いる意味で、公益事業である生命保険会社を設立した」となっている。

「当社本店社屋は関東大震災、太平洋戦争においても大きな被災はなく、堅実な経営を行ない、昭和七年に東華生命、同八年に寿生命の包括移転を受けた」。昭和十九年日本生命と合併。包括移転時の保有契約高は四十万件、七億七千万円であった。現在の日生ビルは三十八年竣工の二代目。

明治後期の宝塚会館は東京市街鉄道と東京電燈。街鉄は明治四十四年市電気局の傘下に入るが、しばらくは引きつづいて庁舎の一部として使われた。大正六年九月から九年秋まで電気倶楽部に。この年、業容が拡大して手ぜまとなった東京電燈に吸収されて、十二年の震災を迎えるのであった。

初年資料では大峰商会（明治四十二年創業）三工商会（大正七年）三平商会（十一年）などの商店名もある。

三井ビル、東宝日比谷シャンテを中心とした三丁目の大正期は、日比谷大神宮、三井集会所、愛国生命、東京電燈、トム商会などがあり、ガードをはさんだニュートーキョー側に田中商会、日本動産火災、青雲堂印刷、島屋旅館、山本鉱業部、大東鉱業があった。

愛国生命は明治三十年の創業で、日比谷進出は大正元年十二月、現在の日生会館の地に本社屋を新築移転したことによる。

日輪がまばゆい大正はじめの愛国生命
（日比谷公園・心字池から）

日比谷物語 ⑱⓪

山岸弘明

関東大震災

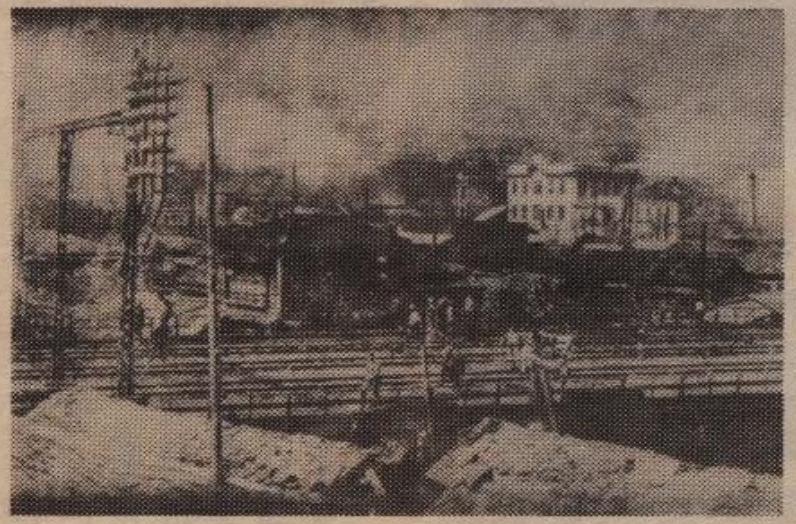
大正七年（一九一八）十一月、ドイツ降伏によって第一次世界大戦が終わる。翌年のベルサイユ会議で、日本は中国の諸収益と南洋諸島の委任統治権を得、イギリス、アメリカ、フランス、イタリアと並んで五大列強への仲間入りをはたす。この間、海運界、重工業を中心に軍需景気がもりあがり、経済界は一大発展をとげるが、一方、米騒動にみられるように大衆は物資の欠乏、インフレに悩まされていた。

明治末期から大正にかけ、日比谷は政治と経済の中心地、日比谷大神宮の門前町、銀座への表玄関として繁栄したことをこれまで紹介したが、大正十二年九月一日、関東地方を襲った大地震は日比谷の街を廃虚と化すことになる。

この日午前十一時五十八分、首都圏一帯はマグニチュード七・九の激震に揺れたが、この大地震は家屋倒壊に加えて、同時に発生した火災が未曽有の大惨事を引き起こす。東京府下の罹災者百三十二万人。全焼、全壊家屋三十一万戸、死者・行方不明者九万七千人。明治維新後五十年間かかって築いた日本の心臓部を壊滅させるのであった。

丸の内消防署の『五十年の歩み』が日比谷周辺の罹災状況を詳しく伝えている。「地震発生と同時に有楽町一丁目の田中製版所から出火し、折からの南風にあおられ、たちまちのうちに木造建物のシンガーミシン会社に燃え移り、火勢は一層熾烈になった。この火災は二方向に分れ、一方は警視庁の各官舎を焼きつくし、馬房演武場と警視庁東面新館をあおりながら総監邸を焼き、東京市役所、東京停車場へ燃え移る寸前に、消防隊が有楽橋通りを延焼阻止線とした必至の活躍で消し止め、日比谷警察署、日日新聞社とこれに隣接する三菱の各館、市庁舎、東京駅のある一部が残った。

他方の火流は遺失物倉庫裏から有楽町一丁目の木造建物や高層建物密集地域へ拡大し、たまたま幸楽亭方面に発生した火災と大正生命の方面から突進するように拡大した火災と合流し、ますます火勢を増した……」。



地震1時間後の有楽町（ラクチョウビルあたりから。
間もなくこの一画は、すべてが灰燼に帰した）

日比谷物語 ⑱⑴

山岸弘明

燃える日比谷

前回につづいて、丸の内消防署『五十年の歩み』から関東大震災の惨状を紹介する。「(幸楽亭方面に発声した火災と田中製版所から拡大した火災が合流し、ますます火勢を増す)この火災は午後二時三十分ころ消防庁舎をはるかに高く越えて警視庁三階の総監官房室のひさしに燃え移り全焼した。この庁舎が延焼中に、帝国劇場屋根裏に飛火し、周囲の建物の一部を焼いて鎮火した。

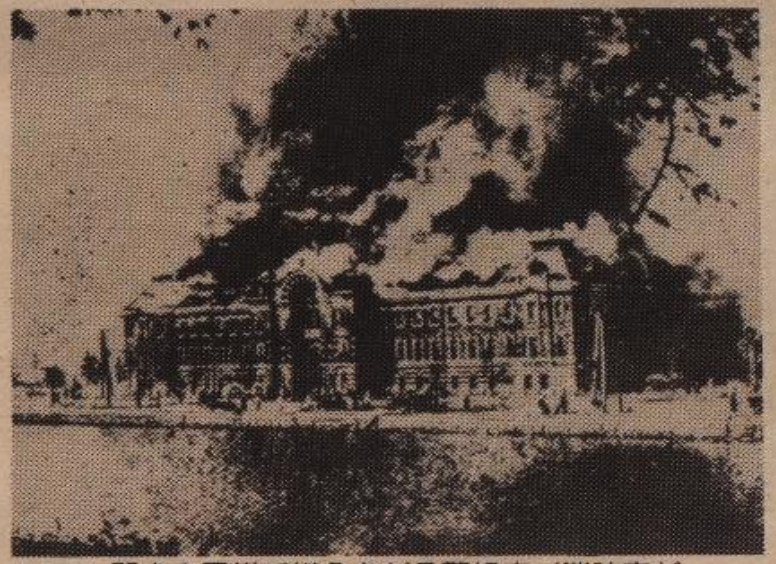
拓殖会社を焼いて、毎日新聞社を襲い午後十時三十分ころ芝烏森へ延焼して行った」。

『警視庁百年の歩み』には「家屋倒壊と同時に有楽町一丁目から出た火は付近一体を焼き警視庁に迫ってきた。庁員はあげて消火に努めたが猛火は庁舎を包囲し、折りからの余震で三階床の一部が墜落、午後四時ごろついに焼失してしまった」と書いている。

『東京大神宮沿革史』も奉斎会本院の焼失の一項がある。「突如関東を襲った大地震は東京市を中心に東西八方を玩具の如く揺り動かし、焦熱の大地獄と化しめた。家屋倒壊、大火災、阿鼻叫喚、酸鼻を極めた巷の中に奉斎会もこの災厄から逃れることができなかった。みるみる間に火は本院を包んで、一握の灰と変ぜしめた。この最中に役員はご神霊を奉じて宮内省にご動座、ついで篠田理事、本橋教守奉伺、日枝神社に奉安することができた。かくてその直後、未だ焼跡の灰の温籠の裡に応急のバラックを建築、ただちに日枝神社から御神霊を奉迎安置申しあげ、復興策に対し、着々その実現を急いだのであった」。

午後三時ごろ、有楽町の電灯会社付近に発生した火災は南の風十一㍍の強風にあおられ、火災の主流は数寄屋橋方面へ燃え広がり、橋上に運びだされた荷物が延焼の媒介となって、午後五時三十分ごろ八官町から出荷して、北東方へ燃え拡った火流と元数寄屋町(銀座五丁目)で合流した。

その後、この火災は有楽町鉄道線路以東から有楽座および電気局のある一街区を焼き、午後八時には風向が逆転して、一時下火になりかけたが再び勢いを増し、帝国ホテル付近に燃え移り、建築中の政友会本部、東京



関東大震災で燃えあがる警視庁(消防車が日比谷濠—手前—の水をポンプで汲みあげだが、火の手はますますひろがった

日比谷物語 ⑱⑵

山岸弘明

宮田氏の震災体験

同じ『東京大神宮沿革史』に、元神宮奉斎会々長・藤岡好春氏の震災体験話が載ってる。「震災当日、私は当番の挙式をすませ、何かの用事で今泉会長宅へ行く途中、飯倉へさしかかった電車の中で揺れだした。ばらばら人々は飛びだす、瓦は落ちる、崩れるように倒れる家もある……。(二時ごろ本院にかけつけると)古い建物は倒壊していたが、本殿、拝殿、事務所などはみな無事だった。何分揺れかえしがひどく、しかも烈風中に火災が迫ってくるので難をさけるのが精いっぱいである。……職員一人を殿守に残し、篠田翁と今後のことなど打合わせたうえ、一同気がかりな家路についたのはすでに日没に近かった。事務所の大きな建物には、焼えあがる大松闇の火災が覆いかぶさるように降りそそいでおり、本殿、拝殿ともこれが見おさめかと眺めるほかはなかった」。

山水楼会長の宮田武義氏も震災体験者の一人。「昼近くでした。中野の自宅から省線でできまして、当時は万世橋という駅があったんですが。ちょうどあそこにきたとき時にあいましてね。電車はガタッとした程度でしたけど、窓の外をみると家の屋根がガタガタとゆれている。それがくずれて時どきパーッとほこりがたつ。これは大変だと思っていると、電車もそれ切り動かないものですから、バスで銀座へ出て、銀座から歩いて店の前まで。そしたら店はもう火がきて焼けているのですよ。従業員も何人かいるんだけど、その辺にはもうだれ一人いない。

観念して日比谷公園に逃げていくんですけど、一歩歩くごとにゆらりゆらりしましてね。転ぶほどひどくゆれる。余震が次々にくる。それをやっとのことで公園に入ると、いま噴水のあるあたりにみんな避難して、いい具合に料理人四人もそこにおりました。

三時から四時ごろまでそこで様子をみていたところ、火はほうぼう燃えてくる。こうしとったらいかん家へ帰ろういって中野へ……。日比谷公園から外務省の横をあがって四谷駅にでて、後は線路へね。電車は動かないですから路路に沿って歩いて帰りました。ま、生きた心地がしなかったですね」。(談話)

地震直後の日比谷交差点(長養軒が崩壊し、山かん横丁の火が日比谷ビルをおびやかす)

室町春秋

業務を広げる

JR駅のキヨスクで「大清水」という水が売られているのをご存知の方は多いであろう。上越新幹線が貫く谷川岳の真下に生まれる〝名水〟である。

そもそもは、JR社員がトンネル巡回のあと、渇いたのどを潤すため、手近な水として飲んでいた。「たいへんうまい」と評判となっていたのが、商品に結びつくヒントになったそうである。

ところが、これを売り出すには、鉄道法による制約があって、にわかに商品とするわけにいかない。いいかえると鉄道の業務内から発生するもの以外は、売ってはいけないのだそうである。これも〝鉄道の発生品〟とみなすことに解釈が落着いて、現にこのとおり売り出されている。その間、同じ原料を基にして、三国カコ・コーラボトリングが「おいしい清水」の名のもとに売り出した。

両者の間には、多少の確執も生じたが、結局、両者は提携するに至り、本格的な事業展開が始まったという。

かつて旧国鉄時代、成田空港の航空機燃料を輸送するに当たって、国鉄（あるいは国労、あるいは機労というべきか）がせっかくの荷扱いを拒否したことがある。もっと危険なものを輸送しているはずだから、ほかの理由もあったのだろう。その結果はパイプ輸送が促進されて、本来の仕事のネタを逸早く失った。

この差異はどこに求めるべなのだろう。業務を広げると狭くするのと……。そこになにか教訓がありそうな気がする。

（公木子）

日比谷物語 ⑱③

山岸弘明

帝国ホテルの震災

この日、ライト設計の竣工式を迎えるはずだった帝国ホテル新館は、幸運にも震災の魔手をのがれる。「落成会館披露の当日、しかも祝宴開始の直前にかかる大災禍が発生するとは、いかなるめぐり合わせというべきであろうか。……時計の針はちょうど十一時五十八分を指していた。私は何か異様な鈍い地鳴りのごとき物音を耳にしたと思った途端、足もとから突き上げてくる激動を全身に感じた。はげしい地震である。大地が大揺れに揺れ、建物は突きあげられ、突き下げられ前後左右に揺れる。

……裏玄関をでると向かい側の東京電灯本社は早くも火災を起こしたらしく窓からもうもうたる黒煙が噴出している。（営繕主任の甲斐原君がホースをもって東電本社に飛びこんだが）『ホースから水がでません』という。東電の従業員たちもすでに社屋を見捨て全員退避した。

……火の粉は屋上にも無数に落下する。破損したガラス窓からは容赦なく黒煙が入る。しかし水がでないため消火は思うに任せない。ただ焼消し、踏み消すだけである。私の脳裡には、いまここで新館が焼失したならばこれを再建することは不可能であろう、との考えが閃光の如くひらめいた。私は励声一番、従業員を叱咤した。『水がなければ身体で火の粉を防げ。どんなことがあってもこの建物を燃やしてはいけない。命がけで守るんだ』。

……すると今度は北側の道一筋を隔てた愛国生命保険のビルディングが窓から黒煙を噴きはじめた。飛び火が入ったもののようである。これは現在の日生ビルの位置にあった。従業員はすでにこぞって避難したらしく、屋内には人影一つ見い出すことができない。もし建物が炎上すればホテルにも必ずや類焼の厄にあうに違いない。一難は去ってまた二難が迫り来たのである。私は愛国生命ビルを指して『あの窓を閉めろ。なかの火を消せ』と叫んだ。するとたちまち何人かがビルに走って火を消し窓を閉じて帰ってきたので、われわれは思わず歓声を発して、いっせいに拍手した。

『ホテルとともに七十年』のなかでホテル王といわれた犬丸徹三氏が述懐している。

震災直後の有楽町駅周辺（ライト設計の帝国ホテル＝中央＝が災害をまぬがれた）

日比谷物語 ⑱④

山岸弘明

震災の救済活動

大正十二年の関東大震災は日比谷の町を廃墟と変える。有楽町でかろうじて災禍を免れたのは〝そこら〟の位置にあった報知新聞と、新有楽町ビルの東京日々新聞、日比谷署、有楽稲荷。有楽町三丁目の三井集会所と愛国生命の六棟。その三井集会所も「本館は木造入母屋造平家建の純日本風で五百坪以上の堂々たる建物で（あったが）大震災の折、南側の柱が数本内法鴨居上で折れたため、大きな屋根は瓦そのまま軒先を地上についていた」（大西儀八氏の覚書『関東大震災と三井不動産』）といった具合で、直後取壊しの運命が待っていた。

震災直後の日比谷を『関東大震災全史』が書いている。「ぽうぼうとして満目荒涼たる一面の広野。石のかけらとれんがの壊れとあめのようになった鉄とうず高い灰と死体（がつづき、日比谷交差点は）無数の自動車が疾駆して、その間をたずね人をたてたシャツ一枚、やぶれゆかた一杯の通行人が左右に逃げまどう。いままでならばしゃれた流行の装いをこらした紳士淑女が遊楽の巷へといそぐこの日比谷街頭には、焼石の茶赫色の灰のうえにおかゆと冷水の接待があってたくさんの人だかりだった」。

有楽町周辺の罹災者は自然に宮城前と日比谷公園に集まった。彼らは焼け跡から板切れや鉄板を拾い、これを組合わせたバラックを建てる。内務省の七日後の調査によれば日比谷公園五千六百人、東京市役所付近二千人、宮城前一万三千人、東京駅付近五千二百人となっている。帰る所がないまま避難をつづけるのであった。

官民一体となった救援活動がはじまる。警視庁、東京府・市、三菱地所、帝国ホテルなどによる救護隊、飲料水、飲料品などの提供であった。三菱地所の『丸の内今と昔』によれば「二日目のお昼ごろには身をもって逃れた人たちがいよいよ空腹を感じてきた。そこで三菱本社から数十俵の米を貰い受け、ただちに炊出しにかかる一方、乳児その他老病者に対してコンデンスミルク、ビスケットなどを提供した。しかし、この程度では到底一般の満足を与えることができない。……東京府知事ならびに東京市長宛米の提供を仰ぎ、更に炊出しを続行した。しかし数十俵の米をもってしても収容罹災者に対して一日わずかに一個の握りめしかしか与えられなかった」。

激震直後の有楽町（日比谷交差点から有楽町方面を臨む。人々はあぜんと成行を見守った）

日比谷物語 ⑱⑤

山岸弘明

有楽町の復興

前回で、山かん横丁の最後を書いた。信泰洋服店（大正九年、楼勝館）、日本ジケートコットン（明治四十四年）、山水楼、日比谷タクシー、カフェオデッサ、江露法律、神田新聞店、集成社印刷、日比谷理髪、有馬商店、折笠医院、健心社……。昭和はじめの電話番号簿や商店名鑑などに、最後の住民名が載っている。

有楽町っ子の通学した日比谷小学校は無事だったが、川ひつとはさんで多くの子弟を越境入学させていた銀座・泰明小学校を焼滅させていた。

「（九月には）焦土のなかをわずかばかりならして建てた外国寄贈の天幕の中で焼トタンを敷いて授業がはじまりました」。十二月バラック一棟ができ、翌年八月までに十八学級分が完成するが、「多くの住民が離散し、結局クラスメートの半分はそれっきり銀座の学校へは戻ってこなかった」。泰明百年ものがたりに書いている。

十五年五月、外堀ぞい市電線路敷を買収、旧校舎敷と交換して得た現在地千五百坪に新校舎の建設を決める。鉄筋コンクリート三階の現校舎が完成するのは昭和四年六月のことであった。

有楽町駅も震禍を免れることはできなかった。「さすが丹念にレンガを積みあげた駅の高架部分はビクともしなかったが、ホーム上は延焼で火の海と化して大損害を受けた。当時はホームも鉄骨支えの部分も総アスファルト敷きであった。これが猛火で溶け黒飴のようにたれさがり、鉄のアンゲルが各所で露出して、アバラ骨のように無残な姿をさらした。このためホームは使用できなくなり、都庁寄りに仮ホームを造り急場をしのいだが、使ってみると利用者が多くなかなか好評で、間もなく復旧した日比谷口とともに乗降客が増加する一方となった」（元有楽町駅長・橘川政人著『有楽町駅舎今昔』）。

震災を機に有楽町駅は大きく変わる。急ごしらえの東京寄り改札は京橋口、都庁として残り、新たに銀座口を誕生させる。駅の中央高架下にはアーチ二画をそのまま通り抜ける横断道路も完成する。そして、昭和十八年には、中央口ができて現在の駅舎が整うのであった。

現在の有楽町駅中央ガード（関東大震災を契機にアーチ二区画をぐりぬいた横断道路ができてグンと便利になった）

日比谷物語 ⑱⑦

山岸弘明

震災後の仮社屋

大正十二年の関東大震災は首都東京に潰滅的な大打撃を与えた。企業の多くは社屋を失なって、仮風のビルを求めていた。犬丸徹三氏の書いた『ホテルとともに七十年』によれば……。

「わが帝国ホテルは旧館がほとんど倒壊したものの、新館はわずかに焔熱により数枚の窓ガラスを破損したのみで、他には震火災による瑕瑾を一つだに負わず、満目荒涼たる焦土の帝都に魏然たる姿をみせてそびえたっていた。私は新館が罹災を免れたのは実に大いなる幸運というべきであると思い、このさいこの建物を最も有意義に活用したいと考えた。

そこで、社屋焼失の難にあり、取材活動も意にまかせぬ東京朝日新聞、電報通信その他の新聞通信各社に、ロビーの一隅や客室を提供することにした。次に英、仏、米、伊などの各国駐日大使館にも同様に客室を事務所として提供し、さらに王子製紙、東京電灯、大倉組、日本土木、大倉商事、高田商会などの罹災各社にもホテル内に仮本社を設置せしめた」。

大震災はビル建築のはしりともなった三菱ケ原時代の赤レンガが建物にとっても一大試練の場となったが「東京会館の半壊、内外ビルの倒壊を除いて、致命的な打撃を受けたものは皆無であった。……ために東京市内ことに京橋、日本橋方面の事務所は翕然として丸の内に集中した。統計的にみれば大正十一年の丸の内における会社その他の事務所数は五一四にすぎなかったが、震災翌年の十三年には一、〇五四の大きにのぼった」（『丸の内今と昔』）。震災を機に引っ越したり、仮社屋を丸の内に三菱村に求めたのであった。

三井集会所の焼失をまぬかれた三井グループも、この集会所を復興の足がかりにしている。「大正十二年九月一日の関東大震災は四号館の竣工からわずか一年半後におこり、威容を整えつつあった駿河町一構の各建物はすべて類焼した。三井合名は有楽町集会所の構内に各社の仮事務所を急造することを決め、木造平家建て亜鉛板ぶき六棟、付属建物とも一、六八〇坪の建設を十月末完成の条件で大林組に委託した。工費の概算は三十万円であった」（『三井不動産四十年史』）。

関東大震災でビクともしなかった帝国ホテルは本社を焼失した朝日新聞の仮社屋にもなった（『有楽町六十年＝朝日新聞社』から）

日比谷物語 ⑱⑧

山岸弘明

三井信託仮社屋

大正十二年、三井合名は震災後の三井各社仮事務所を現在の三井ビル、三信ビルにあった三井集会所構内に建てた。

「こうして三井合名の本社は日本橋駿河町から一時期、有楽町の一角に移ることになるが、これはあくまでも仮住居であり、仮本社である。再び駿河町に戻ったのは昭和四年六月十六日であった」（『技術史三井本館』）。

翌十三年三月には、三井信託の仮本社が三井集会所に隣接した三丁目三番地に建設される。『三井不動産四十年史』によれば「当面の急務に設立の出願中であった三井信託の本社社屋の問題があった。業務の性格上、少なくとも堅牢な金庫は必須な条件であったからである。三井合名不動産課は各社の仮事務所を急設した有楽町集会所に近い所有地に、米国モスラー社製の厚さ六㌢の扉をそなえた金庫室をもつ三井信託本社を建設することを決定、長野宇平治の設計、清水組の施工によって大正十三年一月から急遽着工した」とある。

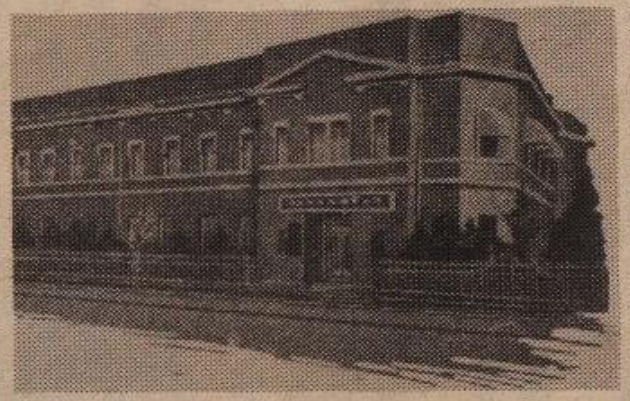
三井不動産顧問の石田繁之介氏が六十二年に三友新聞紙上に連載された「技術史三井本館」（『三井本館と建築生産の近代化』と改題されて、昭和六十三年、鹿島出版会から出版）にも三井信託仮本社の詳しい記述がある。

「建物は木造二階建、延四四二・五坪、坪あたり工事費約四百三十八円。大地震直後の物価変動、資材費・労務費の大暴騰、金庫室二十四坪の特殊工事費を差し引いてもかなりのものといえよう。

この建物は現在の日比谷三井ビル、三井銀行本店のある部分の日本生命ビル寄りの鋭角の敷地に建てられた。仮本社でありかつ木造の建物とはいいながら手を抜くことなく、これがそのままパリあたりの街角に建てられたとしても何ら違和感が感じられない程に洗練され、古典主義の様式を正当に表現したものとしてさすがといわざるを得ない。

一階の階高は地盤面より三尺上りとし、階高を一、三階とも十六尺、約五㍍におさえた。一階に三井信託、二階に三井合名の入居、これが設計条件になっていた」。

「昭和四年六月、三井本館が日本銀行や三越に隣接する日本橋駿河町に竣工し、三井信託は本店を同館に移転した。さらに翌五年七月不動産部を新築の麹町区有楽町の三信ビルに移し、東京支店と称した」（『三井信託銀行六〇年のあゆみ』）のであった。



震災直後に誕生した三井信託仮社屋（１階が信託で、２階に三井合名が入った―『三井信託銀行五十年史』から）

日比谷物語 ⑱⑨

山岸弘明

邦楽座

震災後の大正十三年から十五年にかけて、いわゆる復興景気に沸くことになる。有楽町の復興ブームは、一面焼野原と化した駅東、すなわち二丁目マリオン周辺からはじまった。一つは後の松竹ピカデリーになる邦楽座であり、一つは公害研究にかわる電気研究所であり、そして現在のレバンテ＝中央自動車、現マリオンの朝日新聞などであった。

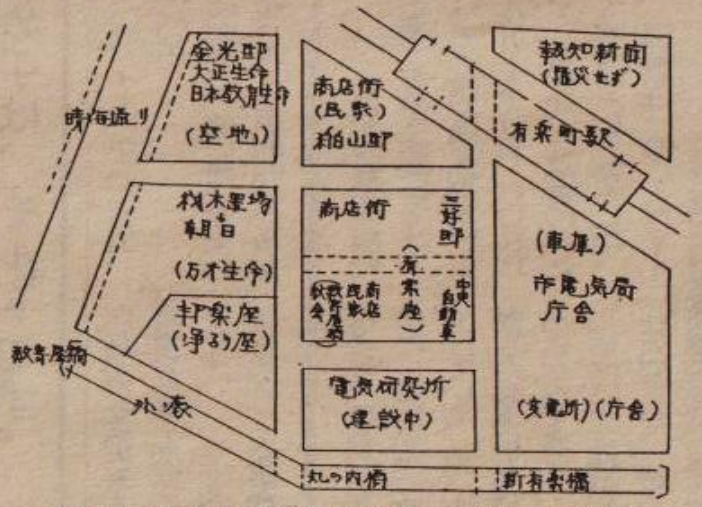
震災で焼けた浄瑠璃座はわずか一年のはかない運命に終わったが、跡地に立った邦楽座は昭和二十年の戦災にも耐えて三十二年、朝日新聞社に包含されるまでつづく。

「朝日新聞の裏側で外濠にくっつくように建ってましたね。朝日新聞が大きくなったとき、いっしょのビルになっちまったけど、最初のは三階かなんかの鉄筋コンクリートで趣きのある劇場だったね」（富永春夫氏の話）。

この邦楽座の思い出を仏文学者の朝吹登水子さんが『日比谷・有楽町を愉しむ』に書いている。「私が十四、五歳のころ、有楽町に有楽座という外国映画専門の映画館があってね。当時のハリウンドの名優＝ゲーリー・クーパー、フランチョット・トーン、グレタ・ガルボらの主演映画、そしてヨーロッパの名画が上演されていた。

箱入り娘の私は、兄たちと映画をみに行くにも監督の家庭教師といっしょだったが、当時はもちろんテレビもなく、海外旅行に出掛けられる日本人も少なかった。ハリウッドは大きな夢の世界であり、映画は日本の少年少女を未知の西洋社会へと誘ってくれたのである」。

『有楽町六十年・朝日新聞のうちそと』によれば「大正十三年七月邦楽座として誕生。昭和九年六月丸の内松竹劇場、十二年八月国際ニュース劇場、十三年六月丸ノ内松竹劇場、十四年十二月邦楽座、二十一年九月米軍に接収されてピカデリー劇場」と何度も改名した。二十四年四月にはその接収も解除され日本人向けに再会場。娯楽に飢えた東京市民でにぎわった。三十一年六月、朝日新聞社の大増築工事で解体。三十二年七月、丸の内ピカデリーとしてよみがえり、六十一年まで。



震災直後の有楽町の駅東部の復興＝大正末期から昭和初頭、（カッコ）内は震災前を表わしている。震災では、駅から銀座寄りすべてをが燃えた。

日比谷物語 ⑲⓪

山岸弘明

電気研究室

後に公害研究所と変わる東京都電気研究所も、大正十四年の竣工であった。電気研究所は、電気の利用開発に関する研究調査機関。ここへその昔の外濠石垣と道路敷で、明治四十年石垣撤去後、市電気局の所属地として空地になっていた。

大正十二年三月工事費百万円を投じて着工するが「工程ほぼ二割に及んで九月一日の関東大震災にあい、相当の被害を受けたため工事は一時中断され、翌大正十三年度において、復興費と工事請負ならびに物品供給契約補給金二十四万四千二百円余を追加計上して、これが復旧ならびに建設に努め、大正十四年十一月一日に来賓多数の参列を得て落成開所式が行なわれた」（『電気研究所四十年史』）。

鉄筋コンクリート地下一階地上四階、建坪三六八坪。昭和四十二年美濃部都政の誕生で「東京都公害研究所」にかわり五十九年まで。

現在レバンテになっている中央自動車が竣工するのは大正十三年のことであった。鉄筋コンクリート三階。一階が吹抜けの車庫と工場で二、三階が事務所。屋上には社旗へんぽんとひるがえった。施工・大倉組。

社長の小林菊造氏は明治二十一年生まれ。大倉組をへて、中央自動車を設立。日本自動車商工連合会会長。昭和はじめ資料によればフォード、リンコン、トラクター、保険代理引受けとあり、有楽町本社のほか芝、麻布、赤坂などに支店があった。昭和二十年の戦禍を免れ二十一年レバンテに、五十七年日本建築学会が指定した建築学上貴重なビル二千棟の一つに選ばれた。

大正十四年二月には朝日新聞が現マリオンの地で有楽町社屋のボーリングを開始している。『朝日新聞小観』によれば、地鎮祭が三月十日で、基礎コンクリート工事十二月、鉄骨組立十五年一月、上棟式四月となっている。ここは江戸時代数寄屋橋御門の桝形があったところで「掘りするむにつれて、昔の数寄屋橋見附の形状を明らかに知ることのできる巨大な石垣を発見した。丁度敷地の中央にあたって六、七尺くらいの巨石をつんだ石垣が厳然として相対し、その間に見付の入口を扼した江戸時代のこの方面の固めを眼前に展開した」（同）。

大正14年に外濠に竣工した電気研究所（のちに公害研究所にかわった―『電気研修所四十年史』から）

日比谷物語 ⑲①

山岸弘明

朝日新聞の進出

「（朝日新聞）東京本社の丸の内進出の構想は、かなり早くから村山社長らの胸中にめばえていた。関東大震災の翌年十三年十二月になって数寄屋橋のたもと有楽町の一画に日華生命保険会社（現在の第百生命）所有の地所（当時、間組材料置場）がみつかった。位置は申し分なく地質もすばらしいことがわかったので早速買収することになった。土地の面積が九百九十八坪、価格は百万円であった」（『朝日新聞の九十年』）。

当時、建築界の巨匠といわれた石本喜久治氏設計で、鉄筋コンクリート八階、総工費二百五十万円であった。施工竹中工務店。

朝日新聞の新社屋はみるからにユニークでハイカラ。外濠に影を落とす景観は東京の新名所の一つになっていく。「信じられないことだが、できたばかりの社屋は一、二階がブルー、三階以上が黄色だった。……虚飾をさけ、必要なものだけで形を整えることにつとめ、色彩も華美に失せずまた無味乾燥に陥らぬよう工夫をこらした。……現テレビ朝日顧問の横田武夫氏は開業直後の昭和四年入社『とにかくハイカラな印象だったね。こういう社屋で働くのを誇りに思ったものでした』」（『有楽町六〇年』）。

明治十二年、村山竜平を初代社長として大阪で創刊。二十一年東京進出を果たしていち早く全国紙としての基礎を築いた。昭和二年有楽町進出当時の発行部数は百万余部。「三月二十日、滝山町の社屋から移転し、四月八、九日の両日盛大な披露会を催した。八日には若槻首相をはじめ朝野の名士二千余人を招いて社内をみせ、屋上で茶菓を接待した」（『朝日新聞の九十年』）。

以来六十年、朝日新聞はニュースの殿堂として有楽町とともに歩むことになる。この間二・二六事件では本社襲撃という悲運も体験するが、満州事変を契機に黄金時代を迎え、最新の高速輪転機がうなりを生じた。そして終戦。戦争中に軍の言論統制に苦しめられた新聞界は、今度は連合軍の強い圧力に悩まされたりもした。三十五年大増築工事。五十五年、住みなれた有楽町を後に築地への引っ越し。これらの変遷はそれぞれ項を改めて紹介する。

竣工時の朝日新聞社屋（ハイカラな軍艦型が有楽町の代表ビルになっていく。手前は古い木製の数寄屋橋。右肩の肖像は村山竜平）『朝日新聞小観』から

室町春秋

極月払い

師走に入る。十二月の異称には「極月」（ごくげつ）というものもある。

江戸時代には、呉服などの支払いに「極月払い」というのがあった。この月に、まとめて支払う方式である。一年間のツケが可能であった。

三井越後屋が江戸に呉服店を開いたころ、呉服の大店が相手とするお得意は、ほとんど極月払いであった。そのため、呉服店側は、相手方まで荷を背負って品物を見定めてもらう手間は当然のこと、場合によっては一年近くも支払いがあとなの、利子の分まで勘定して割高となる。

そこへ越後屋が庶民を相手として、店先で反物の端切れを安く現金売りするし、掛け値もしない商法を始めた。

ところが、世の中はさまざまで、深窓のお嬢さんや奥方にとっては、混雑した店先は苦手だった。店の手代が荷を背負ってきて部屋いっぱいに品物をひろげてもらう。時間のたつなど考慮に入れず、あれこれと品定めに熱中する。

買い物の楽しさといった面からいえば、それぞれ別の趣きがあるだろう。現在、日本でも通信販売が日ごとに盛んになっている。カタログによる品選びもあるだろうし、電波の画像による品定めもあるだろう。しかも申込むのに電話であったり、FAXであったり。届けられるまでの日数にしても驚くほど早い。

支払いは年に一度の極月払いというわけにはいかなくても、カードによって二、三カ月ずらすことができるし、月賦も可能である。苦と簡単に比べられない。（公木子）

日比谷物語 ⑲②

山岸弘明

震災後の駅東部

震災後の大正十二年秋には、現在マリオンになっている旧日劇の地に大正生命、日本教育生命仮社屋と金光邸が建っている。

第一七七回で紹介した大正生命が、日比谷濠に面した旧社屋を震災で失ない、タクシー自動車の閉鎖で空地になっていたこの地に、二階建洋風の木造仮社屋二棟を建設したもので、金光庸夫氏はそのオーナー。大分県選出代議士として、戦中、戦後の政界に重きをなした。

昭和四年に日本劇場の建設がはじまるが、大正生命と日本教育生命の二社は、これにともなって朝日街に再度仮社屋を建てて移った。木造二階建洋館。現在、初藤、浜伸、パチンコサンスターなどになっている。十三年大正生命本社ビルの竣工で東京支店と変わり、二十年強制疎開で撤去。

『保険年鑑』によれば「本建築は会社発詳の地である日比谷交差点角にしたいという念願から、昭和十一年ようやく隣接地の買収に成功、十一月着工、二年余を費して十三年十一月大林組により地上八階地下二階の現社屋が完成した。本社屋が完成した翌十四年八月、社長金光庸夫氏は阿部内閣の拓務大臣に就任した」と書いている。

関東大震災で焦土と化した駅東部の復興は早かった。邦楽座、電気研究所、朝日新聞とビルラッシュを迎え、木造の本格建築とバラックがまじって大正末期にはほとんど建て直されていた。

バラックの代表格は市電気局。「木造二階建てで四角く囲まれた真ん中に中庭がありました。窓が高く陰気な建物でした。官舎の脇には外濠線の車庫があり、二十台くらい入ったでしょうか。関東大震災で焼けてしまいました」。大正十三年六月、芝浜町に移転した仮庁舎を数寄屋橋畔の交通会館の地に戻した。

「バンガロー風の屋根のある二階建となった車庫はなくなった。代わりに五棟が国電に並行して渡り廊下でつながれ、有楽町側には切符などを売る印刷工場」（『有楽町有情』）も作られる。これらは必要に迫られて増築をくりかえしたもので、昭和二十年の強制疎開までつづいた。

大正末期、建築ラッシュに沸いた駅東部ビルの１つ「中央自動車」（現レバンテ）―『大東京年史』から

日比谷物語 ⑲③

山岸弘明

大神宮の引っ越し

関東大震災は明治以来五十有余年にわたって築きあげた首都東京を消滅させるが、日比谷の地からも、警視庁、消防本部、日比谷大神宮、三井集会所など明治を伝える建造物もこのとき姿を消している。

『東京大神宮沿革史』に大神宮引っ越しのいきさつが載っている。「本院の復興策は着々進行の途上にあったが、大正十三年に至って、東京市は、未曽有の災害にかんがみ新たに将来に処するの方針から街路の拡張、緑地帯公園の増加率を考慮して新計画を発表した。この結果、本院敷地は一部を公園地帯に割かれて狭隘を余儀なくされ、かつ防火地区の設定は神殿の木造建築を許されなくなり、本院は新たに新敷地を見付けて、これに移転するやむなきに立ちいたった」。

今日ならコンクリートづくりの神社建設も抵抗ないが、当時の世情はこれを許さない。大神宮は日比谷での再建をあきらめて、麹町区飯田町の中野忠太郎所有地を移転先に決める。

後の五代会長・藤岡好春氏は前出『沿革史』のなかでこうのべている。「移転費の負債は有楽町の土地（貸地を除く）を売り、償還する予定であったが、売った相手がつぶれて約三十万円が徴収不能となった。当時本院の年間予算が約八万円であったから三十万円はすこぶる痛手であった」。

昭和三年十月十四日夜。日比谷大神宮を出発した遷座の行列はしずしずと歩みだした。こうして、明治八年、大隈重信邸跡に建設されて以来、四十八年間にわたった日比谷大神宮の歴史が降ろされた。現在、飯田橋駅前の東京大神宮はこの後身。結びの神さまとして今日もにぎわっている。

大正十三年に東京市が発表した復興計画図は昭和二、三年にかけて実行に移された。一つは晴海通りの拡幅工事と数寄屋橋の恒久化であり、一つは大神宮周辺の区画再編であり、さらに都心建造物の耐火構造化であった。

晴海通りはこれまでの二十五㍍はばを三十八㍍にひろげようというもので、通りに面した両側敷地が削られてこれにあてられるのであった。

昭和２年に行なわれた晴海通りの拡幅工事―右側は現在の電気ビルとパークビル、左側は劇場街になっている（『有楽町今と昔』から）

日比谷物語 ⑲③

山岸 弘明

大震災を境に、朝日街にあった有楽座と数寄屋橋教会がなくなり、周辺の空地を加えた跡地は整備されて有楽町駅前の朝日街一、三列目になる。中央自動車、宮沢自動車商会、三芳邸と三勇社印刷、丸の内署長官舎とその寮、鈴木法律事務所が生まれ、やがて大正生命、報知診療所、上田三交社などが加わる。現在の町並が整ってくる。

の一画は一、二階のバラックらしい木造建築がならんで震災の爪跡を伝えている。

そのバラック木造建築のひとつ大和田が、震災直後のジャズ狂たちの巣になったという興味深い記述が『ジャズで踊って』（瀬川昌久著）にある。「大正十三年になると有楽町の〝大和田〟というなぎ屋の広い食堂が踊り場を失った連中のたまり場になった。そこの女給はみなダンスの心得があって、うなぎ

関東大震災直後の数寄屋橋際（手前の有楽タクシーと右奥にみえる東京商業興信所は現在ニュートウキョウになっている）

晴海通りをはさんだニュートウキョーの一画も震災ですべてが灰燼と化した。大正十三年ごろ、数寄屋橋に面したニュートーキューの地に有楽タクシーと東京商業興信所が生まれ、享楽美術クラブ、あけぼの、青雲堂印刷、中央文芸、更科、大和田、富可川とその後のこの町を代表する商店が、相ついで建設されてくる。

大正末期や昭和はじめの写真をみると、東京タクシーは洋館木造で、一階が車庫兼待合所、二階が事務所。正面に社名と電話番号、行先別の料金表が大書きされている。となりの興信所も洋館木造二階建て。隆和ビルの定食をたべると相手をしてくれたのである」。現在の隆和ビルガード沿いの一画にあった。

後の映画街となる日比谷大神宮周辺は昭和はじめの都市計画にともない、大きく様変りを果たすことになる（後述）。そして警視庁、消防本部、大正生命などを焦土と化した駅西部の日比谷濠周辺はもっとも復興の遅れた街でもあった。昭和はじめに少年期をすごした鈴木重行氏によれば「当時はまだ第一生命やパークビルのあたりは原っぱで、トンボをとったりして遊びました」。これらの空地がビル街にかわるのはまだまだ先のことなのであった。

日比谷物語 ⑲⑤

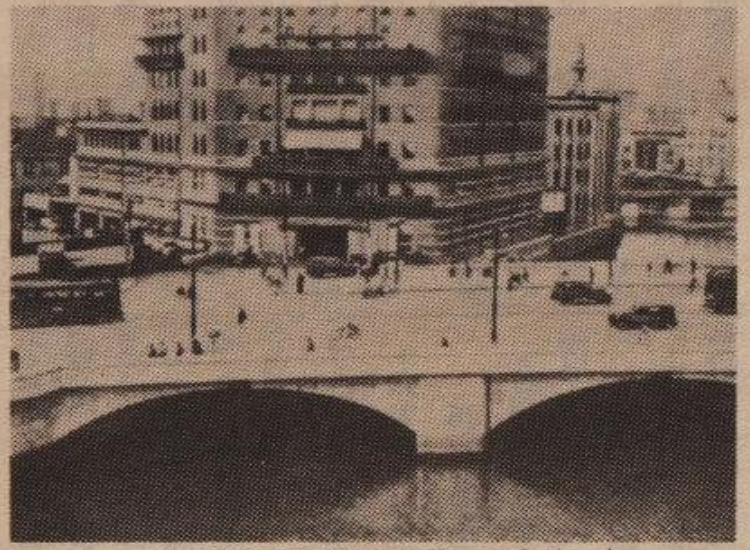
山岸 弘明

昭和の市街再編

昭和三年、復興計画に基づいて数寄屋橋が架けかえられている。明治四十年に架けられた木橋を拡幅、鉄筋コンクリート橋に改めたもので、市電が走り、外濠には小舟も行き来した。後に〝君の名は〟で全国に知られるようになる、東京名所・数寄屋橋の誕生でもあった（後述）。全長三九・五㍍、幅員三六㍍。総工費三十四万二千円。昭和三十三年、外濠埋立と高速道路工事で撤去。高速道新数寄屋橋と名も改めた。

大神宮の去った現在の映画街周辺も、この時大きな様変わりを経験している。旧市街を一新した現在の町並に変わったのである。大正ロマンを現出した平野屋の三角街は、朝日生命、ツインタワービルの町並に、広場と市電停留発着所に敷地を二分された三井集会所は、駅寄りにやがて三信ビルをつくり、もう一方の地は現在の三井ビルになっていく。そして現在のシャンテ周辺の町並もこのとき完成するのであった。

昭和の有楽町は新聞の町、電気の町、そしてアミューズメントセンターとして発展する。第一九一回で朝日新聞が有楽町進出を果たし、昭和二年から五十五年まで数寄屋橋畔に軍艦型の社屋を構えたことを紹介したが、これより早い明治四十四年から昭和四十一年まで有楽町ビルの一角に東京日々新聞→毎日新聞が建つ。そこには明治三十九年から昭和二十年まで報知新聞があって、終戦後の二年間は読売新聞に。そして昭和二十三年から三十年まで、現在ラクチョウビルの地にサンケイ新聞の輪転機が回った。文字どおり、日本の大新聞のすべてが、この有楽町を本拠としたのであった。



「君の名は」で知られるコンクリートの数寄屋橋は昭和３年に竣工した。後方は朝日新聞社（『東京大十六橋』から）

朝日新聞の電光ニュースが町行く人々に刻々とニュースを伝え、号外の鈴の音もここから飛びだした。周辺はインクの香りがみちあふれ、社旗をなびかせたハイヤーが埋めた。飲み屋やマージャン店、喫茶店や食堂も、時間待ちやオフタイムのブンヤのたまり場であり、印刷職員たちの巣となっていく。戦前・戦後期を通じて有楽町は新聞社の、そしてニュースの町へと変わっていく。

日比谷物語 ⑲⑥

山岸弘明

ニュースの町

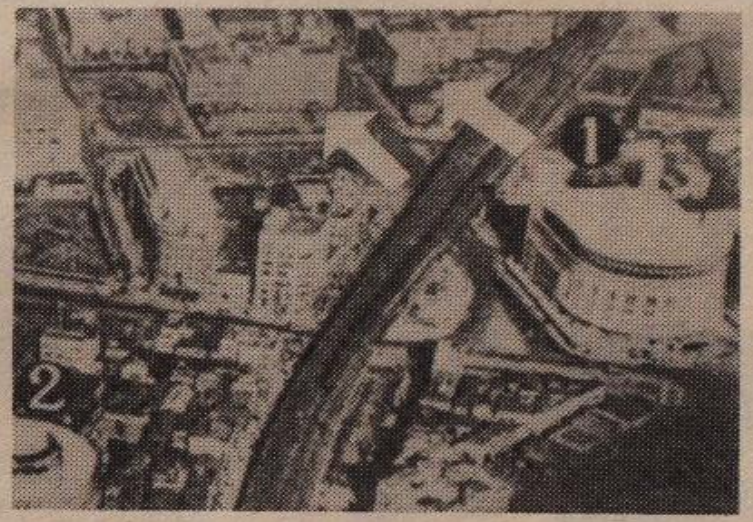
有楽町新聞街の昭和はじめを高浜虚子が『大東京繁昌記』に書いている。「日日、報知の二大新聞が街をへだてて相そびえている。それに近く東京朝日も時事も宏壮な家屋を新築した。大きな新聞社はみな丸の内に集まってくる勢いがみえる。夜遅く帝劇を出て有楽町駅まで歩くとおびやかされるのは、日日や報知の自動車が翌日の新聞を満載して社の中から出てくることである。各階のどの窓にも電燈が明るくともって、その中には人の活動している様が想像される。それをうかうか眺めながら通っていると、警笛を鳴らしてたちまち自動車が家の中から現われてくる。それが往来にきたと思うとまっしぐらに走り去る。その自動車に驚いてとびのくと今度は人をのせた乗用車が一方からやみをついてくる」。

有楽町新聞街の第一号は報知新聞社の明治三十九年であった。報知は明治五年駅通頭・前島密の援助で小西義敬が銀座で創刊した〝郵便報知〟に始まる。一時は福沢諭吉の支援で改進党色を打ちだすが、その後紙面を大衆化して、関東大震災当時発行部数三十六万部をかぞえた。

「(道路一つをへだてた東京日日と東京の新聞業界を二分した報知も、震災後、朝日、日日の大攻勢ではじまった新聞戦国時代のあおりをまともに受けることになる)昭和二年、大隈重常侯が社長になって以来経営が苦しくなった。以来野間清治、頼母木桂吉、三木武吉と次つぎに社長が交替したが社勢は向上せず、昭和十六年五月、三木武吉が読売新聞社に正力松太郎をたずね、相談の結果、読売新聞社が報知の経営を引受けることになった」(『読売新聞百年史』)。吸収合併の悲運が待っていたのである。

報知新聞の初代社屋はそごうの北半分、木造三階建て洋館。明治四十三年の有楽町駅開業時、駅前にPR用の大のぼりをたてた写真が残っている。

「(二代目)社屋は大正十一年十一月二日、同紙創刊五十周年に新築落成したもので、鉄筋五階建て延べ約五千平方メートル。翌十二年の関東大震災にもよく耐え、昭和三十年一月取こわしまで、三十二年風雪にたえた」(同)。



戦前の有楽町新聞街＝中央上部の矢印㊧に日日と㊨に報知が並んでいる。①は日劇、②日比谷映画劇場（『東京30年史』）

日比谷物語 ⑲⑦

山岸弘明

報知と読売新聞

経営不振におちいった報知新聞が昭和十七年、読売新聞の傘下に入ったが、しばらくは『読売報知』として題号が残った。報知が今日のスポーツ専門紙としての活路を開くのは、戦後の二十五年一月、朝刊スポーツ紙として再生の第一歩を印してからだ。

「報知新聞は読売巨人軍を中心とするプロ野球こそ、新生日本を支える大きなポイントであることに着目、プロ野球の報道に力をきいた。巨人軍の戦後初優勝とともにプロ野球の人気は爆発的に盛りあがり、その編集方針は読者に歓迎された」『読売新聞百年史』にそうある。

この報知新聞を吸収合併した読売新聞が、そごうの地に本社を構えるのは終戦直後の二十年十月からの二年間であった。この年五月の東京空襲で、プランタンにあった銀座本館と有楽町の旧報知別館を焼失。一時、築地本願寺で細々と新聞発行をつづけていたが、終戦とともに有楽町別館の社屋復旧作業にかかり、この時、四カ月ぶりに本格紙面を再開したのであった。

読売新聞は明治七年十一月の創刊で、江戸時代の〝読売瓦版〟に由来するのだという。明治中期には坪内逍遥、幸田露伴、尾崎紅葉らを迎えて自然主義運動の本拠とも呼ばれ、大正十三年、正力松太郎が七代目社長に就任してからは、独創的企画と紙面刷新で驚異的な発展をとげることになった。

報知新聞を統合して、旧報知社屋であった現在のそごうに本社を構えた二年間に、天下を衝動させた大争議とレッドパージの混乱があった。末広労働争議調停委員長を中心に、正力と徳田球一が卓をたたいて灰皿を飛ばして緊迫した交渉がくりかえされ、正力の主張が貫徹して読売新聞の経営が維持された。

二十一年『読売報知』の題号を『読売新聞』に戻し、同じ銀座本館復旧工事も完了して、有楽町の別館から本社を移した。

この読売（報知）新聞と二メートルの道路一本はさんでライバル『毎日（東日）新聞』がそびえて報知―東京日日、読売―毎日の四十年間にわたる激しい取材合戦と拡販戦争をくりかえすことになる。

大正11年に建設された報知（読売）新聞社屋。昭和30年にとりこわされ、現在そごうになっている

日比谷物語 ⑱

山岸弘明

毎日電報と東日

第一九六―七回で紹介した報知（読売）新聞と有楽町で四十年競争をくりひろげた一方の雄・東京日々（毎日）新聞は、現在の新有楽町ビルと有楽町ビル（一時）にあった。

東京日日新聞は明治五年、東京初の日刊新聞として創刊、一時は福地源一郎社長のもと政府御用紙ともいわれたが、三十八年、三菱が買収して、後の総理大臣加藤高明が引き継いだ。

「最初加藤が伊東巳代治から日々新聞を譲り受けたとき、銀座の社屋と一緒に譲渡することが伊東の希望であったらしい。しかし加藤はこの社屋を不十分であるとして買い受けなかった。四十一年には新たに丸の内の有楽町、即ち現在の社屋（新有楽町ビル）の一部に地を卜して建築に取りかかったのである。それが四十二年三月に至って完成した。引っこしは三月二十、二十一日の両日で、この新築の祝賀をかねて二十九日には創刊満三十七周年を記念し、一週間にわたって記念号を発行した」（『東日七十五年史』）。初代社屋は木骨モルタル洋風の二階建。四隅に回教寺院風の塔をめぐらせた本館と工場の二棟があった。

加藤の社運をかけた有楽町進出も折からの不景気風にあおられて、またたく間に経営は悪化する。引継ぎ時に四万五千あった読者も半減し、二年後には毎月二、三千円ずつの欠損を生むという最悪の事態を迎えていた。

明治四十四年、東日は大阪毎日新聞に吸収合併されることになった。大阪毎日は明治十五年の創刊。大阪を中心に大阪朝日新聞をライバルに激烈に競争をくりひろげながら急速に発展していた。この大毎の東京進出にはライバル朝日の東京進出成功という伏線があった。

「本山彦一社長は先に（三十六年十月）電報新聞（同一月星亨創刊）を買収して毎日電報と改題し、鋭意経営につとめたがうまくゆかず、毎日電報の廃刊は東京進出の敗北を意味する。是が非でも成功に導かねばならぬ、という時にこの東京日日の合併話が持ちこまれたのである」（『日本新聞大観』全日本新聞連盟編）。大毎が喜んだのも無理はなかった。

明治42年に建った東京日々（毎日）新聞社屋
＝大正５年焼失。東日１号館をへて現在、新有楽町ビル。（『毎日新聞百年史』）

日比谷物語 ⑲

山岸弘明

大毎の有楽町進出

「日日新聞は大毎と合併した。銀座から日比谷に通ずる通りの省線ガードに近い毎電発行所（現在の電気ビル一部）に立てこもって、四年の間あてもない奮闘をつづけてきた一党が新築して間もない東日の社屋に引越したのは明治四十四年の二月末日であった。その日彼らは毎電の社屋を引きあげるにあたって『万歳』の声をあげようとしたということである。それを主幹の高木がすぐ近い日日の方へ聞えては気の毒だからと制止したという。その一事によってもいかに毎電側がこの合併を有利に解釈したかが明瞭に理解できる」（『東日七十年史』）。

当時の発行部数は東日が二万四千、毎日電報が三万五千で、合計五万九千部、日日の古いのれんに大阪毎日の新風を盛りこんだ新紙面が徐々に認められ、日を追って発行部数を増やしていく。

大正五年十月、東日本館社屋が漏電のため全焼した。幸い印刷工場は無事だったので、かろうじて新聞発行がつづけられた。直ちに新社屋建築に着手。翌年三月、鉄筋コンクリート三層の一号館を落成したが、いくばくもなく手狭となり、十年十二月隣接して六階建（地下とも）の三号館を増設した。あわせて一、三八〇・六坪。最新式の高速輪転機が地下に装備される。

社勢の隆盛は印刷能力をますます不足させた。大正十一年十月二号館を建設、十四年四月には旧工場を一新した四号館が生まれ、昭和三年十一月、元警視庁舎跡の払下げを受けて鉄筋コンクリート四階建（地下とも＝後増築）の新工場＝五号館も竣工。後に紹介する新館（東日館）と別館を加えた七棟が東日（毎日）社屋のすべてになる。

大正十二年九月の震災は東京市に潰滅的な被害をもたらしたが、震禍を受けず焼け残った東日社にとって、大毎日躍進へのきっかけとなっていく。ただちに非常体制がしかれ、散乱した活字をひろい集めた手刷号外が発行された。安否も知れない販売店を探し出して見舞い金や食料を配布し、販売網の確立をはかる。適切な応急措置が、この後の経営基盤確立につながったのである。

有楽町ビル、新有楽町ビルにあった毎日新聞社屋。
手前から１・２号館、別館、新館（東日館）。
（『日本新聞大観』から）

日比谷物語 ㉚

山岸 弘明

東日、報知の争い

「まさに非常事態中における大活躍であった。震災の厄を免れたる幸運とはいえ、その後東京における各新聞中、最大の発行部数をもつに至った源泉は実にこの不幸中の幸の上に立った本社努力の集積であり、十三年元旦紙数は実に一挙に八十万部をこえたのであった」（『毎日新聞百年史』）。

昭和に入って東京日々新聞は

有楽町新聞街の代名詞存在となった朝日新聞社の裏側発送口＝配送車が印刷したての新聞を満載して各地に散った（『朝日新聞小観』から）

〜〜〜

日比谷物語 ㉒

山岸 弘明

東日館プラネタ

「ぼくは大正十五年（朝日新聞に）入ったときの月給が七十円で、その年の秋正社員で八十円になった。二・二六事件の直前に社会部次長になって百七十円、それから昭和十五年、戦争のはじまる前の年社会部長になって二百八十円だった」

「夜勤で最終番の〆切りがすむと国鉄有楽町ガード下の夜あかしおでん屋・岩崎によく入った。お酒一本十五銭で勘定が一円にならなかった。東京日日、読売、報知などの顔なじみもいっぱいで、当時の有楽町は文字通り『新聞街、インク街』だった。今思ってもなつかしい」（『有楽町60年・懐かしい新聞街』荒垣秀雄氏から）。

元読売新聞記者の高木健夫氏も岩崎常連の一人。「お定事件のときにね、夕刊ではやれ銀座に現われたとかどこに現われたという。調べてみるとそんなことはない。それを朝刊で何となく訂正してね。もうしびれを切らして引上げようとしても、もう少しいようや、現場まだいるんだからって、朝の四時ごろまでいるんですよ。朝までやっているという岩崎しかないんだな」（『有楽町今と昔』から）。

新聞街の話題は戦中・戦後編で改めて紹介することにしたい。

さて、新聞街の一方の雄・東日（毎日）新聞が隣接地（新有楽町ビル南半分）にプラネタリウムを擁した東日館（新館）を建設して話題をさらった。

「この新社屋の運営は別会社の手で行なうこととし、資本金二十万円の株式会社東日館を設立した。館長は奥村信太郎で、さきに時事新報建直したあたった前田久吉が専務に就任した。鉄筋コンクリート地上八階、地下一階総延坪三千六百坪。昭和十三年十月落成。

東日館の六階から八階まで使ってドイツのカール・ツァイス社から四十七万七千円で購入したプラネタリウムを装置し、東日天文台と名付けた」（『毎日新聞百年史』）。プラネタリウムは、戦時下の少年たちにつかの間のロマンを感じさせもした。二十年五月、東京大空襲で被災、復旧は戦後二十二年五月。のち毎日ホールとなり、ラジオ東京（現在のTBS）の拠点ともなっていく。

戦前最後の本格建築物といわれる東日館。６階から上はプラネタリウムになっていたが、空襲で焼け、戦後はラジオ東京のスタジオとなった。（『毎日新聞70年』から）

日比谷物語 ㉓

山岸 弘明

東京市電気局

昭和の有楽町・日比谷はまた電気の町でもあった。市電とバスの東京市電気局（後の都交通局）、電気研究所、電気博物館、電気協会、電気倶楽部、そして市電気局は現在の東京交通会館の前身である。明治三十六年九月、東京市街鉄道が市内一番目の電車を数寄屋橋―神田橋間二・*キロに開業、当時、三菱所有地と皇居付属地（後市有地）であったこの地に同社線車庫を建設したことにはじまる。

三十六年図によればマリオンの旧朝日新聞側裏手に始発停留場を設け、外濠に沿った引込み線（後の電気研究所のところ）で車庫につないでいた。街鉄らによる路線網が確立するのもこのころ。同じ図に日比谷交差点（工事中＝当時は朝日生命のところで交差）を十文字に、神田橋、新橋、永田町へとのばし、三十八年には外濠を路線が一周して、東京の路面電車がほぼ完成する。

しかし、一方では「事業の発展は経営会社の乱立となり、市民は乗車券や貫金の不統一に悩まされ（もした）共通賃金制確立の叫びはやがて公営論の喚起と（なってくる）」（『交通局四十年史』）。時の東京市長尾崎行雄は意を決して事業の一切を引継ぐ。買収価格八、四五八万円。東京市電と市電気局の誕生であった。

この時、交通会館の地は市電気局車庫と変わり、大正七年には外濠沿いに本庁舎が完成、引込み線も外濠線から有楽橋をこえて引っぱった。この庁舎の変遷は第一九二回で紹介したが、昭和十年十二月には庁舎横手に電気局案内所が誕生している。当初、乗客掛分室としてスター

東京市民に親しまれた市電・バスとタクシー

ト、乗車券の発売や忘れもの取扱いなどを担当したもので、十三年ショーウインドーも完成して、電気器具の陳列販売も行なった。戦後二十四年の新庁舎落成時に裏玄関に再設置、庁舎窓口として親しまれたのであった。

大正から昭和期にかけて市（都）電は文字通り市民の足として定着していく。大正三年には系統番号制が採用され、日比谷には七番の目黒―日比谷、八番天現寺―京橋線をはじめ十二、十六、二十四、三十七番など路線がめぐらされるのであった。

日比谷物語 ㉗

山岸弘明

宝塚の有楽町進出

日比谷、有楽町がアミュージメントセンターとして今日の興隆をみるのは、大阪宝塚の成功で東京進出をめざした小林一三氏が、この地に一般大衆向け劇場と映画館が密集した興行街の出現を計画したからであった。

「映画や芝居など、娯楽はいずれ家族で楽しむようになる。上品な盛り場としては、浅草、新宿などより、日比谷公園、公会堂、帝国ホテルが近くにある有楽町が最適と考えたわけです。たまたま東京電灯（現在の東京電力）の材料置き場三、三〇〇平方㍍が空き地になっていたので、買収した」（東宝・矢部健一常務＝有楽町友情）。土地選定には小林氏が東京電灯副社長を兼ねていたことも関係したかもしれない。

「昭和八年の秋も更け有楽町隅には木枯らしが吹き始めたが、三信ビルと小さなオフィス（現在のエアフランス）には熱気があふれ、そこだけは深夜までこうこうと明かりが輝いていた。すぐそばの東京宝塚劇場建築現場では、すでにすさまじい勢いで工事が進行しつつあった。また、日本の洋画劇場として画期的役割を果たした日比谷映画劇場も八年七月五日に、地鎮祭を終えて着工、小林社長の胸中には、すでに全国大都市における劇場建設の構想がたてられていたのである。

昭和九年一月一日、東京宝塚劇場は宝塚歌劇月組公演によって華々しく開場した。演目は舞踏『宝三番叟』オペレッタ『パリのアパッシュ』劇場『紅梅殿』とレビュー『花詩集』。三月には水谷八重子の芸術座が東宝専属男女優グループと合同で出演した。開場以来、東京宝塚劇場公演の中心となったのは宝塚歌劇であった。出演は九年に二回、十年は十一回、十一年は通年、十二年と十三年はそれぞれ十一回におよび、その華麗な舞台は東京のファンを魅了した」

（東宝五十年史）

九年九月にはこの宝塚劇場五階には定員四百四十二人の東宝小劇場が開場している。当初ダンスホールの計画を所轄官庁の方針で急遽変更したのだという。のちに寄席芸人憧れの高座となった東宝名人会であった。

日比谷アミューズメント・センターのはじまりとなった東京宝塚劇場（新築工事概要から）

日比谷物語 ㉖

山岸弘明

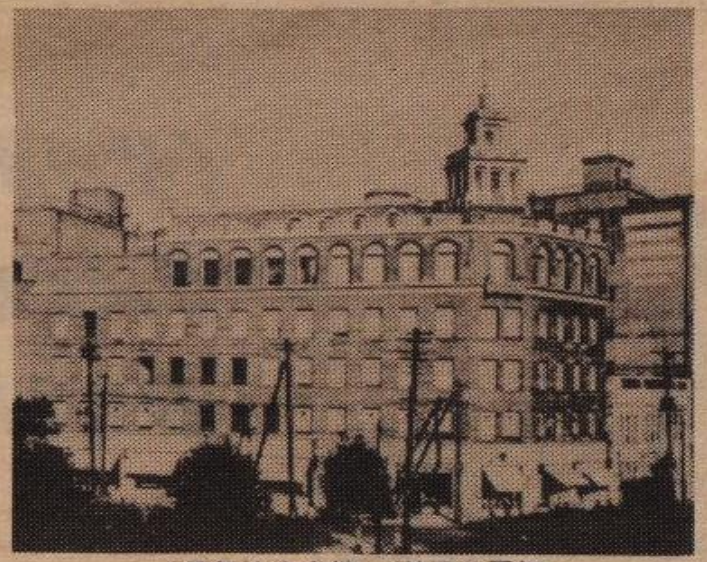
電気倶楽部

昭和二年竣工の電気倶楽部ビルは、壁面をレンガで積み上げた鉄筋コンクリート五階建、スパニッシュな味わいが美しい造形美をみせた。総工費五十三万円、うち四万円が防火建築助成金であった。

このビル建築の模様を当時道路ひとつはさんだ真中（現在のパークビル）にあった山水楼の宮田武義氏が覚えていた。「大倉土木、いまの大成建設が請け負ってね。当時はセメントや砂を持ってきて往来でこねるんです。そうするとセメントの粉がとんでくる。うちは三階建の洋館みたいにしてあるんですけど、窓なんかもガタガタでね、テーブルがすぐまっ白になる。みなさんお得意さんでいつもきてくれるから、あるとき監督の斉藤さんに苦情をいったら『セメントはね、肺病の薬になるんですよ。ハッハッハッ』といってさ、逃げられましたよ。電気倶楽部ビルは戦後もズーッとあったけどレンガ積みのいいビルだったね」（談話）。

その後の協会の発展で竣工後三、四年にすぎない昭和六年には、早くも倶楽部が手狭となって新会館建設の気運が高まってくる。「昭和七年五月、その敷地として倶楽部隣接地に二四四坪を買収した。買収敷地は最初の予定よりも地価高く、かつ場所から相当のものを建てる必要があり、かたがた到底はじめの予算五十万円では事たり得べくもなかった。すなわち、昭和八年十月臨時総会を開き、総額七十五万円の更正予算を決議してこれにあてたのである。

工事は昭和七年十二月大倉土木の請負により着手せられ、九年一月延坪一、〇八四坪の新館を落成して竣工修祓式をあげ、四月三日開館した」（電気協会十五年史）。鉄筋コンクリート地下一階、地上五階建。設計・佐藤功一。中世様式を巧みに採り入れ、日本建築協会選定の代表建築二千棟の一つに選ばれた。戦争が激しくなった昭和二十年五月被爆。四十四年電気倶楽部が、五十一年電気協会ビルが撤去されて、電気ビル建設へとつながっていくのであった。



「電気協会会館」（前回の電気倶楽部ビルとともに、現在は電気ビルの一部）

日比谷物語 ㉗

山岸 弘明

日比谷劇場

日比谷劇場が旧日比谷大神宮跡地に開場したのは、宝塚から一カ月遅れた昭和九年二月一日であった。「ハイカラな円形のドームの塔を建てその先端に東宝のマークを高く掲げていた。当時の話題は千七百席の大ロードショー館、一円、一円五十銭などの格差のあった料金システムに五十銭均一興業を導入しての画期的なデビューであった。

二本立てでスタートした日比谷映画劇場は、はじめ洋邦画の併映、のちに洋画二本立てで番組を編成した。三月十一日パラマウントとの間に十本の独占封切り契約を結び、その頃丸の内における松竹洋画興業部の牙城だった帝国劇場と対峙する勢いをしめした」（東宝五十年史）。

昭和十年六月には隣合わせた空き地に有楽座が誕生している。ここも神宮跡地の一部で近所の人達がキャッチボールを楽しんだり、ときにはバイクの練習所にもなった所だという。建物の外壁にはなまこ壁の和風を採り入れた地下一階地上六階建て鉄筋コンクリート劇場で、定員が一、六三一人。発足時は東宝専属男女優グループから発展した東宝劇団の常打劇場としてスタートしたが、のち舞台劇場から映画館へと転じていく。

東宝劇団には市川寿海や八代目三津五郎、十二代目団十郎がおり、中村勘三郎もまた有楽座舞台に立った一人。「東宝劇団には四年近くいましたが、現代劇や翻訳劇など歌舞伎以外の芝居をやり、大変プラスになりました。長谷川伸先生の『瞼の母』で忠太郎役をやり、本当の男にさせてもらったからです」（有楽町有情）。

竣工当時の日比谷映画劇場＝現在は日比谷シャンテの一部になっている『東宝五十年史』から）

映画は無声時代からトーキー時代へと躍進している時代で、外国映画にはスーパー字幕が入り、カラー作品も登場していた」（日比谷一〇〇）。地下一階地上二階、延べ坪三、二四二平方㍍。設計阿部美樹志、施工竹中工務店であった。

「洋画一本立てによる長期ロードショーという興業形態が定着するのは戦後のことで、当時の洋画封切りは二本立てによる一週がわりが原則であった。カルミネ・ガローネ監督のドイツ映画『南の哀愁』とハーバード・ウィルコックス監督のイギリス映画『ウインナ・ワルツ』の

日比谷物語 ㉙

山岸 弘明

有楽座

俳優の森繁久弥氏も、この有楽座は思い出の劇場であったという。「昭和十年の有楽座のこけら落しは早稲田から群衆で出演した。出し物は後年猿翁になった猿之助の『国性爺合戦』で、花道にゴマンとならんでカルカさまカルカさまと絶叫しただけのことであったが、馬鹿馬鹿しいので、すぐ劇研の後輩に譲ってサボってしまった。まもなく

昭和十年、宝塚劇場・日比谷劇場につづいて有楽座がオープンした―写真は開業当時の正面（『東宝五十年史』から）

藤原義江のオペラ、レハールの微笑みの国が上演され、この劇場に厄介になることになるのである。

小林一三は歌舞伎を安くみせようと、いわば二流みたいな歌舞伎を安くみせた。でも時には六代目菊五郎ご自身が出演したこともあった。六代目は当時小林一三直系の守衛に楽屋口でひっかかり、おれは麻布の寺島だーと毒づいたがグズグズいうのでとうとう怒って帰ってしまったという珍談もある。

当時楽屋に入っていた店屋物は、国定の天丼。ここの倅がブルーコメッツの井上忠夫である。双葉の親子、きじ丼、大きな荷をしょってくる寿司屋の久さん。わたしたちの仲間は方々に借りができ、三月も四月も払わないで劇場中を逃げ回ったが、舞台の袖まで追い詰められて舞台から引っこめずに往生したのを思い出す。舞台稽古はおおむね徹夜である。私たちはカツラや舞台衣装のままガード下の岩崎で一杯をやり、めしを食った。丸の内の珍風景であったことだろう」と『日比谷・有楽町をたのしむ』で書いている。

あの懐かしいドーム型劇場・日本劇場（当時、日本映画劇場）の起工式は宝塚や日比谷劇場より早い昭和四年二月のことであったが、途中経営者の交代などで工事が中断して、おばけ屋敷と呼ばれたりもした。たまたま天皇陛下がみとがめられ、関係者は恐縮して工事を再開したというエピソードも持っている。昭和八年十二月二十四日開場。鉄筋コンクリート地上四階地下二階。延べ建坪一四、四〇〇平方㍍。設計・渡辺仁。円形ドームの美しい建物に八角窓が並んだ定員数二、九四〇人という巨大劇場が人々の目を奪った。やがて昭和劇場建築の最高傑作のひとつとして有名になっていく。現マリオンの戦前期であった。

日比谷物語 ㉑⓪

山岸 弘明

東宝と小林一三氏

日本劇場は昭和八年十二月三十日からゴールド・デイガースとカバアルケード、翌年一月初旬にはチャップリンの『街の灯』を封切るが、その後の興行は不振で十年三月、東宝が買収した。小林一三氏の描いた一大興行街建設の夢がこうして徐々に実現していく。

「電車のターミナルにデパートや、映画演劇のアミューズメントセンターを作るということは今では何でもないことのように思われるが、これを思いついて実行に移したということは凡人ではできないことだ。小林さんのやり方でもう一つ感心したことはあの絢爛たる日劇を合併すると同時にこれを五十銭均一劇場として全館を大衆に開放したことだ。長い間たちぐされていた日劇も経営者が入れ代わってやっと開場したが入りは悪かった。特別席三円五十銭、一等席二円五十銭、二等席一円五十銭、三等席五十銭で、特別席と一等席は同じ正面玄関だったが二等席は二階、三等席は三階でおのおの入口が違っていた。したがって綺麗な一階ロビーには二等席、三等席の人達は降りて来られなかった。それを小林さんは二等、三等の専用入口を廃止すると同時に下足をとることもやめられ、入口は正面玄関だけとした。だから誰でも五十銭だすと大手をふって豪華な一階ロビーから入場できた。この英断で日劇は小林さんの手に入った翌日から押すな押すなの盛況となった。

小林さんは誰よりも自分の事業を愛した。多忙な東電の社長時代でも宴会は早めに切り上げて東宝劇場にかけつけて宝塚歌劇の舞台に見入りいろいろとダメを演出者にだしていた。自分の育てた事業のことは寸時も頭から去らなかったらしい。デパートを歩きながら、電車に乗りながら思いつくとすぐ新しい企画を練った。しかし仕事のやり方はまことに堅実であった。有楽町のアミューズメントセンターを建設するにしても、まず東宝劇場をたてその予算の余りで日比谷映画劇場を作る。東宝・日比谷とも客が入ってこれで良しとなると有楽座を作り、それから日劇を合併していくというようにステップ・バイ・ステップのやり方であった」日劇支配人、東京会館専務などを勤めた三神良三氏が著書『丸の内夜話』で書いている。

建設中の日本劇場（工事が中断して〝お化け屋敷〟と呼ばれたりした）

日比谷物語 ㉑①

山岸 弘明

日本劇場

俳優の森繁久弥氏も日劇の舞台裏で働いた経験を持っている。「私が最初東宝に入ったのは昭和十一年の暮れで、大川氏が建てた日劇を東宝が買ってからだ。その日劇の舞台課に勤めろといわれ、役者になりたかったが、いやいや日劇の舞台課に入った。斉藤という主任が一人いて、その下に松村という照明係と安さんという道具係とエッチな内藤という楽屋番のオッサンと私がいた。この建物はいささか手抜き工事もあったらしく、ある時舞台と客席をふさぐ大きな鉄扉が轟音をたてて舞台に落ちたり、綱場のフンドウが落ちてきたり新参ものの私などおそるおそるあがる毎日だった」（日比谷・有楽町をたのしむ）。

十年十二月、日本最初の地下劇場・日本劇場第一地下劇場がニュース短編映画専門館としてオープン。九月には専属舞踊団日劇ダンシングチームも生まれている。「日劇ダンシングチームは、秦豊吉氏がブロードウエイにあるロケットガールにヒントを得、その卓抜な独創力と不屈の意思によって作り上げた。初舞台は昭和十一年一月十三日から日本劇場のステージを飾った『ジャズとダンス』である。チームは前年九月日本劇場専属舞踊団として募集を行い、三百人以上の応募者のなかから厳選した四十人の女子団体によってスタートした。日劇五階の大ホールを稽古場とし、毎日十時から午後四時までハードトレーニングが続けられたが、その烈しさに途中で脱落する者が多く、初舞台を踏んだ第一期生は半数の二十一名になってしまった」（東宝五十年史）。

「この第一期生の一人に丹下キヨ子さんがいた。『亡くなった人のことをどうこう言うのはきらいだけど、秦というのはマルキ・サド、有名なサディストよ。あのサドにあやかろってんでペンネームに丸木砂土とつけたくらい大変な男なんですよ。私の隣で踊ってた娘なんて竹ザオでしょっちゃう太モモをつっ突かれて随分いじられた。ほかにも不愉快なことがあって、私は三年ちょっとでやめちまったよ。だけどね、あの反感、畜生やってやるぞ、という気持ちのお陰で私も多少は名が知られたんだと思えば、ちっとは感謝しなくっちゃ』」。

昭和九年開場した日劇だが、十年には東宝の傘下に入った（「有楽町今の昔」から）

日比谷物語 ㉑②

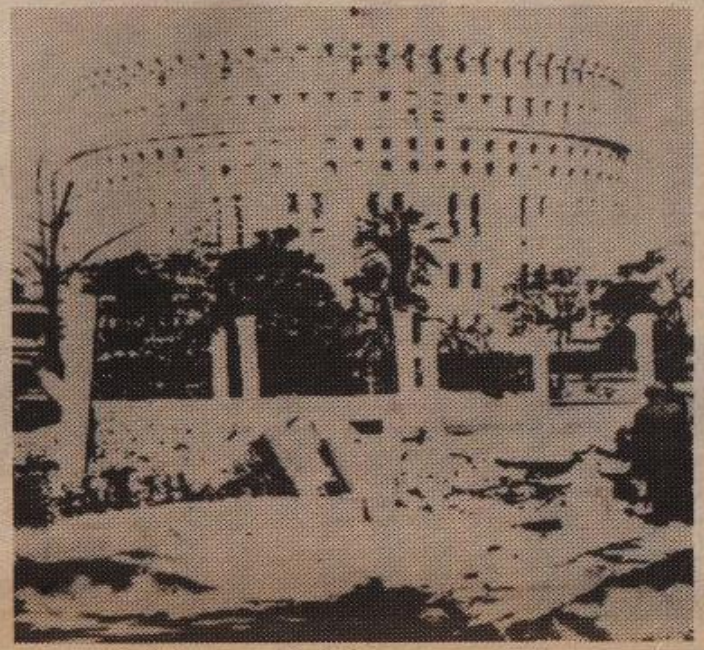
山岸弘明

日劇の秦支配人

秦は、しかし研究生の体調を心配してカルシウムを摂取させなければ、と七輪を持ち込んでイワシを焼いて食べさせたり、肝油と牛乳を毎日与えたりもしている。丹下さんのほかに、一期生からは女優の三浦光子、バレエの松山樹子、牧由紀子、二十の扉で活躍した柴田早苗らが成長した」（有楽町有情）。

ズメントセンターを創立するに際し、探していたのは文学とそろばんの両方がわかるマネージャーであった。秦さんはその理想的なタイプとして小林氏の目に映じた。一高時代から努力家で負けず嫌いの秦さんは、自分を知って自分を遇してくれる小林一三氏には感激し、人一倍の努力をもって報いようとした。秦さんはあまりに仕事に対して情熱を燃やし過ぎており、馬車馬的に努力をつづけていたので、つい秦さん本来の性格である激情癖をむき出しにして誰かれを区別なくどなり、また誰にでもかみついた。小林一三氏は秦さんの激情家としての欠点も知っていたが、その着想の人に優れていることもよく知っていた。だから側近の反対を押し切って秦さんを益々登用し専務から社長にまで任用している」。

昭和十一年九月、多数の芸能タレントをゲストに迎えた本格ショー「日劇秋の踊り」を舞台にのせたが、これは一ヵ月続演という大ヒットとなり、後年の春、夏、秋三大踊りの出発点となった。こうして株式会社東京宝塚劇場は、東京進出以来わずか四年あまりの間に、映画演劇興行界の雄としての基盤を確立したのであった。



秦支配人が情熱を燃やした日本劇場（写真は戦時下のもの）

この秦氏の思い出を三神良三氏が『新文明』という雑誌に書いている。「数え年四十二歳になった秦さんが、時の天才実業家小林一三氏の知遇を得て東宝創業期の支配人に就任したことは秦さんにとっても嬉しいことだった。大学を出て三菱商事に入って十六年、その間ベルリン支店を開発したり、帰朝後も機械部では相当ベテランのセールスマンのつもりでいたが、同期の者はすでに課長になった者もいたし、後輩でも海外支店長などみな責任あるポストについていた。商才にかけても同僚に劣るとは思ってもいなかった秦さんは、いささか三菱生活にいや気がさしている頃だった。小林一三氏が東京有楽町にアミュー

日比谷物語 ㉑③

山岸弘明

戦前の映画街

昭和十二年十二月、東宝は帝国劇場と東京会館を所有する帝国劇場株式会社を吸収合併した。帝国劇場は定員一、三八六人、明治四十四年開場以来白亜の殿堂と呼ばれ、日本の近代演劇史に不滅の足跡を残してきたが、昭和に入ると経済不況と良心的興行方針が業績低下を招き、五年、十年間の契約で松竹に経営を委ねた。松竹も当初二

戦前・戦後を通じ映画の街でありつづけた日比谷（写真は50年の歴史を閉じるサヨナラ・フェスティバル）

年間、演劇公演を行っただけで、やがて洋画の封切り館としていた。十五年三月宝塚雪組、四月新国劇公演をもって再開場、演劇劇場として再びファンの期待に応えた。しかし、一方では非常時色が刻一刻と深まってもいた。九月、情報局庁舎として徴用の至上命令が下る。まさに晴天の霹靂であったが、なんとも致し方ない。九月興行は十日をもって打ち切られた。

日比谷映画街で映画に目覚めたという映画評論家の荻昌弘氏にとって、戦前の映画街の思い出は青春そのものでもあった。「有楽座でエノケンの舞台を楽しんだ少年時代、日比谷劇場に十二、三年が私には日比谷に夢中の第一期だった。東京宝塚劇場、日比谷映画劇場、日劇が開場した（私が小学校二年の）昭和九年冬から三年後。補導協会の怖い目をかいくぐり、自前で映画館のカネを払うことに自立の快感を味わってた少年には、全館五十銭の日比谷映画劇場は球形の印象が古い場末の館とまるで違うモダンでなかでも発声装置を誇示する入口脇のブロンズプレート『ウェスタン・エレクトリック』の英字が重い信頼感となった。

五千の男達が日劇へ李香蘭（山口淑子）のエキゾチズムを見に殺到し、大混乱で興行中止を引きおこしたのは昭和十六年紀元節である。私には日比谷映画街は何より、どこより外国映画の街だという固定観念が育ちつづけた」（日比谷一〇〇）。

フランス映画『格子なき牢獄』をみた旧制中学時代、いまの人生展開を予測できたはずもなく、この一郭を変遷させる日本の運命じたい想像のほかだったのだから。日比谷劇場と三信ビルがつくる（今も広い）空間に、当時は市電が引き込まれていた。いまは朝日生命の日比谷交差点角、大喫茶店・美松では吹き抜けのメザニーンのバルコニーからイブニングの美女がレコードをかけつづけた。あの昭和

日比谷物語 ㉑④

山岸 弘明

三信ビルの竣工

昭和三年の日比谷地区市街再編と、昭和八年に施行された皇居周辺の美観都市指定は日比谷・有楽町の町並みを一新させることになった。それは駅西部皇居側のビル化であり、今日に面影を伝える日比谷交差点周辺のたたずまいでもあった。

昭和初頭の代表的事務所建設として知られる三信ビルと、先年惜しまれながらとりこわされた朝日生命館が建設されたのは昭和五年のことである。三信ビルの三信は三井信託の略称であった。三井信託（現・三井信託銀行）がその創立事務所を丸の内の「有楽館」（現在の三井銀行丸の内支店）に設けたのは関東大地震後の大正十二年十二月で、翌十三年現在の三井ビルの地にあった三井合名との仮事務所で信託業務を開始した（前述）。この三井信託と三井合名、が子会社＝三信建物を設立して、三井合名の所有地であったこの地に、三井信託不動産部自社ビル＋貸オフィスビル＝三信ビルの建設に着手したのであった。

三井不動産社資料によれば、起工は三年七月で、基礎工事完成四年五月、鉄骨完了九月、コンクリート工事完了十二月。基礎工事清水組、上層工事大林組となっている。総工事費四三二万円、地上八階、地下二階、述べ二一、七一〇平方㍍。日比谷講演に面した堂々たる構えは古き良き時代の傑作ビルのひとつでもある。日比谷周辺の土地は有楽層といってヘドロ状の軟弱な地盤で、三信ビルでは一〇㍍の松の生木を岩盤まで打ち込んで基礎を固めたという。現在ビル入口に六段の階段があるが、周囲が地盤沈下したなかで、基礎のしっかりしたこのビルだけが最初の高さを保っているためだという。テナントの第一期生は王子製紙、三機工業など。現在もこのビルに本社をかまえる電気化学工業も昭和六年一月十日、藤原銀次郎会長以下さっそうと第一歩を印した。

当時の図面をみると、三階から七階までがいわゆるオフィスで、地下一階には食堂、カフェ、理髪店、マーケットなどの名前がみえる。現在の三信ビルの一階のドアを押してなかに入ると航空会社や宝石店の並んだ商店街になっていて、吹き抜けの二階から古風な欄干と天井の装飾が目に入ってくる。

昭和４年竣工直後の三信ビル＝クラシックな装飾が今では貴重な存在になっている（三井不動産提供）

日比谷物語 ㉑⑤

山岸 弘明

常磐生命と美松

前項につづいて昭和五年に竣工した三信ビルの描写からすすめる。重厚な感じの石畳の通路をあゆむと丸くなった中央ロビーに出る。ここには、よそではお目にかかることなどあり得ないようなクラシックな飾りのついたエレベータが五基並んでいる。かつてこの大理石づくりの中央階段付近に一㍍もの台座のついた照明灯が置かれていたという。戦前は豪華なシャンデリヤや照明灯がいたるところに飾られていたが、昭和十七、八年ころ金属の供出命令でゼロ戦や弾丸に変わった。

三信ビルの八階に登ると、ほかのフロアと造り方が違っていることに気付く。ここには竣工当時、三井グループの厚生設備「三友倶楽部」があった。ビリヤード、トランプ、碁、謡に興じた戦前の三井マンの姿が偲ばれる。次々と新しいビル建築の進む今日、三信ビルに重要文化財なみの思いをはせるのは筆者一人の思い過ごしだろうか。（戦後編は後述）

常磐生命は朝日生命の前身になる。昭和一年一月創立。十四年五月、日本共立生命と合併して前川生命へと変わり、十七年帝国生命の包括移転を受けて二十二年八月社名を現在の朝日生命とした。五年十一月鉄筋コンクリート地上八階、地下一階、延坪一〇、五九五平方㍍の常磐生命ビルを竣工。壁面レンガに彫刻をきざんだ昭和初頭建築最高傑作のひとつでもあった。昭和五十五年新ビル建設のため撤去。現在の朝日生命日比谷ビルは五十八年建設の二代目。

常磐生命ビルのテナントに美松があって、こちらの方が有名だった。当時の朝日新聞に女店員募集のニュースが紹介されている。「美松百貨店は常磐生命ビルで十月一日開店の予定であるが、銀座を中心とする百貨店の競争はいよいよ猛烈で同店では女店員三百人、食堂少女百八十人、男店員三百人を募集している。日給七十銭から一円。」昭和七年の東京大年誌広告には「近代人の新百貨店・日比谷美松」とある。三越、松坂屋、松屋とならぶ銀座のデパート界に一大攻勢を掛けた美松ではあったが、その後の経営は不振で、やがて喫茶店や食堂、ダンスホール主体の食堂ビルへと転身していく。

昭和６年に美松デパート(左)がオープンしたが、数年をへず閉店した。右は朝日生命館（写真集『銀座』から）

日比谷物語 ㉑⑥

山岸 弘明

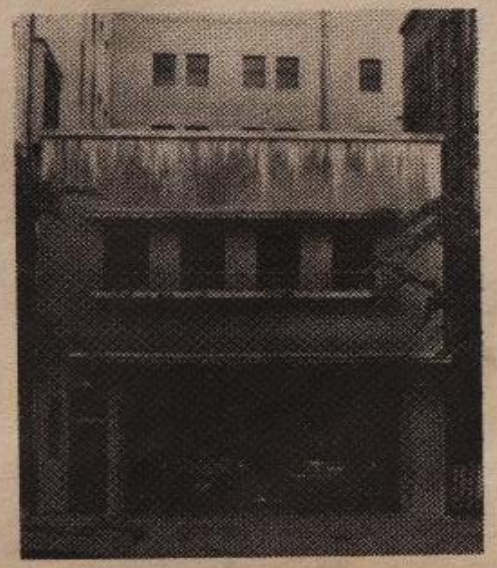
丸の内署と消防署

有楽町でサラリーマン生活三十余年を数えたという田隅龍二氏も美松は思い出の店だ。

「有楽町は子供時代、学生時代、デンカ時代といろいろな思い出があるよ。こどものころ、朝日生命館の一階に美松というバンド入りの立派な大食堂があった。たしか二階も食堂だった気がするね。日曜日はよく親に手を引かれて銀座へ行ったが、宵の銀ブラの前にここでバンド演奏を聞きながらカツライスを食べるのが楽しみでねェ。そのせいか今でもトンカツは大好きだ」。

関東大震災で消失した警視庁と消防本部跡地は、警視庁職員の官舎として利用したり一部は空き地として放置されていた。この跡地の一部に昭和五年丸の内の警察署が完成、移転して、八年には隣接地に丸の内消防合宿所が誕生する。現在の丸の内警察・消防合同庁舎の前身であった。残り敷地は昭和六年から民間に払い下げられた。中央蚕糸会旧館と農林中央金庫ビルが八年、糖業会館が十四年、第一生命館は十年に起工して、三年後の十三年十一月に竣工している。

丸の内警察署の前身が有楽町ビルにあったことを第一五六回で紹介した。五年十一月二十日「地上四階、地下一階の鉄筋コンクリート建て、延べ一、五六五平方㍍の庁舎が落成した。当時四階建の庁舎は警視庁管内でもはじめての立派なものであった。そして翌々日の十一月二十二日、その名も麹町丸の内警察署と改名された。その威容を誇った庁舎は太平洋戦争下の大空襲にも損害を受けることなく残った」（首都中心の治安を担う・丸の内警察署）。戦後の四十七年まで。現在の丸の内警察署



旧丸の内消防署有楽町庁舎。（ベンツ梯子車、アーレンフォックス車を配置）現在は丸の内警察署との合同庁舎にかわっている（『五〇年のあゆみ』から）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

・丸の内消防署有楽町出張所合同庁舎は四十九年竣工の二代目。

丸の内消防署出張所は八年三月、鉄筋コンクリート二階建延べ二二〇平方㍍の消防署合宿所兼器具置き場の建設から始まる。十五年三月には有楽町警備派出所と改称され、十七年消防派出所、十九年消防出張所に昇格した。四十六年十月合同庁舎建設のため閉鎖。当時の配置車はベンツ梯子車、アーレンフォックス車各一台であった。

日比谷物語 ㉑⑦

山岸 弘明

農林中央金庫

農林中央金庫は大正十二年設立の農林、漁業協同組合全国金融機関である。昭和八年、関東大震災で焼失した警視庁跡地の払下げを受けて有楽町一丁目の現在地に本社ビルを建設、現在は東京支店になっている。地上五階、地下一階、延べ面積三、〇三二平方㍍とやや小振りではあるが、正面に六本の力強い円柱を、側面にも六本の角柱を配した堂々たる構えで金融機関らしい重厚な雰囲気をかもしだしている。

円柱と角柱の上部にはイオニア式とよばれる装飾が施され、玄関などポイントに配された飾りが全体をしきしめる。一階事務所は広い窓と太い大理石柱がゆったりとしたオフィスを作り、かつてこの天井に豪華なシャンデリアが輝いたという。戦前期の代表ビルのひとつ。第二次世界大戦後の二十年九月進駐軍によって接収され、三十一年まで連合軍総司令部の一部になった。設計・渡辺仁、施工・清水組。

蚕糸会館は着工が七年で、翌八年四月の開館である。それより先の六年三月、蚕糸業組合法が公布され、養蚕、蚕種全国連合会、蚕糸中央会など七団体が設立され、それまで業界唯一の中央機関であった蚕糸業同業組合中央会の残余財産五十万円をもって会館建設にあてることとした。「敷地は有楽町駅前の警視庁のあったところ、警視庁舎が関東震災で焼失してほかに移り、その後には警官や巡査の官舎があった。そこを今井翁の骨折りでその一部の三百三十坪を払い下げてもらった」（玉利高之氏）。「第一期工事は農中金側の北半分を作りました。敷地は十六万円ちょっと。設計は後年建築界の大御所になった山下寿郎氏、工事は大林組で工費は三十六万八千円。延べ坪が一、一七四坪ですから坪当たり三百二十円でした。地下一階、地上七階、外装は生糸の色にあわせて白色擬石タイルを貼って、白亜の殿堂と呼ばれたものでした。昭和初期は明治以来の様式建築の技術が花開いた時代で、第一生命、明治生命、第一銀行など重厚華麗、今後二度とお目にかかれない記念すべきビルが多く建ちましたが、当会館も貴賓室の内装に彫刻を施すなど凝った仕上げになっています」（『蚕糸会館余話』皆川俊之氏著）。

戦前期の代表ビル・農林中央金庫東京支店（いかにも金融機関らしい重厚な雰囲気がただよう）

日比谷物語 ㉑⑧

山岸 弘明

蚕糸会と糖業会館

前項に続いて皆川俊之氏の蚕糸会館余話を続ける。「玄関脇に記者クラブが設けられました。七階にはホテルとして和室七、洋室四と食堂があり、二階三階が事務所階で家主の中央蚕糸会など八団体が入居、一般テナントもグリル山紫など何軒か入りました。会館にとって自慢だったのは、四、五、六階吹抜きの蚕糸講堂でしょう。客席七百三十、手頃な劇場として盛んに使われました。戦中、講堂が廃止され、昭和二十八年に再開したときには蚕糸講堂の名は消え、大阪の放送会社に丸貸しし、公開録音を主とするヴィデオホールと変わりました。民間放送が華やかに登場したころです。文化放送の三つの歌、フジテレビの歌の饗宴など人気の高い番組でした。司会のロイ・ジェームス、歌のザ・ピーナッツ、コント55号などのタレントはこのホールから生まれていったのです。

十四年第二期工事として、仕舞屋が建っていた南側地続きの民有地一三〇坪を坪当り千五百円で買収して、新館五六九坪を工費三十七万円で増築しました」（日本蚕糸新聞）。

戦争が烈しくなった十八年、団体統合解散令が出て、蚕糸中央会も解散を余儀なくされた。こうして一時、家主不在のまま放任され、二十一年、財団法人・大日本蚕糸会の帰属とされたのであった。四十七年まで。現在の蚕糸会館は五十八年四月竣工の二代目。

ニッポン放送で知られる糖業会館の起源は十年九月日本糖業協会連合会が創立二十五周年の記念事業として、社団法人・糖業協会の設立と糖業会館の建設を決定したことに始まる。翌十一年三月現在地である有楽町一丁目の大蔵省所管地二八六坪と民有地一一一坪を購入、十三年に工事を起こして、十四年八月開館した。鉄筋コンクリート五階建て。戦争が烈しくなった十九年四月、決戦非常措置により会館食堂を閉鎖、四階までを農工務省に賃貸して協会業務をほとんど休止した。

幸い戦禍を受けることなく終戦。二十九年、民間放送ブームに乗って誕生したニッポン放送に三～五階を貸与、ニッポン放送ではその屋上に三フロアを重ねて今日にいたることになる。戦後編は改めて紹介する。

昭和14年竣工の糖業会館＝中央（ニッポン放送社屋としても有名）後方が蚕糸会館

日比谷物語 ㉑⑨

山岸 弘明

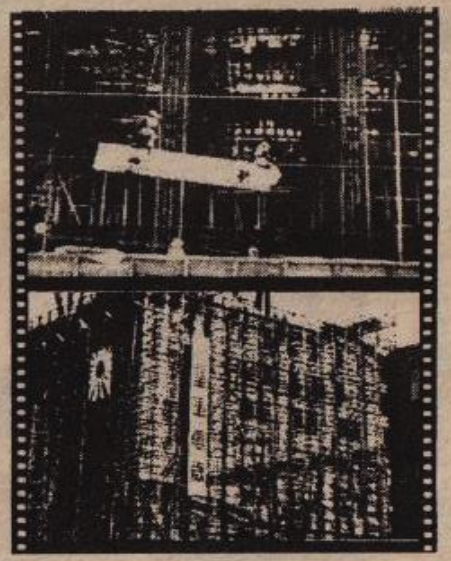
第一生命館

わが国の戦前建築中もっとも歴史的な役割を果たしたビルといえば、第一生命館を置いてないだろう。第一生命館の履歴は単に一生保会社本社としての社史にとどまることなく、戦後混乱期のわが国の歴史そのものでもあったからだ。

第一生命保険は明治三十五年設立の日本最初の生保相互会社。昭和六年、関東大震災で焼失した警視庁舎跡地の国有地が民間に払い下げられた時、創設者であった矢野恒太氏が新社屋建設用地として購入した。入札価格は一、六八一坪、一八二万円、本館建物の外観は一般から募り、葛西万司、横河民輔氏らに設計を委嘱した。「ところがこの地はかつて東京湾が湾入していたところで地盤が極めて軟弱であることがわかり、大ビルディングを建築するのがはたして適当であるかどうかが構造上の大問題となった。従来の建築方法では隣接地盤が陥没するおそれがあった」（第一生命七十年史）。

「当時としては珍しい潜函工法が採られた。巨大な鉄筋コンクリートの箱を土の中に沈めるもので、最大で長さ約二十四㍍、幅約八㍍高さ約四㍍の箱が十五ご使われた。箱は深さ二十㍍以上の岩盤の上に直接のせられ、四階分の地下部分として利用し、さらにその上に七階建てのビルを建てた。『生命保険会社にとってももっとも大事な契約原本を守ることが至上命題。関東大震災級に耐えられるものをめざした。その結果、総重量十六万㌧。今時のビルの二倍以上もかかった。計画したとき、警視庁が目の前の皇居のお堀の水が抜けるといって許可をくれず、試験掘りをしてやって納得してもらった。そういえば建設場所は旧警視庁の跡地。土台に使われた松の木の杭がいっぱい出てきたものです』（矢野一郎相談役、当時財務課長兼総務課長、後に社長）（朝日新聞）。

十三年十月、地上八階地下四階、総床面積四六、五〇〇平方㍍の大建築が竣工した。建築費一、四〇〇万円。ビルディング正面には畳六帖大の花崗岩がかざられ、それには矢野社長の筆になる第一生命保険相互会社の文字がブロンズのリリーフとなってはまっている。



第一生命で見つかった工事フィルム＝『皇軍万歳』の垂れ幕がみえる（『朝日新聞記事』から）

日比谷物語 ㉒⓪

山岸弘明

戦時下の第一生命

「（第一生命館の）建設当時から軍がさまざまな注文を出してきた。鉄骨が建ち始めた昭和十一年十一月ごろ、陸軍の下士官がおとずれ『非常事態のときに市民が避難できる場所が必要なのでさらに補強するように』と指示して行った。その結果、一階の床はそれまで計画していた厚さ二十五㌢を六十㌢に直し、鉄骨量は一階で五〇㌫増し、屋上部分は二倍にした。『当時は軍が幅をきかせていて、何をやっているんだと視察にきたので工事現場を案内した。そうしたらいざという時皇居を守る高射砲を乗せたいというので鉄骨の柱の真上にあたる屋上に高射砲四門を乗せる台を作った。その後昭和十八年には実際に高射砲がクレーンで吊り上げられて据えつけられた。いまでも台座が残っているはずです』（松本与作顧問技師、当時技師長）。

昭和十九年、ビルの六階以上を軍に提供せよという命令がきて、六階の会長室に東部軍管部区司令官の田中静壹大将が、社長室には参謀長が入った。二十年に入ると空襲が烈しくなり、警視庁はこのビルの地下四階を国賓などの待機所とした。空襲警報が出るとホテルからインドのチャンドラ・ボースやビルマ初代首相のバモー氏らが避難してきた。敗戦直後の二十年八月二十四日深夜、田中大将が六階の自室で自決した」。朝日新聞六十三年十月の〝記写縦横〟が取材している。（戦後編は後出）。

震災でそのほとんどを焼失した電気ビルの一角も昭和はじめビル街へとかわっていく。先に紹介した電気倶楽部、電気協会に続き、三柏ビル、富士アイス館が竣工し、一色印刷、塩瀬ビルが再建されている。一色印刷も第一七二回で紹介したが、その後の調査結果を補足する。明治十五年新富町で創業、四十二年有楽町社屋を竣工移転。社長一色忠雄氏は二十年から十年間米国に渡って印刷術を学び欧文印刷を得意とした。震災後の昭和三年ごろ鉄筋三階の新社屋を建てたが、二十年の戦災を機に日本橋三代町の現在地に移転。第一六四回で紹介した塩瀬ビルの再建も同じ昭和初年頃。十二年東宝が買収して東宝ビルと改称、本社を日劇四階から移した。十五年まで。

建物の自重で地下に沈める潜函工法がとられた第一生命ビル。戦後はGHQ（連合軍総司令部）となった

日比谷物語 ㉒①

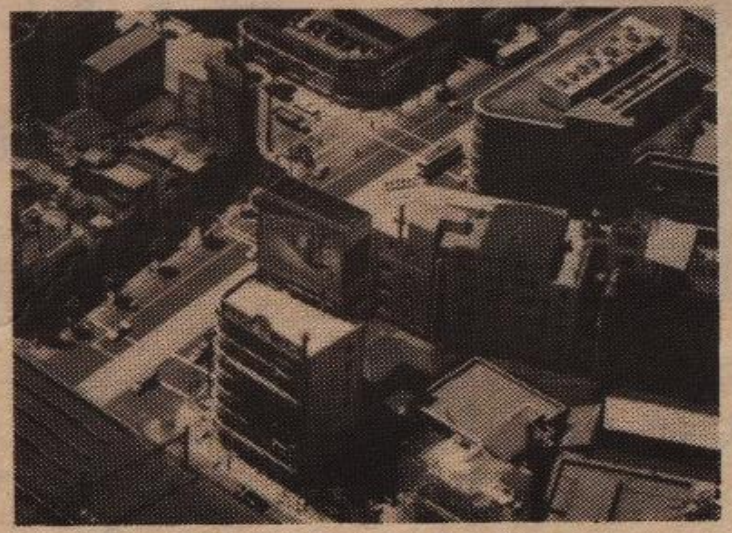
山岸弘明

東光ビル

戦前・戦後期を通じて、現在電気ビルになっている一角の山手線ガード沿いに「トウランプ」のネオンを掲げた一際めだつのっぽビルがあった。当初三柏ビルといい、のち東光ビルに変わっている。昭和二年三月起工して翌三年三月完工。鉄筋コンクリート地上七階、地下一階、建坪二八七、延べ二、五五〇平方㍍。設計岡田堤五郎、施工大倉土木。「地階の下にさらに一階重量コンクリート部分を地表よりうずめる工法で建築様式もすぐれ、建築学会の一資料として早大工学部建築学教室にビルの設計図、詳細写真などが永久保存されている」（東光電気社史）。施工主の三柏商事は明治三十五年創業のパッカード輸入商社であった。

現在も電気ビルに入っている東光電気の社史にその後の詳しい記述がある。「四十年の長い間本社ビルの置かれていた東光ビルの所有者・東光建物は昭和十三年三月、当時の東京電灯社長・小林一三氏によって設立され、同年七月有楽町一丁目三番地二の三柏ビルを買収し、ビル名を東光ビルと改称して事業を開始した。同ビルには当時の東京電灯関係および電気関係の会社や団体が逐次入居し、当社の前身東京電球も同年入居した。昭和二十年五月の空襲によりビル内部が全焼、当社も一時銀座七丁目に仮移転したが、戦後復旧してから同ビルに戻り、以来五十年十月までビルの二、三、四階および八階の一部に入っていた」。

富士アイスは大正十三年の創業である。昭和十二年から四十三年までこの有楽町の富士アイス館に勤務したという中野区の野口順太郎氏によれば「私はことし（六十一年）七十五歳になりますが、有楽町は懐かしい思い出の町です。いま電気ビルになった駅の皇居寄りの一角に三階建ての富士アイスの本社ビルがありました。昭和九年ごろの建築で富士アイス館といいました。当社はアイスクリーム、レストラン、製菓製パンを柱に銀座四丁目教文館ビルに本社と営業所があって、有楽町は一階だけでレストラン、ベーカリー、二、三階は古久根組という所に貸していました」。



昭和３年に建築された三柏ビル（中央）＝13年から東光ビルに改名、現在この一画は電気ビルになっている

日比谷物語 ㉒②

山岸 弘明

富士アイス館

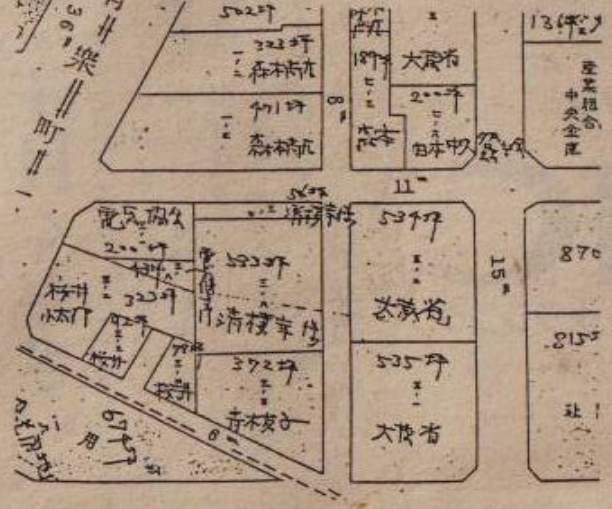
有楽町の富士アイスに戦前戦後期勤務した野口順太郎氏の話をつづける。「私は兵隊にもいかず頑張り、最後は社長と専務と私の三人だけ。富士アイス館も終戦当時は営業を休んで空き家になってしまいました。そして敗戦。昭和二十年十二月、進駐軍に接収され、ドーナツやパンを作ることになりました。工場名はGHQ―PXベーカリーで、監督官庁は当時のファイナンスビルいまの大蔵省にあった。富士アイスの名はまたたく間に広がった。

「有楽町で逢いましょう」にあるビルのほとりのティールームのモデル。映画「君の名は」では支度部屋にもなった。森繁久弥、フランク永井などの芸能人や政治評論家が記者会見、ミーティングなどに足しげく通った。一時は都内に工場一、店舗三十七をかぞえるが、創設者が亡くなると経営は破綻する。放漫経営は好調会社を一挙に会社更生法申請へと追い詰めていた。四十三年またまた隣接地に関連会社であったKM観光とKMタクシーの案内所を持っていた国際自動車が救済に乗り出すことになる。「波多野社長は当社のファンでもあったようです。ビーフシチューとフライプロンがお好きで、管財人と何度か一緒にお見えになっていました。社長は有楽町の土地六一・五坪と月島の二三五坪の魅力とKMグループでの食品部門導入といった観点から引受OKの決断をされたと聞いています」(最上部長)。富士アイスはこの年、有楽町の本社を閉め赤坂に移転する。以来KMグループの一部門として事業を拡大、ステーキハウス店、賃貸ビル経営などを行っている。

て、製品はそれぞれの接収ビルPXに納品しました。私も事務員として勤務しました。

やがて世の中もだんだん落ち着いてくるようになり、レストラン商売も再開、いそがしくなってくる。二十三年十一月GHQに働きかけて返還してもらうことになりました」。

再開した喫茶店兼レストランが関東一の名声を得るのに多くの歳月を必要としなかった。都民は本格的な洋食を待ち望んでいたし、国鉄副総裁、日通社長をつとめた創設者・太田永副氏の幅広い交友関係と、隣接地にラジオ東京、ニッポン放送が開局して芸能関係者の出入りが増えたという追い風もプラスし



昭和９年の電気ビル周辺地籍図
＝富士アイスのところは四谷区
・青木友子所有地になっている

日比谷物語 ㉓③

山岸 弘明

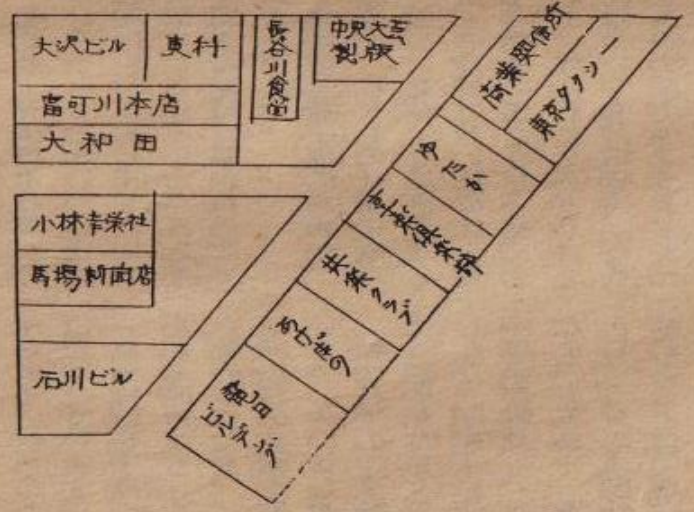
電日ビルと日本閣

ニュートーキョーから東宝街にかけてのガード周辺は、昭和はじめもビル建設が進む。三年に建築された電日ビルはほろほろ鳥料理・大雅の一部として現在も利用されているが、同じころ建てられた日本閣ビル、久須美屋ビル、淘淘亭ビル、大沢ビル、石川ビル、砂本ビル、明和ビル、佐藤ビルなどはその後の改造工事で一新した。そして昭和十年代になってニュートーキョービル、東宝旧本社ビル、東京名物食堂ビル、カティビルと戦前期の有楽町を代表するビルが相ついで建設される。

電日ビルは鉄筋コンクリート建て五階。ビル名は『電気日報』の略称である。大正末期創刊の電気業界紙で、当初外濠を挟んだ銀座・泰明小学校のところにあって、この年自社ビルを竣工して有楽町に移った。戦争が烈しくなった十五年ころ朝日新聞の一部に替わり朝日ビルと改称。二十年被災。戦後は朝日新聞第二別館とも呼ばれて専属広告会社の朝日広告会社などとなった。三十七年大雅が吸収。

八年、現在ラクチョービルの地に六階建鉄筋コンクリートの日本閣ビルが竣工して外濠に美しい影を落とした。当初は日本新聞社屋として建設されたものだが、十二年には前田久吉氏が買収して大阪新聞兼日本工業新聞支社とした。大阪新聞は一介のローカル夕刊紙にすぎなかったが、昭和八年日本工業新聞を興し、戦争が烈しくなった十七年には全国的な新聞統合令推進で産業経済新聞と改号、この時有楽町の東京支社も産業経済新聞東京支社と変わった。第二次大戦中東京の日本経済新聞とならんで天下を二分することになる。

『前田久吉伝』によれば「京橋の河っぷちの小さなビルの一室で五人の社員が仕事をはじめたのだが、それが東京支社で、その後西銀座に六六平方メートルばかりの部屋を借りて移った。たしか社員は二十人ばかりになっていたかと思う。それから有楽町数寄屋橋に社屋を買収して移転したのが十二年」。二十年一月、直撃弾を受けてマリノニ式新聞印刷機二台が火を被った。戦後、日本閣ビルはサンケイ新聞と新生・時事新報の本社屋と変わるが、後章で改めて紹介することになる。



昭和５年の「電日ビル」周辺地図
（生ビールの殿堂・ニュートーキョーも、まだ誕生していない）
＝『大日本職業明細図』写し＝

日比谷物語 ㉔

山岸弘明

東宝文芸ビル

東宝による有楽街建設構想も着々進んでいる。昭和十二年には東宝本社別館とも呼ばれた東宝文芸ビルが完成する。現在有楽町シャンテシネ1、2が建っている一角である。四階の鉄筋コンクリートビルで当初は一、二階が舞台の大道具作業場。三階が稽古場で四階が事務所になっていた。東宝関係の芸能人やスタッフ、事務職員らが出入りした。当時有楽町で少年期を過ごした土地っこの一人は、一階でローラースケートができ学校帰りや休日を楽しんだともいう。

東京宝塚劇場本社がこのビルに引っ越しするのは十六年一月から十八年十二月まで。この年、東宝映画と合併して新社名が東宝とかわり、本社も銀座七丁目の旧東宝映画本社に吸収された。映画界が苦難の道を歩むのもこの頃。「十六年後半に入ると輸入会社のストックも底をついて洋画興業は再映を多用するようになり、太平洋戦争開始と同時にすべてのアメリカ映画は上映禁止を命ぜられた。十一月十九日公開の『空の要塞』が開戦前日比谷映画劇場で上映された最後のアメリカ映画である。こうした戦時体制下で東宝の演劇部門は既成勢力の堅塁摩し見事に開花した。その中軸を形成したのは古川緑波一座と榎本健一一座の活躍である」（東宝五十年史）。

古川緑波一座は有楽座で火野葦平の『ロッパと兵隊』を上演、時局的な題材のなかに笑いと涙を誘う傑作として一座の名を不動のものとした。一座は有楽座を中心に東宝系劇場で奮闘する一方各地に移動演劇隊を派遣した。榎本健一一座も日本劇場で『突貫弥次喜多』『人間大砲』などを上演して戦争に疲れた観客の心をいやした。

「昭和十九年の正月興業は東京宝塚劇場が宝塚歌劇雪組、有楽座が新演技座、帝国劇場が新国劇で華々しいスタートを切ったが、二月二十五日政府は第一次決戦非常措置令を発動、全国の大劇場十九に対し、向こう一年間の閉鎖を命じてきた。時局重大の折から高級享楽は停止すべきだというのがその理由である。東宝関係としては東京宝塚劇場、有楽座、日本劇場、帝国劇場……がその指定を受けた」（東宝五十年史）。

一時期、東宝の本社ともなった東宝別館ビル。戦前の面影を残したが、日比谷シャンテ建設で撤去された

日比谷物語 ㉕

山岸弘明

有楽町シャンテ3になっている東宝文芸ビルは、戦後の二十三年三月から東宝会館が完成する三十二年四月までの間、再び本社屋となり、その後は本社別館と呼ばれたが、いつしか飲食店ビルに変わった。昭和六十一年閉鎖。最後のテナントはインドネシアラヤ、阪急茶屋、日比谷ラウンジ、サントリークラブ、そして牛どんのまるが。同じ六十一年に取り壊された三階建てのカティビルも、東宝が有楽街構想の一環として十年一月に開設した。主として喫茶店。戦前資料には明朗クラブ・コーヒィハウスとあり、後期はベーカリーピクニック、カティ喫茶、クラブカティとなった。

東宝ツインタワービルのマン前に古めかしい小ビルが建っている。劇場街発足当時の十年十二月完成の東宝食堂ビルで、戦前は東京名物食堂あるいは東宝名物食堂ビルといった。一階に東宝の案内所があって、二階から上がいまでいう味のデパート。すし金、すえひろ、ハゲ天、竹葉亭と有名店が支店を構えていた。「昭和十二年、三十三歳で独立して有楽町に小さな店を出すことができました。帝国ホテルにおられた出光佐三さんには目と鼻にできたこの店を大いにもり立てて戴きました」。明治三十七年生まれのすし金二代目・鈴木守氏（現帝劇サブモール地下）によれば「戦時中の食料難時代には（この店も続けられなくなって）出張だけで細々と仕事をつづける時代がありました。注文があると朝一番の電車に飛び乗り、千葉の波左間という島の網元を頼って魚を分けてもらいにいきます。家へ帰ると夕方です。いそいで支度を整えました」。（出光）

十五年ごろ学生服のまま劇場街に通いつめたという今井徹氏は「あのビルはいまでも変わっていないな。屋上に名物食堂と書いた大きな看板がかかっていてね。劇場帰りに二階のてんぷら屋なんかにも行った。やし油を使って目の前であげるんだ。なにしろうまかったね。もっとも家に帰って学生の分際でってしかられましたがね」。戦後は東宝案内所、東宝のOGクラブ・宝友会、東宝寮、喫茶店、ホットドッグ店、洋装店などを変遷、平成元年現在、うどん店どんど、洋食サンマルト、東宝食堂事務所になっている。

戦前の東宝映画街の名ごりをとどめる東宝食堂ビル。かつて東京名物食堂の名で親しまれた

日比谷物語 ㉖

山岸 弘明

日比谷陶陶亭

東宝ツインタワーの三信ビル側に、戦前期の有楽町を代表した中華料理店・陶陶亭があった。大正八年から。「当初は木造二階建てで、昭和五年に五階建てのビルになった。一階にグリル、二、三階に洋間、四階は日本間の宴会場もあり、一度に三百人以上も入れた。主人は中国革命を援助した志士で孫文の臨終をみとった唯一の日本人、萱野長知氏だった。萱野氏は革命軍への武器輸送を企てたり、辛亥革命直後に三井との間の借款契約交渉に奔走したりした。昭和六年、犬養毅内閣のとき密使として蔣介石との間に満州事変解決の和平工作に派遣されるなど、生涯を中国革命に捧げ昭和二十二年に死亡した。亭をついだ息子の長雄氏も死に、亭の創立を知る人も少なくなった。その一人井上正見元支配人は『開店に際し、孫文は金をいくらか出し中日友好協会の廖承志会長の父・仲愷は株主になっていました。陶陶亭の近くに漫画家杉浦幸雄さんのお父さんが住んでいて、孫文はそこに居候していました』。

陶陶亭は昭和十七年統制で店がはやらなくなったこともあり、社団法人・満州交友会に買収され満州会館と命名された。交友会は前年十二月、日満友好のため会合をもったり満州事情を話す事務所が欲しいと、満州関係者が集まって結成した。満州会館ができると同時に交友会も満州会と改名された。交友会の事務所探しも手伝ったという片倉衷氏は満州事変のときの関東軍参謀で元陸軍少将。「満州国は十年間に人口が一千万人増えて四千万人になった。十七年は建国十周年になるのでなにか満州国をもり立てることを考えているところに、鮎川義助満州重工業初代総裁が百万円を寄付してくれた。そこで陶陶亭を日満両国のかけ橋になるようにと、買収したんです。満州会の初代会長は元関東軍司令官で退役していた本庄繁大将でした」。（有楽町有情）

戦後はアジア諸国との交友機関に改め国際善隣倶楽部として再発足、亭も倶楽部が経営した。三十九年十一月、東宝のツインタワービル建設で売却。半世紀におよぶ陶陶亭の歴史に終止符をうった。

孫文ゆかりの陶陶亭（写真は終戦直後のもの。手前の駐車場は現在のパークビル。右に朝日生命、後方に三信ビルがある。『有楽町60年』から）

日比谷物語 ㉗

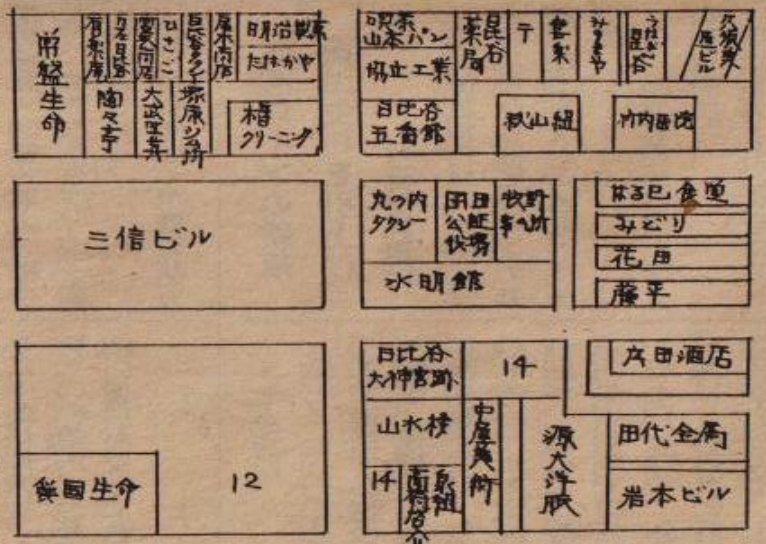
山岸 弘明

久須美屋ビル

久須美屋ビルはTIC（ツーリスト・インフォーメーション・センター）が入っている小谷ビルの前身である。昭和四年竣工。「有楽町の劇場街もできていないひっそりした頃でね。当時このあたりでビルと名のついたのはここだけ。四階建てのどっしりした建物だった」（地元の人）。小谷家は明治以来の有楽町住民。先々代にあたる普松氏が明治十年にこの地で酒類の販売店を開いた。大正十一年には美太郎氏が日比谷ビヤホールを併設、震災後の焼け跡に久須美屋ビルを興した。戦争が激しくなると周辺の木造建築が強制疎開でなくなり、鉄筋コンクリートのこのビルだけが残った。戦後の混乱期は酒類も配給制度にかわる苦しい時代が続いたが、逸早く日比谷ビヤホールを再開して市民に歓迎された。久須美屋ビルのテナントには一階に中華料理・栄楽、二階には万代商会、東京電気懇和会、関東電気工事連合会、府省四友クラブがあった。

桂一氏に替わった三十七年、オリンピック景気のなか新ビル建設をすすめる。この間三十四年からの五年間町会長として地区の振興に貢献したりもした。同じ年、ビルの真裏にあった日比谷ラウンレットに仮店舗を移す。「木造二階建ての小さなお店だが、周辺に飲食街を控えたせいもあって結構はやっていた。ご主人が亡くなって間もなく店を閉めた」（同）。五十三年久須美屋管理ビル建設、六十三年さらに新ビル建設のため撤去、現在両ビルの経営は未亡人の美喜子さんがあたっている。

ムラサキビルになった砂本ビルは昭和初期から六十三年まで。鉄筋コンクリート三階建てで、建築者は日本橋横山町に象牙店を構えた砂本覚次郎氏。明治三十九年創業という老舗だが、店舗の有楽町進出は清一郎氏に替わった戦後三十年代のこと。象牙芸術が青い外人客の目を引きつけた。この砂本ビルの戦前戦後期に井上英会話スクールがあった。校長の井上当蔵氏が英国オクスフォード大学に学んで十一年開校。戦争が激しくなると英語は敵国語とされて中断のうきめも。GHQの町と替わった戦後は一転して時代の最先端をいくことになる。二十年代から合成樹脂新聞、広告社があり、酒井好古堂が加わった。



昭和５年の久須美屋ビル周辺図＝三信ビルと常盤（朝日）生命ビルはあるが、東宝劇場街はまだない

日比谷物語 ㉘

山岸 弘明

ビールの殿堂誕生

マリオン前にあった大沢ビルは三階建ての小ビルだが、屋上に大きな広告塔をいただく背伸びビルだった。五年から新幹線工事の始まる三十七年まで。戦前期このビルの地下に白系ロシア人が経営するロシア酒場があってローレライの歌声がひびいた。

石川ビルと明和ビルも同時期に完成して同じ年に取り壊された。石川ビルは妙ビル、福石ビルの前身。新幹線ガード近くまでの一角に四階建てのぎっしりとしたビルを構えた。戦前は三丸商店、電気日々新聞、戦後は小寺工務店、海外貿易など。明和ビルはタイピスト養成所、理髪店、業界紙などの雑居オフィスビルであった。

生ビール売上げ日本一。ビアホール、和洋食・中華料理店と全国に百七十余店を網羅する外食産業の雄・ニュートーキョーの名を知らないサラリーマンはまずいないだろう。そのニュートーキョー本店が有楽町マリオン前に一際高くそびえ建っている。オープンは昭和十二年六月。有楽町タクシーと東京商業興信所の土地三百六十平方㍍を十二万円で買収、白亜の殿堂を建てた。

「工事中囲いに赤いペンキで？と書き何ができるのかと人の目を引いた。屋上ビアガーデンは日本ではじめて。？がきいたかどうか開店のとき二千人近い行列ができた。『すべて準備がととのったのですが、あわてたのは当時建築許可権をもっていた警察がなかなかウンといわなかったことです。ちょうど裏に泰明小学校があり、その前にビアガーデンはけしからんというわけです。川っぷちに目隠し用の植木を入れることでようやく許可になった記憶があります』（当時からいる速水健太郎副社長）」（有楽町有情）。

地下一階がドイツ風ビアホール。ふたつきの陶製ジョッキがインテリ層に大うけだったという。一階が生ビール専門の大ホール。二階は食事のできるビアホール。三階はすき焼きに生ビールのメニュー。四階はカフェで若い男女の社交場。五階は屋上ビアガーデンで数寄屋橋の下を流れる川面を眺めながら生ビールを楽しんだ。十四年ごろ隣接地にドイツビアホールの別館を増設した。

戦前期のニュートーキョー（手前に外濠と数寄屋橋がみえる）＝五〇周年記念ビアコースタから＝

日比谷物語 ㉙

山岸 弘明

ニュートーキョー

「（ニュートーキョーの）開店のときからいる小林馨子さんは『ビアホールでは、昔のバスの車掌のように革のカバンを肩から斜めにかけ切符方式で売っていました。地下のジャーマンルームにはいまのボトルキープ式に陶器のジョッキを預かる棚を作り、人気がありました。いまだに親子三代でジョッキをかたむけにくる人もいます』当時はショッピングセンターの所が川で一階から釣り糸をたれるとハゼが釣れた。常連に萩原朔太郎、高見順、河上徹太郎、石黒敬七、山本嘉次郎、それに朝日、毎日、読売の記者たち（がいた）」（有楽町有情）。

が、生ビールファンにとってよいことばかりが続かない。太平洋戦争への突入を境に、ビアホールも苦難の道を歩むことになる。十八年にはニュートーキョーも閉鎖をよぎなくされ、従業員は戦地や軍需工場に転出した。二十年終戦。有楽町は赤ちゃけた焼け野原と化したが、その一角にニュートーキョーは以前の姿をとどめていた。

「数寄屋橋本店および渋谷支店も進駐軍に接収され、不本意ながら進駐軍相手のビアホールとして本業につくことになりました。店内では米、英、闘、印など各国の兵隊がジョッキ片手にダンスに興じ、毎日二時になるとWVTRによるアメリカンリーグやナショナルリーグの野球放送に一喜一憂していました。酒量は日本人とはくらべものにならず、平均で五百CCのジョッキを十杯。強い人は二十杯くらい軽かったといいます」（小史）。

「いわゆる苦難時代を切り抜けたニュートーキョーと生ビール党にとって記念すべき日がやってくる。昭和二十七年五月二十六日がその日である。進駐軍に接収されていた数寄屋橋本店が接収解除となり、生ビールの大殿堂のキャッチフレーズのもとに再び全館オープンしたからだ。生ビール党にとっては待ちにまった日であった（丸の内）。戦後は生ビールのメッカとしてサラリーマンの圧倒的な支持をうけることになる（後出）旧館は三十年に撤去。現在のニュートーキョービルは三十一年竣工の二代目。テナントにニュー東宝シネマ1、2。直営のさがみ、高尾、ろんなどが入っている。

ニュートーキョー開店当時の広告――人気のあった陶器ジョッキもみえる（有楽座プログラムから）

日比谷物語 ㉚

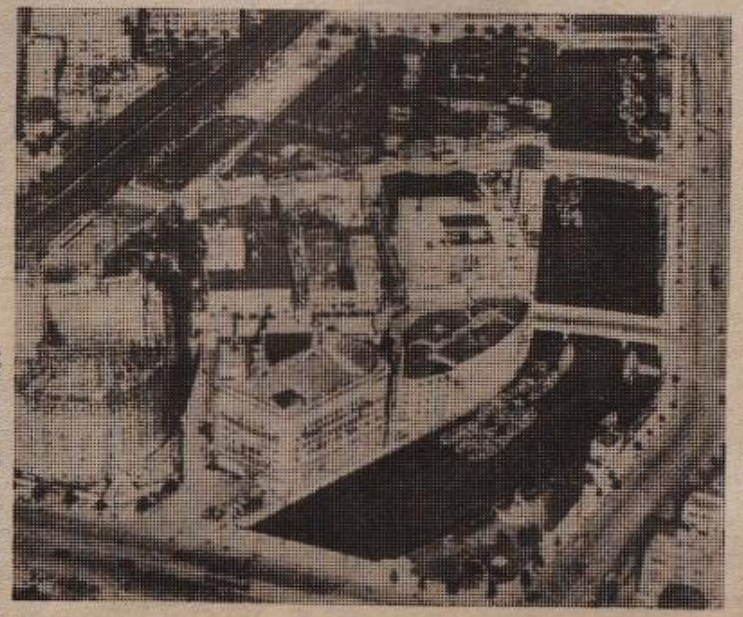
山岸弘明

鈴木法律事務所

昭和三十一年からの三年間、有楽町町会長をつとめた故鈴木重毅氏は昭和始めから有楽町駅前の朝日街に事務所と住居をかまえていた。明治三十二年生まれ、関東大震災の直前に明治大学を卒業して弁護士となり、昭和二年現在のアマンド、かもめの地に法律事務所を構えた。

「ここは昔有楽座があった所で工事の時、有楽座の敷石がでてきた、と父に聞かされました」（当主・重行氏）。さらに昔、荒畑寒村らが集まった平民社がすぐ先にあったともいう。重行氏は大正十二年生まれで昭和四年に泰明小学校に入学した。「隆和ビルの小川さんなんかが同級生でね。当時は第一生命やパークビルのあたりは原っぱでトンボを追ったり、数寄屋橋で魚を取ったりしました。有楽町の子供は泰明小学校と日比谷小学校へ半々ぐらいだったけど特に仲が悪いということはありませんでしたね」。有楽町駅と日劇、朝日新聞、そして市交通局、外堀に囲まれた戦前のこの街を鈴木氏は実に鮮明に記憶されていた。

「町並みは今とそんなに変らないけど、落ち着いたいい町だったね。駅側の一列目に稲山さんといって経済連の会長になられた人。あの方の実家のお屋敷があって、後に平岡さんに変って風呂屋になった。このあたりの人たちはみんなここの湯につかった。入口は銀座側だったけど細い駅へ抜ける道がついてて、背中合わせに喜多村食堂と精養軒ベーカリー。喜多村ではフグ料理もあった。一列目の交通局の方は角がすし食堂、次がたばこ、菓子、雑貨となんでも扱った梨本商店（などがあった）」。鈴木氏のアルバムには町内総出と思われる梨本商店前での「入営記念写真」が収められている。戦局が逼迫する前は、徴兵令による軍隊入りは、入営と呼ばれたのだという。稲山家は帝国ホテルから山下橋を越えたすぐ旧山下町にあった稲山久仙氏の別邸である。祖先は幕府直属の稲山流検校元締であったという。明治時代多くの私立銀行が誕生したが、久仙氏の興した稲山銀行もそのひとつ。後に新日鉄社長に就任した嘉寛氏の生家でもあった。



戦前の有楽町駅前の商店街（国鉄線・外濠・晴海通に囲まれていた）＝『有楽町六〇年・朝日新聞社のうちそと』から

日比谷物語 ㉛

山岸弘明

戦前の有楽町駅前

丸の内消防五十年の歩みに「昭和八年十二月、（有楽町駅前の商店街）一列目下宿屋から出火全焼四軒」。中央区年表には「十六年五月、有楽町駅近くの浜野靴店から出火、スエヒロ食堂、喜多村食堂、飲食店インテリジェント、精養軒ベーカリーを焼失。駅前大混雑」とある。

戦前の有楽町駅前、中央通り商店街、朝日街の模様を鈴木重行氏の話で続けよう。「（割烹・初藤やパチンコサンスター、有楽シネマなどのある二列目は交通局側が三芳さんの自宅。黒板塀をめぐらせた立派な構えでね、大きな松の木が塀越しにのぞいていた。その隣に三芳さん経営の三勇社印刷。ついで五十嵐さんと洋服屋があって、日比谷通りにある丸の内署の署長官舎と寮。若いおまわりさんたちが寝起きしていた。朝日新聞側には木造二階建ての真っ白な建物があって、ここに大正生命の本社と東京支店があった」。三芳家は明治以来三代にわたる有楽町住民である。祖父が埼玉県から状況、この地で印刷店を開いた。明治大学から学徒出陣した三芳長次氏は復員後この旧邸跡を利用してヤミ市街を作ることになる（後出）。

「三列目はいまのレバンテが中央自動車といってフォードやリンカーンといった会社の代理店。新聞輸送の所が村井自動車、真ん中にお米屋さんを挟んで、今も残っている朝日新聞社の別館。この辺はいまもあんまり変わっていないね。朝日街は号外屋、小料理・逗子、そしてうち（鈴木事務所）。現在のセヴァンとロンドンやが筒抜けになっていた竹中活版でのちに朝日印刷に変わった。あとはタイプ屋、飯塚さん、三好さん、上田三交社」。すらすらとこの町の戦前図を思い出していただいた。

村井自動車オーナーの村井信次郎氏は大阪小林商店勤務をへて大正十二年上京、自動車工場の村井商店を興した。麹町区議。終戦ごろまで。鉄筋コンクリート二階建ての工場・事務所は現在も新聞輸送として残っている。上田三交社の上田亀吉氏は国民新聞広告部を経て、大正五年独立。区議。

戦前のおもかげを伝える有楽町駅前朝日街３列目。当時の中央自動車、村井自動車、朝日別館が現存している。

日比谷物語 ㉜

山岸弘明

有楽町駅前の疎開

前項で紹介した鈴木重行氏は、青年期であった戦時下の昭和十六年からの六年間を療養生活を余儀なくされていた。「十七年の防空法制定で、このあたりは交通疎開地に指定されましてね。二十年三月に銭湯を除くすべての木造家屋が取り壊されました。私の家も同じ運命。駅前の爆撃はその疎開地跡に落ちたと聞いています」。終戦後、ヤミ市街と変わった商店街に仮事務所を建て法律事務所を再開。建て直したとき一階をパチンコ店に貸した。「昭和四十年に当時大流行していたマージャン屋を開きました。有楽クラブといってね。有楽町には朝日、毎日、読売、サンケイと東京の大手新聞社がみんな集まってたころで、大盛況でした。ところが最後の朝日新聞も築地に引っ越して……」六十二年秋そのマージャン屋も閉店した。当時近くに事務所を構えていた瀬戸わんや氏も常連客の一人だったという。舞台の裏方さんや芸能人をきそって夢中でパイをかき回した。

「そこがオープンした三十二年ころ、父が二丁目の町会長をしてましてね。この通りに親しみやすい名前をつけようということになった。私が朝日街というのを応募してこれが決まりました。父のポケットマネーかなんかじゃなかったのでしょうか、賞金も貰いました」朝日新聞もなくなったいま、街名変更の話もあるのだという。

「朝日街と中央通り商店街で戦前からいる人ですか？　九割以上が戦後の人でしょうから、いまはもういくらもいませんね。鈴木さんと戦前新聞輸送の一画の所有者だった村井さん、国際マージャンの青木さんくらいでしょうね」喫茶店・るびあんオーナーの宮沢彬氏は数少ない戦前住民派。「昭和四十年に父が上京してここを借りました。十八、九年ごろ強制疎開で取り壊されて、十九年から二十二年の三月まで長野の田舎に引っ越しました。東京に戻ってきたころは焼野原とヤミ市。焼け残っていたのは電気研究所と変電所、レバンテ（旧中央自動車）、丸の内署官舎、それに朝日別館くらいのものでしたね。その後、当時この一画の所有者だった清水栄蔵氏から土地の分譲を受けました」。木造二階建ての一部を歯科や雪村いずみ事務所、有線放送などに貸した。

鈴木氏の育った朝日街（一階をパチンコ店に貸して、二階でマージャン店を経営した）

日比谷物語 ㉞

山岸弘明

更科そば

隆和ビル二階の信州そば店・更科は大正十一年創業の老舗である。「昭和のはじめころは自転車で片手でかつぐ出前屋というのを七、八人は雇い、売上げも日本一でした。いまは周りに飲食店も増えたせいもありますが、ヒマになりましたよ。それに客のほうも味がわからなくなりましたね」。昭和三年にこの更科に嫁入りした藤村八重さんが『有楽町有情』で語っている。ご主人の昇太郎氏は戦前の有楽町名士の一人。「おとっつぁん小三郎も銀座の知り合いの家に寄留していることにして（泰明小学校）に通った、と話してましたね。大正天皇さんが馬車で学校の前を通るときは、生徒がみんな直立不動の姿勢で立ったものよ。洋服の子はめずらしくって、ほとんどが着物にハカマでしたね。大正十二年の大震災のときは六年生でした。なぜか家にいたなあ。二月期の始業式が終わって帰ってきてたのかしら。宮城前に逃げて、二重橋のたもとで一夜を明かしました」（小川キミさん）。有楽町有情によれば小川家の泰明出身者は小三郎氏明治二十八年、キミさん大正十三年、長男利夫氏昭和二十四年、長女キヨ子さん二十六年、次男光男氏三十二年、次女ヒロ子さん三十六年卒業の三代六人。利夫さんは話す「僕らは疎開児童でしてね。疎開中の昭和二十年一月二十七日に二五〇キロ爆弾が三発、学校に落とされたと記録されてます。終戦で帰ってみた母校は床も壁も焼け落ちて残がいだけの幽霊みたいなもんでした……」

は元騎兵隊だったとかで、毎日町内をまわるのが日課でね。『なかにはうるさいおやじだ、といっているそうだけど、お前んとこはどうだ』なんていいながら店に入ってくる。終戦直後だったけど、便利社（現在広田ビル）のあたりにヤミのタバコ売りが出ていて、ラッキーセブンやキャメルなんかを売っている。それが警察に捕まって保証人がいないので帰してもらえない。おとっつぁんが謝って引き取りにいく。みんなに慕われていたけど、三十三年ころかな、胃ガンでしくなった」（町内の人の話）。

同じ隆和ビル一階のたばこ屋・小川商店は明治二十年代からの有楽町住民である。「父親の

ザルソバ一九枚、丼物一〇個をかついで数寄屋橋をゆく更科の出前屋（『朝日新聞のうちそと――有楽町六〇年』）

日比谷物語 ㉟

山岸 弘明

小川商店と平野屋

「……それで築地小学校や常盤小学校に間借りのジプシー学園でした。クリスマスになると米軍がトラックを数寄屋橋のところに止めて、ぼくらにキャンデーを投げてくれたもんです。泰明小学校といわないで泰明学校っていってたなあ」（有楽町有情）。

この小川商店と戦後まであった平野屋履物店、JRガード沿いの平野屋は親戚関係にある。「たばこ店平野屋の小川マサさんは旧日劇前のゲタ屋の長女として生まれた。『戦争で結婚しようとした人が死んじゃってね。あたしにだってロマンスはあったんだ』と昔を振りかえる。いまは一人ぐらし。二階の小さな物干しでニラやパセリを作っている。部屋の壁には日枝神社のお札を祀った神棚。『いまはお揃いのユカタもおみこしもちょうちんも、みんな消えちまったからねえ』（産経新聞）。マサさんの同級生に池田弥三郎氏がいた。「あちらは銀座の大店、てんぷら屋天金のお坊ちゃん。そばにも寄れない気持ちがこっちにはあったのね。でも気さくな人だった。いま時々テレビで見る通りよ。級長さんだから遠足なんかの時は学校の旗を持って列の先頭を歩いたけど、かわいらしい少年だったわよ」（有楽町有情）。

小川さんはカズ少ない有楽町現住者のひとり。昭和22年からここでタバコ店を経営し、二階で一人暮らしをつづける

戦前の有楽町の顔といえる人に井上忠次郎氏がいた。「大正六年、山形県米沢市の高校を卒業して親友の斎藤悌三郎さんと上京、有楽町で飲食店を開いた。その友人と震災後の混乱期に路上で再会して無事を喜びあったと聞いています」（佐藤清氏）。昭和はじめ小唄勝太郎がうたった東京音頭の元歌丸の内音頭推進者としても有名。「お父さんら町内会の顔役が不景気の時なので何かやろうと丸の内音頭をつくったんです。それをビクターが歌詞を変えて東京音頭で売り出した。きっぷのいい人だったんで一銭も貰わずに権利をみんなやっちゃったんですよ。お前損したと随分いわれましたが、世直しのためにやったんだからって」（炉端・井上すずさん）。「一緒に世直しに走り回った顔役に岩崎善右衛門さんとおとっつぁんと呼ばれた藤村昇太郎さんがいた。井上さんはナワのれん富可川、岩崎さんはおでんや岩崎、藤村さんはそばや更科をやっていた。……」

日比谷物語 ㊱

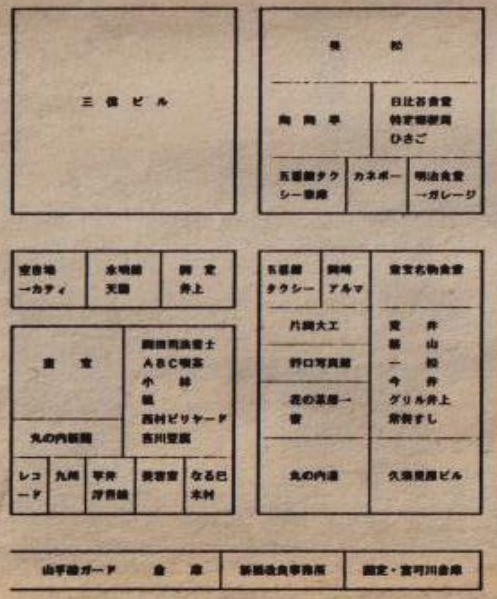
山岸 弘明

富可川と国定

「……店内には富可川が学生は学生らしく、人間は人間らしくの意でらしくあれ、岩崎は働かざるもの食うべからず、更科は宣伝が嫌いでいいものを出せば人は自然にくるの意味で無声人を呼ぶとそれぞれの哲学が張られていた」（有楽町有情）。

千葉県の沼南町議会議員をつとめる佐藤清氏は井上忠次郎氏の義理の弟・佐藤栄次氏の次男。忠次郎氏の起こした富可川と国定の二代目を引き継ぐ。「戦前の有楽町はこどもたちのパラダイスだったたね。現在の三井ビルの所は大きな広場になっていたし、その前面にあった日東紅茶のコーナーハウスはらせんになった階段がついていて、きれいな芝地と池があった。帝国ホテルの裏も公園みたいになっていてどこでも遊べた」。佐藤家と井上家はニュートーキョー裏の三角街にあった。現在も戦前戦後の面影を残すこの一角に井上光栄貿易店、白石日昌堂新聞店、小料理おかよ、八百屋、魚屋そして第223回で紹介した石川ビルなどがあった。「いま新幹線が通っているあたりはちょっとした広場になっていてね。JRのガードは新橋改良事務所の遊佐さんという人が管理していて、いまのゆうかりのあたりを富可川と国定の倉庫として借りていました」。

戦争がはげしくなった昭和十八年十月、学生の徴兵猶予特権が廃止され、明治大学在学中の佐藤氏も神宮球場での雨中の壮行会にのぞんだ。「学徒出陣が決まって同級生たちと、いまの隆和ビルのところにあった富可川で壮行会を開いた。当時は非常時で飲食店はどこも店を閉めている。この非常時にドンチャンやってるのがいる。なにごとだ、というので丸の内署の連中がかけつけた。麻生という専任教官（軍人）が同席していて一喝すると、ハッといって引き下がってしまった。あの時の同級生の何人かは再び日本の土をふむことはなかったね」。戦後の有楽町はGHQの街へと変わっていた。米軍のMPやGIがあふれ、浮浪者やパンパンガールと呼ばれた夜の女たちがたむろした。有楽町の主だった建物は進駐軍に接収された。第一生命はGHQ、朝日生命館は憲兵隊本部、三信ビルは通信隊……。



日比谷物語 ㉗

山岸弘明

ブルーシャトー

宝塚劇場は占領軍専用の「アーニーパイル劇場」と改称された。ここでは、ブルースの女王とうたわれた淡谷のり子さんらがスペシャルゲストとして出演していた。国定が戦後の再起をかけたのもアーニーパイル劇場の仕出し弁当だったという。「外食もだめという時代でね。すしやは米一合持参者に四十円でにぎるという委託販売方式だった。もっとも警察の目を逃れて入口で米飯を売ったり、つりばのついた二階建ての小料理屋でね。ママは宝塚の仕事もしていたというコマタのきれあがった美人だった。会議が終わると仲間と二階に上がり込んで飲んだり歌ったり大変だった」（客として出入りした中川謹三郎氏）。美人ママの杉山アキさんは麹町で割烹・さん幸を開き、国定は佐藤氏の兄・貞雄氏と結婚した忠次郎氏の実娘・井上すずさんの味の店・炉端に引き継がれた。

一方の富可川は昭和三十八年井上忠次郎氏の心意気を引き継いだ「炉端」（一時、二階に長男忠夫氏のヒット曲にあわせた「ブルーシャトー」というお店も併設した）

しこの二階に仕出していたので、終戦直後の混乱期をアーニーパイル劇場で食べさせてもらったようなものですよ。二十四、五年ころかな。統制になっていないうなぎをふきながしにして百円で売り出した。これが大当たりで朝日新聞かなんかにも元祖百円うなぎと紹介された」（佐藤清氏）。当時国定は三信ビル前にあった戦前の建物を強制疎開で失って国電のガード前に移転していた。「昔風のガラス戸新幹線工事のため閉店。「（忠次郎氏の）丸の内音頭の心意気を引き継いだのが富可川育ちのすずさんの長男・井上忠夫さん。森と湖にかこまれての、あのブルーシャトーを作曲した。四十二年グループサウンドのブルーコメッツをジャッキー吉川らと率いてこの曲を発表、第九回レコード大賞をとった。『昔は祭りが盛んで、東宝の寄付が少ないと、みこしが上映中の日劇や日比谷映画館に突入したことを覚えています。有楽町にはいまの下町みたいな人種がいたのです。映画と歌を組み合わせた最先端の文化を作る面でなんとかその伝統を守っていきたいですね』（忠夫さん）（有楽町有情）。

日比谷物語 ㉘

山岸弘明

日比谷便利社

日比谷シャンテ側のガード周辺は、戦前の雰囲気をわずかに残した昔ながらの町並みが続いている。広田ビルの広田正介家も大正はじめ以来の有楽町住民であった。大正九年、このビルの前身であった広田酒店・勝彦氏の長男に生まれて泰明小学校を卒業。生粋の土地っこだ。

「こどものころは遊び場に不自由しませんでしたね。日比谷公園に野球場があって、毎日暗くなるまで遊んでいました。夏はせみが多くて、二、三時間で酸素不足で水面をパクパクさせながら泳いでいるところを網ですくいあげる。大雨の日はバケツをもって川へ行ったものですよ。当時は子供が生まれると、日比谷大神宮へ行ってお祓いを受け、名前を付けてもらいます。三つほどめでたい名前を選んでくれて、その中から親が決めるのです。そんなこともあって、ここの住民の初詣は靖国神社と大神宮に決まっていたね」。姪ごさんの結婚式で兄弟七人が集まったところで戦前の有楽町図をまとめて戴いた（後出）。それぞれの遊び仲間に話がはずんだという。

二・二六事件では有楽町の住民が日劇と三信ビルの地下に集められ、広田正介氏もこの中にいた（朝日新聞のうちそと・有楽町六〇年）

虫かごがいっぱいになるほどとれたし、三井ビルの空き地は草ぼうぼうでトンボとバッタの宝庫だった。帝国ホテルには高さ四、五メートルの築山があって兵隊ゴッコはもっぱらここでした。晴海通りの向こう側にはお稲荷さんがあって、二の午には舞台が造られ、お神楽をみるのも楽しみの一つだった。雨が降ると宮城のお堀りの水が水門をこえて数寄屋橋の所に落ちてくる。一緒に鯉や鮒が流れてくるのだけれども、神田川は汚くて

二・二六事件の思い出も鮮明だ。「日劇に閉じ込められましてね。こどもたちがお腹がすいたというので銀座へパンを買いに行ったんですよ。数寄屋橋のこっち側は通行人もなく、機関銃がズラッと並んでいるのに向こうはネオンがこうこうとしていて人通りも普段と変わらない。橋を境に対象的だったね」。正介氏は昭和十六年一月から二十一年七月まで兵役。この間、有楽町の広田酒店は強制疎開のため取り壊されて一家は麹町、杉並を転々とする。そして終戦。一面の焼野原となった自らの跡地にバラックが建った。広田家の戦後がはじまった。

日比谷物語 ㉓⑨

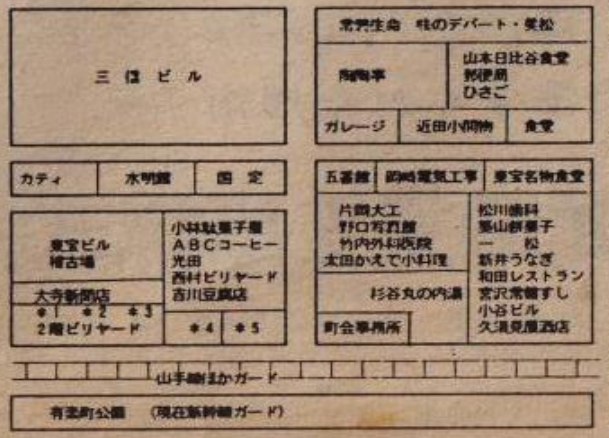
山岸 弘明

だるま

日比谷便利社・広田正介氏の話を続ける。「父親が有楽町に戻ってバラックで酒屋を再開するが、肝心の酒が配給制度で割当がないのでどうにも商売にならない。そのうちに私と弟が復員してきて、運送梱包業にでも転向しようということになって日比谷便利社を興しました。私は杉並に住んで、一時この有楽町の家は父母だけが残りましたが、昭和三十五年に建て直して戻り、五十三年の広田ビル建設までここで生活しました」。広田ビルにはすしや、郷土料理店ね。その原っぱの脇に日比谷大神宮っていうのがありましたよ。あれはいま飯田橋へ移っちまって東京大神宮に出世しちゃった。八百屋だから野菜のきれっぱしやなんかたくさんでるでしょ。それを使ってニワトリやウサギも飼っていたよ」。生前『有楽町有情』で語っている。

開店直後の震災で焼失し、大戦で強制疎開も。だるま食堂は三十九年、雀士苑は四十五年に開店。長女の美子さんと末妹の俊子さんと長男健一氏が切り盛りする。姉妹は三階に住み、長男一家は北千住に住んでいる。健一氏は大学を出て証券会社に勤めたものの、忙しいので脱サラ、家庭料理の味と安さを守っている。

山かん横丁と関東大震災で紹介した山水楼の宮田武義氏が、現在東宝会館になっている当時の大松閣を引き継ぐのは昭和四年のことであった。「震災後、山かん横丁のバラックに四、五年おりましたが、家主から追い立てを食いましてね。代わりの所を探している時に大神宮が九段に移ることになった。松本楼の小坂さんが新婚披露場の大松閣と大松軒という木造洋館と日本建ての二軒を背中で一緒になっていたのを経営されていた。それが空いたものだから、知り合いの関直彦さんという弁護士が斡旋してくださった……」。



広田氏が兄弟七人で作った昭和十年当時の有楽町図（幼な友達をたどり正確にまとめられている）

〜〜〜

日比谷ものがたり

三井グループ「三友新聞」
昭和５９年～平成４年＝7年間連載

中　編

前編１～70　デンカの70年を見つづけた街日比谷収載
後編241～　データーとも欠落

山岸弘明

DVDBY　塚原　茂